

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (151)

中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(VI)

わたり ばた  
渡畑遺跡 1

(南さつま市金峰町)

2010年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
(151)

渡畑遺跡  
1

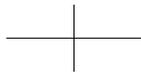
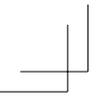
二〇一〇年三月  
鹿児島県立埋蔵文化財センター



鹿児島県

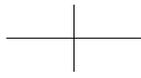
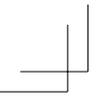


渡畑遺跡と万之瀬川下流





足形土製品



# 序 文

この報告書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴って、平成8年度、12年度、15年度から平成16年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する渡畑遺跡の発掘調査の記録（縄文時代及びA地点編）です。

本遺跡では、縄文時代中期・後期・晩期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が発見されました。特に、縄文時代後期と思われる足形土製品は約40m隔てて、隣接する芝原遺跡から出土した足形土製品の一部と接合し、同一個体の土製品であることが判明しました。これは、全国でも類例が殆ど無く、希有な資料となりました。

また、縄文時代中期の阿高式土器や後期の南福寺式土器をはじめ、磨消縄文土器等の出土は、在地の指宿式土器との関連を含め、南九州の縄文時代中期から後期の生活文化を考える上で貴重な資料と考えます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた伊集院土木事務所、南さつま市教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 山 下 吉 美

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	わたりばたいせき							
書名	渡畑遺跡							
副書名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	VI							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	151							
編著者名	佐藤義明・小林晋也・日高勝博・上床真・内山伸明							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号（0995-48-5811）							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
渡畑遺跡	南さつま市 金峰町宮崎 字渡畑	462209	35-80	31° 25' 44"	130° 19' 22"	2000.8.21～ 2001.3.27 2004.3.2～ 2004.3.16 2004.5.20～ 2005.3.29	43,400	中小河川改修事業 （万之瀬川）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
渡畑遺跡	散布地	縄文時代 中期			春日式土器・轟ヶ迫式土器 ・阿高式土器			
		縄文時代 後期	ピット・土坑 集石		足形土製品（足首部） 南福寺式土器・指宿式土 器・出水式土器・市来式 土器・磨消縄文土器・鋸 歯縁石器・石斧・石鏃・ 磨石・敲石		足形土製品は、 隣接の芝原遺跡 から出土した足 部と接合。	
		縄文時代 晩期			入佐式土器・黒川式土器 （浅鉢、深鉢）			
		古墳時代	竪穴住居跡		成川式土器			
		古代	竪穴住居跡 古道・ピット		土師器・須恵器・刻書土 器・墨書土器・土錘・紡 錘車			
		中世	土坑・ピット 溝状遺構 掘立柱建物跡・ 方形竪穴 青磁集積		土師器・青磁・白磁 須恵器・常滑焼・滑石製 石鍋・布目瓦・緑釉陶器 土錘・カムイヤキ・合子 古銭（洪武通宝・治平元宝 ・崇寧通宝）			
近世	木棺墓（隅丸方形） 土坑墓（円形） 畝間状遺構		薩摩焼・肥前陶磁・古銭 （天保通宝・寛永通宝・加 治木銭）人骨・数珠玉		畝跡と思われ る畝状遺構を検 出。			
遺跡の概要	<p>渡畑遺跡は、A地点（調査区北側）とB地点（調査区南側）に分けられる。本報告書は、A地点の調査報告及びB地点の縄文時代中期から晩期までの調査結果を掲載している。</p> <p>本遺跡では、縄文時代中期の遺物として春日式土器、阿高式土器、それに後期の主体となる指宿式土器が多数出土した。また、隣接する芝原遺跡で検出された足形土製品と接合する足首部の土製品が出土しており、これは他に類例のない資料である。</p> <p>縄文時代晩期の遺物では、入佐式土器と黒川式土器の深鉢・浅鉢が出土した。さらに漁撈具として利用されたと思われる「組み合わせ鋸」の可能性が高い鋸歯縁石器など、当時の生活文化を知る上において貴重な石器が出土した。</p> <p>古墳時代以降については、A地点で近世の畝跡と思われる約3,600㎡に広がる畝間条遺構や、古銭などの遺物が検出された。</p> <p>B地点においては、多量の成川式土器、古代の土師器や須恵器、中世の青磁や白磁が出土したが、これらは来年度刊行する第2分冊に掲載予定である。</p>							



渡畑遺跡位置図 (1 : 50,000)

# 例 言

- 1 本書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う渡畑遺跡の発掘調査報告書である。本書では、A地点の調査報告及びB地点の縄文時代中期から晩期までの調査報告を行う。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成12年8月21日～平成13年3月27日、平成16年3月2日～平成16年3月16日、平成16年5月20日～平成17年3月29日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成20年度、平成21年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじた、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 9 遺構実測は主に調査担当者が行い、一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。トレースは、整理作業員の協力を得て小林晋也が行った。
- 10 土器、陶磁器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て佐藤義明・小林・日高勝博が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社九州文化財研究所、株式会社アイシン精機、株式会社パスコに委託し、監修は溝口学・黒川忠広・上床真が行った。
- 12 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 13 本書の編集は、佐藤・小林・日高が担当し、執筆の分担は次の通りである。

第1～4章	．．．．．	佐藤・小林
第5章	．．．．．	小林
第6～9章	．．．．．	日高
第10章	．．．．．	内山伸明
第11章 第1節	．．．．．	小林
第2～5節	．．．．．	日高
第6節	．．．．．	上床
- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物の注記の略号は「WB」である。

# 本文目次

巻頭図版  
序文  
報告書抄録  
例言  
目次

第1章 発掘調査の経緯	1	第8章 中世の調査 (A地点)	131
第1節 調査に至るまでの経緯	1	第1節 調査の概要	131
第2節 調査の組織	1	第2節 出土遺物の分類	131
第3節 調査の経緯	2	第3節 遺物	131
第4節 中小河川改修事業関連の遺跡と概要	4	第9章 近世の調査 (A地点)	140
第2章 遺跡の位置と環境	9	第1節 遺構	140
第1節 地理的環境	9	第2節 遺物	148
第2節 歴史的環境	11	第10章 化学分析	150
第3章 調査の概要	15	第1節 観察・分析方法	150
第1節 発掘調査の方法	15	第2節 結果	150
第2節 整理作業の概要	15	第3節 鹿児島県内における赤色顔料の観察例	150
第3節 遺物の分類について	16	第11章 発掘調査のまとめ	152
第4章 遺跡の層位	21	第1節 縄文時代の概要	152
第5章 縄文時代の調査	24	第2節 弥生・古墳時代の概要	154
第1節 調査の概要	24	第3節 古代の概要	154
第2節 遺構	24	第4節 中世の概要	154
第3節 遺物	41	第5節 南九州における 古墳時代の甔形土器	155
第6章 弥生・古墳時代の調査 (A地点)	117	第6節 畝間状遺構について	159
第1節 調査の概要	117	写真図版	161
第2節 遺物	117		
第7章 古代の調査 (A地点)	125		
第1節 遺構	125		
第2節 遺物	125		

あとがき

## 挿 図 目 次

第1図	中小河川事業関連遺跡位置図	7	第45図	縄文時代出土土器実測図 (23) VII類	68
第2図	渡畑遺跡周辺地形変遷図	10	第46図	縄文時代出土土器実測図 (24) VII類	69
第3図	周辺遺跡位置図	12	第47図	縄文時代出土土器実測図 (25) VIII類	70
第4図	遺跡グリッド配置図	15	第48図	縄文時代出土土器実測図 (26) VIII類	71
第5図	土層断面実測図 (1)	22	第49図	縄文時代出土土器実測図 (27) IX a類	72
第6図	土層断面実測図 (2)	23	第50図	縄文時代出土土器実測図 (28) IX a類	73
第7図	確認トレンチ配置図	25	第51図	縄文時代出土土器実測図 (29) IX a類	74
第8図	遺構配置図 (1)	26	第52図	縄文時代出土土器実測図 (30) IX a類	75
第9図	遺構配置図 (2)	27	第53図	縄文時代出土土器実測図 (31) IXab類	76
第10図	遺構配置図 (3)	28	第54図	縄文時代出土土器実測図 (32) IX b類	77
第11図	遺構配置図 (4)	29	第55図	縄文時代出土土器実測図 (33) IX b類	78
第12図	集石実測図 (1)	30	第56図	縄文時代出土土器実測図 (34) X a類	79
第13図	集石実測図 (2)	31	第57図	縄文時代出土土器実測図 (35) X a類	80
第14図	土坑実測図 (1)	32	第58図	縄文時代出土土器実測図 (36) X a類	81
第15図	土坑実測図 (2)	33	第59図	縄文時代出土土器実測図 (37) X a類	82
第16図	土坑実測図 (3)	34	第60図	縄文時代出土土器実測図 (38) Xbc類	83
第17図	土坑実測図 (4)	35	第61図	縄文時代出土土器実測図 (39) XI a類	84
第18図	土坑実測図 (5)	36	第62図	縄文時代出土土器実測図 (40) XI b類	85
第19図	焼土跡実測図	37	第63図	縄文時代出土土器実測図 (41) XI b類	86
第20図	縄文時代中期掲載遺物出土状況図	42	第64図	縄文時代出土土器実測図 (42) XI b類	87
第21図	縄文時代後期掲載遺物出土状況図	43	第65図	縄文時代出土土器実測図 (43) XII a類	89
第22図	縄文時代晩期掲載遺物出土状況図	44	第66図	縄文時代出土土器実測図 (44) XII a類	90
第23図	縄文時代出土土器実測図 (1) I II類	45	第67図	縄文時代出土土器実測図 (45) XII a類	91
第24図	縄文時代出土土器実測図 (2) III a類	46	第68図	縄文時代出土土器実測図 (46) XII a類	92
第25図	縄文時代出土土器実測図 (3) III b類	47	第69図	縄文時代出土土器実測図 (47) XII b類	93
第26図	縄文時代出土土器実測図 (4) III b類	48	第70図	縄文時代出土土器実測図 (48) XII b類	94
第27図	縄文時代出土土器実測図 (5) III b類	49	第71図	縄文時代出土土製品実測図 (1)	95
第28図	縄文時代出土土器実測図 (6) IV類	50	第72図	縄文時代出土土製品実測図 (2)	96
第29図	縄文時代出土土器実測図 (7) IV類	51	第73図	縄文時代石器出土状況図	98
第30図	縄文時代出土土器実測図 (8) IV類	52	第74図	縄文時代出土石器実測図 (1)	99
第31図	縄文時代出土土器実測図 (9) V a類	54	第75図	縄文時代出土石器実測図 (2)	100
第32図	縄文時代出土土器実測図 (10) V a類	55	第76図	縄文時代出土石器実測図 (3)	101
第33図	縄文時代出土土器実測図 (11) V a類	56	第77図	縄文時代出土石器実測図 (4)	102
第34図	縄文時代出土土器実測図 (12) V a類	57	第78図	縄文時代出土石器実測図 (5)	103
第35図	縄文時代出土土器実測図 (13) V a類	58	第79図	縄文時代出土石器実測図 (6)	104
第36図	縄文時代出土土器実測図 (14) V a類	59	第80図	縄文時代出土石器実測図 (7)	105
第37図	縄文時代出土土器実測図 (15) V a類	60	第81図	縄文時代出土石器実測図 (8)	106
第38図	縄文時代出土土器実測図 (16) V a類	61	第82図	弥生・古墳時代出土遺物実測図 (1)	118
第39図	縄文時代出土土器実測図 (17) Vab類	62	第83図	古墳時代出土遺物実測図 (2)	119
第40図	縄文時代出土土器実測図 (18) V b類	63	第84図	古墳時代出土遺物実測図 (3)	120
第41図	縄文時代出土土器実測図 (19) V b類	64	第85図	古墳時代出土遺物実測図 (4)	121
第42図	縄文時代出土土器実測図 (20) V b類	65	第86図	古墳時代出土遺物実測図 (5)	122
第43図	縄文時代出土土器実測図 (21) VI類	66	第87図	古墳時代出土遺物実測図 (6)	123
第44図	縄文時代出土土器実測図 (22) VI類	67	第88図	土坑実測図	125

第89図	古代出土遺物実測図 (1).....	126	第106図	畝間状遺構検出状況 (7).....	147
第90図	古代出土遺物実測図 (2).....	127	第107図	畝間状遺構内遺物実測図 (2) 近世出土遺物実測図.....	148
第91図	古代出土遺物実測図 (3).....	128	第108図	時期不明遺物実測図.....	149
第92図	古代出土遺物実測図 (4).....	129	第109図	スペクトル図.....	150
第93図	中世出土遺物実測図 (1).....	132	第110図	指宿式土器 (上水流遺跡出土).....	152
第94図	中世出土遺物実測図 (2).....	133	第111図	足形土製品出土状況図.....	153
第95図	中世出土遺物実測図 (3).....	135	第112図	蒸気孔の形態分類模式図.....	158
第96図	中世出土遺物実測図 (4).....	136	第113図	南九州の地域区分と甑形土器出土遺跡.....	158
第97図	中世出土遺物実測図 (5).....	137	第114図	薩摩半島及び鹿児島湾岸地域の甑形土器.....	158
第98図	中世出土遺物実測図 (6).....	138	第115図	川内平野の甑形土器.....	158
第99図	畝間状遺構内遺物実測図 (1).....	140	第116図	えびの盆地の甑形土器.....	158
第100図	畝間状遺構検出状況 (1).....	141	第117図	都城盆地の甑形土器.....	158
第101図	畝間状遺構検出状況 (2).....	142	第118図	肝属平野の甑形土器.....	158
第102図	畝間状遺構検出状況 (3).....	143	第119図	畝間状遺構検出状況.....	160
第103図	畝間状遺構検出状況 (4).....	144			
第104図	畝間状遺構検出状況 (5).....	145			
第105図	畝間状遺構検出状況 (6).....	146			

## 表 目 次

表 1	中小河川改修事業関連遺跡一覧表.....	6	表22	縄文時代晩期出土土器観察表 (1).....	114
表 2	中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯.....	8	表23	縄文時代晩期出土土器観察表 (2).....	115
表 3	周辺遺跡一覧表.....	13	表24	縄文時代土製品観察表.....	115
表 4	石器分類表 (1).....	16	表25	縄文時代出土石器観察表.....	116
表 5	石器分類表 (2).....	17	表26	弥生・古墳時代出土遺物観察表.....	124
表 6	石材分類表.....	18	表27	古代出土遺物観察表 (1).....	130
表 7	A地点の層位.....	21	表28	古代出土遺物観察表 (2).....	130
表 8	B地点の層位.....	21	表29	古代出土遺物観察表 (3).....	130
表 9	土坑一覧表.....	36	表30	中世出土遺物観察表 (1).....	138
表10	ピット一覧表 (1).....	38	表31	中世出土遺物観察表 (2).....	139
表11	ピット一覧表 (2).....	39	表32	中世出土遺物観察表 (3).....	139
表12	ピット一覧表 (3).....	40	表33	中世出土遺物観察表 (4).....	139
表13	縄文時代中期出土土器観察表.....	107	表34	畝間状遺構出土遺物観察表 (1).....	149
表14	縄文時代中・後期出土土器観察表 (1).....	107	表35	畝間状遺構出土遺物観察表 (2).....	149
表15	縄文時代中・後期出土土器観察表 (2).....	108	表36	畝間状遺構出土遺物観察表 (3).....	149
表16	縄文時代中・後期出土土器観察表 (3).....	109	表37	近世出土遺物観察表.....	149
表17	縄文時代中・後期出土土器観察表 (4).....	110	表38	時期不明遺物観察表.....	149
表18	縄文時代中・後期出土土器観察表 (5).....	111	表39	成分分析表.....	150
表19	縄文時代中・後期出土土器観察表 (6).....	112	表40	鹿児島県内出土赤色顔料観察表.....	151
表20	縄文時代中・後期出土土器観察表 (7).....	113	表41	蒸気孔の形態分類.....	158
表21	縄文時代中・後期出土土器観察表 (8).....	114			

## 写真・図版目次

巻頭カラー 1 渡畑遺跡と万之瀬川下流	
巻頭カラー 2 足形土製品	
写真 1 人骨出土状況	2
写真 2 成川式遺物出土状況	3
写真 3 円形粘土塊検出状況	3
写真 4 近世溝完掘状況	3
写真 5 カマド状遺構検出状況	4
写真 6 指宿式遺物出土状況	4
写真 7 石組井戸跡検出状況	4
写真 8 上空から見た渡畑遺跡周辺の様子	9
写真 9 石材分類写真 (1)	19
写真 10 石材分類写真 (2)	20
写真 11 B地点北側土層断面	21
写真 12 I類 1	45
写真 13 V a類 122	54
写真 14 V a類 164	60
写真 15 VI類 (底面の様子)	67
写真 16 VII類 286	68
写真 17 足形土製品	95
写真 18 鋸歯縁尖頭器・鋸歯縁石器	100
写真 19 電子顕微鏡画像	150
写真 20 足形土製品出土状況	153
図版 1 ①上空から見たB地点調査区	161
②B地点調査区	161
図版 2 ①B地点北側土層断面状況	162
②B地点東側土層断面状況	162
図版 3 ①B地点遺構検出状況 (1)	163
②B地点遺構検出状況 (2)	163
図版 4 ①B地点ピット検出状況 (1)	164
②B地点ピット検出状況 (2)	164
③B地点土坑検出状況 (1)	164
④B地点土坑検出状況 (2)	164
⑤B地点集石 1号検出状況	164
⑥B地点集石 2号検出状況	164
⑦B地点集石 3号検出状況	164
⑧B地点焼土跡検出状況	164
図版 5 ①B地点遺物出土状況 (1)	165
②B地点遺物出土状況 (2)	165
③B地点遺物出土状況 (3)	165
④B地点遺物出土状況 (4)	165
⑤B地点遺物出土状況 (5)	165
図版 6 ①A地点畝間状遺構検出状況 (1)	166
②A地点畝間状遺構検出状況 (2)	166
③A地点畝間状遺構検出状況 (3)	166
図版 7 縄文時代後期ほかの土器	167
図版 8 縄文時代中期の土器	168
図版 9 縄文時代中・後期の土器	169
図版 10 縄文時代後期の土器 (1)	170
図版 11 縄文時代後期の土器 (2)	171
図版 12 縄文時代後期の土器 (3)	172
図版 13 縄文時代後期の土器 (4)	173
図版 14 縄文時代後期の土器 (5)	174
図版 15 縄文時代晩期の土器	175
図版 16 縄文時代後期～晩期の石器 (1)	176
図版 17 縄文時代後期～晩期の石器 (2)	177
図版 18 弥生・古墳時代出土遺物 (1)	178
図版 19 弥生・古墳時代出土遺物 (2)	179
図版 20 古墳時代出土遺物 (3)	180
図版 21 古代出土遺物	181
図版 22 中世出土遺物 (1)	182
図版 23 中世出土遺物 (2)	183
図版 24 中世出土遺物 (3)	
畝間状遺構内遺物・時期不明遺物	184

## 第1章 発掘調査の経緯

### 第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護と活用を図るため、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し、諸開発との調整を図っている。この協議に基づき、鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地域内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課、以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持躰松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が判明した。この結果を受けて、県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の三者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとなった。

確認調査は、平成8年9月25日から11月25日の期間に実施した。その結果、予定地において約43,400㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受けて、渡畑遺跡の調査は県立埋文センターが担当し、平成12年度に持躰松遺跡隣接部分（A地点）と河川側（B地点）、平成15年度に樋門隣接部分（B地点）、平成16年度に樋門部分から下流部分（B地点）の本調査を実施した。

なお、渡畑遺跡はA地点とB地点との間にあたる未調査部分が約29,000㎡あり、今後河川改修事業を行う際には発掘調査が必要である。

整理作業に関しては、平成8年度から平成16年度にかけての発掘調査中に遺物の水洗・注記・接合作業等を並行して行い、本格的な整理作業を平成20年度より平成21年度にかけて他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で県立埋文センターが行った。

報告書は、平成21年度にA地点及びB地点の縄文時代中期～晩期の調査について刊行することとした。B地点の古墳時代から近世までの調査分については、平成22年度に刊行する予定である。

### 第2節 調査の組織

#### 1 本調査

##### (1)平成12年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
調査主体 鹿児島県教育委員会

調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 井上 明文  
次長兼総務課長 黒木 友幸  
調査課長 新東 晃一  
主任文化財主事  
兼第一調査係長 青崎 和憲  
主任文化財主事 中村 耕治  
文化財研究員 栗林 文夫  
文化財研究員 福永 修一  
文化財研究員 上床 真  
文化財調査員 橋口 亘  
事務担当 総務係長 有村 貢  
主任 事 溜池 佳子  
調査指導 鹿児島大学歯学部  
助 手 竹中 正己

##### (2)平成15年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 木原 俊孝  
次長兼総務課長 田中 文雄  
調査課長 新東 晃一  
主任文化財主事  
兼第一調査係長 池畑 耕一  
主任文化財主事 中村 耕治  
文化財主事 湯之前 尚  
文化財主事 日高 正人  
文化財主事 富山 孝一  
総務係長 平野 浩二  
調査指導 広島大学文学部  
教 授 河瀬 正利  
西南学院大学文学部  
教 授 高倉 洋彰

##### (3)平成16年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 木原 俊孝  
次長兼総務課長 賞雅 彰  
調査課長 新東 晃一

主任文化財主事  
兼第二調査係長 彌榮 久志  
主任文化財主事 長野 眞一  
調査担当 文化財主事 抜水 茂樹  
文化財主事 富山 孝一  
文化財主事 石原田高広  
文化財研究員 黒川 忠広  
文化財研究員 上床 真  
事務担当 総務係長 平野 浩二

## 2 報告書作成事業

### (1)平成20年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
作成主体 鹿児島県教育委員会  
調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課  
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
作成企画 所長 宮原 景信  
次長兼総務課長 平山 章  
次長 池畑 耕一  
調査第一課長 青崎 和憲  
主任文化財主事  
兼調査第一課第二調査係長 井ノ上秀文  
作成担当 文化財主事 溝口 学  
文化財主事 佐藤 義明  
文化財主事 木之下悦朗  
文化財主事 黒川 忠広  
文化財研究員 上床 真  
事務担当 総務係長 紙屋 伸一

### (2)平成21年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
作成主体 鹿児島県教育委員会  
調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課  
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
作成企画 所長 山下 吉美  
次長兼総務課長 齊藤 守重  
次長 青崎 和憲  
調査第一課長 中村 耕治  
主任文化財主事  
兼調査第一課第二調査係長 宮田 栄二  
作成担当 文化財主事 溝口 学  
文化財主事 小林 晋也  
文化財主事 日高 勝博  
文化財研究員 上床 真  
事務担当 総務係長 紙屋 伸一  
企画担当 文化財主事 佐藤 義明

### (3)報告書作成指導委員会

平成21年12月1日 次長ほか6名

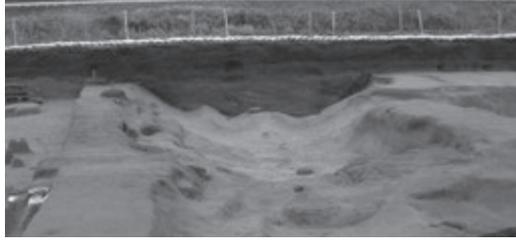
### (4)報告書作成検討委員会

平成21年12月11日 所長ほか11名

## 第3節 調査の経緯（日誌抄）

調査の経緯については、調査日誌をもとに主な出来事を月単位で表した。

【平成12年度：実働119日】 (平成12年8月21日～平成13年3月27日)	
8・9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・重機による表土剥ぎ取り。</li> <li>・プレハブ設置場所の造成。 (芝原遺跡の調査と併行して作業を行う。作業員は10月から渡畑遺跡へ移動。)</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・重機による表土剥ぎ取り。</li> <li>・プレハブ設置。</li> <li>・芝原遺跡より移動。</li> <li>・グリッド杭打ち。</li> <li>・X～Z-1・2区表層掘り下げ。</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表層掘り下げ(W～b-1～5区)。</li> <li>・溝状遺構検出(X～Z-2・3区, a・b-3・4区, Z-4区)。</li> <li>・土坑墓検出。</li> <li>・人骨出土(X・Z-2・3区 写真1)。</li> </ul>  <p>写真1 人骨出土状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・土坑墓検出(W-2・3区, Y-2区)。</li> <li>・中世同安窯青磁碗出土(Y-2区溝状遺構内)。</li> <li>・IV b層埋土ピット検出(Y・Z-2・3区)。</li> <li>・竪穴建物跡検出(Z-2・3区, V a層上面)。</li> <li>・中世掘立柱建物跡検出(X・Y-1～3区, 3間×3間)。</li> <li>・重久淳一氏(隼人町教育委員会)来跡(24日)。</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表土剥ぎ(Z・a-4・8区)。</li> <li>・表層掘り下げ(Z・a-5・6区, a-4区, X～Z-14～18区)。</li> <li>・VI層上面検出(W～Z-1～3区)。</li> <li>・V b層埋土ピット検出(X-2区)。</li> <li>・ピット内より土師器皿出土(Z-2区)。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土坑墓78号人骨取上(W-2区)。</li> <li>・柳原敏昭氏(東北大学助教授)来跡(11日)。</li> <li>・本田道輝氏(鹿児島大学助教授)来跡(19日)。</li> <li>・伊集院土木との現地協議(19日)。</li> <li>・藤田明良氏(天理大学教授)他6名来跡(22日)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・溝状遺構検出(No1213~1216, U~W-1~3区)。</li> <li>・大溝内から青銅製鏡出土(U~W-1~3区)。</li> <li>・ピット検出(U・V-1・2区)。</li> <li>・陶磁器片が混入する中世焼土検出(A~E-28~29区)。</li> <li>・竪穴建物跡検出(U-3区)。</li> <li>・平成12年度調査終了</li> </ul>
1 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・VI~VIII層掘り下げ(W~a-1~4区, W~Z-4区)。</li> <li>・表層掘り下げ(Y~a-18・19区)。</li> <li>・古道検出(W~Z-2・3区)。</li> <li>・竪穴建物跡検出(W-4区)。</li> <li>・カマド状遺構検出(X-1区)。</li> <li>・成川式土器出土(W-1・2区, 写真2)。</li> </ul>	<p><b>【平成15年度~実働13日】</b> (平成16年3月2日~平成16年3月16日)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表土剥ぎ(V・W-5区)。</li> <li>・ピット検出(V・W-5区)。</li> <li>・X・XI層掘り下げ(V・W-5区)。</li> <li>・平成15年度調査終了。</li> </ul>
	 <p>写真2 成川式土器出土状況</p>	<p><b>【平成16年度~実働63日】</b> (平成16年5月20日~平成17年3月29日) *平成16年8月~17年1月までは調査中断。</p>
2 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・XI層上面検出(W~Y-1~4区, a-3~13区)。</li> <li>・X・XI層掘り下げ(Z-5~13区)。</li> <li>・畠畝検出(A~I-21~29区)。</li> <li>・III層掘り下げ(A~C-26~29区)。</li> <li>・川側落ち込みライン確認(A~D-28・29区, F~K-30~39区, Y・Z-16~29区)。</li> <li>・石製品出土(W-3区)。</li> <li>・竪穴建物跡検出(W-3・4区)。</li> <li>・中世畠畝検出(A地点)。</li> <li>・中世畠畝より白磁・青磁出土(A地点)。</li> <li>・畠畝空中写真撮影(A~I-21~29区)。</li> <li>・完形土器出土(XI層より, Z-3区)。</li> <li>・集石検出(Z-9区, No1363・1364)。</li> <li>・永山修一氏(ラ・サール学園)来跡。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表土剥ぎ・掘り下げ(W~Y-5~7区)。</li> <li>・ピット検出(Y-6区)。</li> <li>・竪穴住居跡検出(No1931, Y-6区)。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・XI層掘り下げ(U~W-1~3区)。</li> <li>・III層掘り下げ(A~D25・26区)。</li> <li>・VIII層掘り下げ(A~E-26~29区)。</li> <li>・円形粘土塊検出(W-1区, 写真3)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芝原遺跡にて, 足形土製品の足部が検出。渡畑遺跡の足首部土製品との接合に成功。</li> <li>・ピット検出(W~Y-5~7区)。</li> <li>・竪穴住居跡検出(2・3号)。</li> <li>・土坑検出(No1951・1952)。</li> <li>・竪穴住居跡ピット検出(2・3号)。</li> <li>・森脇広氏(鹿児島大学教授)・和田るみ子氏(新和技術コンサルタント)来跡。</li> </ul>
3 月	 <p>写真3 円形粘土塊検出状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・X層掘り下げ(W-6区)。</li> <li>・ピット検出(W-6区)。</li> <li>・板倉有大氏(九州大学大学院)来跡。</li> <li>・近世溝掘り下げ(W-6・7区, 写真4)。</li> </ul>
	 <p>写真4 近世溝完掘状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・IX・X・XI層掘り下げ(V~Y-5~11区)。</li> <li>・ピット検出(V・W-7・8区)。</li> <li>・鉄生産関連遺構検出(X・Y-8・9区)。</li> <li>・石鍋出土。桑水流俊一氏(鹿児島読売記者クラブ)来跡。</li> </ul>

- ・大澤研一氏(大阪歴史博物館)来跡。
- ・橋口巨氏(坊津町教育委員会)来跡。

- ・Ⅻ層掘り下げ(W～Y-5・6区)。
- ・縄文時代晩期土坑検出(X-5区)。
- ・カマド状遺構検出(No2061, 2155, 1991大溝内, 写真5)。



写真5 カマド状遺構検出状況

- ・集石検出(No2202・2203, X・Y-5・6区)。
- ・ピット検出(X・Y-5・6区)。
- ・指宿式土器出土(W～Y-5・6区, 写真6)。



写真6 指宿式土器出土状況

- ・橋本達也氏(鹿児島大学総合研究博物館助教授)来跡(2日)。
- ・石組井戸跡検出(No2164, W-7区, 写真7)



写真7 石組井戸跡検出状況

- ・西村誠氏・大濱春代氏(鹿児島国際大学生)来跡(14日)。

- ・伊集院土木部との現地協議(17日)。
- ・岩永勇亮氏・榊原えりこ氏・真邊彩氏(鹿児島大学生)来跡(24日・29日)。
- ・調査終了。

## 第4節 中小河川改修事業関連の遺跡と概要

### 1 関連遺跡の概要

中小河川改修事業(万之瀬川)に伴い、調査を実施することになった遺跡は、渡畑遺跡を含めて6遺跡である。ここでは、報告書の刊行年度順に概要を示すことにする。尚、各遺跡の検出遺構及び出土遺物等の詳細については表1に示し、各遺跡の場所については第1図に示した通りである。

#### (1)南田代遺跡

鹿児島県南九州市川辺町田部田に所在し、万之瀬川流域右岸の自然堤防上に立地する。渡畑遺跡とは東南約4,600m離れた場所に位置する。

南田代遺跡では、縄文時代～中世の遺構や遺物が発見された。中でも、縄文時代前期の層から検出された石斧埋納遺構や剥片集積遺構は、当時の生活様式を知る上でたいへん貴重な資料となるものである。また、前期出土土器(轟式土器・曾畑式土器・深浦式土器)及び石器(石鏃等)も多量に見つかった。

#### (2)古市遺跡

南九州市川辺町永田に所在し、万之瀬川左岸の自然堤防上に立地する。南田代遺跡の東側に隣接しており、渡畑遺跡とは約4,700m離れた場所に位置する。

古市遺跡では、弥生時代～中世の遺構や遺物が発見された。特に、弥生時代中期の出土土器(山ノ口式土器・黒髪式土器)は、古市遺跡から1kmほど離れた内陸部にある寺山遺跡出土の同時期の遺物(須玖式土器)との関連性を考える上で興味深い遺跡となった。

#### (3)持躰松遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。渡畑遺跡A地点の北側に隣接しており、本遺跡との関連性も高い。

持躰松遺跡では、縄文時代晩期から近世までの遺構や遺物が発見された。縄文時代後期に出土した土器(南福寺式・出水式)、晩期の出土土器(入佐式、黒川式)については、渡畑遺跡から出土したものと類似点が多い。弥生時代は、終末期の在り系土器が豊富に出土し、中世前半期においては、掘立柱建物跡や溝状遺構・土抗墓等が確認された。また、それに伴い、県

3

月

内では例を見ないほどの多種多様な輸入陶磁器と、東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶磁器等が出土している。

#### (4)上水流遺跡

鹿児島県南さつま市金峰町花瀬に所在し、万之瀬川中流の右岸、標高約6mの自然堤防上に立地する。渡畑遺跡とは、南東約1,500m離れた場所に位置する。

上水流遺跡では、縄文時代前期から近世にかけての遺構・遺物が発見された。縄文時代前期では、曾畑式土器がほぼ単純な状態で出土し、石器組成などの時期判断を絞り込むことのできる数少ない遺跡である。

縄文時代中期～後期にかけては、阿高式系土器と指宿式土器が出土し、縄文時代晩期では黒川式土器及び後続する千河原段階の土器がまとまって出土した。中でも三叉文を有する資料が出土するなど、これまで不明瞭であった時期について良好な検討資料が出土している。竪穴住居跡こそ発見されなかったが、各時期ともに集石や土坑、ピットや焼土跡などが多数検出され、一定期間人々が生活していた様子が窺える。また報告書では、後期の編物圧痕のある底部片や、晩期の組織痕についてモデリング陽像を採り比較を行い紹介している。

弥生時代では、磨製穿孔具などの特徴的な石器が出土し、周辺遺跡との関係が注目される。

古墳時代では、11軒の竪穴住居跡が発見された。これに伴って、古式須恵器の器台・把手・付鉢・甕などや、県内では類例の少ない鉄製の摘鎌が発見された。

中・近世では、大溝（大型溝状遺構）から出土した16・17世紀を中心とした大量の陶器・磁器が注目される。これらの遺物は、中国・朝鮮・東南アジア産のものと同国内産のものに大別される。国内産のものの中には、初期の薩摩焼窯である堂平窯で生産されたとみられるものも多くあり、この時期の流通を考える上で重要である。また、鉄製品も多数出土しており、鍋の破片や鎌、火打金が出土している。

#### (5)芝原遺跡

鹿児島県南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。渡畑遺跡B地点の東側に隣接し、本書でも特筆したが縄文時代後期の足形土製品の足部（芝原遺跡）と足首部（渡畑遺跡）が合致したこともあり、関連性の高さが窺える。

芝原遺跡では、縄文時代中期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。縄文時代中期では、春日式土器を伴う竪穴状遺構が2基と土坑1基が検出されている。縄文時代中期の竪穴状遺構は検出例が少なく

注目される。また、竪穴状遺構からは、漁猟具であると考えられている鋸歯尖頭器（組合せ銛の先端部）が3点出土している。縄文時代後期の遺跡から出土する例はあるが、縄文時代中期の遺構から出土したことは貴重な情報である。尚、渡畑遺跡でも、この組み合わせ銛の可能性が高い石器が6点出土しており、関連性について検証中である。

縄文時代後期では、竪穴状遺構3基をはじめ、集石や土坑、ピットなどが多数検出され、一定期間人々が生活していた様子が窺える。

弥生時代以降については、多量な遺構・遺物が発見された。次年度以降に整理作業を行い、報告書刊行の予定である。

#### 刊行報告書一覧

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「南田代遺跡」

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(88)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「古市遺跡」

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(89)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「上水流遺跡Ⅰ」

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(113)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「持躰松遺跡」

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008「上水流遺跡Ⅱ」

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009「上水流遺跡Ⅲ」

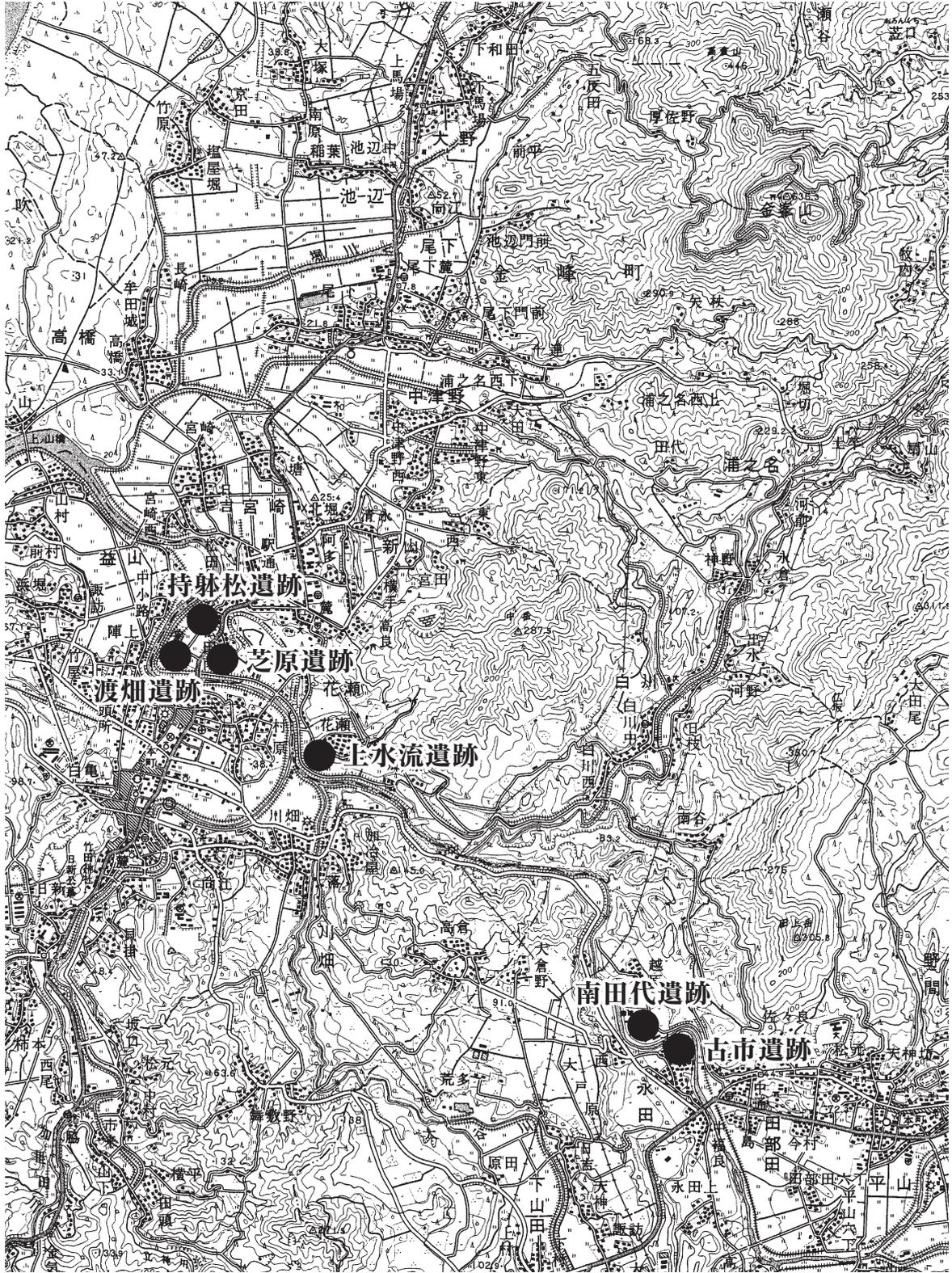
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(136)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「芝原遺跡Ⅰ」

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(150)

表1 中小河川改修事業関連遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物
1	南田代遺跡	27-82	01.5.7~ 01.8.29 02.10.4~ 03.3.20 03.5.6~ 03.5.27	13,700㎡	縄文時代早期		塞ノ神式土器
					縄文時代前期	集石、磨石集積、石斧埋納、剥片集積、黒曜石埋納	轟式土器、曾畑式土器、深浦式土器、石鏃
					縄文時代中期	集石	阿高式土器、春日式土器、船元式土器
					縄文時代後期		御領式土器
					縄文時代晩期		黒川式土器
					弥生時代		高橋式土器、松木園式土器
					古墳時代		成川式土器
					古代		土師器、須恵器
2	古市遺跡	27-89	01.9.3~ 02.3.25 02.5.07~ 02.10.3 03.10.20~ 03.11.12	17,180㎡	弥生時代	竪穴住居跡	高橋式土器、黒髪式土器、山ノ口式土器、松木園式土器、中津野式土器、石鏃、石斧、石包丁
					古墳時代	竪穴住居跡、溝状遺構	成川式土器、砥石、石製品
					中世	掘立柱建物跡	土師器、須恵器、白磁、青磁
3	持鉢松遺跡	35-130	97.9.1~ 98.2.27 98.10.12~ 99.3.25 99.4.20~ 99.10.14	7,038㎡	縄文時代後期		南福寺式土器、出水式土器
					縄文時代晩期		入佐式土器、黒川式土器、石鏃、磨製石斧、打製石斧、スクレイパー、磨石、叩石
					弥生・古墳時代	竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、ピット、土器溜まり	刻目突帯文土器、入佐式土器、黒髪式土器、山ノ口式土器、須玖式土器、松木園式土器、中津野式土器、砥石、ガラス製品、鉄製品
					古代	溝状遺構、土坑、掘立柱建物跡、畝間状遺構、ピット	土師器、須恵器、墨書土器、刻書土器、篋書土器、赤色土器、黒色土器、移動式カマド、鉄製品、紡錘車、鞆の羽口、鉄滓
					中世	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝状遺構、畝間状遺構、土師器集積遺構、土坑墓、ピット、杭列跡、石列	土師器、須恵器(東播磨系・樺万丈系)、瓦質土器、瓦器、赤色土器、黒色土器、常滑焼、瀬戸焼、備前焼、カムイ焼、青磁、白磁、青白磁、青花、輸入陶器、土鍾、土製品、滑石製石鍋、滑石製品、砥石、硯、刀子、鉄製品、鞆の羽口、鉄滓
近世		苗代川焼(薩摩焼)、肥前系陶磁器					
4	上水流遺跡	35-98	00.4.24~ 01.3.29 03.8.9~ 04.3.19 04.5.14~ 05.2.4 05.5.9~ 05.9.28	15,500㎡	縄文時代前期	集石、土坑、焼土、ピット、集積	曾畑式土器、方形土器、焼成粘土塊、石鏃、石匙、楔形石器、スクレイパー、石鍾、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石皿、石製品
					縄文時代中期～後期	集石、土坑、焼土、ピット	阿高式土器、南福寺式土器、指宿式土器、磨消縄文土器、松山式土器、土製品、石鏃、石匙、石斧、磨石、石皿
					縄文時代晩期	集石、土坑、焼土、ピット	入佐式土器、黒川式土器、千河原段階、三叉文施文の土器、孔列土器、刻目突帯文土器、南島系壺形土器、石鏃、石匙、石斧、磨石、石皿、石製品
					弥生時代		高橋式土器、入来Ⅱ式土器、黒髪Ⅰ式土器、磨製石鏃、磨製穿孔具、扁平片刃石斧
					古墳時代	竪穴住居跡、土坑、埋納ピット、礫集積、焼土	中津野式土器、辻堂原式土器、笹貫式土器、古式須恵器、ミニチュア土器、土製品、勾玉、菅玉、鉄製摘鎌
					古代		土師器、須恵器、縁釉陶器
					中・近世	掘立柱建物跡、大型土坑、大型溝状遺構、溝状遺構、塚状遺構、帯状硬化面、土抗墓、炉状遺構、土坑、畝間状遺構、畦状遺構、鍛冶炉、土器埋納遺構、礫積遺構	土師器、須恵器、カムイ焼、瓦質土器、染付・青花・薩摩焼(堂平窯・苗代川系・竜門司系含む)、輸入陶磁器(東南アジア系含む)、土鍾、砥石、石硯、鉄器、鉄滓、ガラス玉、軽石製品、石塔、銭貨、人骨、炭化桃核、ヤマトシジミ
5	芝原遺跡	35-81	99.10.15~ 00.4.24~ 01.1.25 01.5.7~ 02.3.19 02.5.7~ 03.3.20 04.5.6~ 05.3.22 05.5.14~ 05.7.16	49,600㎡	縄文時代中期	竪穴状遺構、土坑	春日式土器、石鏃、鋸齒尖頭器、石匙、スクレイパー、擦切石器、石皿、磨石
					縄文時代中期後半～後期前半	竪穴状遺構、埋設土器、土坑、集石、ピット、焼土、石皿集積、落ち込み	阿高式土器、南福寺式土器、出水式土器、岩崎系土器、指宿式土器、市来式系土器、土製品、石鏃、石匙、スクレイパー、楔形石器、石鍾、磨製石斧、打製石斧、礫器、擦切石器



第1図 中小河川事業関連遺跡位置図

## 2 事業関連遺跡の調査経緯

中小河川改修事業（万之瀬川）は、平成5年度の県教委による分布調査に始まり、これまで南田代遺跡、

古市遺跡、持躰松遺跡、上水流遺跡、芝原遺跡、渡畑遺跡について調査を進めてきた。一連の調査経緯については、表2に示した通りである。

表2 中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯

事業年度	遺跡名	調査内容	担当	備考
平成5年度	全遺跡	分布調査	鹿児島県教育委員会	
平成6年度	持躰松遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	県教委支援
平成7年度	上水流遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	
平成8年度	渡畑遺跡・持躰松遺跡	確認調査（一部本調査）	南さつま市（旧加世田市）教育委員会	県教委支援
平成9年度	持躰松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	松ヶ鼻遺跡	確認調査	鹿児島県教育委員会	
平成10年度	芝原遺跡・持躰松遺跡	確認・本調査	鹿児島県教育委員会	
平成11年度	芝原遺跡・持躰松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成12年度	上水流遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成13年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成14年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成15年度	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡 ・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成16年度	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	南田代遺跡・古市遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
平成17年度	上水流遺跡	本調査・整理作業	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成18年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅰ刊行	鹿児島県教育委員会	
	持躰松遺跡・芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成19年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅱ刊行	鹿児島県教育委員会	
	持躰松遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成20年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅲ刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成21年度	上水流遺跡	報告書Ⅳ刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業・報告書Ⅰ刊行	鹿児島県教育委員会	
予 定	芝原遺跡	整理作業・報告書Ⅱ刊行		
	渡畑遺跡	報告書Ⅱ刊行		
予 定	芝原遺跡	整理作業・報告書Ⅲ刊行		
予 定	芝原遺跡	報告書Ⅳ刊行		

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

渡畑遺跡は、鹿児島県の南さつま市金峰町宮崎の万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。(写真8)

万之瀬川は鹿児島市の南部美濃岳南麓に源を発し、川辺町（現南九州市）から南さつま市の加世田平野を横断している。さらに吹上浜に至り、東シナ海に注ぐ長さ約20km、流域面積381㎡の薩摩半島南部を代表する河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており、中下流域には沖積平野が広がっている。また万之瀬川の蛇行によって浸食された台地が見られる。こうした砂丘地と台地には、縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

河口より約6kmさかのぼった渡畑遺跡周辺の標高は約5m前後である。このあたりの表層は、未固結堆積物である粘土や砂礫のある河川敷で、後背地には灰色低地土壌が広がり、一部には黒泥炭土壌も見られる。

氾濫堆積物は主に砂・シルトからなり、場所によっては、その下位に砂礫からなる万之瀬川の旧河床堆積物が伏在する。

本遺跡で出土した縄文後期初頭以降の文化遺物は、自然堤防を形成した氾濫堆積物に覆われた土壌層中に見いだされる。そのことから、万之瀬川の自然堤防は、約4,000年前頃から形成されたことが分かる。

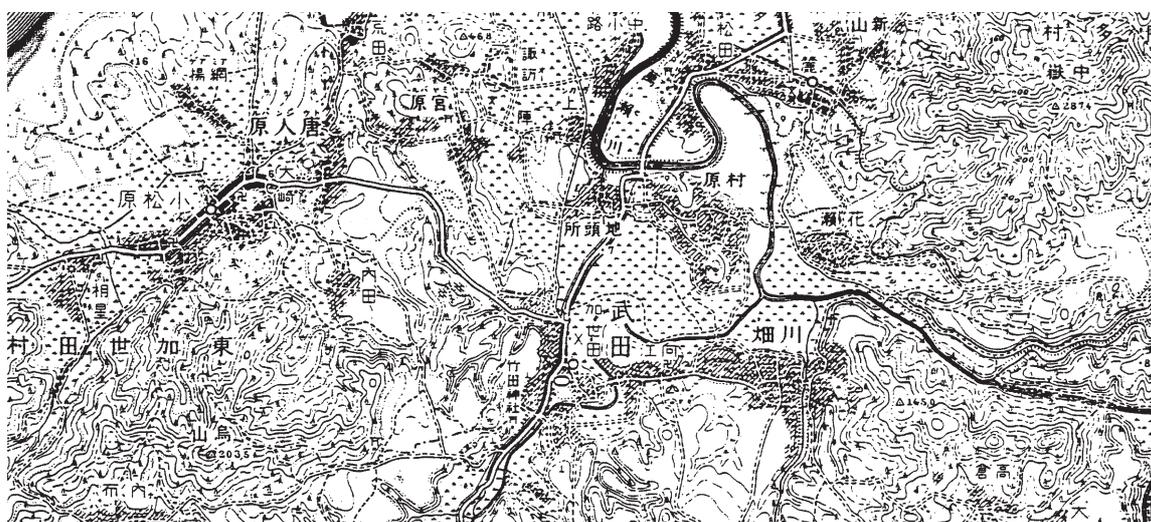
その後の万之瀬川の河道はあまり変化せず、厚さ4mほどの堆積物を氾濫によって累積してきた。氾濫堆積物の層区分とその推移から、遺跡周辺では縄文中期から中世までの顕著な氾濫は4、5回ほど認められる。この一帯は万之瀬川が大きく蛇行しており、かつ、加世田川や長谷川などの支流の合流地点も近くにあり、周辺の沖積平野は、過去梅雨や台風の時期になると水害に遭っている。



写真8 上空から見た渡畑遺跡周辺の様子

昭和10（1935）年の国土地理院発行の地図では、村原付近において河川改修が行われ、低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる（第2図）。これは、昭和初期の恐慌時に、失業対策事業として実施された河川改修事業であったと、加世田在住の古老より話を伺った。下流に目を向けると、現在の河口は、享和年間（1801～1804）の洪水により流れが変わってできたもので、新川と呼称されている。それ以前の万之瀬川河口はさらに南側に蛇行しており、現在の河口より約3km南にあったことがわかっている。周辺に目を向けると、東部には比較的なだらかな標高約200m

前後の山々が南北を縦断している。このなかで約7km北東方向にある金峰山は、旧町名（金峰町）の由来ともなった標高636mの薩摩半島中央部における最高峰で、古来より信仰の対象となっている。また、海上航行の際には、同山より南西方向に約22km先にある野間岳と共にランドマーク的役割を果たしていた。特に、野間岳に関しては、『三國名勝圖會』の中に「毎歳漢土の商舶、長崎に来る時は、洋中にて必ず此嶽を認て、針路を取り、皇國の地に到り、其始て認め見し時は、酒を酌て賀をなすといふ云々」の記述が見える。



① 明治35年測量



② 昭和44年測量

第2図 渡畑遺跡周辺地形変遷図

## 第2節 歴史的環境

南さつま市では、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている（第3図、表3）。

この中には、学史上極めて重要な遺跡も含まれており、当地域が考古学研究の良好のフィールドであることをあらためて示唆している。

旧石器時代では、金峰町小中原遺跡・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が、金峰町山野原遺跡・加世田平田尻遺跡から細石器や礫群が発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、加世田に楸ノ原遺跡がある。ここでは、煙道付き炉穴や集石等の遺構と、隆帯文土器・磨製石斧・丸ノミ状の磨製石斧等の遺物が出土し、国指定の史跡となっている。また、志風頭遺跡では、煙道付き炉穴から大型の隆帯文土器が出土している。早期の遺跡としては、前述の楸ノ原遺跡が著名である。昭和52(1977)年の発掘調査で出土した遺物は、前平式土器と吉田式土器の型式設定について問題を投げかけた。金峰町小中原遺跡では、前平式土器の円筒形・角筒形がまとめて出土している。前期の遺跡としては、金峰町阿多貝塚や上焼田遺跡が著名である。阿多貝塚から出土した資料は、阿多V類土器（現在では西唐津式とされる）と称され、上焼田遺跡からは玦状耳飾が出土している。

中期の遺跡としては、金峰町上水流遺跡で大型の集石と春日式土器が豊富に出土しており、河川沿い低地との関係において注目される。また、同町芝原遺跡の竪穴住居跡と石堂遺跡の阿高式土器・並木式土器の出土等も挙げられる。

後期の遺跡としては、先述の芝原遺跡がある。ここでは、大量の指宿式土器や南福寺式土器と、鋸歯状尖頭器や石鋸などの特徴的な石器も出土している。また、足形を呈する土製品は本県でも例が無く、加えて東隣の本遺跡出土の土製品と接合したことで注目される。

晩期の遺跡としては、上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡がある。ここでは土偶・軽石製岩偶・石棒など祭祀をうかがわせる資料が出土しているが、近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づけられることも多くなっている。また、加世田の干河原遺跡や金峰町上水流遺跡では、豊富な量の浅鉢と深鉢が出土している。下原遺跡では、縄文時代晩期終末～弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って、朝鮮半島系無文土器・糊痕のある土器・石庖丁などが出土している。

弥生時代から古墳時代にかけては、多くの遺跡で遺物の散布がみられる。金峰町高橋貝塚は、弥生時代前期を主体とする貝塚で万之瀬川の支流堀川の右岸、標高11mの洪積世砂丘上にある。昭和37・38(1962・1963)年に、河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調

査の結果、縄文時代晩期の夜臼式土器と弥生時代前期の高橋I式土器が共伴したことや、南海産の貝を素材とした貝輪や貝そのものが出土したことで、学史に残る遺跡となった。同町下小路遺跡は、弥生時代後期の須玖式の甕棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が装着されていた。また、同町松木藪遺跡では、弥生時代中後期の環濠である可能性のある大溝が松木藪式土器を伴って検出されている。

中津野式土器の標識遺跡である同町中津野遺跡からは、床面が3段構造になる竪穴住居跡が発見され、最下段である3段目からは完形土器が40個出土しているという。中津野式土器は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として位置付けられている。

古墳時代の遺跡としては、加世田小湊にある奥山古墳(六堂会箱式石棺墓)が特筆される。この遺跡は昭和6(1931)年に発見され、石棺内部には赤色顔料が塗られており、ガラス玉や長さ180cmの鉄剣、刀子が副葬されていた。平成17(2005)年3月には、鹿児島大学総合研究博物館助教授の橋本達也氏が再調査を行っている。その結果、周溝の一部と考えられる遺構が発見され、また同年8月の調査で4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。金峰町白糸原遺跡では、竪穴住居跡19基が検出されている。遺構内遺物から、辻堂原式から笹貫式にかけての時期の集落であるとされる。

古代にも多くの遺跡が発見されている。特にこの地域の遺跡では、集落が発見される場合が多く、広域的なあり方について検討する場合に重要な資料となることは間違いないと考えられる。荒平窯をはじめとする中岳山麓窯跡群は金峰町にあり、9世紀から10世紀にかけて稼動していたとみられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが、表面採集された遺物が荒尾窯(熊本県荒尾市)の製品との類似性が高いことから、人的・物的な交流があったと考えられている。同町小中原遺跡からは、多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字が刻まれた土器などが発見されていることから、阿多郡衙の跡ではないかと考えられている。

また、同町山野原遺跡でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。祭祀に関わるとみられる遺構や、土師器焼成遺構の可能性が考えられるものなども発見されており、在地の実力者にかかわる施設であった可能性が考えられている。

中世には、阿多郡は、ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって、唯一大宰府領であった。このなかで大宰府の権威をかりて領主権を確立し、やがて薩摩武士団の棟梁的地位を固めるまでに至ったとみられる阿多郡司平忠景は、12世紀前半の史料に初見される。

忠景の在位期間は中央政権の交代の影響で比較的短



第3図 周辺遺跡位置図

表3 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代							備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
1	牟田遺跡	南さつま市 金峰町高橋字真門砂入						●		
2	尾下遺跡	南さつま市 金峰町尾下			●					
3	亀ヶ城跡	南さつま市 金峰町尾下 麓						●		
4	田布施遺跡	南さつま市 金峰町野首他5		●		●		●		
5	筆付遺跡	南さつま市 金峰町尾下筆付		●	●		●			金峰町発掘
6	高橋貝塚	南さつま市 金峰町高橋			●					金峰町発掘
7	草原町遺跡	南さつま市 金峰町宮崎				●				
8	上焼田遺跡	南さつま市 金峰町宮崎焼田		●	●	●	●	●		金峰町発掘
9	堀川貝塚	南さつま市 金峰町宮崎		●						
10	阿多貝塚	南さつま市 金峰町宮崎上焼田		●	●	●				金峰町発掘
11	立原遺跡	南さつま市 金峰町宮崎				●				
12	中津野遺跡	南さつま市 金峰町中津野1119			●					県発掘
13	中津野城跡	南さつま市 金峰町新山						●		
14	万之瀬川床遺跡	南さつま市 金峰町益山万之瀬川			●	●				
15	上川原遺跡	南さつま市 金峰町宮崎上川原			●	●				
16	上花立遺跡	南さつま市 金峰町								
17	野村原遺跡	南さつま市 金峰町中津野				●				
18	白糸原遺跡	南さつま市 金峰町宮崎		●	●	●	●	●		県発掘
19	小中原遺跡	南さつま市 金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		県・町発掘
20	立野原遺跡	南さつま市 金峰町新山				●				
21	三反田	南さつま市 金峰町新山			●	●				
22	市菌遺跡	南さつま市 金峰町宮崎		●				●		県発掘
23	中小路遺跡	南さつま市 加世田益山			●	●				市発掘
24	陣跡遺跡	南さつま市 加世田益山陣						●		
25	内ノ田遺跡	南さつま市 加世田益山内ノ田	●			●		●	●	
26	松田南遺跡	南さつま市 金峰町花瀬		●		●		●		
27	持鉢松遺跡	南さつま市 金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県発掘
28	渡畑遺跡	南さつま市 金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	本報告書
29	芝原遺跡	南さつま市 金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県・町発掘
30	下東堀遺跡	南さつま市 加世田宮原下東堀	●	●		●				
31	大迫田遺跡	南さつま市 金峰町花瀬						●		
32	今城跡	南さつま市 金峰町花瀬今城原		●	●	●		●		
33	中岳山麓古窯群	南さつま市 金峰町花瀬					●			鹿児島大学調査
34	柵ノ原遺跡	南さつま市 加世田村原字柵ノ原	●	●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
35	上水流D遺跡	南さつま市 金峰町花瀬								金峰町発掘
36	花瀬遺跡	南さつま市 金峰町花瀬				●			●	
37	上水流C遺跡	南さつま市 金峰町花瀬		●		●		●		金峰町発掘
38	上水流遺跡	南さつま市 金峰町花瀬上水流森山		●	●	●	●	●	●	県・町発掘
39	針原遺跡	南さつま市 金峰町花瀬		●			●			
40	弥十山遺跡	南さつま市 金峰町花瀬		●						金峰町発掘
41	宇治野原遺跡	南さつま市 金峰町白川西	●	●		●				金峰町発掘
42	杉本寺遺跡	南さつま市 加世田川畑杉本寺			●		●	●		現市役所
43	上加世田遺跡	南さつま市 加世田川畑上加世田		●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
44	永田遺跡	南さつま市 加世田川畑永田					●			
45	加治屋遺跡	南さつま市 加世田川畑岩山・加治屋		●	●	●	●			県発掘
46	鮎受遺跡	南さつま市 金峰町花瀬		●		●				金峰町発掘
47	二頭遺跡	南さつま市 加世田川畑二頭				●				加世田市発掘
48	屋地遺跡	南さつま市 加世田武田屋地			●					
49	遠見ヶ岡遺跡	南さつま市 加世田川畑遠見ヶ岡		●	●					
50	上長迫遺跡	南さつま市 加世田川畑上長迫 川辺町下山田荒多迫, 他		●	●	●				

期間ではあったが、周辺地域にも多少の影響を与えたことも考えられる。

阿多郡はその後13世紀前半には北方と南方に分割される。金峰町が位置する阿多郡は阿多氏が、後には鮫島氏が支配を行い、加世田市が属する加世田別府は二階堂氏が、後には島津氏が支配するようになる。

中世前半の遺跡としては、平成8(1996)年から11(1999)年まで旧金峰町が発掘調査を行った小園遺跡が挙げられる。ここでは、掘立柱建物跡・円形竪穴遺構・区画溝等が発見され、遺物として11世紀後半から13世紀代の貿易陶磁と、須恵器・常滑焼・和泉型瓦器碗・類須恵器(カムイヤキ)・滑石製品等が出土している。このことから、金峰山信仰の拠点寺院として、12世紀前半の文献で初見される観音寺との強い関連性が指摘されている。観音寺は保延4(1138)年に、前述の阿多郡司平忠景より阿多牟田上浦の寄進を受けるなど、薩摩半島西南部における仏教及び山岳信仰の中心拠点であったと考えられている。

城館跡の発掘調査としては、上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻崎城跡などが知られる。発掘調査は行われていないが、加世田市益山の寺園氏宅には、二重の濠があったと伝えられ、現在もその痕跡が残る(上東2004)。中世に由来するかは明らかでないが、居館であった可能性も考えられる。

白糸原遺跡では、中世末から近世にかけての土坑墓が24基検出されている。この中には、南島産の夜光貝が入っているものもある。加えて、竪穴建物跡や双魚文青磁なども見つまっている。また、本遺跡の属する万之瀬川流域の遺跡群も、近年特に注目されている。万之瀬川下流には川底遺跡(加世田市山村・金峰町宮崎)と中流には古市遺跡・南田代遺跡(川辺町)などがあり、中世を中心とした縄文時代から近世・近代にわたる複合遺跡として今後の調査の成果が期待される。

近世においては、前述の金峰町上水流遺跡の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼(苗代川系)等が、福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また、万之瀬川河口付近を含む吹上浜沿岸では、東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている(橋口1999など)。

外城制度(天明4[1784]年、郷に改められた。)に関連するものとして、地頭仮屋(加世田は麓、金峰町は阿多と田布施の2か所)・庄内役所・浦役所・別当役所・会所・宿場・御蔵・常平倉・津口御番所・遠見御番所・射場・御牧などがあった。また、野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。加世田では川畑に現在所在する聖徳寺付近に、また金峰町内では阿多郷野町と

田布施郷池辺野町の二つがあった。渡畑・持躰松・芝原の各遺跡を含む宮崎の「御新田」とされる一帯は、享保13(1728)年、万之瀬川の中流域にあたる川辺町越ヶ原より用水路を引き新田開発が行われたものである。

交通網に目を向けると、本遺跡と下流側に隣接する持躰松遺跡には近世の街道『伊作筋』が通っており、現在は国道220号線となって万之瀬橋が架けられている。ここはかつて村原渡口と呼ばれる渡し場であり、昭和56(1981)年以前は船で渡っていた。また、大正3(1914)年には、南薩鉄道(鹿児島県唯一の私鉄)の伊集院-加世田間が開通している。これは、渡畑遺跡・持躰松遺跡のなかもかつて通っていたものであるが、昭和58(1983)年の6・21加世田水害を機に、翌昭和59年廃止された。数年前までは、遺跡周辺でも線路跡である土堤があちらこちらに残っていたが、近年になってその姿を消しつつある。近・現代においては、太平洋戦争(第二次世界大戦)時、加世田の唐仁原・高橋に、陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ、戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

#### 参考文献

- 鹿児島県 1975『南薩地域 土地分類基本調査』  
上東克彦 2004「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩クンディと果実形水注」『貿易陶磁研究24号』日本貿易陶磁研究会  
橋口 亘 1999「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究会19号』日本貿易陶磁研究会  
加世田市 1985「上加世田遺跡Ⅰ」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)  
1987「上加世田遺跡Ⅱ」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)  
1995「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)  
1999「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)  
金峰町 1998「上水流遺跡-第1次調査-」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)  
1998「持躰松遺跡 第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)  
2000「小園遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)  
鹿児島県 1991「小中原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(57)  
河口貞徳 1988『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社  
加世田市 1986『加世田市史』(上下)史編纂委員会  
金峰町 1987・1989『金峰町郷土史』(上下)郷土史編纂委員会  
原口虎雄 1982『三國名勝圖會』第二巻 図書出版青潮

### 第3章 調査の概要

#### 第1節 発掘調査の方法

平成8年9月～11月にかけて行われた県立埋文センターの確認調査を受けて、平成12年度に河川側と持鉢松遺跡隣接部分、平成15年度に樋門隣接部分、平成16年度に樋門部分から下流部分の本調査を行った。

調査は、対象区域全体に公共座標に沿って10mのグリッドを設定して実施した。本遺跡の北側からA・B・・・Z・a・b、東側から1・2・・・29・30とし、B-6区などと呼称することとした。(第4図)

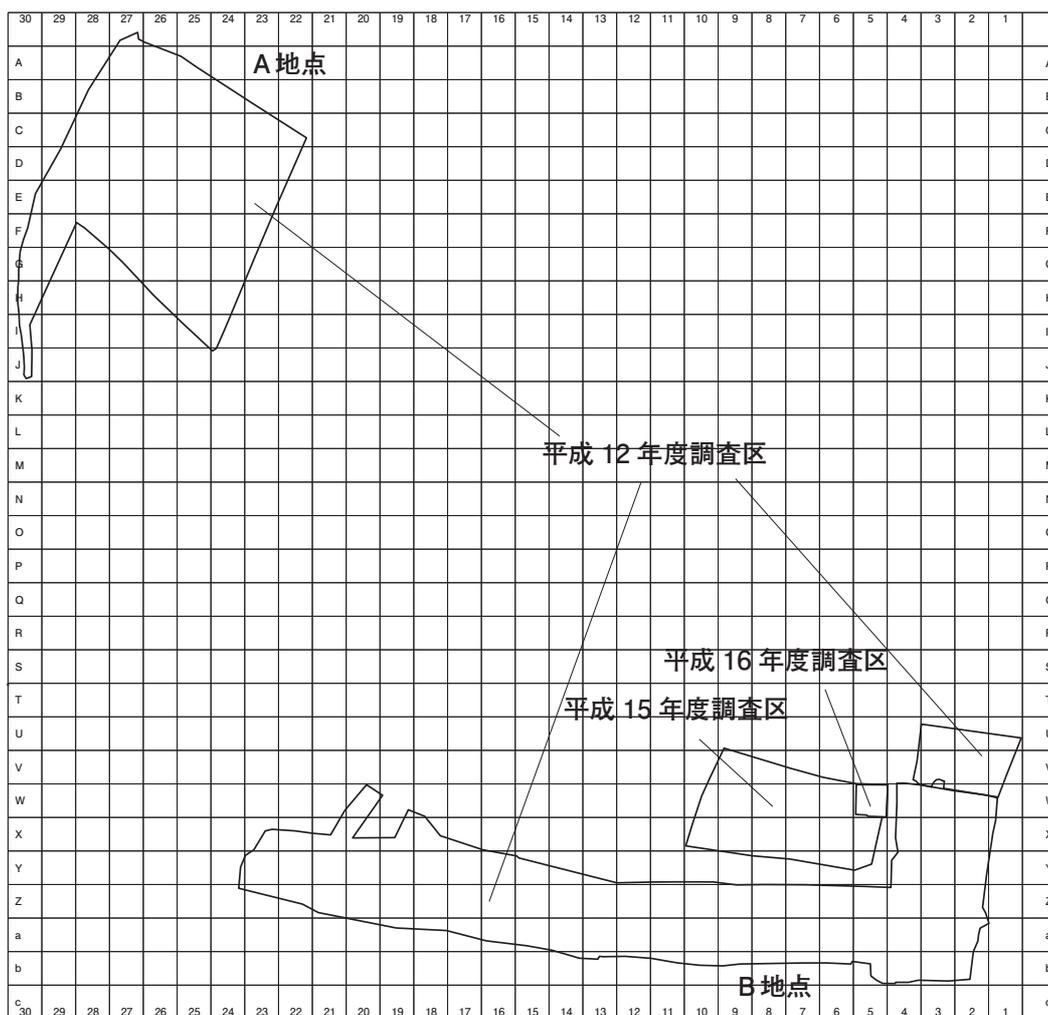
発掘調査は重機によってI層(表土)を除去した後、遺物包含層を人力で掘り下げた。場所により、II層以下に無遺物層が認められる場合も同様に重機で除去した。最後に、下層確認のためのトレンチを設定して、掘り下げていった。

これらの調査の結果、II層からXII層まで、縄文時代中期から近世までの遺物と遺構が発見された。

なお、調査区北西側にあたるA～J-22～30区の範囲を「A地点」とし、さらに調査区南東側にあたるU～b-1～24区の範囲を「B地点」と呼称することにした。

#### 第2節 整理作業の概要

渡畑遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は、平成8年度から平成16年度にかけての発掘調査中に、遺物の水洗・注記作業を並行して行い、本格的な整理作業を平成20年度から実施した。作業は、県立埋文センターで、他の万之瀬川流域遺跡群と同時進行の形でいった。



第4図 遺跡グリッド配置図

### 第3節 遺物の分類について

#### 1 土器

本遺跡のB地点から、縄文時代中期～晩期にかけての土器が7,940点出土した。層位はX層からXII層のものが混在しており、明確な分層が困難であった。そのため、器形と文様などの諸属性から、形式別に中期に相当する土器をI類～II類，中期～後期に相当する土器をIII類～XI類，晩期土器をXII類に分けた。

A地点からは古墳時代の土器が出土し、これらは新たにI類～IX類として分けた。尚，形式不明な胴部については、別類とした。B地点から出土した古墳時代の土器については、次年度報告書に掲載予定である。

#### 2 土製品

足形土製品と用途不明なメンコ類に分けて、24点を一括して掲載した。

#### 3 石器

縄文時代中期から晩期にかけての石器が381点出土した。土器同様，時期の明確な区分が困難なため，該

期の石器を一括して器種ごとに分類することにした。

石器について分析していくにあたり，石材及び器種において分類を試みた。これらは，中小河川改修事業に関連する遺跡から出土した石器に共通しているため，渡畑遺跡では出土しなかった石器や石材についても提示することにした。

##### (1) 石器分類 (表4, 5)

石器は，同一器種内で属性による相違が明瞭で，一定量以上出土するものについて，グルーピング化した。使用による折損や，欠損等により他器種への転用が見られる場合は，最終用途をその石器の器種と捉えて分類した。

##### (2) 石材分類 (表6, 写真9・10)

石材に関しては，石材産地を推定させる黒曜石及び安山岩，頁岩について石材の細分化を試み分類した。他に，頁岩や砂岩等にホルンフェルス化した石材も散見されたが，変成が顕著であるものについてのみホルンフェルスに含めた。頁岩については，硅質化が顕著な石材は，頁岩中に含めることにした。

表4 石器分類表(1)

器種	分類	概要
剥片石器	石鏃	剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施してある小型から中型の三角形の石器群を石鏃とした。
		I 全体の形状が正三角形を呈するもの。
		II 全体の形状が二等辺三角形を呈するもの。
		III 先端が尖り縁側が緩やかに曲線を描くもの。
		IV 全体の形状が五角形を呈するもの。 抉りの状況により I:浅い, II:深い, III:平坦
		IV 肩部の位置により A:上位, B:中位, C:下位 肩部から基部への広がり具合により a:広がる, b:同じ幅, c:狭まる
	V 剥離が大きく厚みのあるもの	
	VI 未製品や欠損品	
	鋸歯尖頭器	剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施し，両側縁部を鋸歯状に作出してある大型の三角形の石器群を鋸歯尖頭器とした。本石器と石銛を組み合わせ銛として使用したと想定される。
	鋸歯縁石器	剥片を素材として一側縁部に抉りを入れ，鋸歯状に作出し，もう一側縁部は微細剥離により刃部のように作出してある石器群を石銛とした。本石器と鋸歯尖頭器を組み合わせ銛として使用したと想定される。
	石匙	剥片を素材とし刃部及びつまみ部を作出し，つまみ部に着紐して携帯する石器群を石匙とした。
		I 縦型で，両側縁・両面に調整を施すもの。
II a 横型で両面に調整を施すもの。刃部とつまみ部が左右対称である。 II b 横型で両面に調整を施すもの。刃部とつまみ部が左右非対称である。		
スクレイパー	玉髓系石材を使用した資料中，剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形を施してあるものをスクレイパーとした。頁岩製でも小素材を利用し，刃部調整が丁寧なものは本類に含めた。	
	I 素材剥片の両側縁部を中心的に刃部調整が施され，柳葉状の器形を呈する。	
	II 素材剥片の下縁部を中心的に刃部調整が施され，横長楕円状の器形を呈する。	
	III 素材剥片の一辺に刃部調整が施され，器形を呈する。刃部調整は直線的である。	
	IV 長方形の素材剥片の接しない2縁側部に刃部調整が施される。 V 上記以外のスクレイパーである。	
二次加工剥片	玉髓系石材を使用した資料中，剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形が認められないものを二次加工剥片とし，刃部整形が認められるもので一定の大きさを有する頁岩製資料は礫器類に含めた。なお，後・晩期相当層出土中，頁岩製で横長剥片を素材とする刃部整形剥片を横刃形石器として分類した。	
横刃形石器		

表5 石器分類表(2)

器種	分類	概要	
石核		原石から石器製品作出のための剥片を採取した残存石材を本類に分類した。なお、剥離痕に顕著な使用痕等確認できる資料については、礫器類に含めた。	
	I a	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏2面を剥いだもの。	
	I b	周辺から中心に向かって剥ぐもの。	
	I c	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。	
	II a	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から1面のみを剥いだもの。	
	II b	周辺から中心に向かって剥ぐもの。	
	II c	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。	
	III a	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏2面を剥いだもの。	
	III b	周辺から中心に向かって剥ぐもの。	
	III c	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。	
	IV a	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏1面を剥いだもの。	
	IV b	周辺から中心に向かって剥ぐもの。	
IV c	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。		
剥片石器	石錐	I	つまみ部と棒状の錐部を有し、主要剥離面や礫皮面等をつまみ部とする。
		II a	錐部のみで構成され、つまみ部を有しない。礫皮面等の平坦な面が、基部端部に残されている。
		II b	基部端部も丁寧に整形され、平坦な面を有しない。
		III	大きなたまみ部に対し、小振りな先端部を作出整形し、錐部とする。
		IV	大きな欠損を有し、つまみ部の有無を確認することができない。
			つまみ部を有するI a及びI bは、つまみ部が指でつまめる大きさを有しており、直接手に持って使用した可能性が高いと考えられる。
楔形石器		ピエス・エスキューとも称される。表面観は方形で、上縁端部及び下縁端部は直接的で平行に位置する。刃部断面観が凸レンズ状に鋭角をなし、基部には敲打面を有する。本石器を木の実や骨などにあて、敲石等で敲いて割るために使用したと想定される。	
	擦切状石器	砥石と同様、砂岩質の礫素材を使用する。刃縁部の片面側もしくは両面側に削痕を有する。磨製石斧等の素材を抽出するために、礫素材を擦り切り、分割するための道具と考えられる。	
礫石器	磨製石斧	I	器厚が厚く、重量感がある。刃部が蛤の形態を有するものが多い。蛤型石斧が多い。
		II	Iより小型で、器厚が薄手。長方形状を呈する。定格式石斧が多い。
		III	細長で刃部が片刃である。鑿型石器と称されるタイプである。
	打製石斧	I	明瞭な袈りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。器厚は比較的厚い。短冊形石斧と称呼。
		II	明瞭な袈りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。I類に類似するが、器厚が極薄く、より鋤に近似する。扁平石斧と称呼。
		III	基部と刃部を境界作る袈り部を持ち、ラケット状を呈する。有肩石斧と称呼。
		IV	他器種からの転用品。
		V	分類不可資料及び未製品。
	礫器類	I	素材剥片の両側縁部を中心的に刃部調整が施され、柳葉状の器形を呈する。
		II	素材剥片の下縁部を中心的に刃部調整が施され、横長長楕円(長方形)状の器形を呈する。
		III	素材剥片の一边に刃部調整が施され、器形は三角形状を呈する。刃部整形は直線的である。
		IV	長方形の素材剥片の接しない2側縁部に刃部調整が施される。
		V	上面観が円形を呈しており、周縁部に調整を施し、基部及び刃部を作出する。ラウンドスクレイパーとも称呼される。
		VI	上記以外の礫器類である。
	磨石・敲石	I a	比較的小礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、敲打痕は不明瞭である。
		I b	全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
		II a	大きめな礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、敲打痕は不明瞭である。
		II b	全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
		III	上記I及びII類以外の資料である。上面観が長楕円形状もしくは不定形状を呈し、用途が敲石と考えられる資料群である。
	石皿類		石皿は大礫を利用し、磨面・凹面を有する。磨石とセット関係にあり、木の実を磨り潰すためと考えられる。
		台石も大礫を利用し、敲打痕を有する。敲石とセット関係にあり、石器製作時に石材を据え付けるためと考えられる。	
砥石		砂岩質の礫素材を利用し、主として長軸方向に削痕が縦走し、深い凹面を有することが多い。	
軽石製品		軽石を素材とする。穿孔や凹み等加工痕が残される。	
石錘	I a	左右1対の袈り部を有する。袈り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。	
	I b	上下側面に敲打痕を有する。磨石を二次利用した可能性がある。	
	II	左右及び上下2対の袈り部を有する。	
玉類	管玉	細長い竹管状を呈する。穿孔部に紐類を通して用いた装飾品と思われる。	
	勾玉	半月形・半楕円形・コ字形状などをなし、着紐のための一孔が施される。	
礫石器	磨製扁平石斧	扁平片刃で側面断面観が(隅丸)方形を呈する。大陸系とみなされ、工具の機能を有したと想定される。	
	磨製穿孔具	砥石と同様な砂岩質の素材を利用する。基部と円柱状の穿孔部からなる。穿孔部には回転条痕等が残される。石包丁の穿孔ようとしての機能が想定される。	

表6 石材分類表

器種	分類	概要
黒曜石 (ob)	I	不純物を多く含み、漆黒で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市平木場、いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	II	光を通し、不純物を大量に含む物を総括した。鹿児島市の三船、伊佐市の日東、五女木、錦江町、長谷等の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似する。
	III	飴色～黒色を基調とし、不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。えびの市の桑ノ木津留、伊佐市の上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似する。
	IV	黒色で不純物を全く含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市腰岳山の資料に類似するが、一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系の物も含まれる。
	V	青灰色で不純物の少ない物を包括した。針尾中町や長崎県佐世保市東浜、淀姫等西九州の原産地資料に類似するが、原産地不明の一群も含まれる。
	VI	不純物をあまり含まない灰色の物を包括した。椎葉川周辺の物を資料とするが、原産地不明の一群も含んでいる。
	VII	原産地不明な物を包括した。
安山岩	I a	黒色を呈し、砂質感が強い。斜長石が殆ど含まれない。西北九州産であると考えられる。
	I b	I aが風化したもの。
	II	西北九州産か？斜長石が殆ど含まれず、珪質の光沢がある。
	III a	上牛鼻産と考えられる。斜長石が密に含まれる。黒色もしくは青灰色を呈し、光沢感が強い。風化していない、もしくは、弱い風化が見られる。
	III b	III aに類似するが、風化が強い。
IV	上記以外の一般的な安山岩。花崗岩との区別においては、帯磁率を基準とし20×10 <sup>-1</sup> SI以上を本類に含めた。	
凝灰岩	火山灰や火山砂などが堆積し、凝固したもの。親指大の礫を含む凝灰角礫岩を含む。	
花崗岩	御影石とも呼称。石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。安山岩との区別は、帯磁率において20×10 <sup>-1</sup> SI程度の石材を本類に含めた。	
蛇紋岩等	蛇紋岩はめめとした肌触りを有し、光沢がある。石材不明資料中、蛇紋岩に類似した資料を含めた。	
頁岩	I	風化が顕著で、白色もしくは乳白色を呈する。
	II	風化が見られる。層状剥離や白筋が見られるのが多い。
	III	IIに類似するが、風化がない、もしくは弱い。
	IV	風化が全くない。光沢があり、漆黒色を呈する。
	V	風化が全くない。光沢があり、黒色や黄橙色、白色、乳白色、青灰色などを呈する。珪質の頁岩。
	VI	粘板岩に類似。薄茶色を呈し、剥離が強い。シルト質の頁岩。
	VII	錆が付着。黒色を呈し、剥離が強い。
	VIII	硬質頁岩の一種で、長石が粒状に多量に含まれる。金峰山が産地と考えられる。
砂岩	砂粒・石英が集合して固まった堆積岩の一種。触ると砂粒感が強いものを本類に含めた。	
粘板岩	極微小な砂粒(泥粒)が集合して固まった堆積岩の一種。頁岩に似て層状を成すが、薄茶色～茶黄色を呈し、指で触ると粉が指頭に残るものを本類に含めた。	
ホルンフェルス	硬質化が著しく、鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。ただし、硬質化(もしくは、珪質化)した頁岩は本類に含めず、頁岩に分類した。	
めのう系	めのう・玉随・石英・タンバク石・鉄石英・水晶・石英斑岩などを総称して、本類に含めた。	
チャート	珪酸を含み光沢感を有する。灰白色を呈する。	



ob I

ob II



ob III

ob IV



ob V

ob VI



安山岩 I a



安山岩 I b



安山岩 II



安山岩 III a



安山岩 III b

写真9 石材分類写真(1)



頁岩 I



頁岩 II



頁岩 III



頁岩 IV



頁岩 V



頁岩 VI



頁岩 VII



頁岩 VIII

写真10 石材分類写真(2)

## 第4章 遺跡の層位

渡畑遺跡は、万之瀬川下流沿岸の自然堤防及び河川敷に立地しており、地層は基本的に河川堆積の砂質土および粘質土である。

本遺跡は、調査区北側の持躰松遺跡に隣接するA地点と、調査区南側の芝原遺跡に隣接するB地点とに分かれ、それぞれで層位が異なる。

A地点においては、表7に示す通りI～V層に分層できる。古墳時代の遺物が出土したV層より下位の層位からは、検出遺構や出土遺物はなかった。そのため、A地点の調査は、古墳時代～近世の遺構・遺物の報告となる。

B地点においては、表8に示す通りXII層に分層できる。しかし、水田耕作や過去数回に及ぶ河川の氾濫に伴う洪水堆積層などを含んでおり、層位が安定してい

ない。北側ではⅢ～Ⅴ層が削平されており、古代から近世までの遺構・遺物はほとんど見られない。また、縄文時代中期から晩期の遺物包含層は、基本層位のX～XII層に該当するが、明確な時期の区分は困難である。

表8 B地点の層位

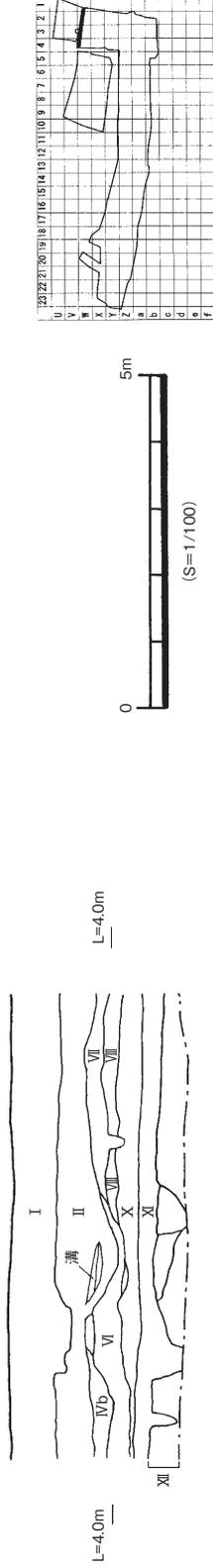
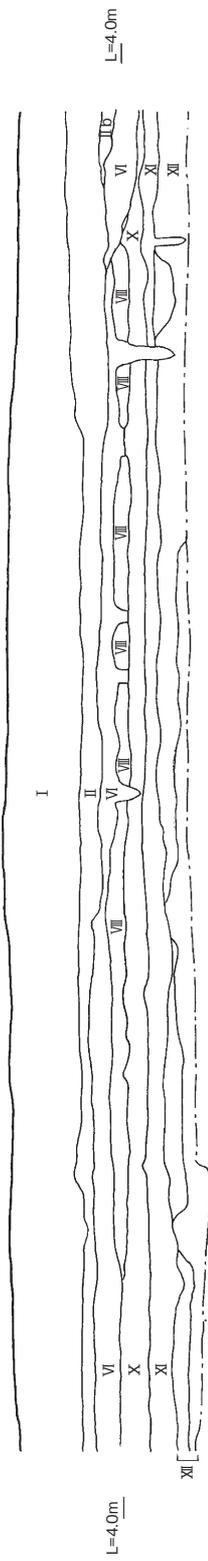
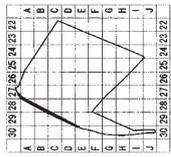
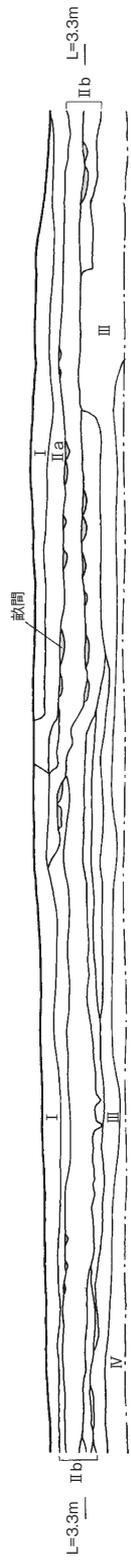
I 層	灰褐色土	現耕作土
II 層	茶褐色砂質土	近世遺物包含層
III 層	黒色砂質土	中世後期遺物包含層
IV a 層	黄褐色砂層	
IV b 層	茶褐色砂質土	中世前期遺物包含層
V a 層	黄褐色砂層	
V b 層	明茶褐色粘質土	古代遺物包含層
VI 層	黒褐色砂質土	古代・古墳時代 遺物包含層
VII 層	暗黄褐色砂層	
VIII 層	明茶褐色砂質土	古墳時代遺物包含層
IX 層	黄褐色砂層	
X 層	明黒褐色砂質土	縄文時代晩期遺物包含層
XI 層	黄橙色砂質土	縄文時代後期遺物包含層
XII 層	白色砂層	縄文時代中期遺物包含層

表7 A地点の層位

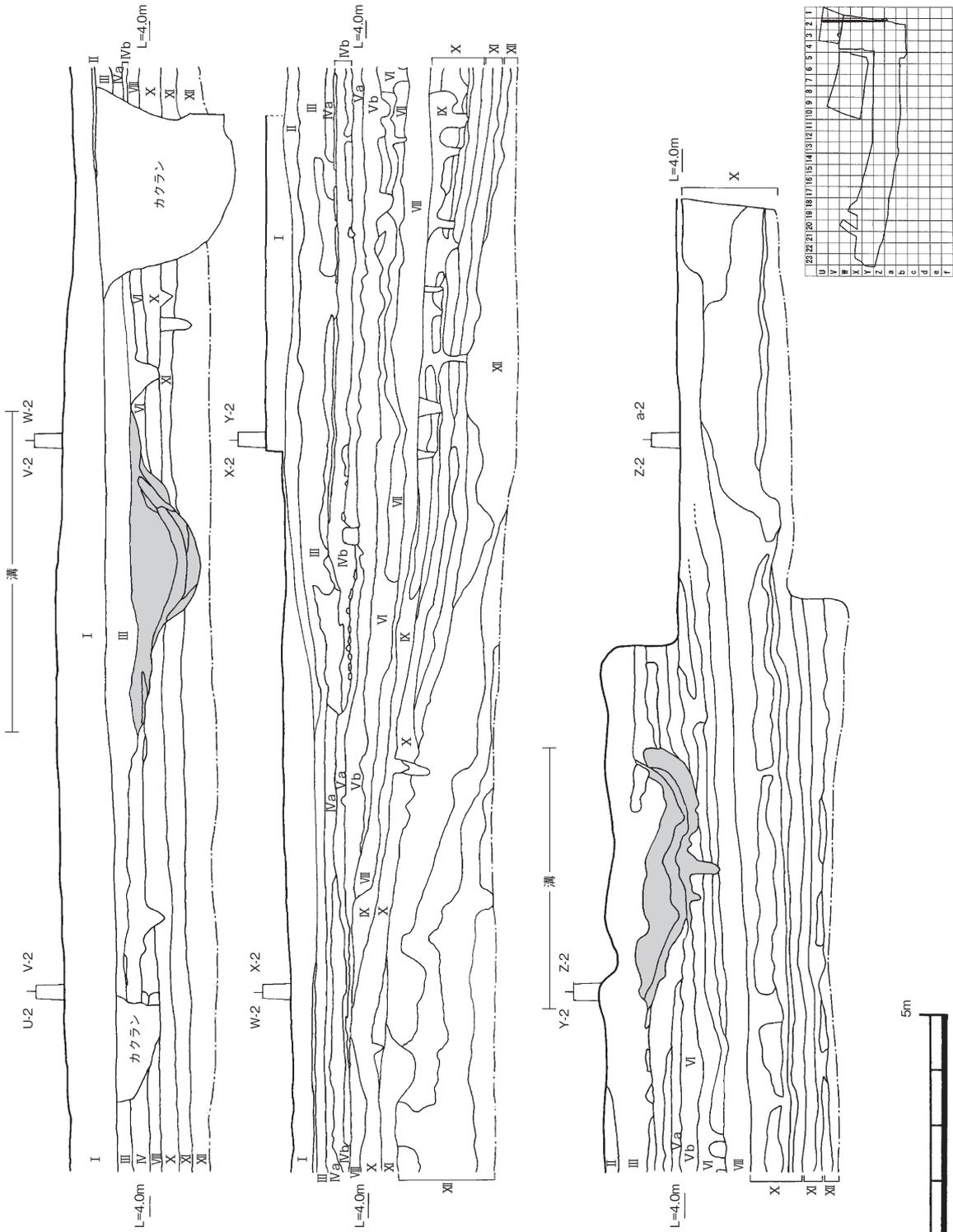
I 層	黒褐色土	現耕作土
I b 層	小軽石混白色砂層	畝間状遺構埋土・近世
II 層	灰褐色砂質土	近世遺物包含層
III 層	黒褐色砂質土	古代・中世遺物包含層
IV 層	暗黄褐色砂層	
V 層	小軽石混明茶褐色砂質土	古墳時代遺物包含層



写真11 B地点北側土層断面



第5図 土層断面実測図 (1)



第6図 土層断面実測図 (2)

## 第5章 縄文時代の調査

### 第1節 調査の概要（第7図）

#### 1 A地点の調査

確認調査により、26トレンチ（以下「T」とする）と27Tにおいて古墳時代以降の検出遺構・出土遺物は確認できた（第7図）。しかし、24T～28T全てにおいて、VI層より下層については遺物包含層が確認できなかった。

これを受け、本調査において重機を使用して表土を除去した後、人力でI b層以下の掘り下げを行った。その結果、どの地点からも縄文時代の遺構は検出されず、遺物も出土しなかったことが判明した。

VI層より上層から検出された遺構や出土した遺物については、第6章～第9章で述べることにする。

#### 2 B地点の調査

確認調査により、19Tの表層の下層が縄文時代晩期の包含層であったことが判明し、晩期以降の包含層の多くは削平されていることが確認できた。また、さらにその下層では、後期の包含層が3枚あることが確認できた。同様に、縄文時代中期から晩期に該当するX～XII層と対応する層が18Tでも確認できた。しかし、全く削平を受けていない13T・14T・17T・21Tから縄文時代後期の包含層は確認できなかった。このことから、縄文時代後期の調査範囲を18T付近より東側に限定して調査を進めた。

B地点の本調査も、A地点同様に重機を使用して表土を除去した後、人力でII層以下の掘り下げを行った。

調査の結果、該期の遺構は集石が3基、土坑が29基、ピットが255基・焼土跡が1基検出された。竪穴住居跡等は検出されなかった。

該期出土土器は総数7,940点を数え、このうち器形と文様などの属性が判明するもの621点を抽出し、掲載することにした。中期の土器は、型式等を明確に分類できたものが5点のみであったため、全てを掲載することにした。後期の土器については、出土点数は多かったが、小片がほとんどで、器形がはっきりするものは少なかった。そのため、器形よりも施文による分類を優先させた。晩期の土器も後期と同様に小片が多いため、器面調整により「粗製土器」「精製土器」「半粗半精製土器」の3つに分類した。その他、足形土製品を含め、用途が不明の土製品24点を一括した。

石器は総点数381点を数え、剥片石器と礫石器とに分け、器種が判明しているもの49点を掲載した。時期については、中期～晩期が混在しており、明確な分類が困難なことから、総括して報告を行うことにした。

### 第2節 遺構（第8～11図）

遺構配置は、第8図～第11図に示したとおりである。遺構は、V～Y-5～10区にかけて集中しており、やや離れてU・V-1区にも土坑とピットが集中している。U～Y-2～4区からは、該期の遺構は検出されなかった。Z-9区から検出された集石3号の周囲には、遺構が確認されなかった。

#### 1 集石

XI・XII層該当の集石は3基が確認され、調査区北側から番号を付けていった。

##### (1) 1号集石（第12図）

X-5区のXII層から検出された。礫は80cm×80cmの範囲に集中している。レベル差は10cmの範囲内に収まっている。

礫の大きさは約2～5cmと小さく、角礫が主流を占める。石材は、万之瀬川流域でよく見られる頁岩が主体を成すが、他の石材も若干見られた。

本集石から黒曜石を石材とした石核が一個出土したが、他に石器類は出土しなかったことから、意図的に置かれたものではなく、紛れ込んでいたものと考えられる。

掘り込みは、はっきりと確認できなかった。礫は、被熱が認められるものがほとんどであるが、埋土内に炭化物、焼土は確認できなかった。

##### (2) 2号集石（第12図）

X-6区のXII層から検出された。1号集石とは5m程しか離れておらず、周囲にはピットや焼土跡が検出されていることから、調理場等の生活の跡が窺える。

礫は60cm×80cmの範囲に収まっており、2～10cm大の頁岩を主体とした円礫で構成されている。断面で確認したところ、レベル差が70cmもあることから、廃棄された礫である可能性が高い。

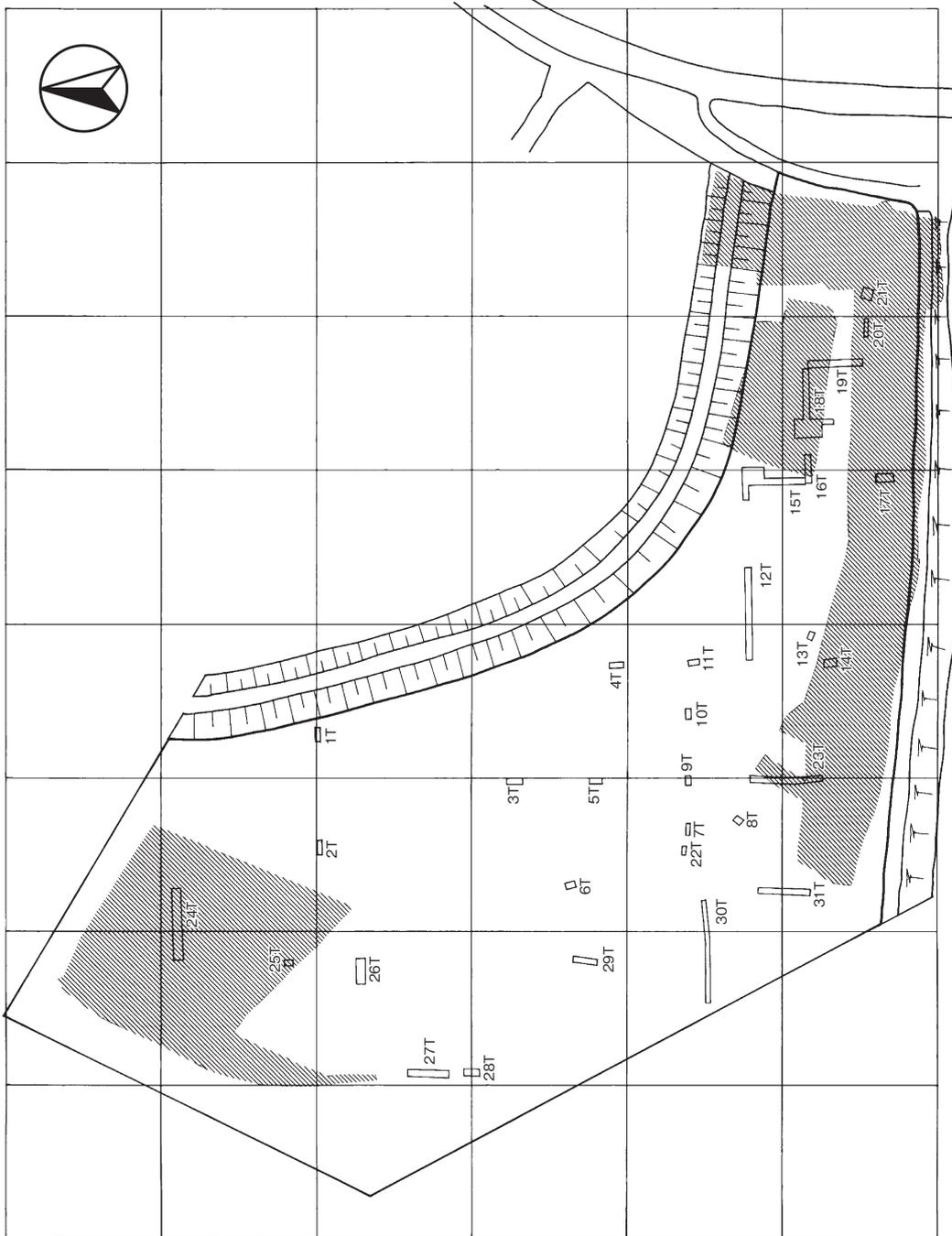
ほとんどの礫に被熱が確認されるが、炭化物や明瞭な焼土は認められなかった。

##### (3) 3号集石（第13図）

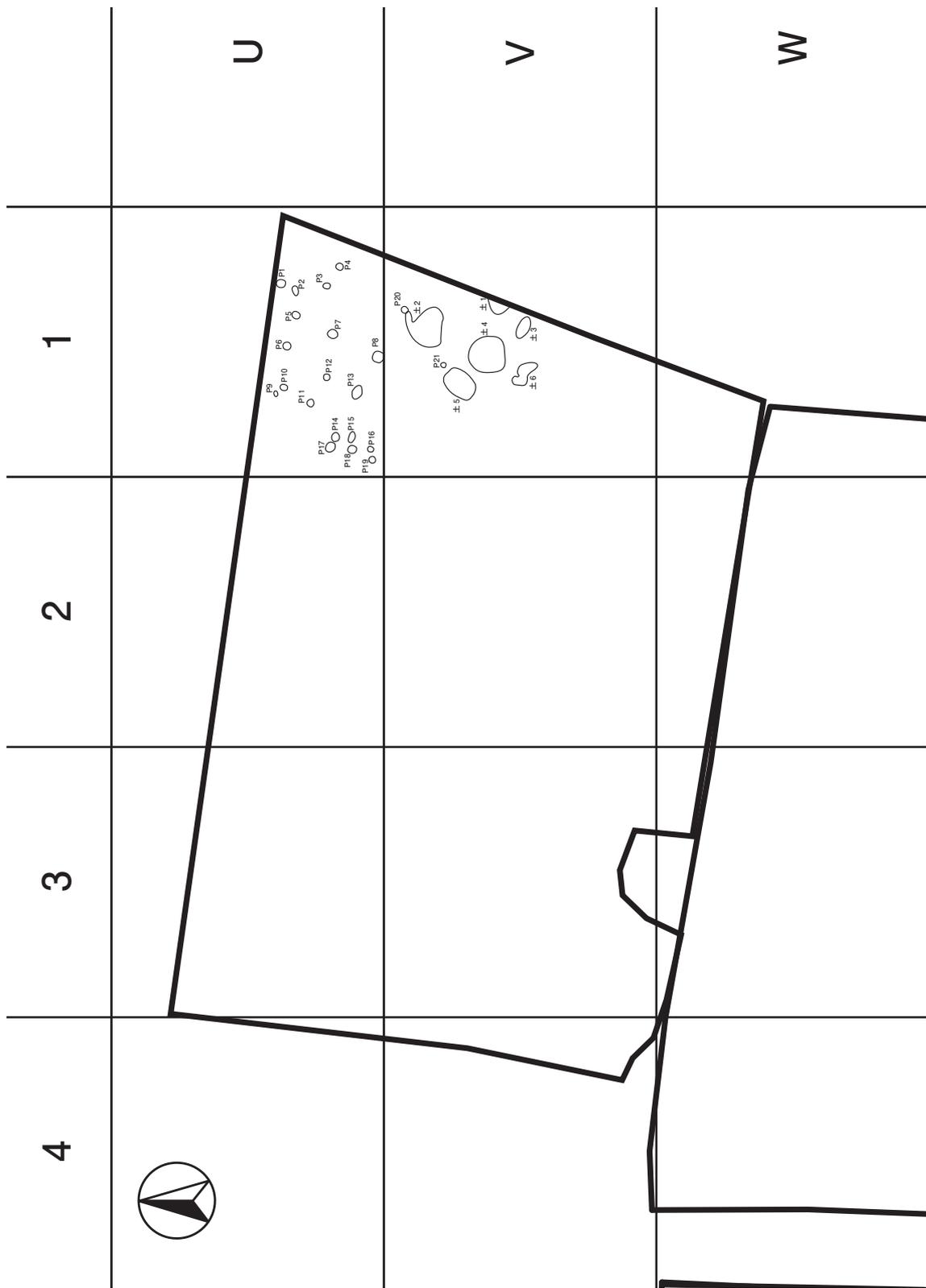
3号集石は、1・2号集石とは離れZ-9区のXI層から検出された。また、周囲にも該期のピットや土坑は検出されなかった。

水磨によって角のとれた5cm大の礫が、直径60cmの円形の範囲に密集している。掘り込みは30cmの深さで、構成礫のレベル差は20cmである。

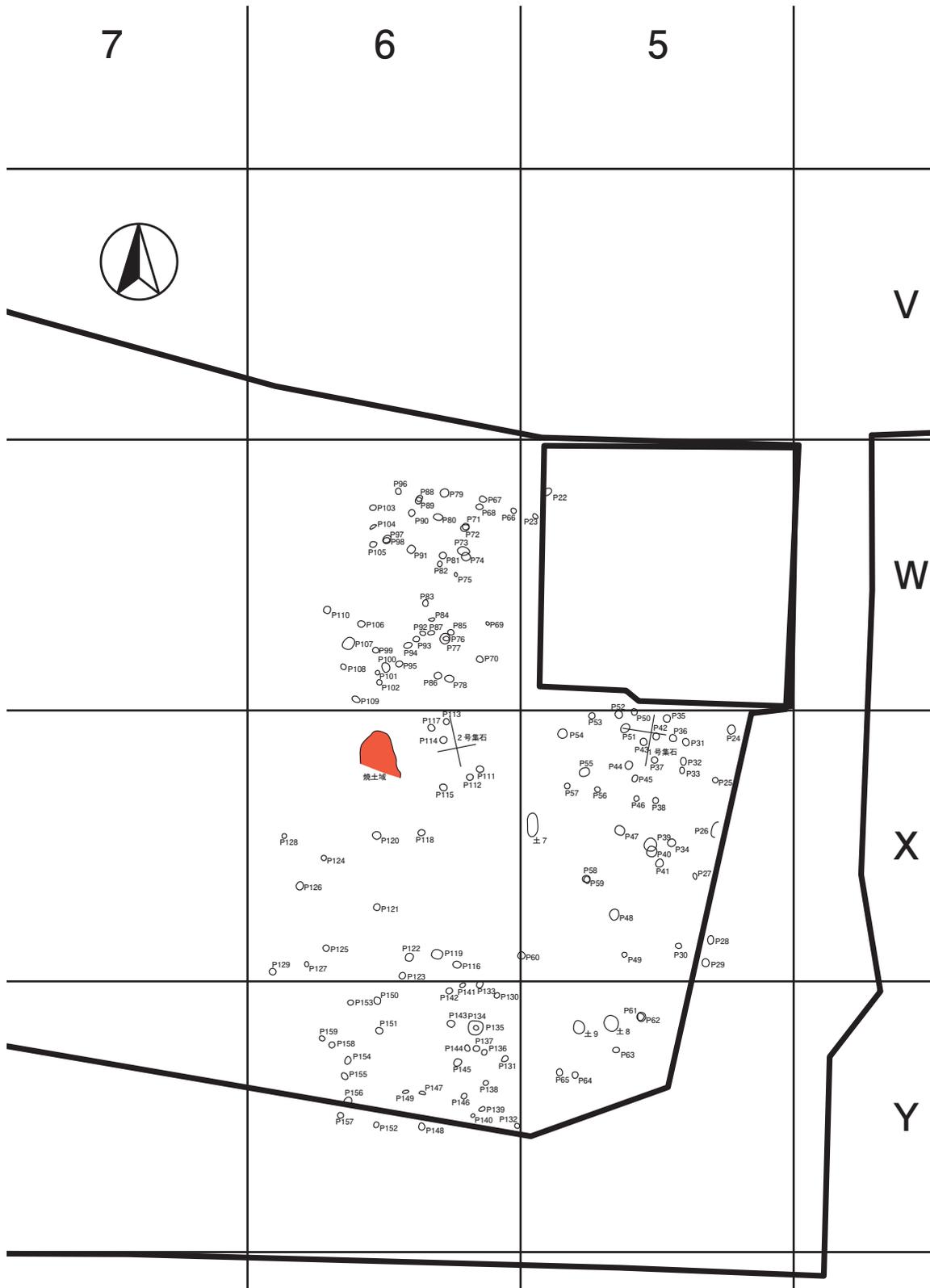
礫に被熱は確認できず、埋土に焼土跡や炭化物は確認できなかった。



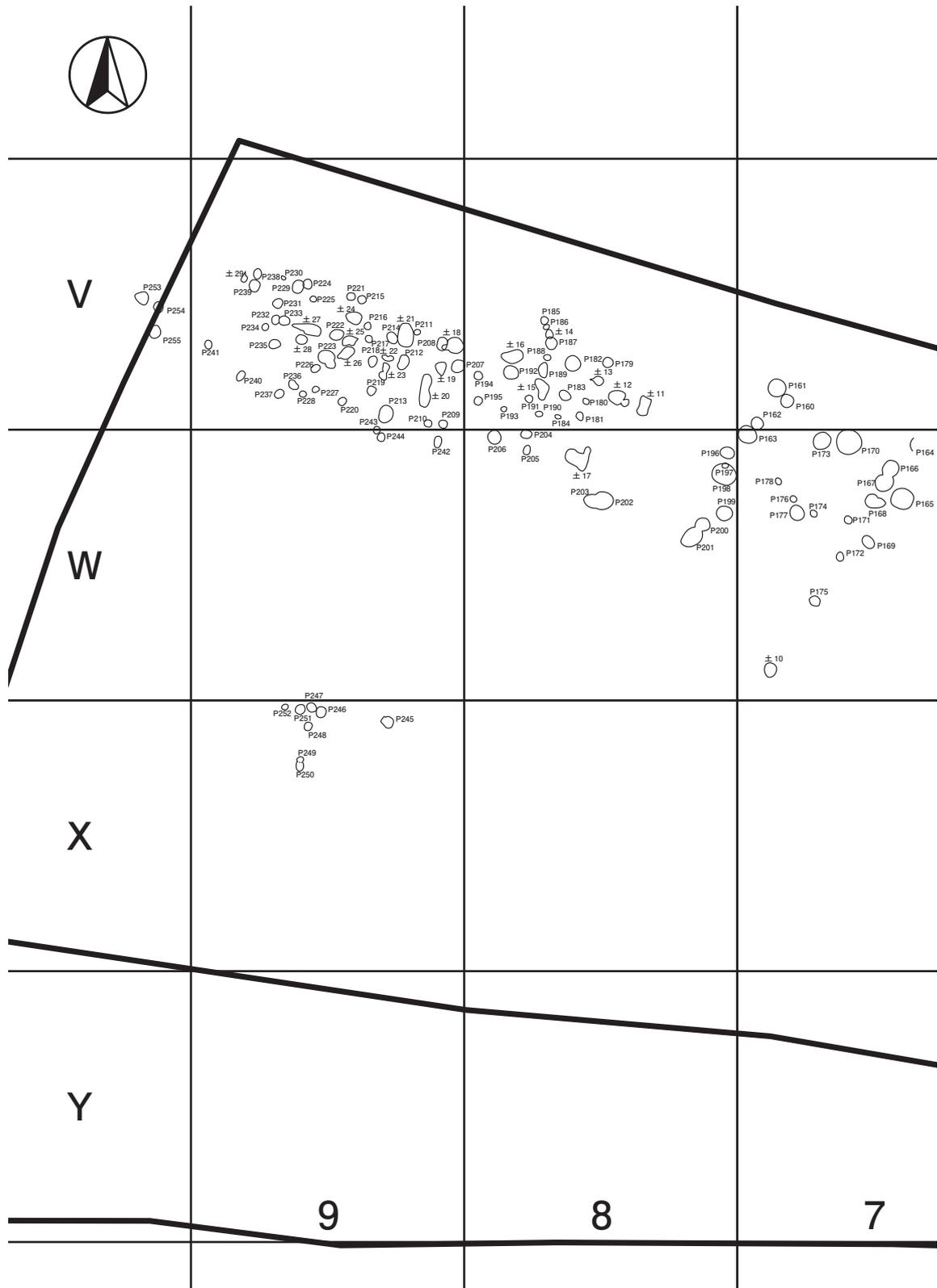
第7図 確認トレンチ配置図 (1 : 2,000)



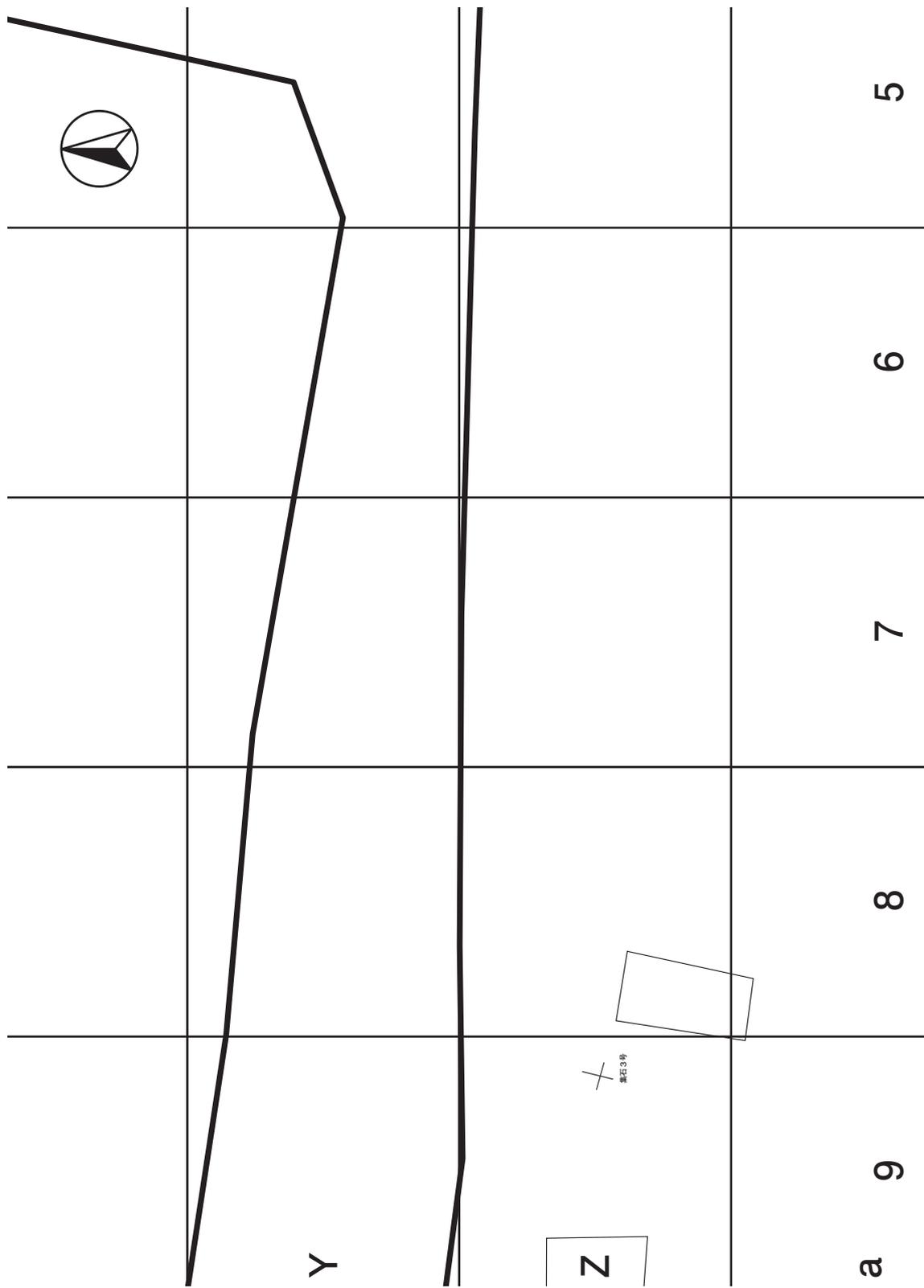
第8図 遺構配置図(1)



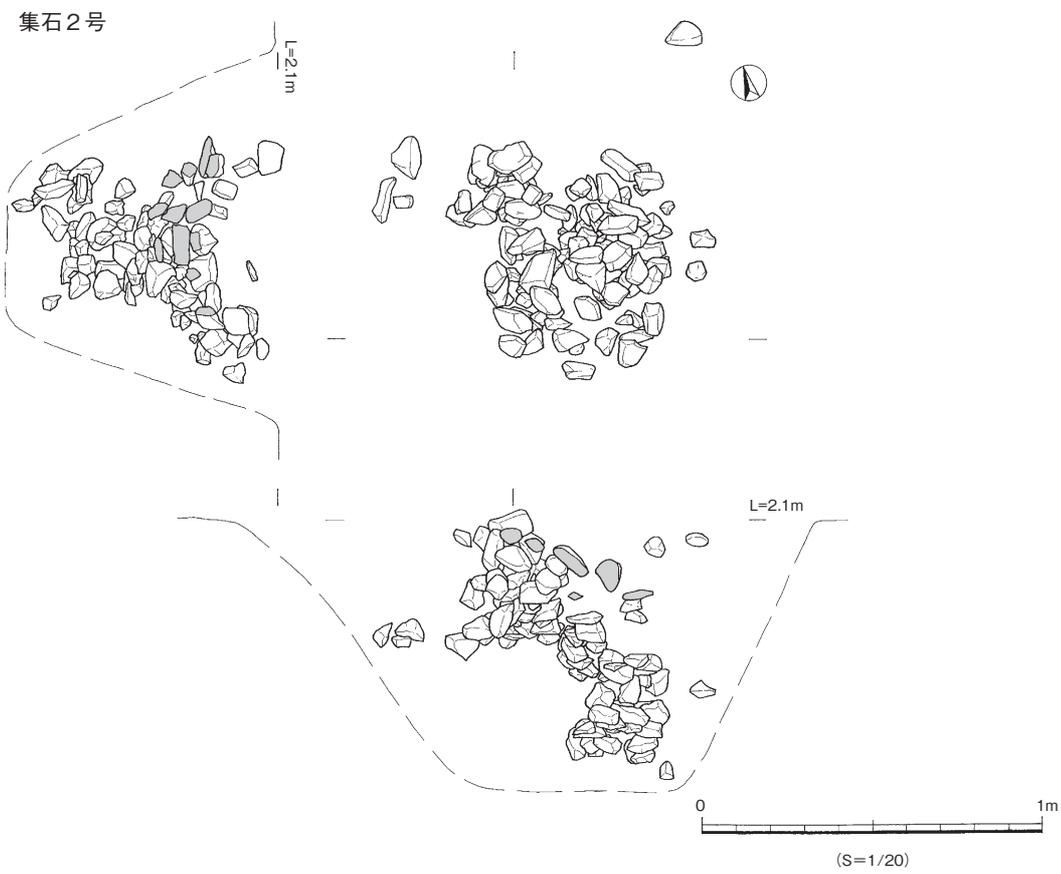
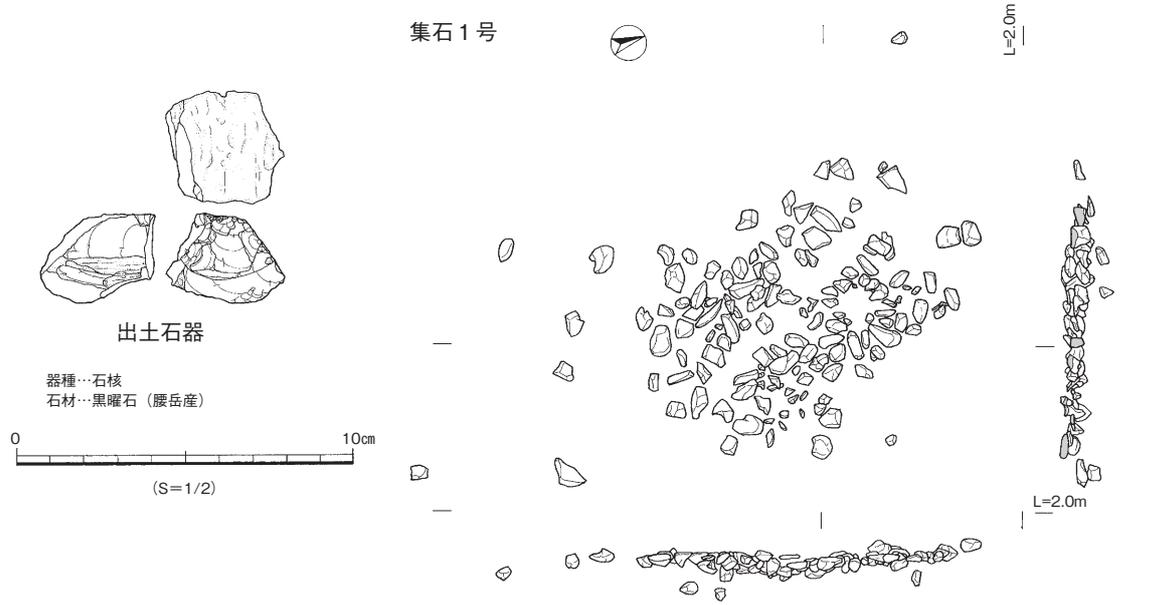
第9図 遺構配置図 (2)



第10図 遺構配置図 (3)

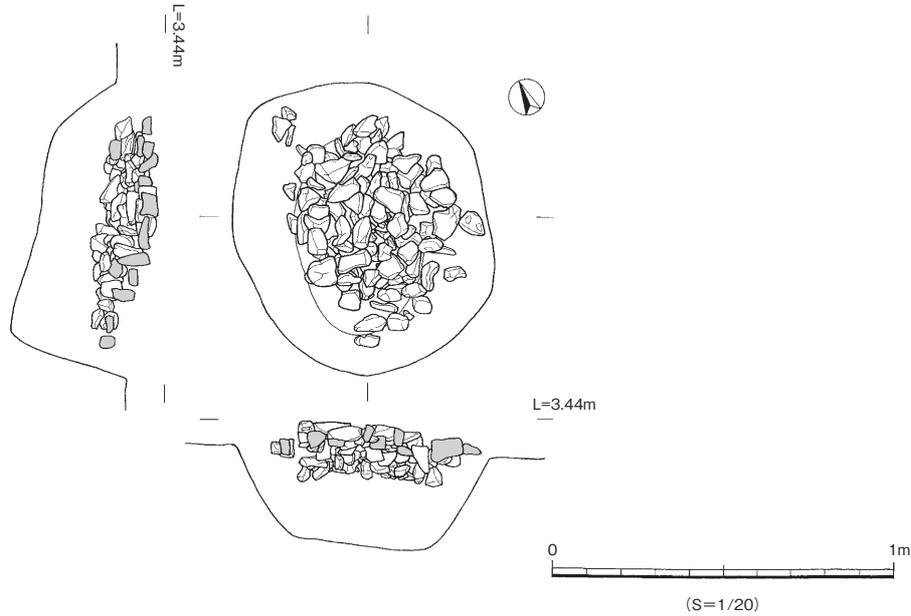


第111图 遺構配置図(4)



第12図 集石実測図 (1)

集石3号



第13図 集石実測図 (2)

## 2 土坑 (第14図1～第18図29)

該期の土坑は29基が確認され、調査区北側からグリッドごとに区切って番号を付けていった。

土坑1～6は、V-1区から検出された。隣接するU-1区からは、同時期と思われるピットが19基検出された。いずれも埋土は砂質土で、細かい炭化物を含んでいる。1は東側調査区の壁際で検出された。2は長径168cm、短径148cmの大型土坑である。土坑内にピットが3基認められたが、いずれも深さ10cm程度と浅い。4も長径144cm、短径139cmと大型の土坑である。土坑内にピットは確認できなかった。5は、土坑内にピットが3基認められ、1基は深さが約50cmある。

土坑7は、X-5区から検出され、埋土内から土器片が大量に出土した。土器は、晩期の浅鉢で、全て内面を上にして重なるように検出された。埋土は暗紫褐色粘質土で、炭化物をやや含むが焼土は確認できな

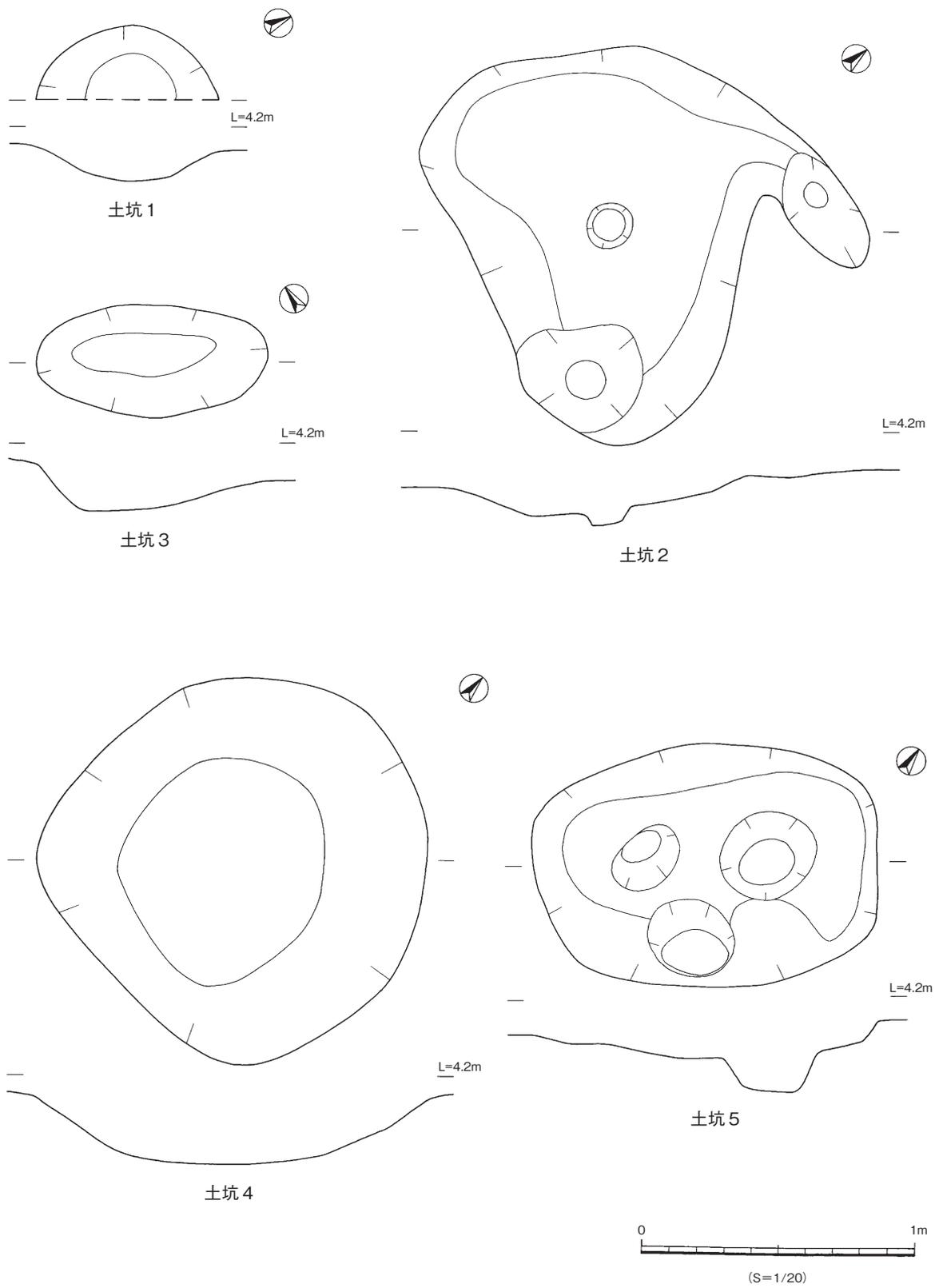
かった。

土坑8・9はY-5区から検出された。埋土は砂質土で、細かい炭化物を含んでいる。

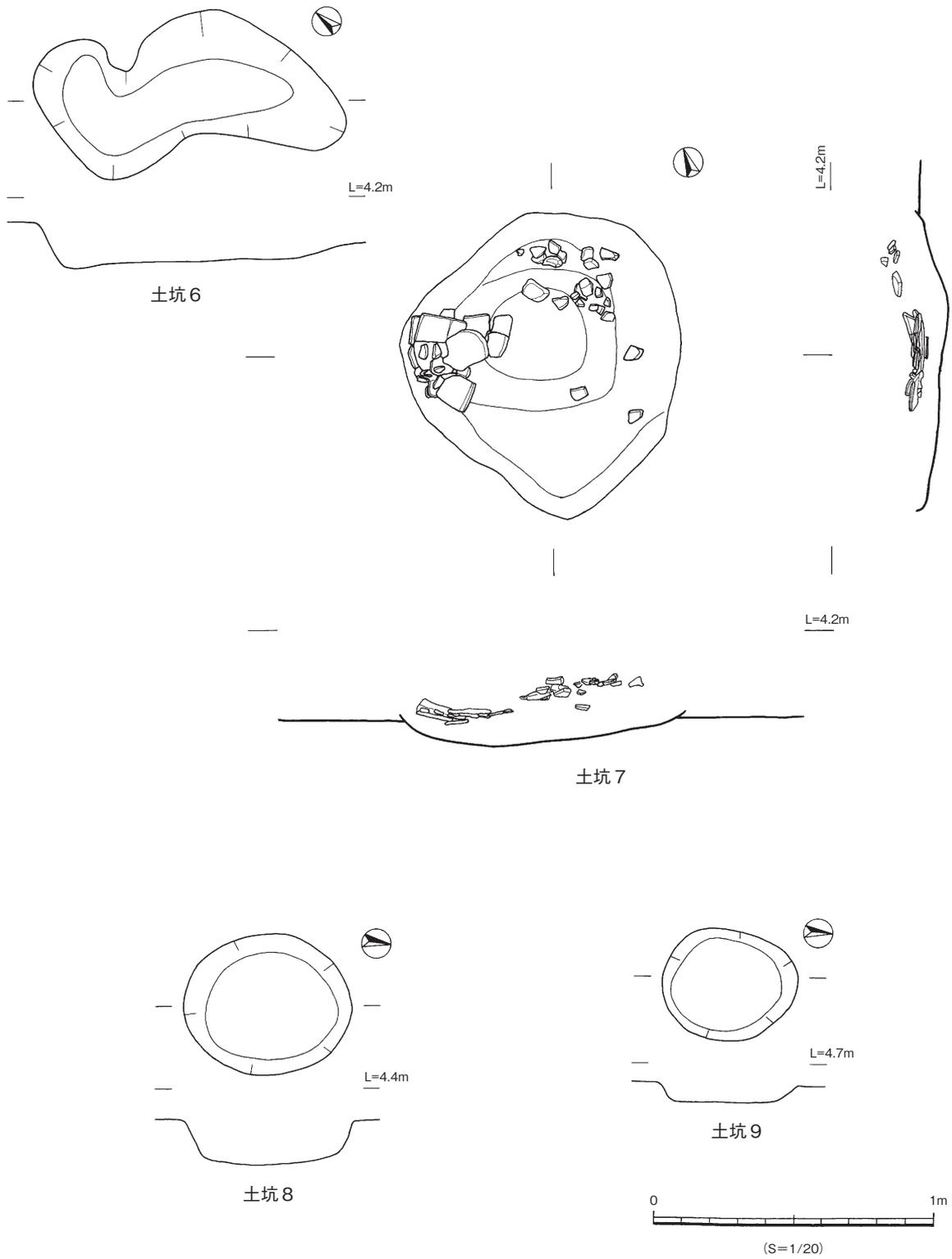
土坑10はW-7区から検出された。周囲にやや大きめのピットが密集している。埋土に焼土、炭化物を含み、型式不明の土器小片が検出された。

土坑11～29は、V・W-8・9区から検出された。11・13・19・22は、いずれも小型の土坑であり、埋土に焼土、炭化物、軽石を含む。12・14～18・20・21・23～29は、型式不明の土器小片が検出された。埋土に焼土と少量の炭化物を含む。15・17は深さが50cmあり、埋土に軽石を含む。24からは、礫が2点検出された。この区域で検出された土坑は小型であるが、土坑内にピットをとこなうものが多い。

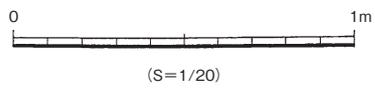
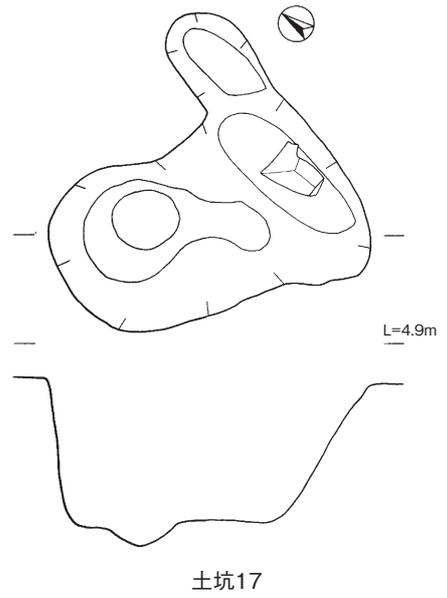
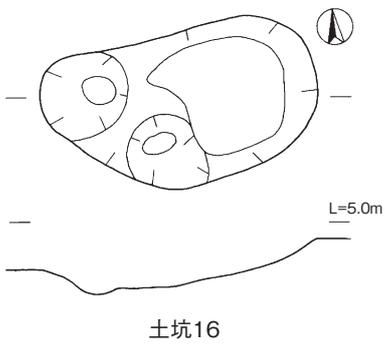
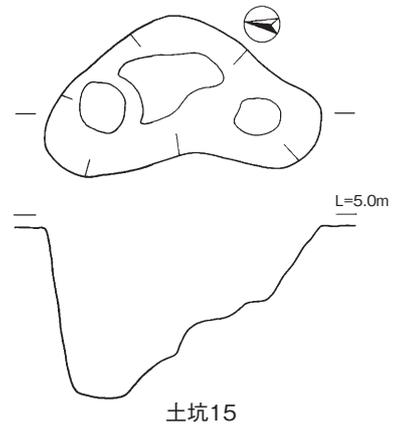
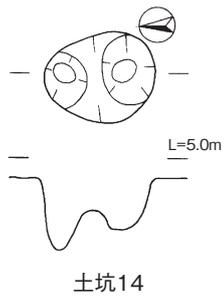
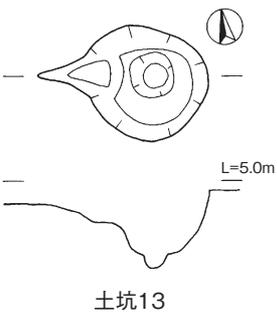
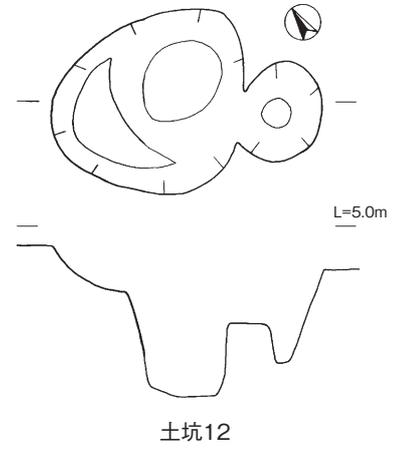
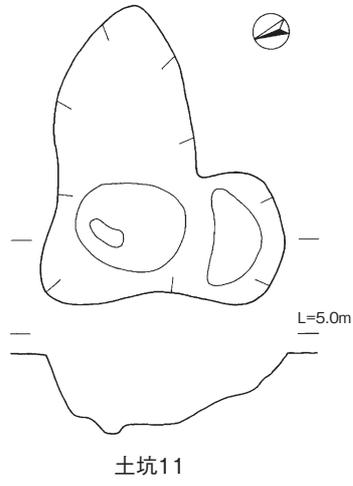
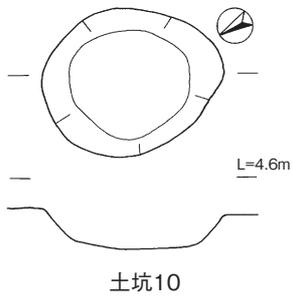
各土坑の埋土状況等の詳細については、表9に示したとおりである。



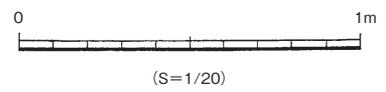
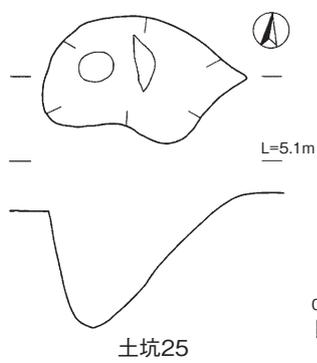
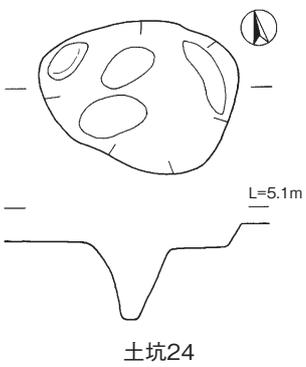
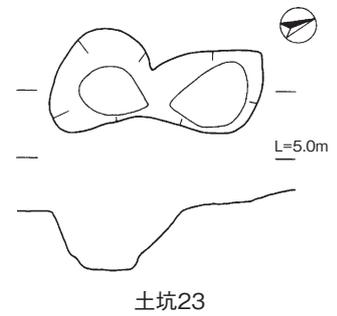
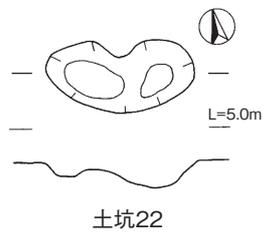
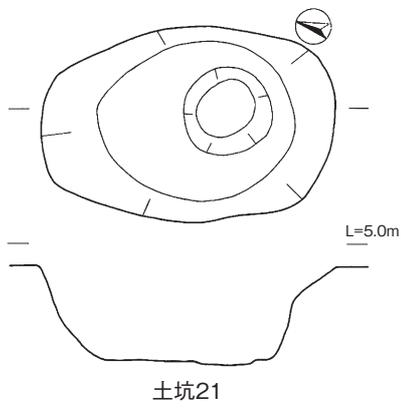
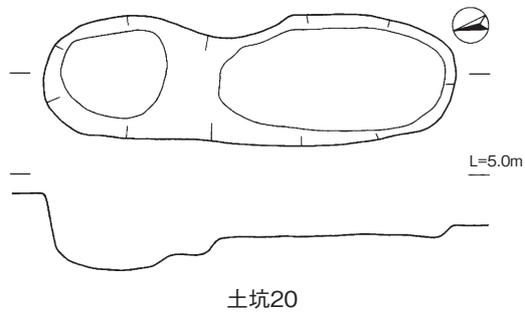
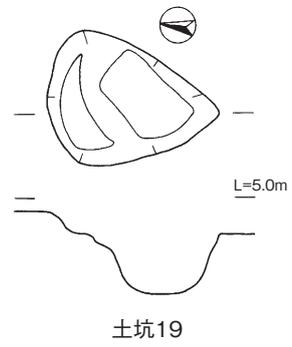
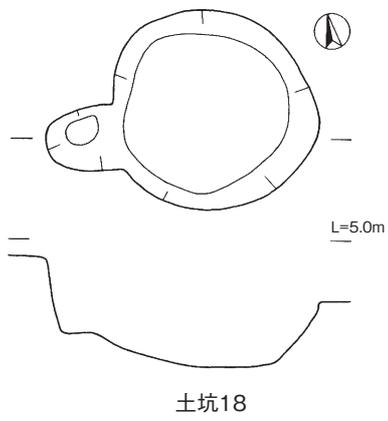
第14图 土坑实测图 (1)



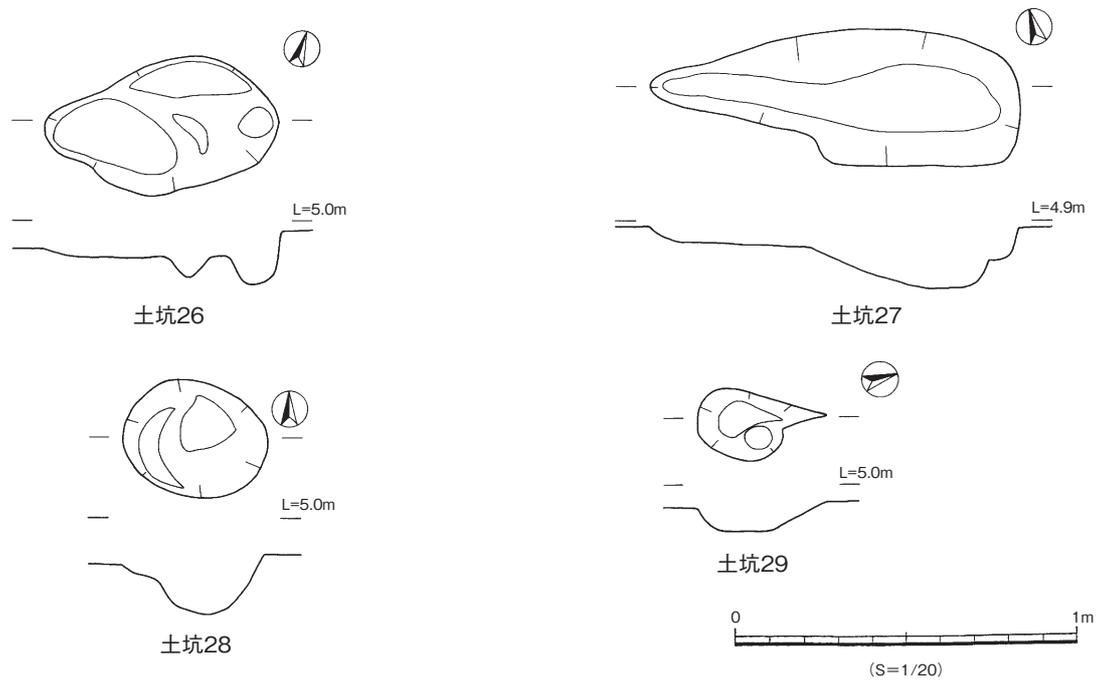
第15图 土坑实测图 (2)



第16图 土坑实测图 (3)



第17图 土坑实测图(4)



第18図 土坑実測図 (5)

表9 土坑一覧表

レイアウト 番号	遺構番号	出土区	層位	計測値 (cm)			埋土状況
				長径	短径	深さ	
1	1588	V-1区	X層	66	52	12.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
2	1586	V-1区	X層	168	148	23.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
3	1503	V-1区	X層	86	42	16.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
4	1572	V-1区	X層	144	139	25	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
5	1571	V-1区	X層	127	90	50.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
6	1502	V-1区	X層	114	45	18.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
7	2059	X-5区	X I層	110	100	13	土器片多量に検出。埋土に焼土, 炭化物あり。
8	2137	Y-5区	X II層	60	52	16	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
9	2112	Y-5区	X I層	46	39	24	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
10	2165	W-7区	X層	50	40	13	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物を含む。
11	2200	V-8区	X層	90	65	24	埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
12	2199	V-8区	X層	77	48	46	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
13	2198	V-8区	X層	44	32	23	埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
14	2192	V-8区	X層	34	25	22	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
15	2193	V-8区	X層	74	45	52	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
16	2189	V-8区	X層	73	43	16	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
17	2196	W-8区	X層	83	55	50	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物あり。
18	2186	V-9区	X層	62	55	32	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
19	2187	V-9区	X層	46	36	7	埋土に焼土, 炭化物あり。
20	2188	V-9区	X層	120	40	23	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
21	2182	V-9区	X層	85	55	29	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
22	2183	V-9区	X層	40	20	8	埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
23	2184	V-9区	X層	63	28	19	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物, 軽石含む。
24	2177	V-9区	X層	55	50	24	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物あり。礫2点。
25	2178	V-9区	X層	56	30	40	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物あり。
26	2179	V-9区	X層	53	36	10	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物あり。
27	2171	V-9区	X層	108	38	18	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物あり。
28	2172	V-9区	X層	45	41	18	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物あり。
29	2166	V-9区	X層	40	21	9	土器片検出。埋土に焼土, 炭化物あり。

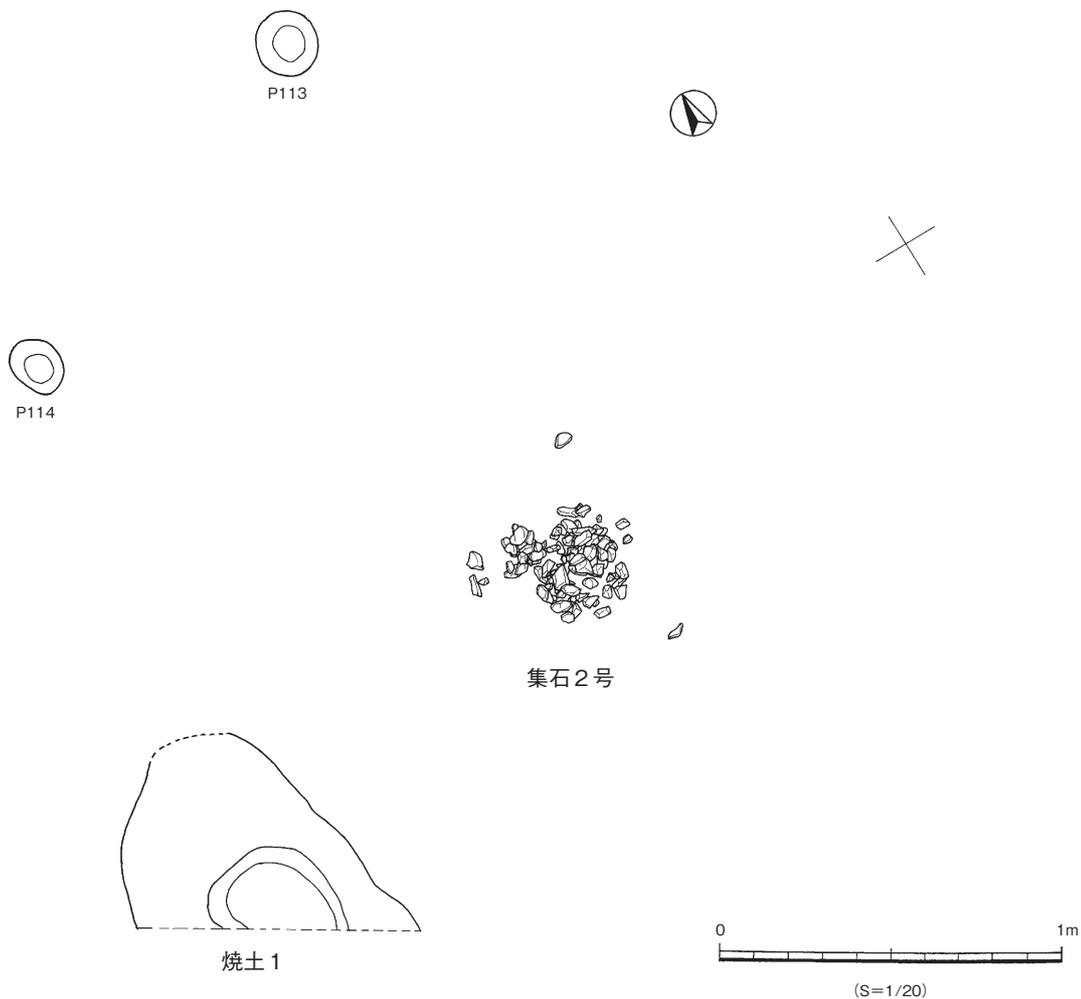
### 3 焼土(第19図)

焼土はX-6区から検出された1基のみである。遺物の出土は認められなかった。直径75cm程の円内に炭化物が集中しており、その周囲にまばらな状態で炭化物が広がる直径150cm程の区域である。周辺から検出されたピット113・114の埋土も炭化物を多く含み黒っぽくなっていた。ピット117からは、炭化物が確認できなかった。これらの関連性については、今後検討していく必要がある。また、東側にある2号集石には、埋土に炭化物が確認できず、焼土もないことから、関連性は薄いと考えられる。

### 4 ピット

該期のピットは、X～Ⅺ層上面で検出されたものを抽出した。255基が確認され、土坑と同様に調査区北側からグリッドごとに区切って番号を付けていった(第8図～第11図)。埋土の状況等も考慮して、後期～晩期への位置付けを行ったが、上層で検出できなかったものも含まれる可能性もある。検出状況から、平地式住居を指摘できる明確なまとまりをつかむことはできなかった。

各ピットの詳細については、表10～12に示したとおりである。



第19図 焼土跡実測図

表10 ピット一覧表（1）

番号	区	層	遺構番号	長径	短径	深さ	
1	U	1	X	1594	34	31	35
2	U	1	X	1578	38	22	25.5
3	U	1	X	1570	28	23	27
4	U	1	X	1569	28	28	31.5
5	U	1	X	1591	31	26	23
6	U	1	X	1590	30	29	20
7	U	1	X	1579	40	34	18.5
8	U	1	X	1580	45	43	13
9	U	1	X	1574	22	15	13
10	U	1	X	1592	29	23	23
11	U	1	X	1575	29	26	18
12	U	1	X	1573	25	24	26
13	U	1	X	1576	53	37	27
14	U	1	X	1583	36	30	20
15	U	1	X	1582	43	24	15
16	U	1	X	1581	23	21	30
17	U	1	X	1585	41	33	63.5
18	U	1	X I	1584	34	30	47
19	U	1	X I	1587	25	25	12.5
20	V	1	X	1593	27	25	17.5
21	V	1	X	1577	21	20	21
22	W	5	X I	2063	35	26	10.5
23	W	5	X I	2064	23	16	18
24	X	5	X I	2085	34	29	27.5
25	X	5	X I	2101	21	21	7.5
26	X	5	X I	2102	60	40	15
27	X	5	X	1943	24	14	15.5
28	X	5	X	1944	33	23	15
29	X	5	X	1945	30	25	20
30	X	5	X I	2109	22	19	18.5
31	X	5	X I	2086	27.5	24	19
32	X	5	X I	2099	29	20	21
33	X	5	X I	2100	24	17	18
34	X	5	X I	2106	30	27	20
35	X	5	X I	2087	28	26	21.5
36	X	5	X	1933	28	27	15
37	X	5	X I	2098	24	22	17
38	X	5	X I	2103	22	21	13.5
39	X	5	X I	2105	49	47	14
40	X	5	X	1942	40	39	19.5
41	X	5	X I	2107	31	27	17
42	X	5	X I	2088	25	24	14.5
43	X	5	X I	2089	28	25	26.5
44	X	5	X I	2096	32	27	13
45	X	5	X I	2097	26	20	21
46	X	5	X I	2104	21	19	14.5
47	X	5	X	1934	38	35	12.5
48	X	5	X	1932	43	35	19
49	X	5	X	1946	20	19	21.5
50	wx	5	X I	2091	25	21	15
51	X	5	X I	2090	37	29	17.5
52	X	5	X I	2092	30	25	8.5
53	X	5	X I	2093	23	23	9.5
54	X	5	X I	2094	36	35	20.5
55	X	5	X II	2153	39	30	16.5
56	X	5	X I	2095	21	20	11
57	X	5	X II	2136	21	20	19.5
58	X	5	X I	2108	29	26	14.5
59	X	5	X	1935	28	21	26
60	X	5	X I	2110	27	27	10
61	Y	5	X I	2111	28	27	8.5
62	Y	5	X	1947	34	30	25.5
63	Y	5	X	1948	25	20	21.5
64	Y	5	X I	2114	24	21	8.5
65	Y	5	X I	2113	26	21	26
66	W	6	X I	2065	20	20	10.5
67	W	6	X	1963	28	23	15
68	W	6	X	1964	28	20	24
69	W	6	X II	2135	14	12	5
70	W	6	X	1987	24	24	17.5
71	W	6	X I	2070	25	24	18.5
72	W	6	X	1965	32	25	15
73	W	6	X	1966	46	30	15
74	W	6	X I	2071	33	30	13.5
75	W	6	X II	2134	16	11	12
76	W	6	X	1985	24	20	32.5
77	W	6	X	1986	22	18	20.5
78	W	6	X I	2077	35	27	17
79	W	6	X I	2066	31	30	15
80	W	6	X	1968	34	24	20
81	W	6	X	1967	26	26	15
82	W	6	X I	2072	22	18	8
83	W	6	X I	2073	25	20	28
84	W	6	X	1984	22	12	10
85	W	6	X II	2152	39	36	12
86	W	6	X	1988	28	24	23
87	W	6	X	1983	26	16	11.5
88	W	6	X	1969	22	22	9
89	W	6	X I	2067	26	24	22.5
90	W	6	X	1970	27	23	16

表11 ピット一覧表（2）

番号	区	層	遺構番号	長径	短径	深さ	
91	W	6	X	1971	30	30	24.5
92	W	6	X	1982	22	14	11
93	W	6	X	1981	24	20	12
94	W	6	X	1980	32	20	20
95	W	6	X	1979	26	22	12
96	W	6	X I	2068	24	23	10
97	W	6	X	1972	32	24	13.5
98	W	6	X I	2069	24	22	7.5
99	W	6	X	1978	24	20	9
100	W	6	X II	2151	36	28	12
101	W	6	X	1990	16	16	6
102	W	6	X I	2075	21	19	7
103	W	6	X	1975	24	20	13.5
104	W	6	X	1974	25	10	20
105	W	6	X	1973	28	20	16.5
106	W	6	X	1989	29	24	15.5
107	W	6	X	1977	44	36	23.5
108	W	6	X I	2074	22	19	8.5
109	W	6	X I	2076	31	22	11.5
110	W	6	X	1976	30	26	10
111	X	6	X I	2081	28	24	13
112	X	6	X I	2082	24	23	26
113	X	6	X I	2078	24	22	15
114	X	6	X I	2080	28	25	12.5
115	X	6	X I	2083	29	24	18.5
116	Y	6	X I	2116	30	24	28
117	X	6	X I	2079	27	24	13
118	Y	6	X I	2115	27	22	10
119	Y	6	X I	2117	42	34	9.5
120	X	6	X I	2140	31	29	11.5
121	X	6	X I	2141	26	24	10
122	X	6	X	1955	30	30	12
123	Y	6	X I	2120	25	23	17
124	X	6	X I	2142	21	19	14
125	Y	6	X I	2118	25	23	9
126	X	6	X I	2143	30	27	9.5
127	Y	6	X I	2119	19	15	10
128	X	6	X II	2204	28	16	68
129	X	6	X I	2205	26	25	24.5
130	Y	6	X	1957	22	18	12.5
131	Y	6	X	1961	27	20	10.5
132	Y	5-6	X II	2138	20	19	10.5
133	Y	6	X I	2121	28	23	22.5
134	Y	6	X	1958	58	56	34
135	Y	6	X II	2139	19	18	8.5
136	Y	6	X	1960	21	19	12
137	Y	6	X	1959	23	22	9
138	Y	6	X	1939	19	18	7
139	Y	6	X	1962	25	12	14
140	Y	6	X	1940	15	12	8
141	Y	6	X	1956	22	14	20
142	Y	6	X I	2122	25	22	19.5
143	Y	6	X I	2133	30	26	15
144	Y	6	X I	2132	24	20	17
145	Y	6	X	1941	32	26	15
146	Y	6	X I	1938	23	20	10
147	Y	6	X	1937	24	12	12
148	Y	6	X I	2131	27	23	11
149	Y	6	X I	1936	23	11	19
150	Y	6	X	1954	27.5	24	12
151	Y	6	X	1953	27	24	38.5
152	Y	6	X I	2130	22	17	15
153	Y	6	X I	2123	22	20	18.5
154	Y	6	X I	2126	30	22	13.5
155	Y	6	X I	2127	29	20	19.5
156	Y	6	X I	2128	30	27	18
157	Y	6	X I	2129	23	22	13.5
158	Y	6	X I	2125	23	23	12.5
159	Y	6	X I	2124	23	18	19
160	V	7	X	2007	24	23	17
161	V	7	X	2006	34	32	35
162	W	8	X	2008	23	22	21
163	VW	7	X	2009	36	32	19.5
164	W	7	X	1998	30	25	27
165	W	7	X	2001	43	40	47.5
166	W	7	X	1999	33	29	10
167	W	7	X	2000	35	33	13
168	W	7	X(下)	1993	75	52	20
169	W	7	X	2002	42	31	50
170	W	7	X	2003	47	47	55.5
171	W	7	X(下)	1994	30	30	20.5
172	W	7	X	1995	33	28	20
173	W	7	X	2004	35	30	40
174	W	7	X	2149	30	24	24
175	W	7	X	1997	41	37	24.5
176	W	7	X	2148	26	22	23
177	W	7	X	2005	31	30	33
178	W	7	X	2147	28	20	20.5
179	V	8	X	2016	18	18	13
180	V	8	X	2197	28	22	33.5

表12 ピット一覧表（3）

番号	区	層	遺構番号	長径	短径	深さ	
181	Ⅴ	8	X	2018	34	25	10
182	Ⅴ	8	X	2017	28	28	7.5
183	Ⅴ	8	X	2019	45	34	28.5
184	X	8	X	2020	24	16	2.5
185	Ⅴ	8	X	2190	30	29	6
186	Ⅴ	8	X	2191	24	18	9
187	Ⅴ	8	X	2021	50	43	11
188	Ⅴ	8	X	2022	28	22	11
189	Ⅴ	8	X	2023	56	34	38
190	Ⅴ	8	X	2024	27	20	3
191	Ⅴ	8	X	2194	30	27	8.5
192	Ⅴ	8	X	2026	107	88	33
193	Ⅴ	8	X	2027	23	20	12
194	Ⅴ	8	X	2029	34	30	13.5
195	Ⅴ	8	X	2030	32	30	59.5
196	Ⅴ	8	X	2010	26	20	19
197	Ⅴ	7	X	2146	23	20	20.5
198	Ⅴ	8	X	2011	45	40	64.5
199	Ⅴ	8	X	2012	29	27	24
200	Ⅴ	8	X	2058	26	27	31.5
201	Ⅴ	8	X	2013	42	30	6
202	Ⅴ	8	X	2015	35	32	9.5
203	Ⅴ	8	X	2014	28	24	23.5
204	Ⅴ	8	X	2025	42	32	36
205	Ⅴ	8	X	2195	36	25	16
206	Ⅴ	8	X	2028	53	50	22
207	Ⅴ	9	X	2031	50	45	18.5
208	Ⅴ	9	X	2185	50	37	32.5
209	Ⅴ	9	X	2054	32	31	40
210	Ⅴ	9	X	2053	29	27	6
211	Ⅴ	9	X	2032	24	20	8.5
212	Ⅴ	9	X	2033	57	37	35
213	Ⅴ	9	X	2052	68	50	23.5
214	Ⅴ	9	X	2181	46	35	25.5
215	Ⅴ	9	X	2034	33	30	32.5
216	Ⅴ	9	X	2036	29	26	12.5
217	Ⅴ	9	X	2037	28	24	19
218	Ⅴ	9	X	2038	42	33	13
219	Ⅴ	9	X	2051	36	34	25.5
220	Ⅴ	9	X	2180	32	28	25
221	Ⅴ	9	X	2035	32	31	8.5
222	Ⅴ	9	X	2176	52	30	19
223	Ⅴ	9	X	2050	78	55	36
224	Ⅴ	9	X	2170	38	36	40.5
225	Ⅴ	9	X	2039	26	20	12.5

番号	区	層	遺構番号	長径	短径	深さ	
226	Ⅴ	9	X	2175	36	27	12.5
227	Ⅴ	9	X	2049	28	23	16.5
228	Ⅴ	9	X	2174	24	24	7
229	Ⅴ	9	X	2040	50	39	39
230	Ⅴ	9	X	2169	18	12	6
231	Ⅴ	9	X	2043	38	36	24
232	Ⅴ	9	X	2044	37	28	14.5
233	Ⅴ	9	X	2045	41	34	31
234	Ⅴ	9	X	2168	24	26	21
235	Ⅴ	9	X	2046	43	33	14.5
236	Ⅴ	9	X	2173	42	27	9
237	Ⅴ	9	X	2048	36	30	44.5
238	Ⅴ	9	X	2041	40	30	36
239	Ⅴ	9	X	2042	44	39	55.5
240	Ⅴ	9	X	2047	41	27	48
241	Ⅴ	9	X	2167	33	26	30.5
242	Ⅴ	9	X	2055	45	27	35.5
243	Ⅴ	9	X	2057	28	24	6.5
244	Ⅴ	9	X	2056	32	28	28.5
245	X	9	X I	2163	47	42	63.5
246	X	9	X I	2159	41	40	48.5
247	X	9	X I	2158	37	35	54
248	X	9	X I	2160	34	30	10
249	X	9	X I	2161	25	20	23
250	X	9	X I	2162	40	27	9.5
251	X	9	X I	2157	37	35	10.5
252	X	9	X I	2156	25	20	10
253	Ⅴ	10	X	2207	53	48	35
254	Ⅴ	10	X	2208	41	34	38.5
255	Ⅴ	10	X	2209	51	42	35

### 第3節 遺物

#### 1 出土土器 (第20～22図)

該期の出土土器については、中期中葉に相当するもの (Ⅰ・Ⅱ類)、中期後葉～後期に相当するもの (Ⅲ～Ⅺ類)、晩期に相当するもの (Ⅻ類) として大きく3つに分類した。中期後葉～後期にかけての移行期については、時期差による明確な型式の分類が困難なため一括することにした。

中期中葉の掲載遺物は、X-5・6区の範囲に4点、Y-2区に1点出土した (第20図)。中期後葉～後期の遺物は、U～Z-1～7区の範囲で出土しており、Z-3区にやや集中している傾向が見られる (第21図)。この区域は検出遺構の集中区でもあり、関連が強いと思われる。

晩期の遺物は、全体的に散在して出土しており、集中区は見られない (第22図)。

#### (1) 縄文時代中期中葉出土土器

##### ア I類 (第23図1～4)

器形がキャリパー状を呈するものであり、4点を図化した。

1と2は、口縁部がやや内湾し、胴部の張り出しが弱い。口縁部に波状の突帯文と、沈線による波状文を組み合わせる施文している。さらに沈線内には、連点状に刺突文を施す。器面調整は、貝殻条痕を基本としており、それをそのまま残している。3は底部から胴部へ直線的に立ち上がり、胴部の膨らみが弱いものである。胎土や焼成が2と類似するが、同一個体であるかどうかは確認できなかった。底部はやや上げ底で、径は約6cmである。4は底部のみの破片であるが、底面に3と同じ条痕によるナデ調整を施していることから、本類の範疇とした。

##### イ II類 (第23図5)

器形は口縁部が外反し、胴部がやや膨らむ深鉢である。貝殻条痕による器面調整を施した後、口縁部のみに5条の凹線文を横位に施している。途中、4.5cmほど凹線文を施さない部分が見られる。また、紐状の突帯を口縁部下位に付着させており、さらに胴部の上位には渦巻き状の文様が描かれている。

最大径は口唇部にあり、31cmを測る。

#### (2) 縄文時代中期後葉～後期出土土器

##### ア III類

口縁部に凹線文を施すもので、太めの凹線文と、やや細めの凹線文がある。66点を図化した。

##### Ⅲ a類 (第24図6～22)

胴部から口縁部にかけて、太い凹線文による不規則

な曲線で施文されているものを一括した。器形は、口縁部が肥厚せず、胴部から口縁部にかけて直立もしくは、やや外反しているものが多い。

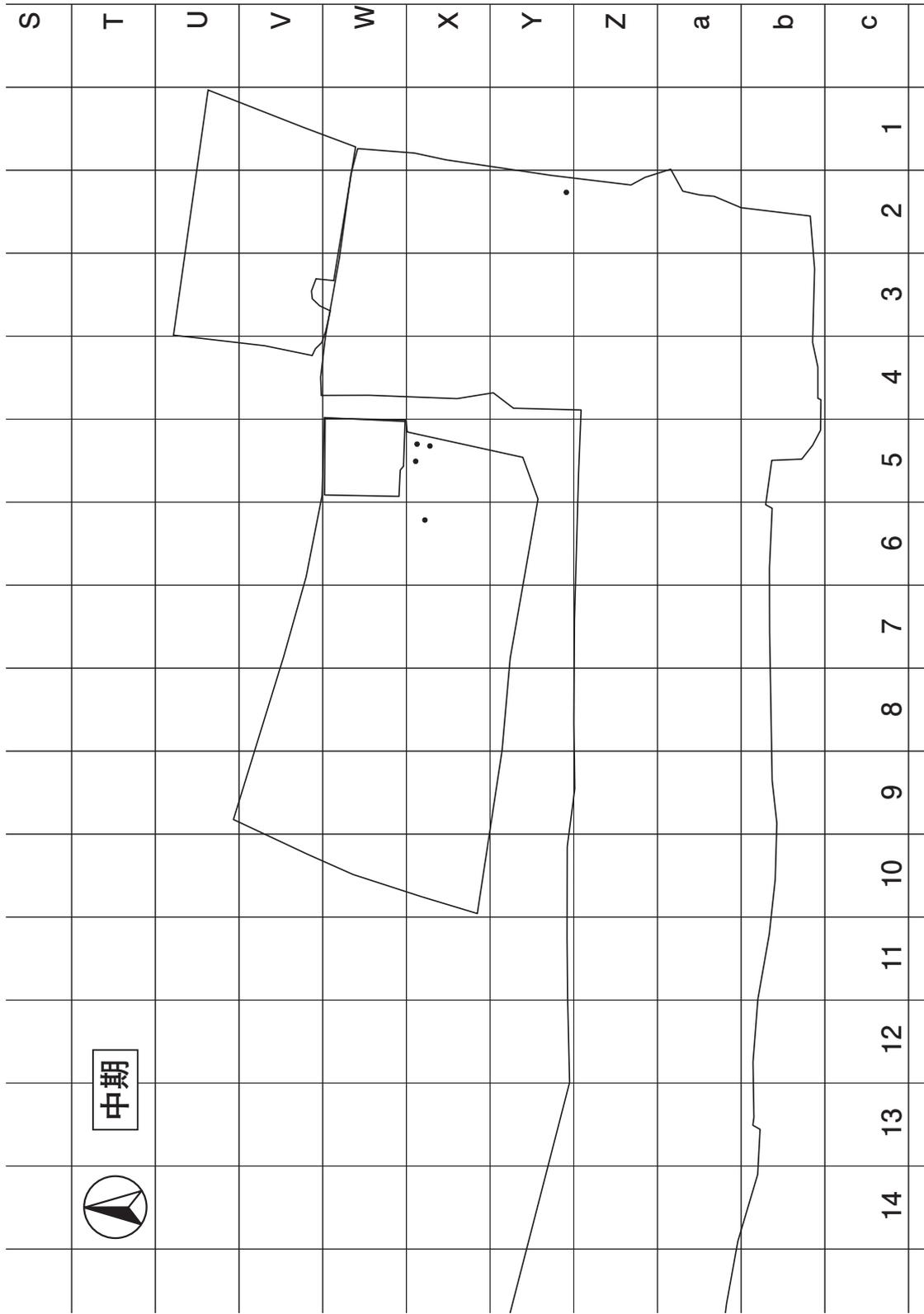
6～8は、口唇部に深い刻みを施す。9・10は平口縁で、口唇部に刻みは施さない。11は口縁部がくの字状に屈曲しており、頸部から口縁部までは直立している。12～17は、口縁部がやや内湾しており、口唇部に棒状の工具による刻みを施している。18～22は胴部片で、胎土に滑石粉を多量に含んでいるため表面が滑らかである。

##### Ⅲ b類 (第25図23～第27図71)

口縁部及びその直下に、太い凹線が集中して施文されているものを一括した。文様は不規則で簡単な曲線を施文しているものや、S字・逆S字状を連続的に施しているものがある。口唇部は、やや深めの刻みを施しているものや、浅く細い刻みを施しているものがある。器形は、口縁部がやや肥厚しており、胴部から口縁部にかけて直立したものが多い。

23は復元口径が42cmで、器形の最大径が胴部上位にある深鉢形土器である。口唇部が平坦で、台形状の突起と施文帯を跨ぐように橋状把手を備えている。24は口縁部に太い凹線文を横位に施した後、縦に2本の突帯を付着させている。25は波状口縁の波頂部である。波頂部には穿孔を施す。26～32は、橋状把手を持つ口縁部、あるいは把手部分の一部である。27はX状に橋状把手が施されている。2か所の穿孔と切り抜きにより、人面様を呈している。28は把手の頂部に太い凹線文が施され、丁寧なナデ調整で仕上げている。29は波状口縁の波頂部である。波頂部上位の内面に細く短い刺突文を施す。33は、口唇部に紐状の突帯を貼り付けている。34は、口縁部下位に突帯を付着させている。35～38は口縁部に凹線文を縦位に施している。39～41は、口縁部に太い凹線文を横位に施し、口唇部に刻みを施している。

42～53は、くの字状もしくはS字状の文様が口縁直下の狭い範囲で連続的に施されている。42は4か所の突出部を有する口縁部で、波頂部にも小さいS字が連続的に施文されている。43・44は口唇部に連点刺突文を施している。45・46は口唇部に連続的な刻みを施している。47・48はくの字状の文様を施した後、その上位に太い凹線文を横位に施している。50は口縁部上位の器壁が薄く、下位は肥厚している。54～61は、やや太めの凹線文が施され、口唇部に浅く太い刻みを施す。61は凹線内に細いスジ状の線が残る。62～71は口縁部に連点やV字など、連続的な刺突文が施されている。62は口縁部上位に貝殻刺突文を施し、下位に太い凹線文を施す。64は口縁部上位と口唇部に棒状の工具を用いて、連点を施している。



第20図 縄文時代中期掲載遺物出土状況図



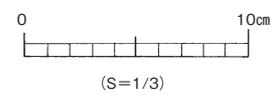
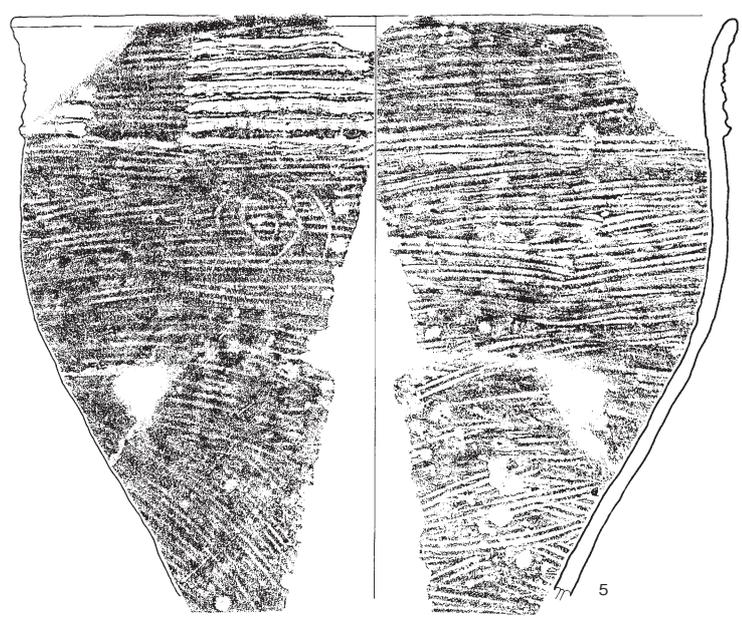
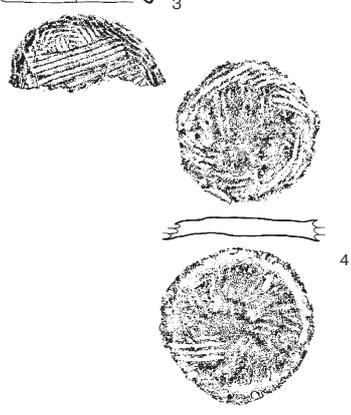
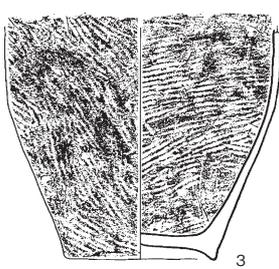
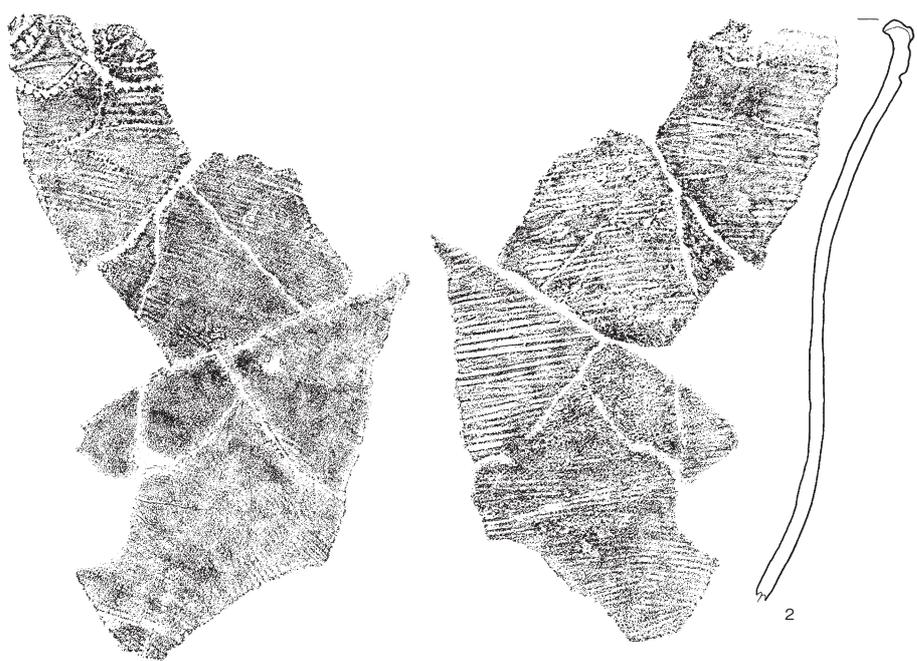
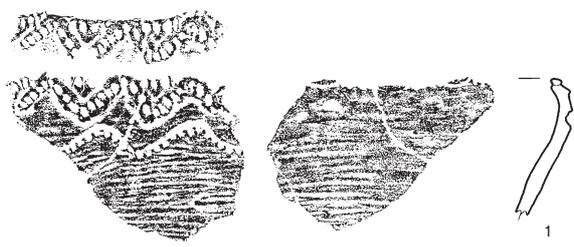
第21図 縄文時代後期掲載遺物出土状況図



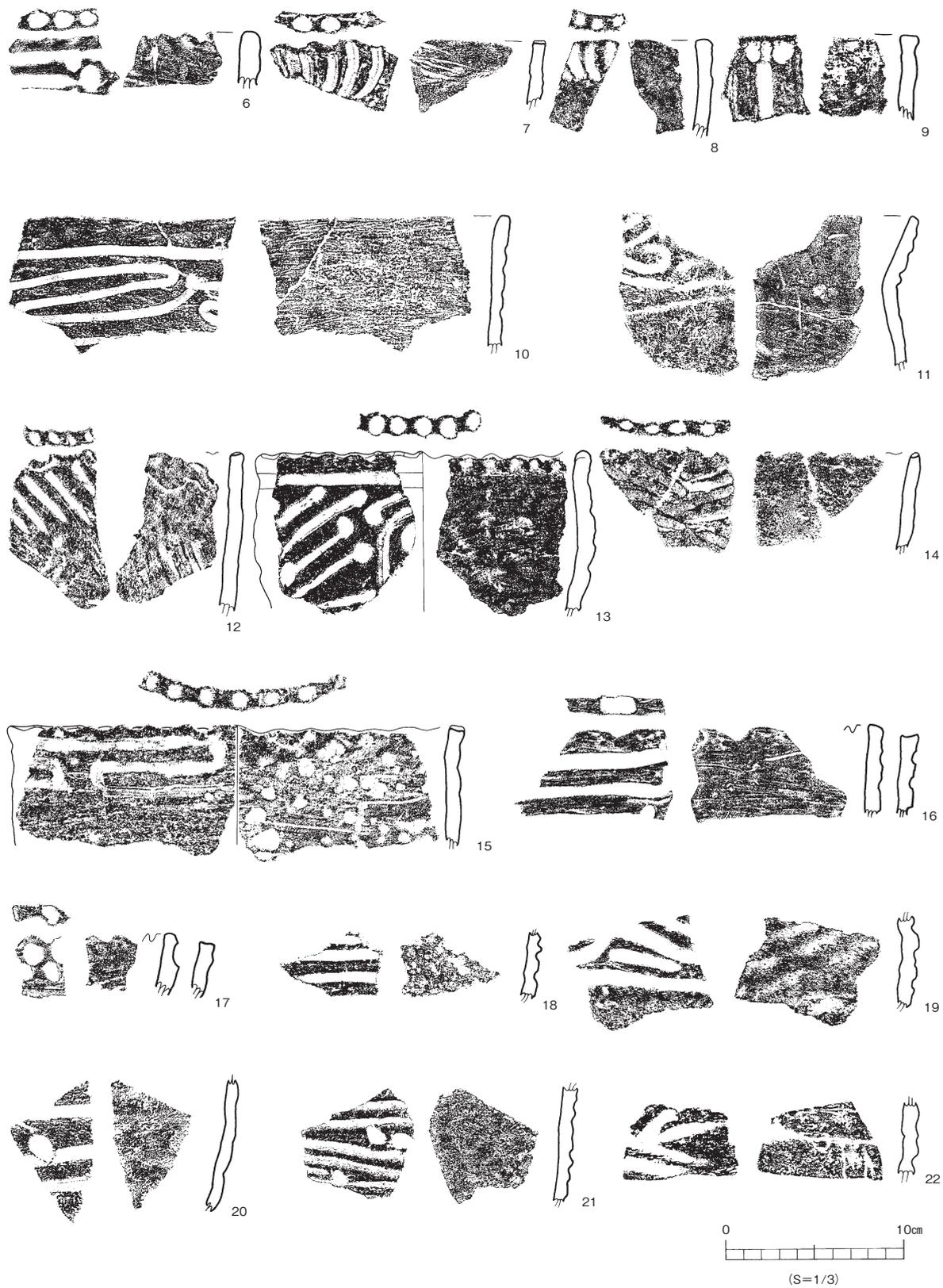
第22図 縄文時代晩期掲載遺物出土状況図



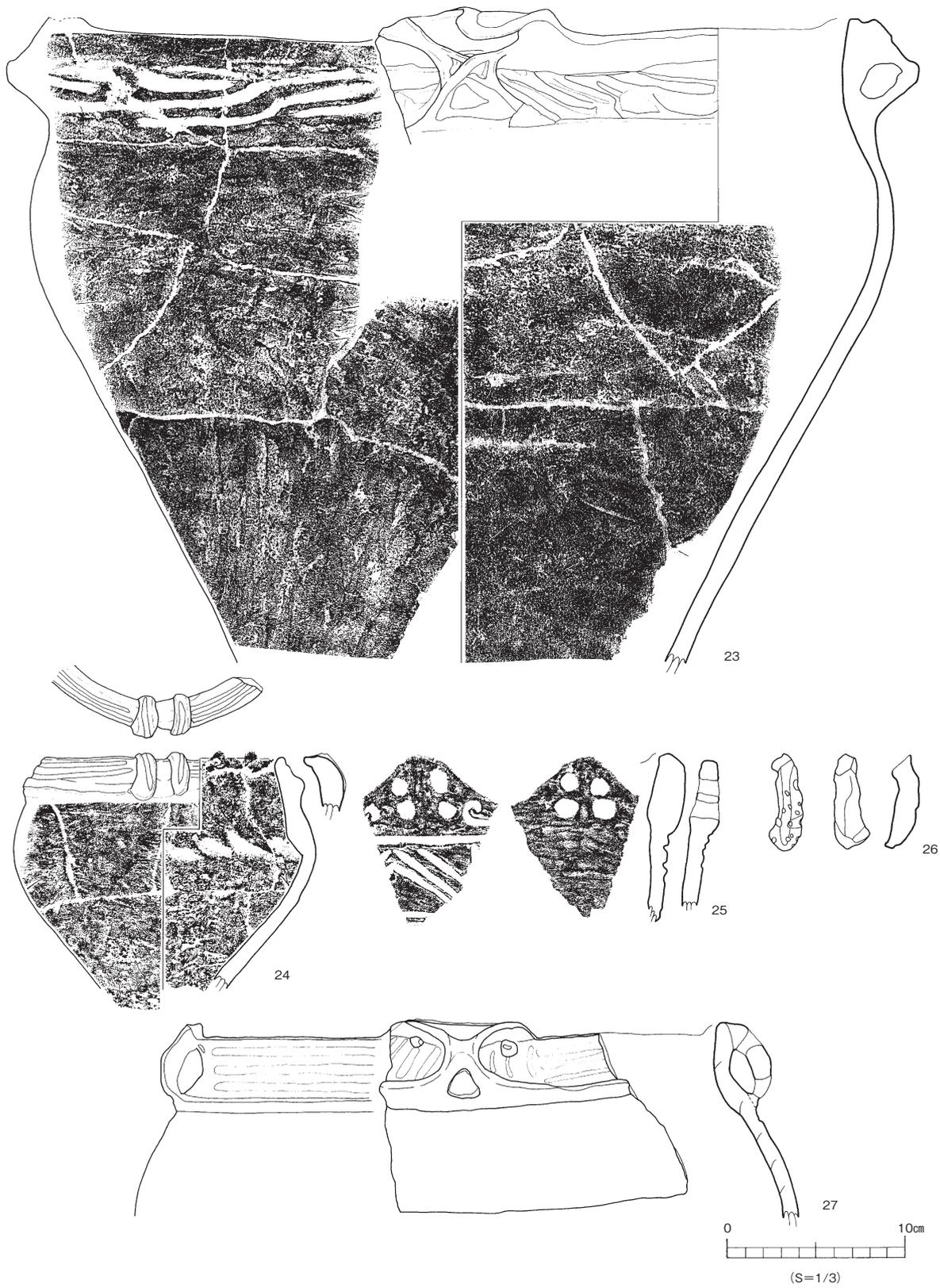
写真12 I類1



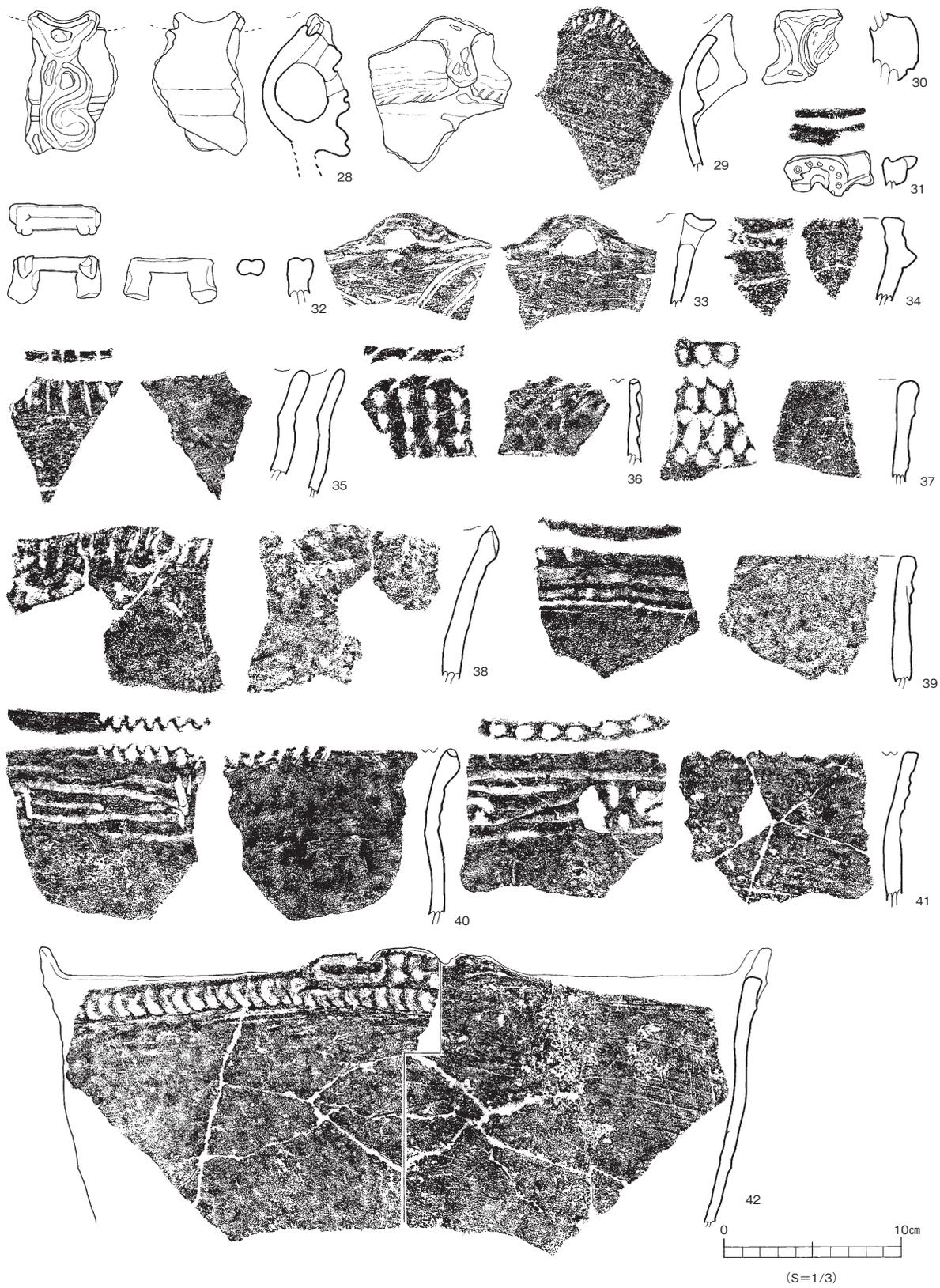
第23図 縄文時代出土土器実測図(1) I・II類



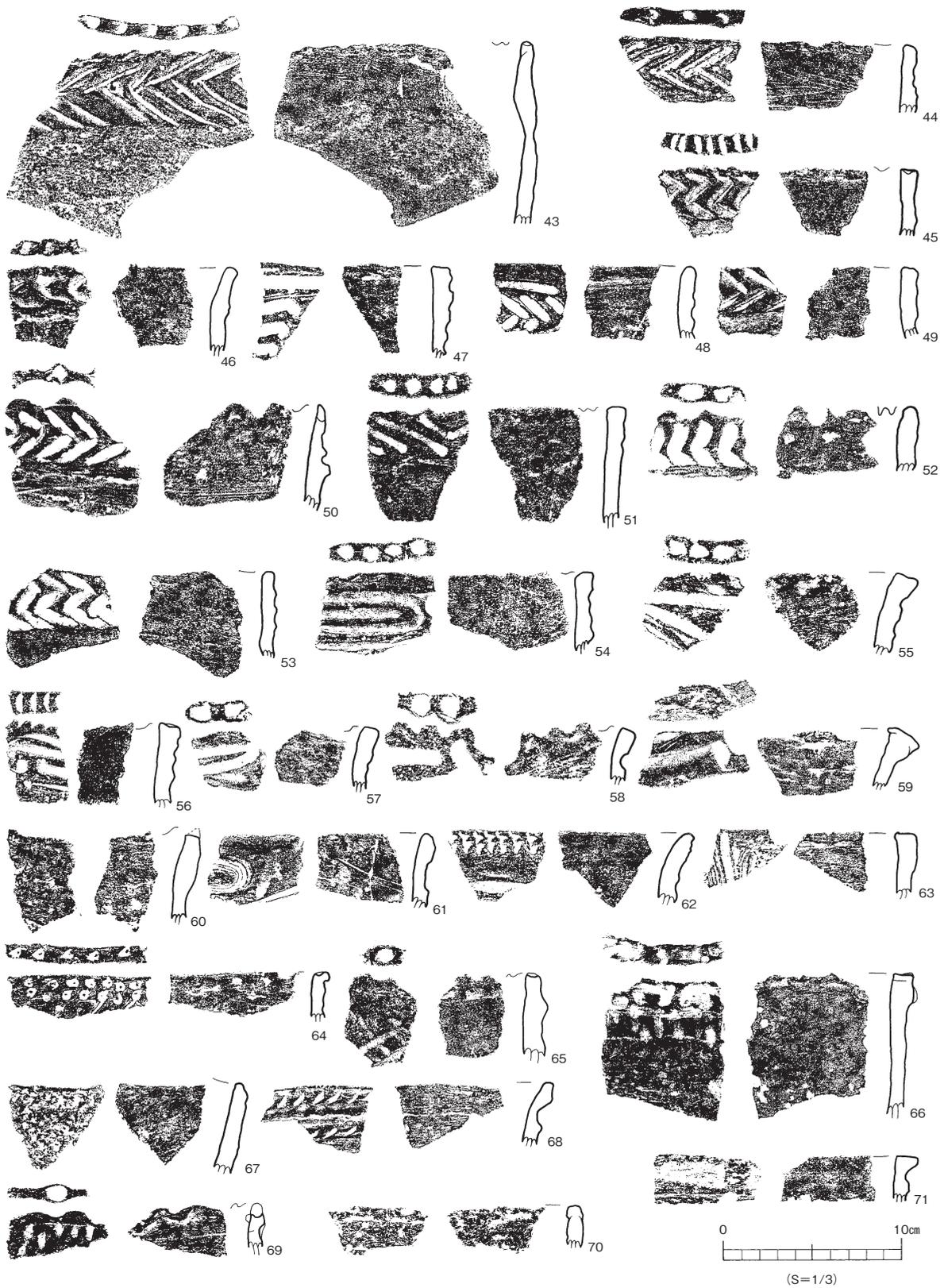
第24図 縄文時代出土土器実測図(2)Ⅲa類



第25図 縄文時代出土土器実測図(3)Ⅲb類



第26図 縄文時代出土土器実測図(4)Ⅲb類



第27図 縄文時代出土土器実測図 (5) III b類

イ IV類 (第28図72~第30図121)

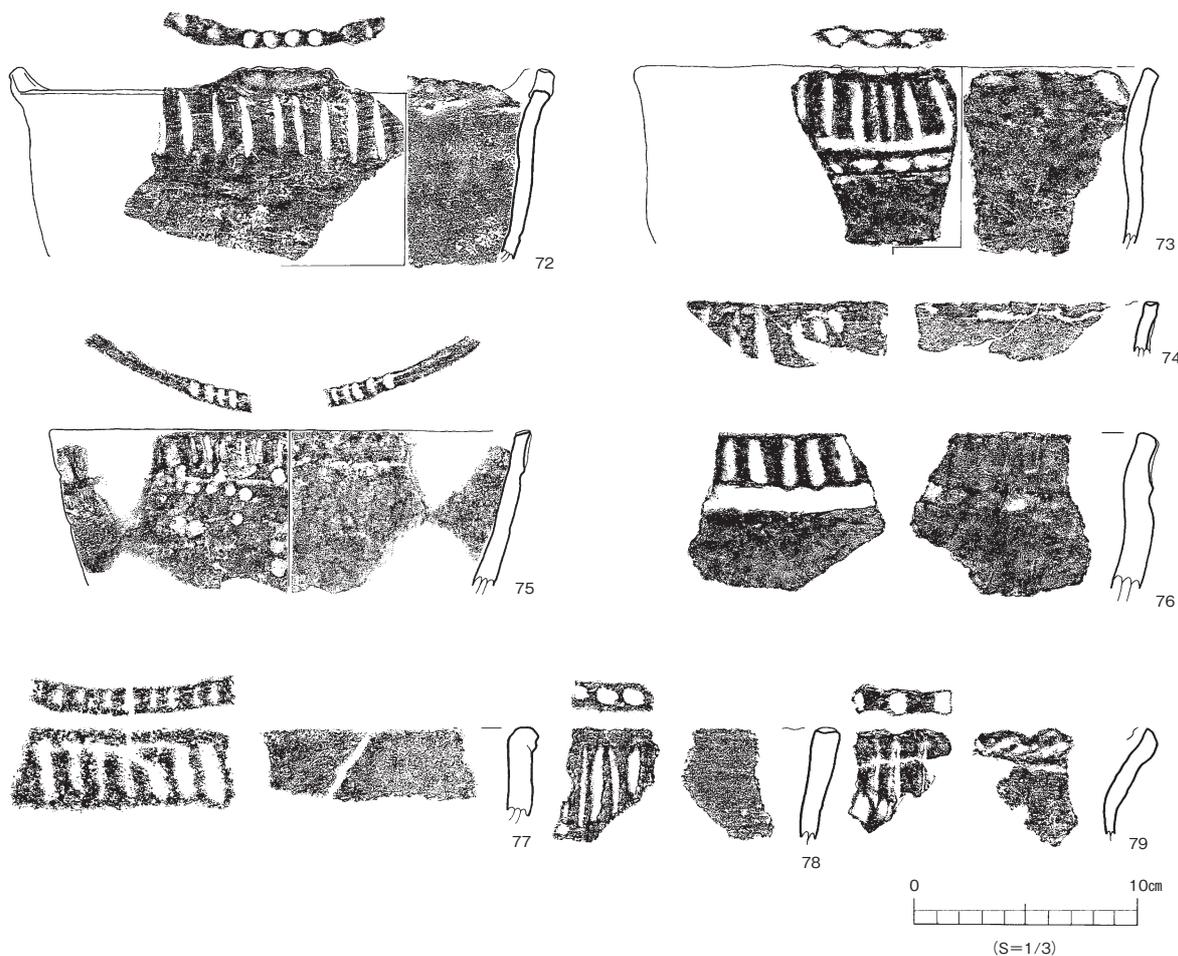
細い沈線文が、口縁部だけに施されているものを一括した。文様は、直線を連続的に縦位、横位、斜位に施している。口縁部は外反、あるいは直行するものが多い。

72~96は、沈線文を縦位に施している。72~75は、口唇部に連続的な浅い刺突文を施している。73・76は縦位に施した沈線文の下位に、太めの沈線を横位に施している。77は口唇部を肥厚させており、口唇部に浅い刺突文を施す。78~82は、先の粗いやや太めの工具を用いて施文しており、沈線内に数条のスジが認められる。83~91は、先の粗い細めの工具を用いて施文している。92~96は、細い棒状の工具により浅い沈線文を施している。

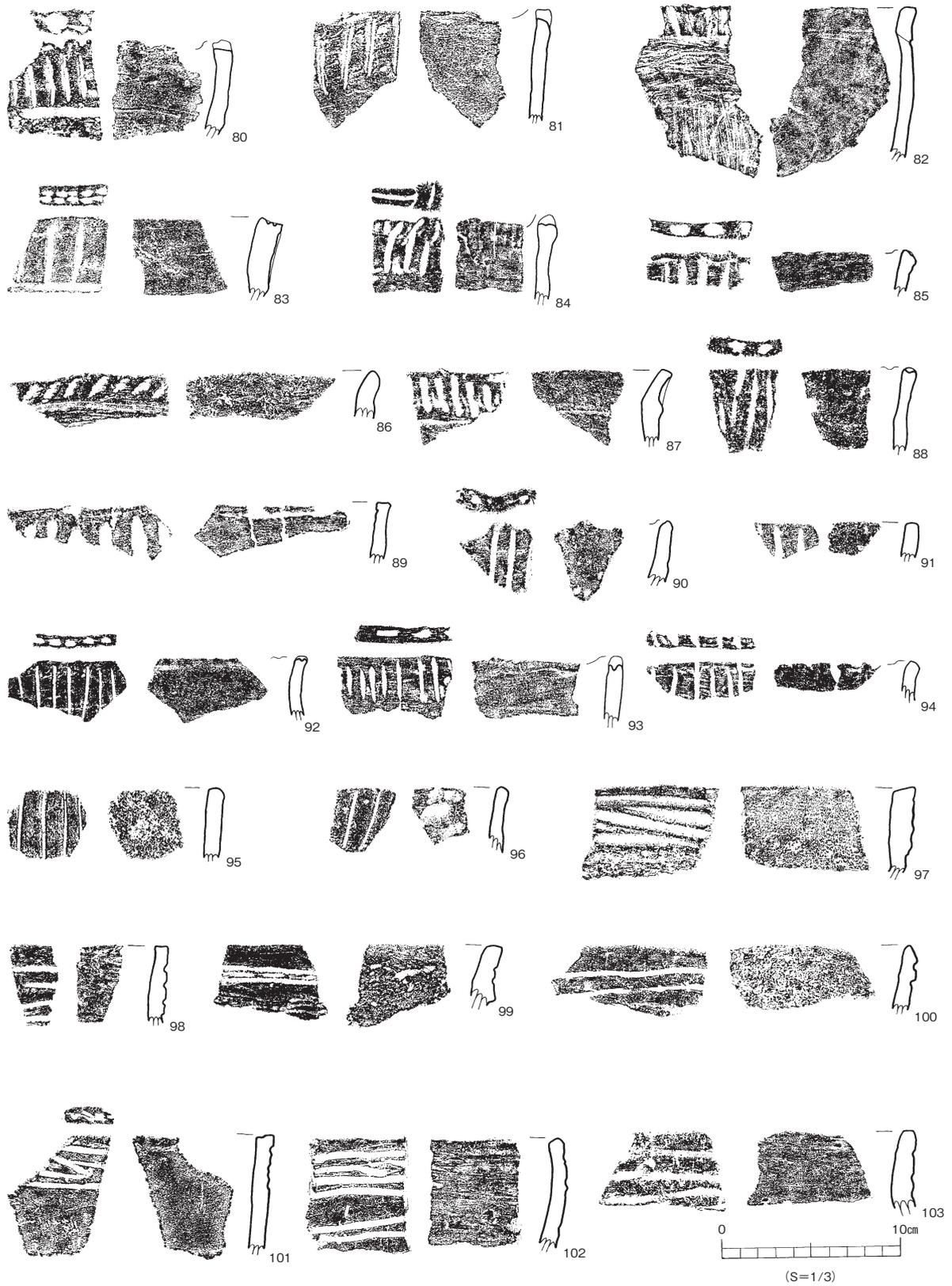
97~112は、沈線文を横位に施している。97~103は、やや太めの工具を用いて施文している。99は2本の

の平行沈線間に、断続的な沈線文を施す。101は口唇部に浅めの刺突文を連続的に施す。102は口縁部が内湾している。104~106は、沈線内に葉脈痕が確認できることから、太く先端が粗い工具を用いて施文していると考えられる。107は細い棒状の工具により浅い沈線文を施す。108は口唇部に1本の深い沈線を施す。109は内面をナデ調整により粗く仕上げている。110・111は、ともに口唇部に棒状の工具を用いて深い刻みを4点施している。111は、その刻みに葉脈痕が認められる。112は摩耗が激しく、沈線は1本だけ認められる。

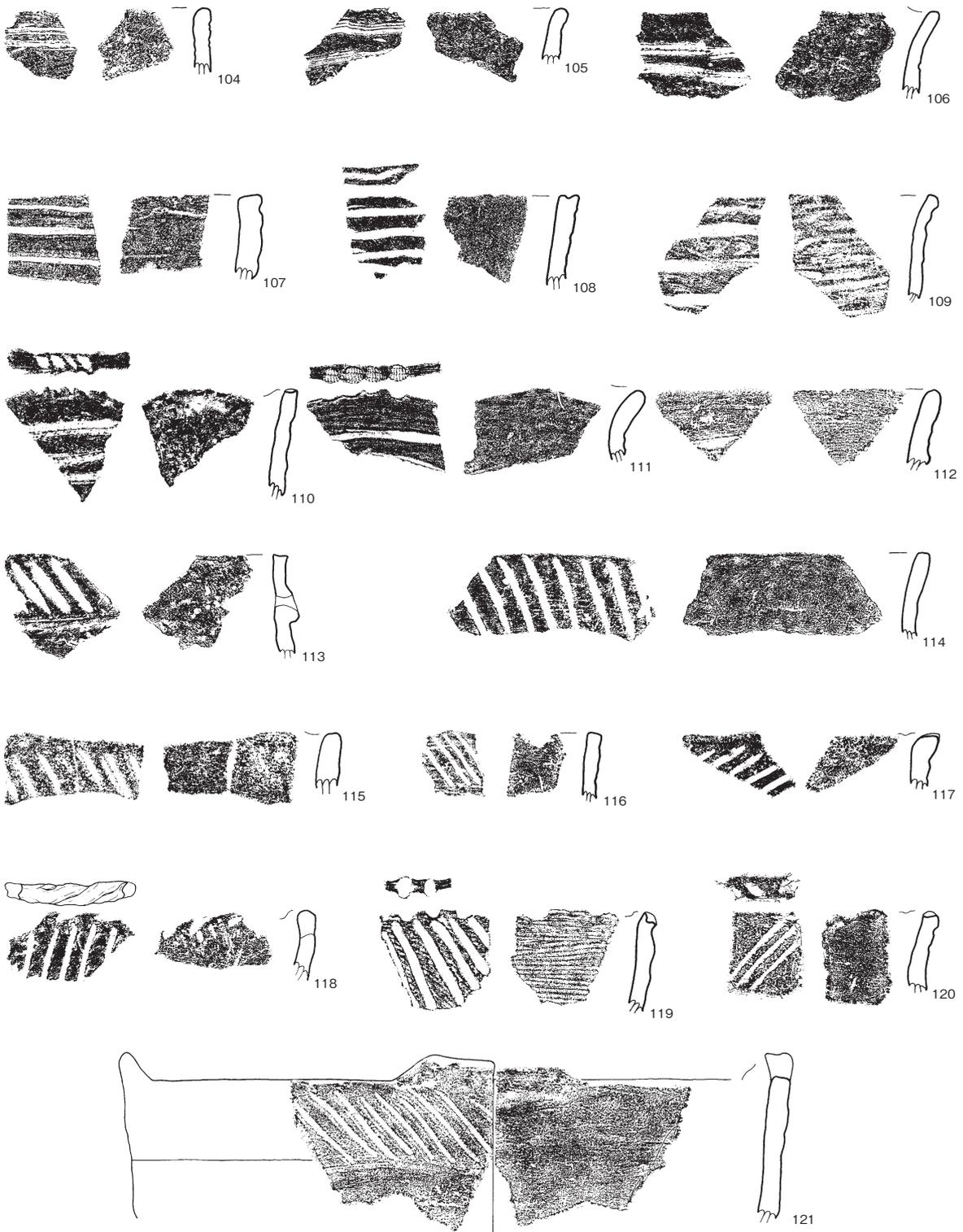
113~121は沈線文を斜位に施している。113は口縁部下位に深い沈線文を施している。114~121は細い棒状の工具を用いて施文している。118は、口唇部に粘土ねじり紐を貼り付けている。121は平口縁に台形状の突起を貼り付けている。



第28図 縄文時代出土土器実測図(6) IV類



第29図 縄文時代出土土器実測図(7)Ⅳ類



0 10cm  
(S=1/3)

第30図 縄文時代出土土器実測図(8)Ⅳ類

## ウ V類

2本の平行沈線による沈線文を基本としたものである。また、編物圧痕がある底部を同時期の土器と判断し、一括して取り上げた。これらは、該期土器の主流をなすものであり、164点を図化した。

### V a類 (第31図122～第39図190)

胴部から口縁部にかけて施文されているものを一括した。2本の平行な沈線文が施されているものが多い。口縁部は、やや外反しており、頸部にかけて直立しているものが多い。

122～162は、曲線や直線を不規則に組み合わせた文様を沈線文により施している。122～125は、頸部を持たず胴部から口縁部まで直立したものである。122・123は波状口縁であり、122は波頂部に穿孔を施す。復元口径の最大は口唇部にあり、32cmを測る。124・125は平口縁で、深い2本の平行沈線文により複雑な文様を施す。126～162は、口縁部が外反、あるいは直立しているものであり、胴部は膨らみを持つものが多い。126は棒状の施文具を用いたと思われ、細くて深い沈線文が施されている。復元口径の最大は口唇部にあり、24cmを測る。127は波状口縁であるが、波頂部の数は不明である。沈線内に細かいスジ状の痕跡が見られる。128～130は口縁部が外反し、胴部の膨らみが弱い。131・132は沈線文が横位に施され、施文後に丁寧にナデ調整を施している。133は口縁部が大きく外反している。134・135は、沈線内に細いスジ状の線が残る。136は、口縁部下位に集中して沈線文を施している。137～140は、大型の深鉢である。137は太く浅い沈線文が施されている。138は口縁部が短くやや外反し、胴部にかけて緩やかに内湾する。復元口径の最大は胴部にあり、40cmを測る大型深鉢である。139は復元口径の最大が胴部にあり、32cmを測る。140は、胴部が最大径になると思われるが、欠損しているため径は不明である。141は、貝殻条痕による器面調整を行った後に、沈線文を廻らしている。142は、頸部がなく口縁部から胴部にかけて膨らみを持つ。143は、口唇部に浅い刻みを施す。144は、沈線内に1本のスジ状になった隆起部分を残す。145～148は、内面を条痕後に丁寧なナデ調整により仕上げている。149は平坦な口唇部に段差を付けて、階段状を呈している。150～160は、口縁部の一部である。161・162は波頂部の突起の部分であり、直下に浅い沈線文を施している。

163～190は、文様が靴形に施されている。163～168は平口縁の深鉢である。163と168は施文後の隆起を残したままで、粗い棒状の施文具を使用したと思われる細かなスジが沈線文内に数条認められる。164は施文後に、ナデによる器面調整を行っている。165は

やや細めの沈線文を施している。166は、太い沈線文を施している。復元口径の最大が口唇部にあり、38cmを測る。167は復元口径の最大が口唇部にあり、30cmを測る。169と170は波状口縁の波頂部であり、ともに穿孔が施されている。171～182は、外反する口縁部の一部である。183～186は内面に貝殻条痕を施し、焼成もしっかりしている。187は口唇部に連続的な刺突文を施す。188～190は、沈線文が施された胴部であるが、小片のため器形は不明である。

### V b類 (第39図191～第42図259)

口縁部のみ、またはその直下までを施文しており、曲線や直線を組み合わせた文様である。口縁部は、やや外反しているものが多い。

191～212は、曲線の組み合わせにより施文されているものである。191～193は口唇部に連続的な刺突文を施す。194は小型の深鉢で、胴部が器形の最大である。口縁部の器壁が薄く、肩部は厚い。195は波状口縁の波頂部である。196は口唇部に太い棒状の工具による刺突文を施す。197は、平口縁に深い刻みを施した台形の突起を取り付けている。198～206は、口縁部の一部であり、複雑な文様を施す。207は裏面の口唇部下に連続的な刺突文を施した後、ナデ調整を行っている。208・209は、口縁部が外反し、口唇部に連続的な刺突文を施す。210は、波状口縁の波頂部である。胴部の器壁がかなり薄い。211・212は細い棒状の工具によって、細く深い幾何学模様を施している。

213～218は、曲線と直線による組み合わせにより施文されている。213～216は波状口縁で、口唇部に深い刺突文を施している。217・218は細い棒状の工具を用いて沈線文を施している。

219～253は、直線の組み合わせにより施文されている。深く鋭い沈線文が多い。220は口縁部に穿孔を施している。225～234は口唇部に連続的な刻みを施す。235・236は、口縁部下位に刻み目で突帯を貼り付けている。237～243は、かなり細い棒状の工具を用いて施文している。238・243は、口唇部横に細い×印を連続的に施している。244は、短くてやや太い沈線文を連続的に施している。245～253は横方向に沈線文を施している。254は沈線内に細かいスジ状の線が残る。

255～259は胴部であり、257～259は沈線内に細かいスジ状の線が残る。

### エ VI類 (第43図260～第44図285)

圧痕を有する底部を一括した。該期の土器に特徴的な網代底が主流を成す。

260～269は底部に張り出しを持たないものであり、270～285は底部にやや張り出しを持つものである。

網代底で、平編みのものが大半を占める。

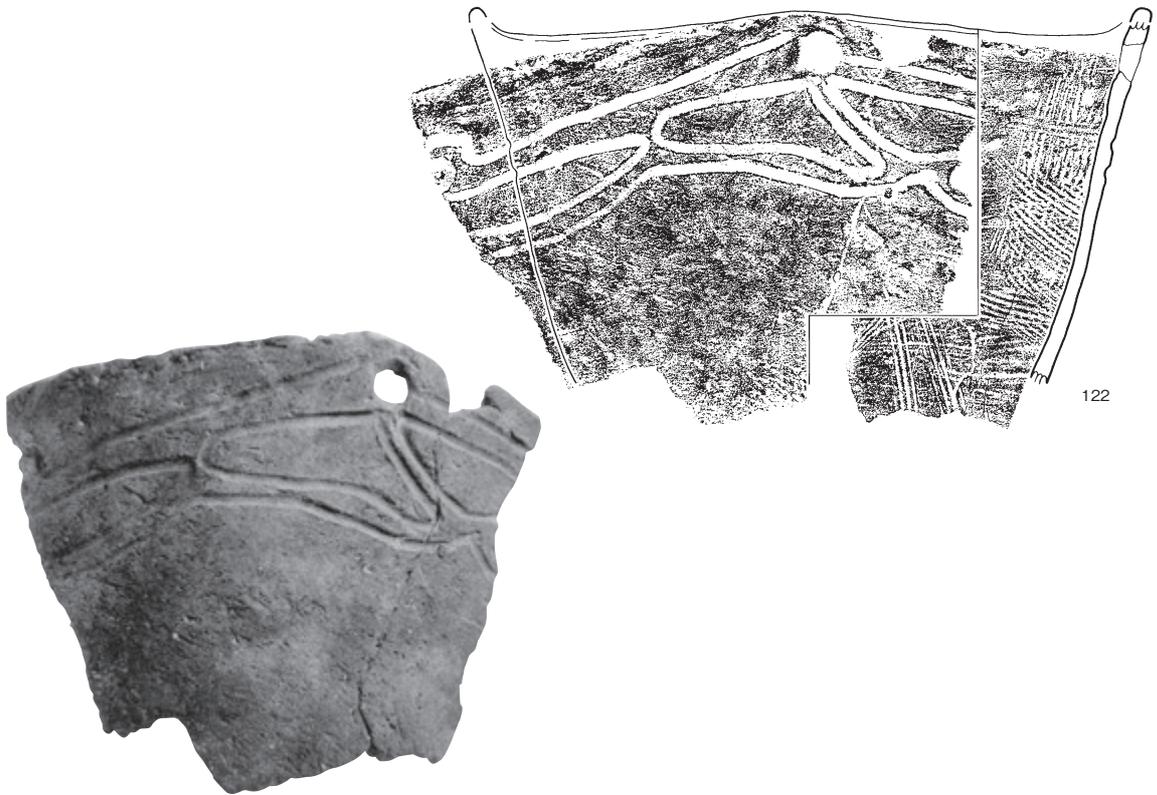
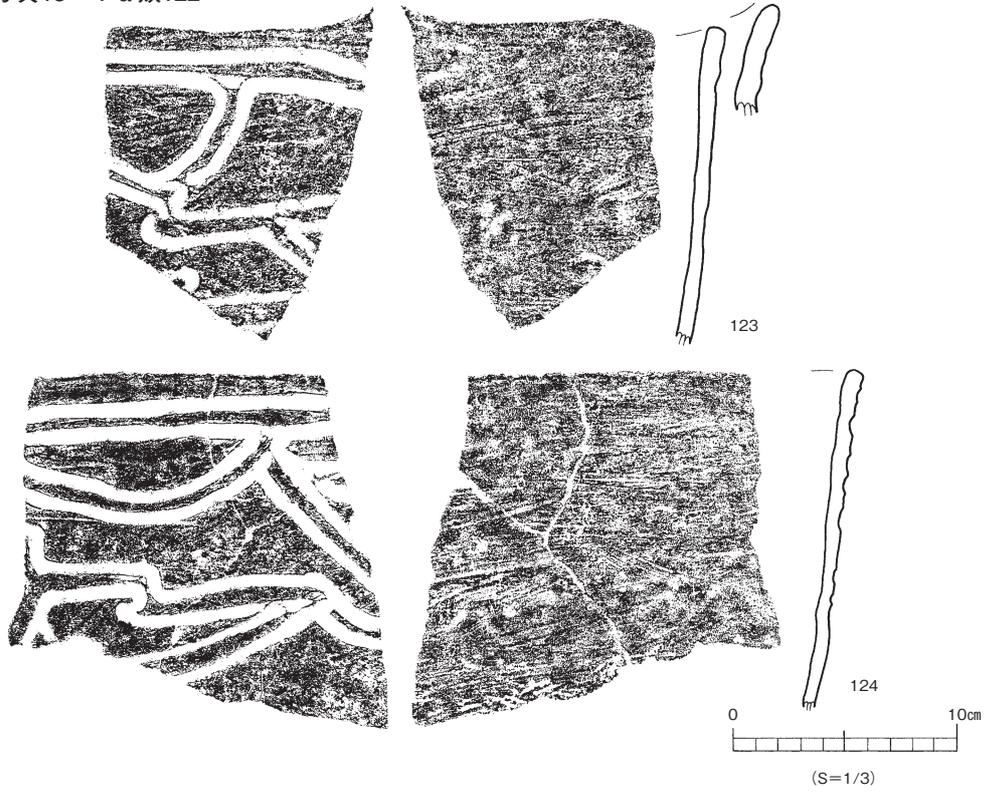
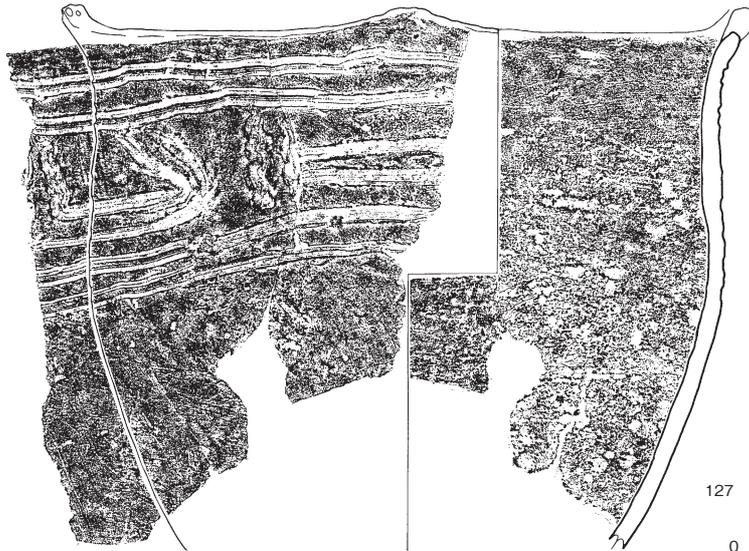
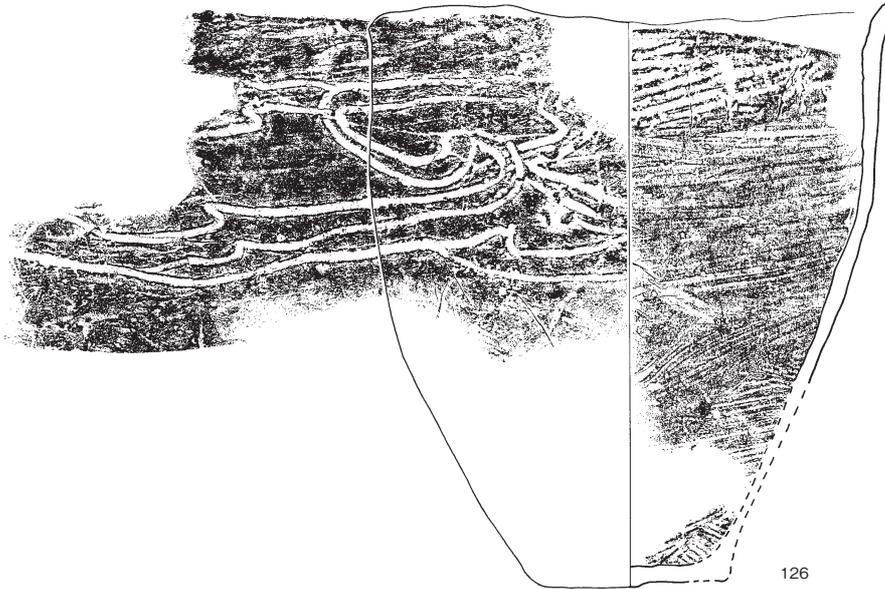
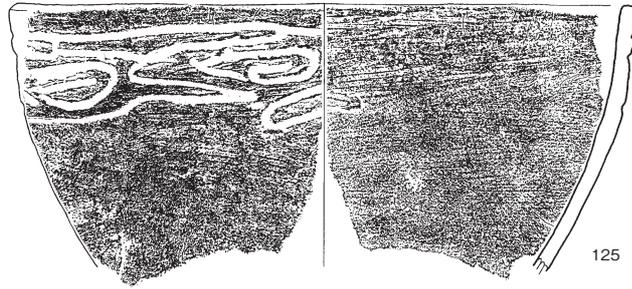


写真13 Va類122

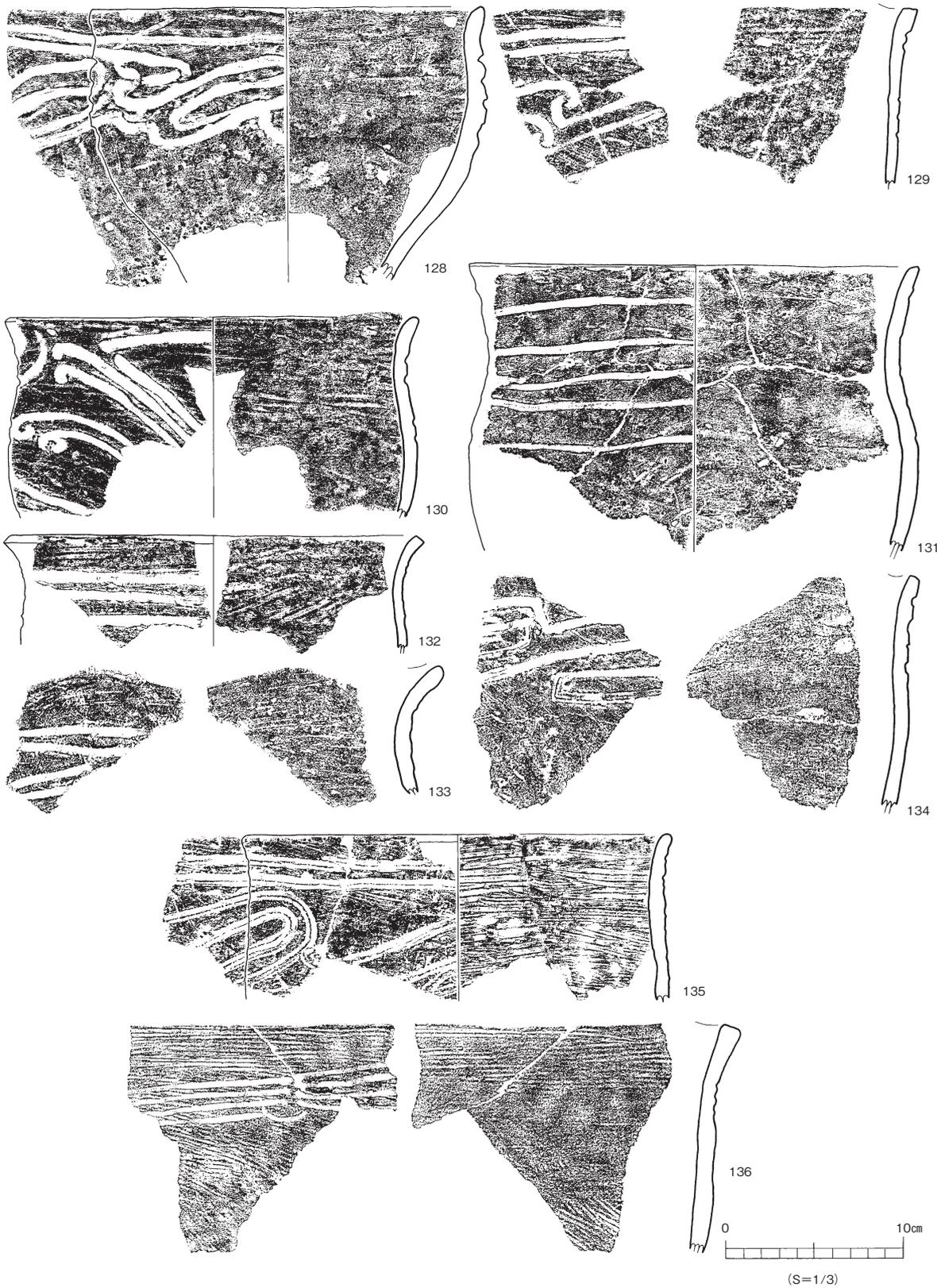


第31図 縄文時代出土土器実測図(9) Va類

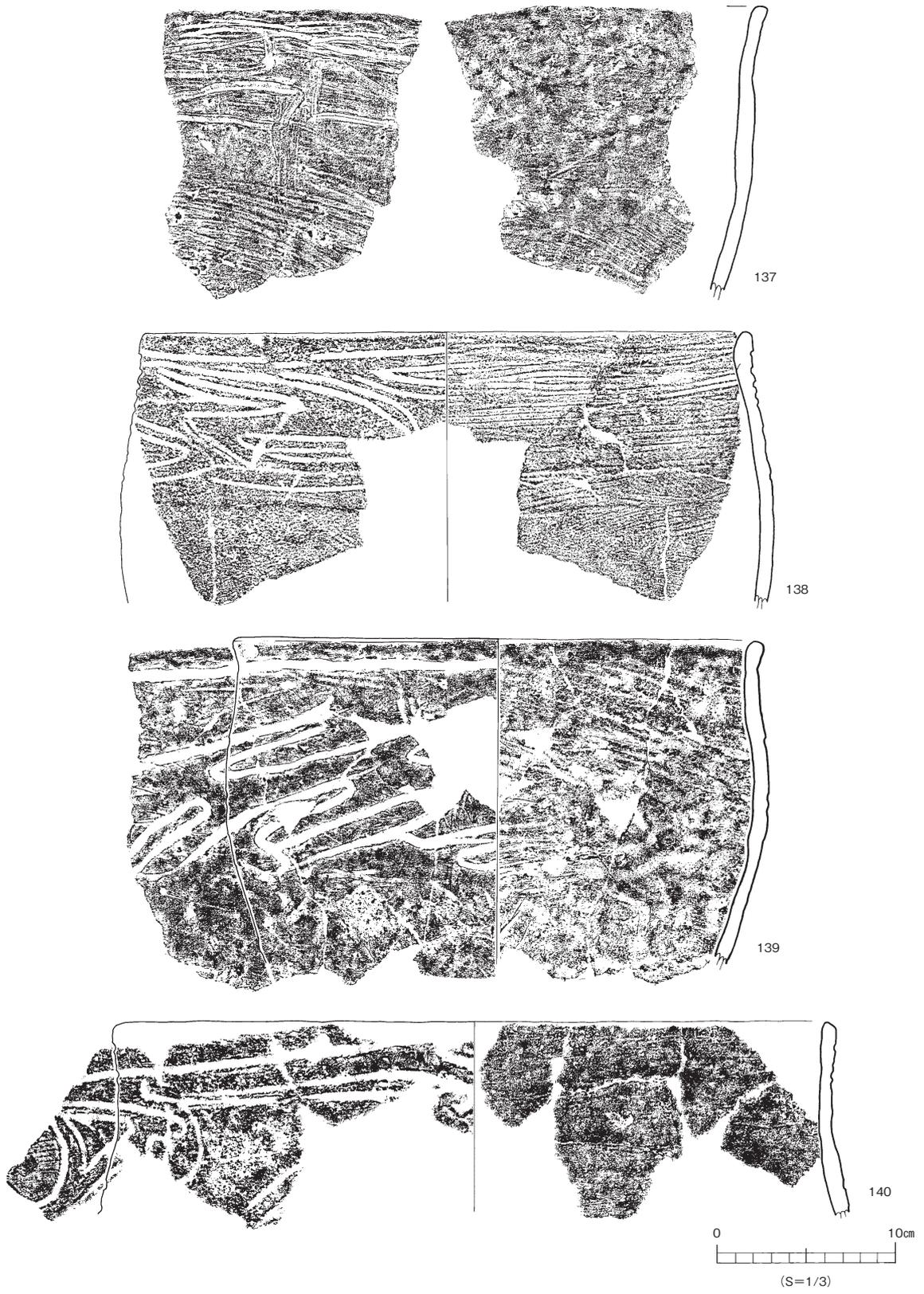


0 10cm  
(S=1/3)

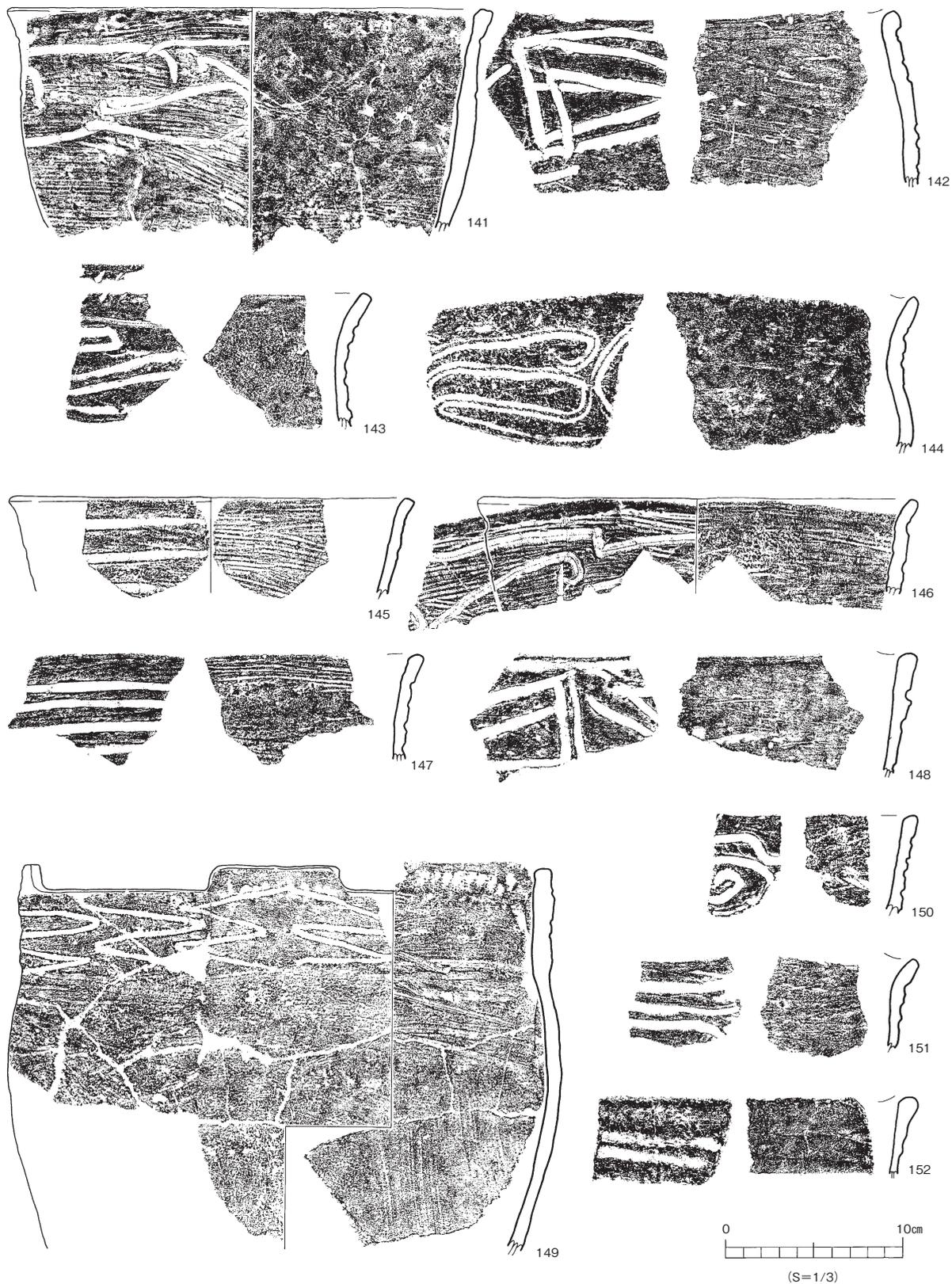
第32図 縄文時代出土土器実測図 (10) V a類



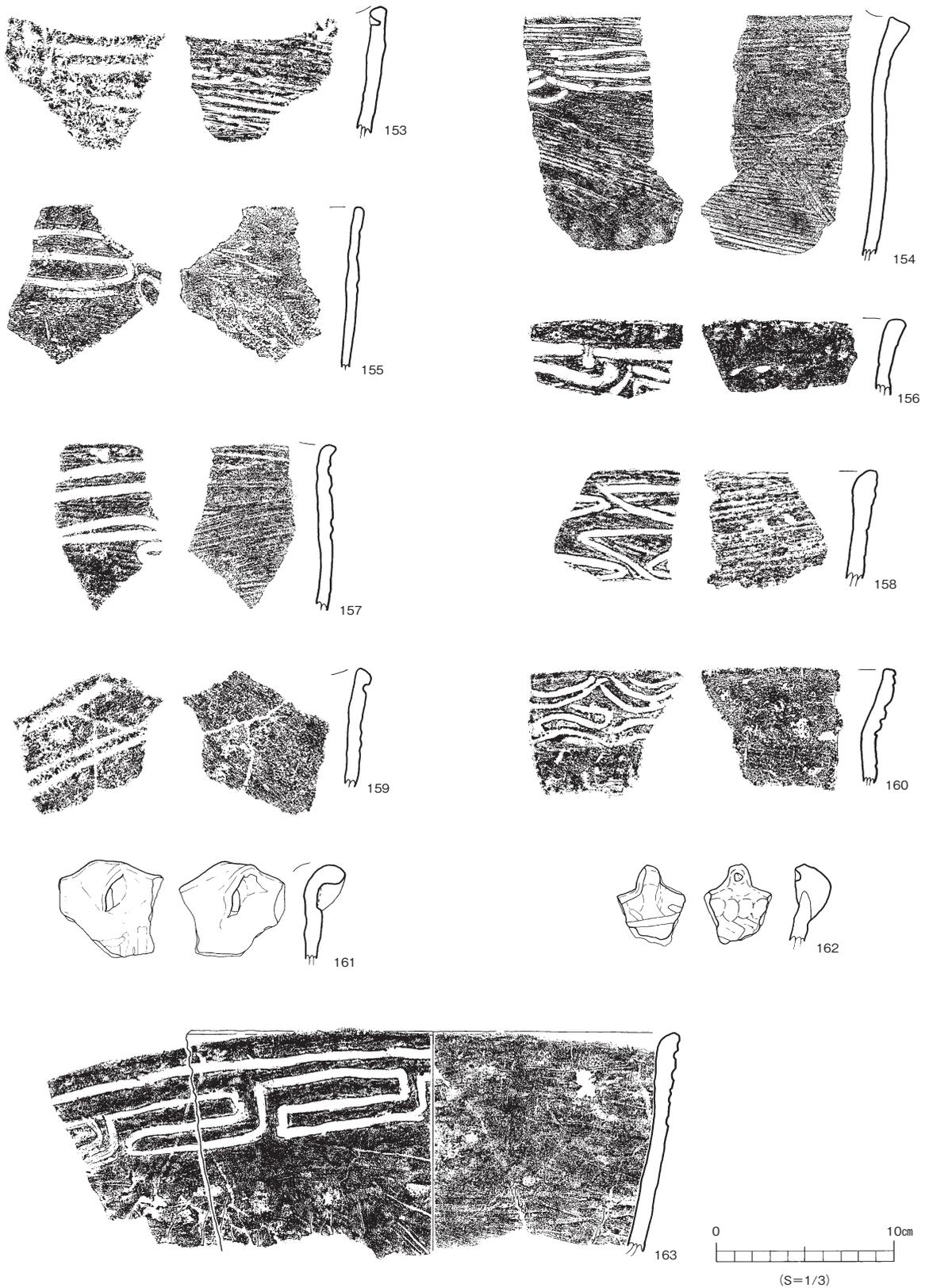
第33図 縄文時代出土土器実測図 (11) V a類



第34図 縄文時代出土土器実測図 (12) V a類



第35図 縄文時代出土土器実測図 (13) V a類



第36図 縄文時代出土土器実測図 (14) V a類

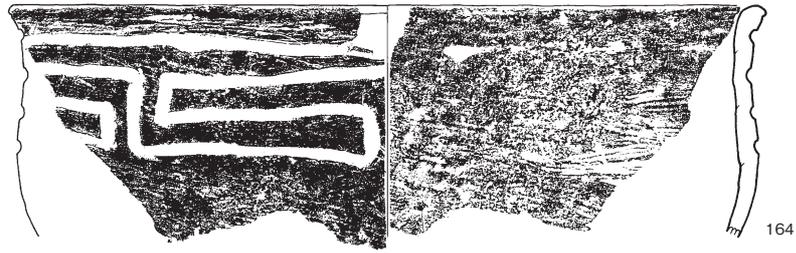
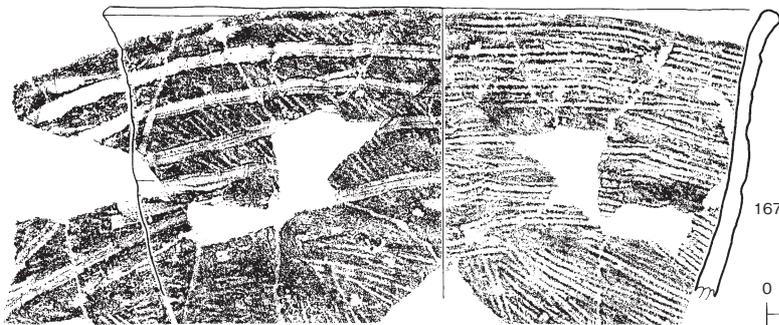
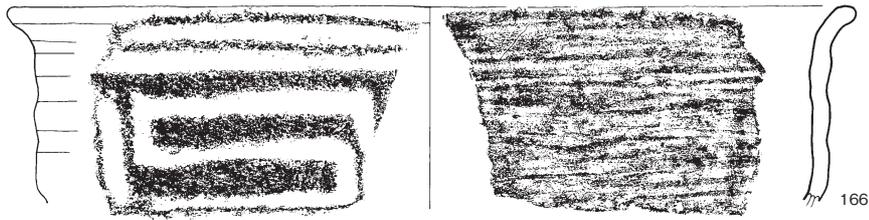
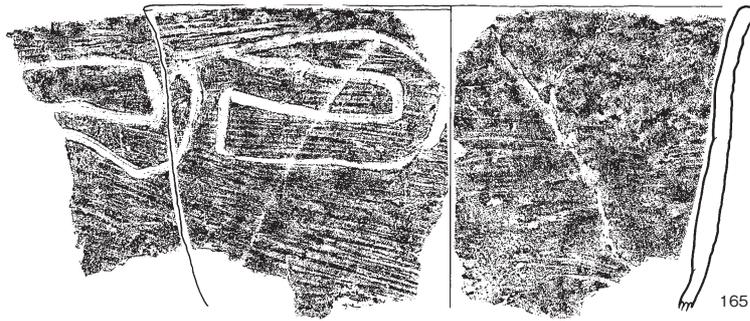
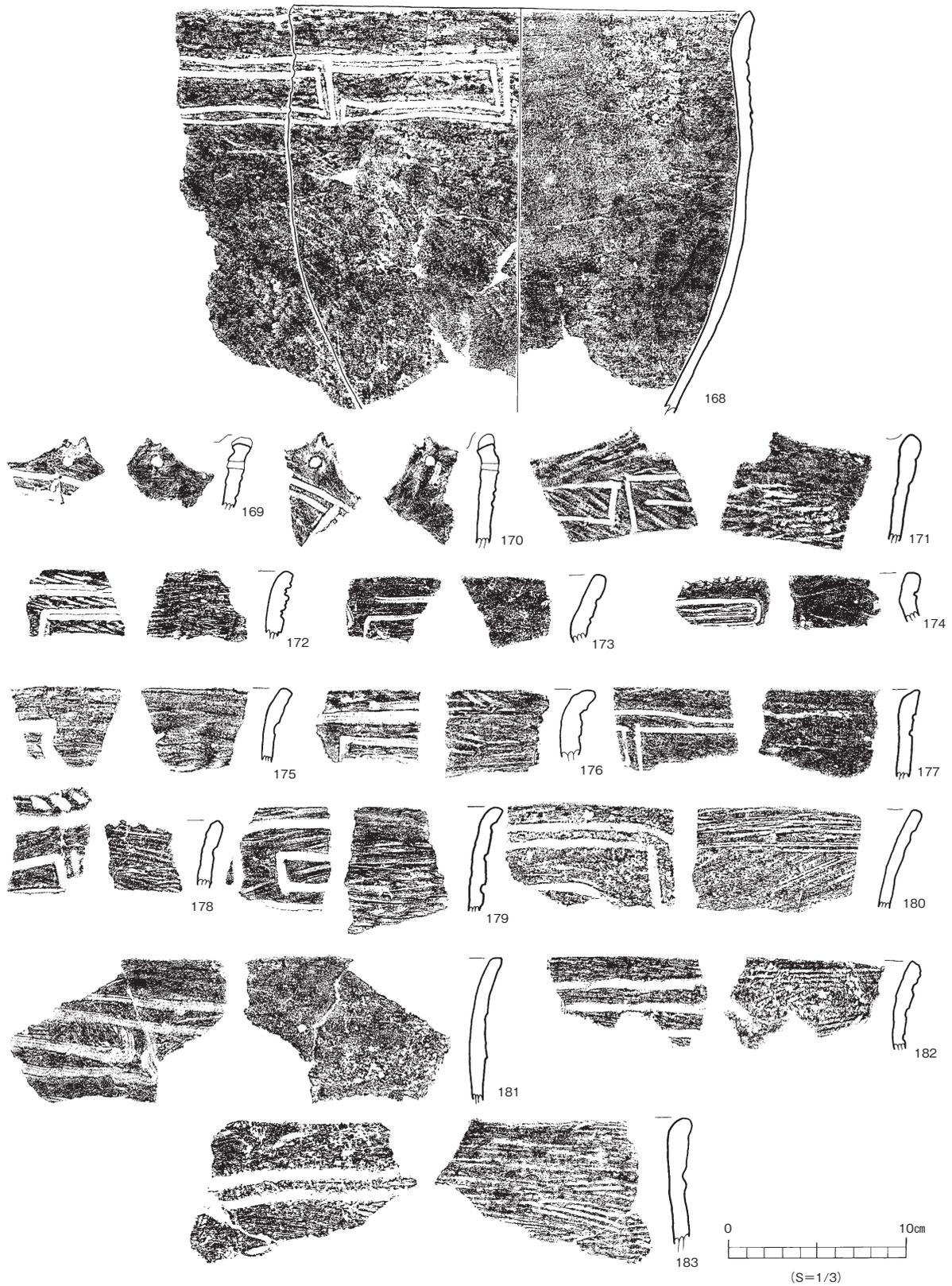


写真14 IV a類164

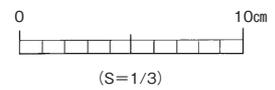
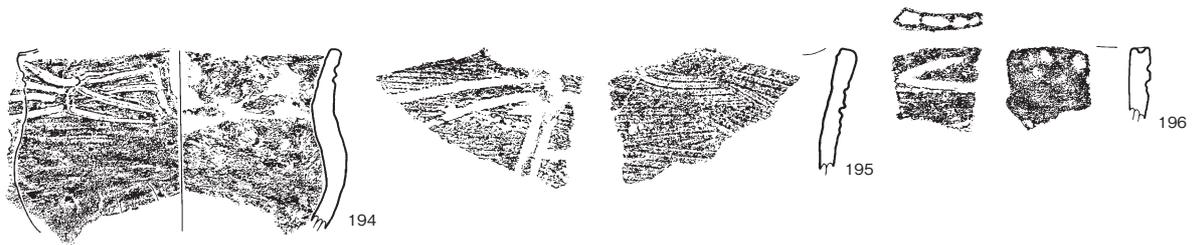
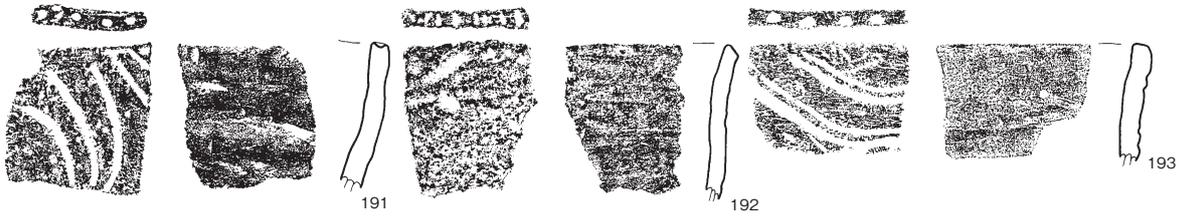
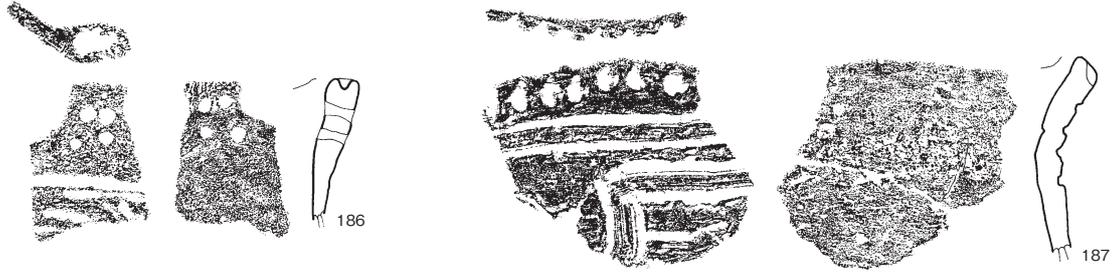
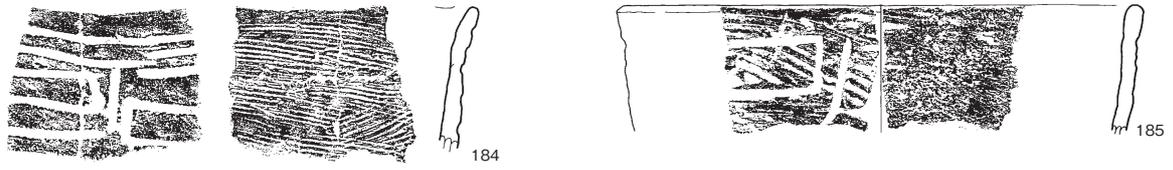


(S=1/3)

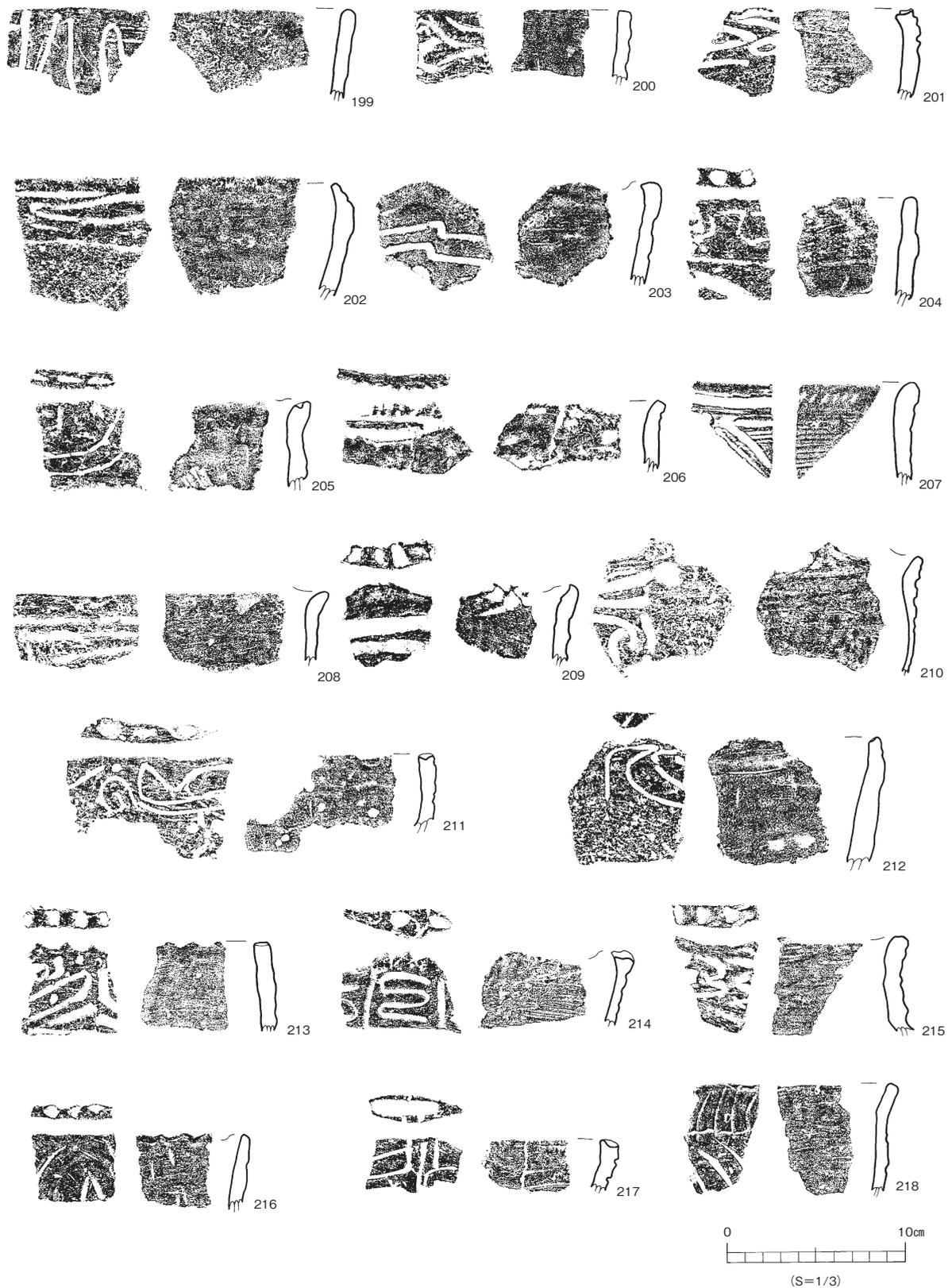
第37図 縄文時代出土土器実測図 (15) V a類



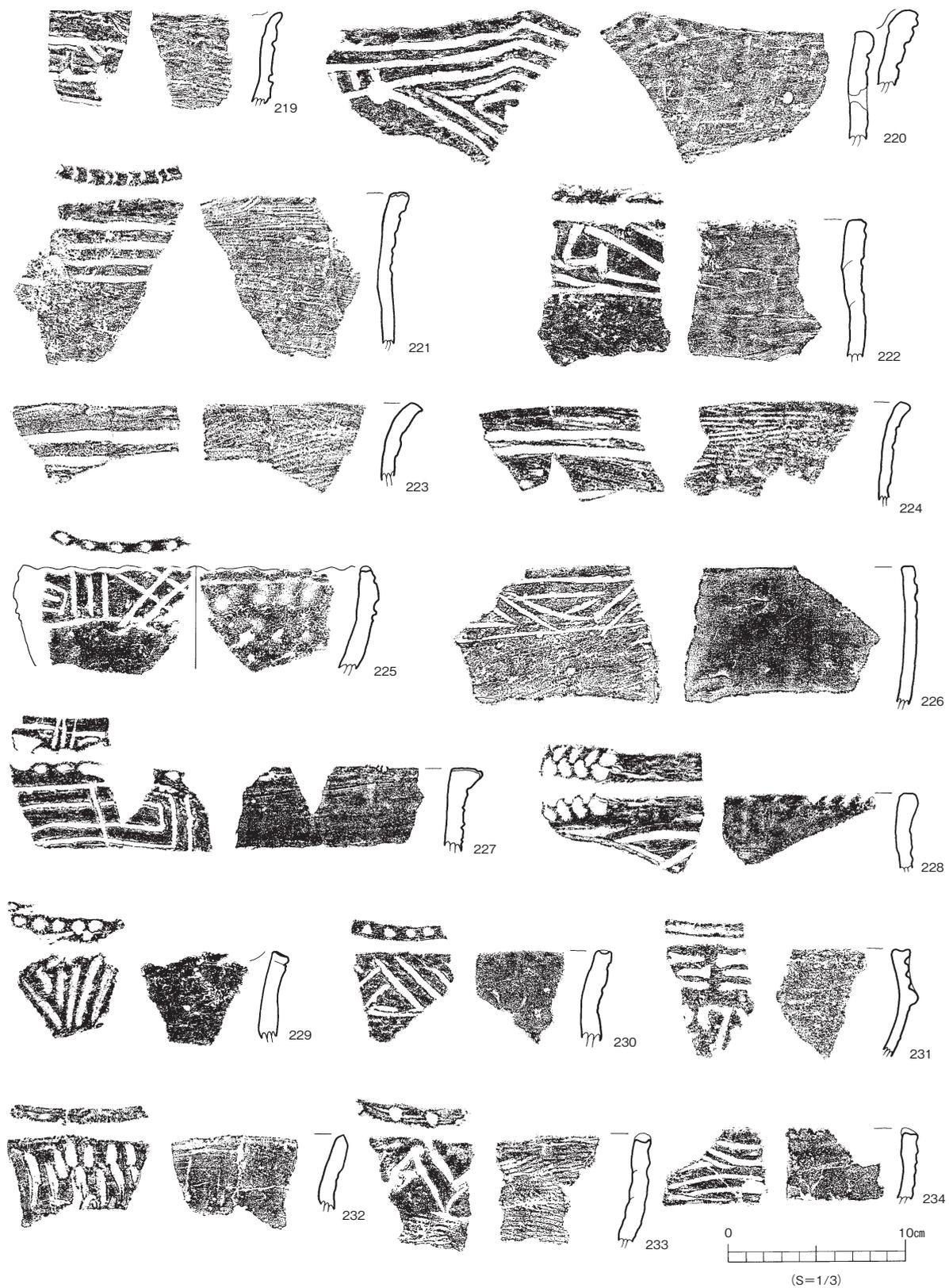
第38図 縄文時代出土土器実測図 (16) Va類



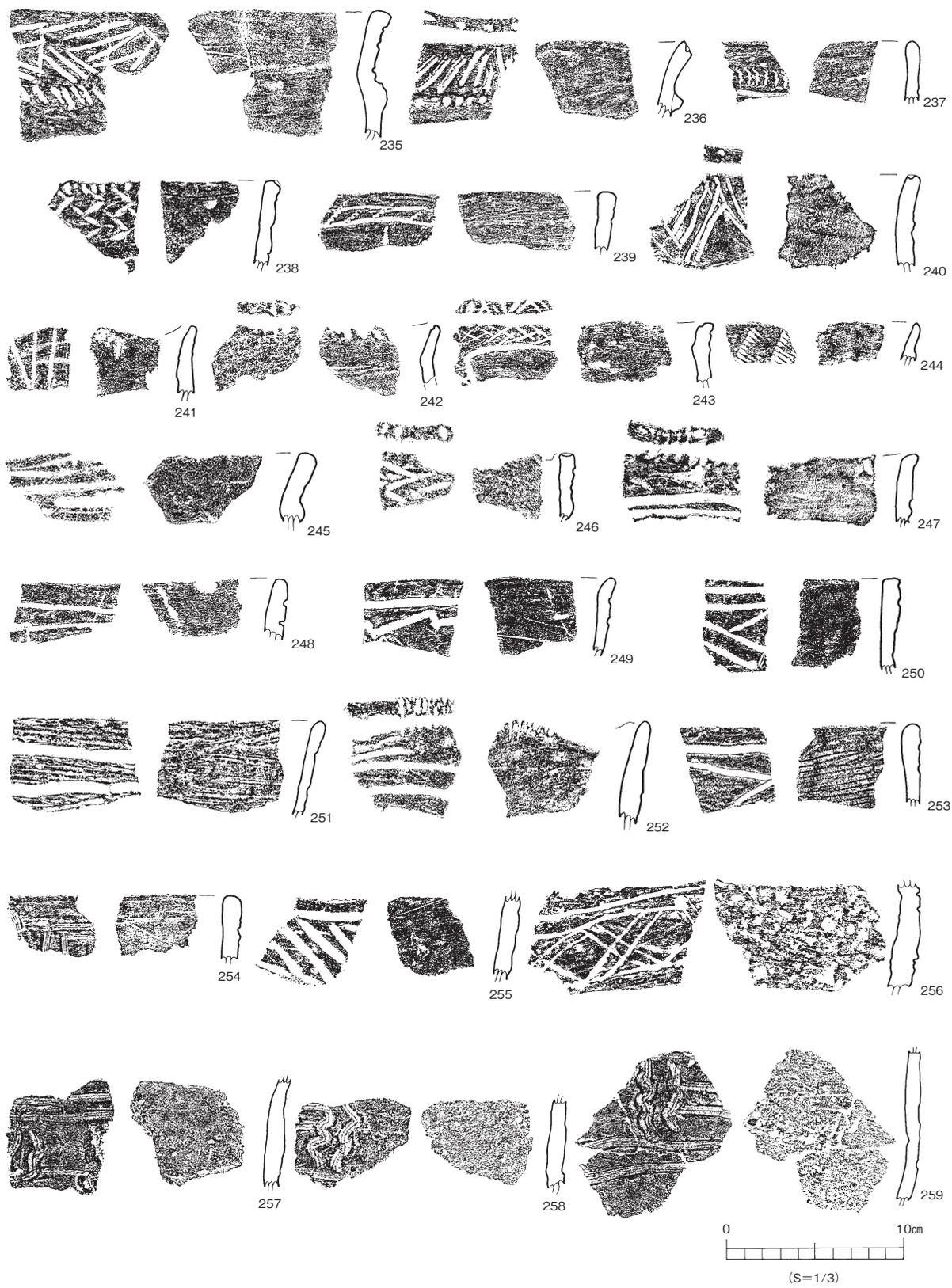
第39図 縄文時代出土土器実測図 (17) Vab類



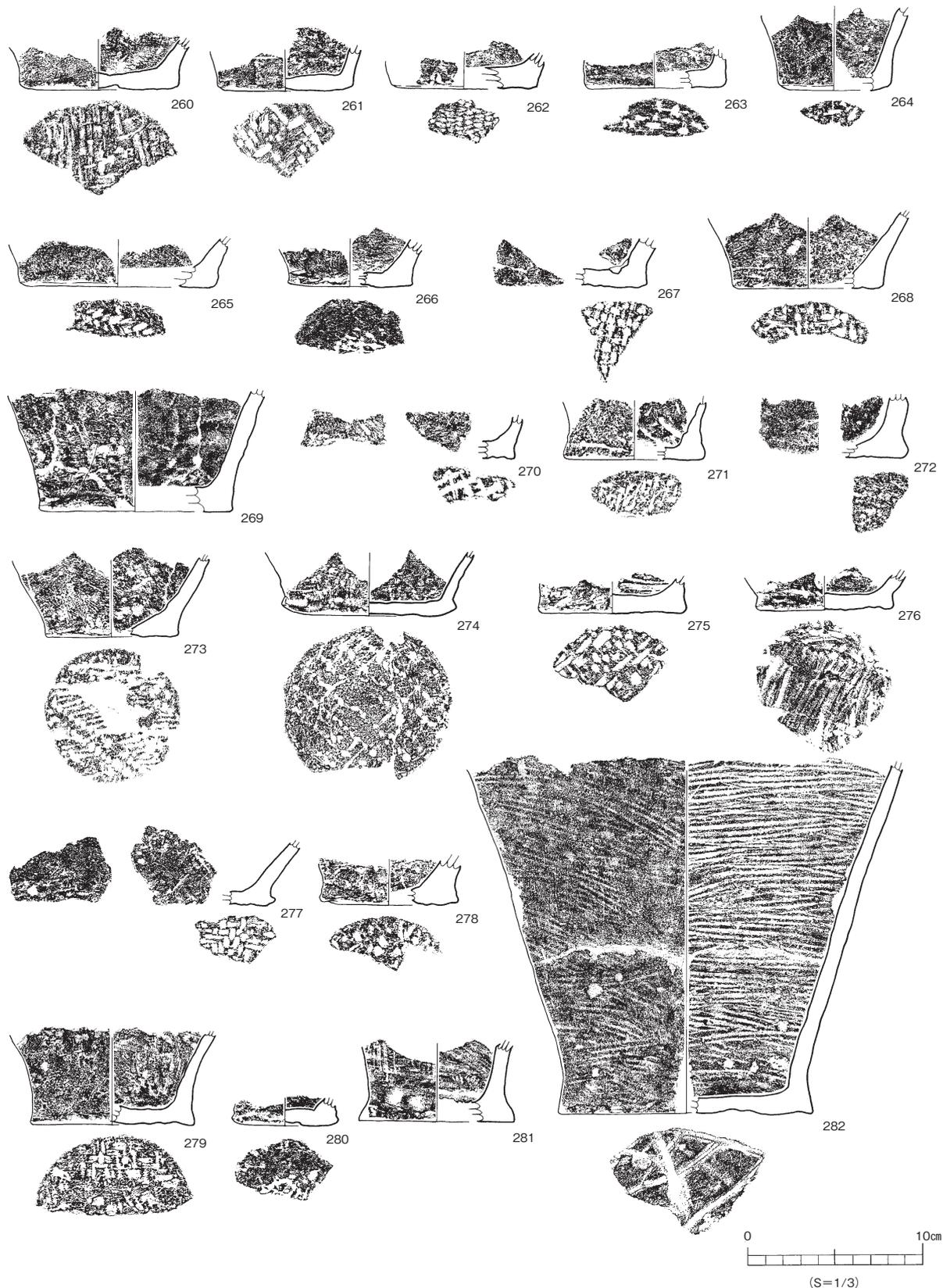
第40図 縄文時代出土土器実測図 (18) V b類



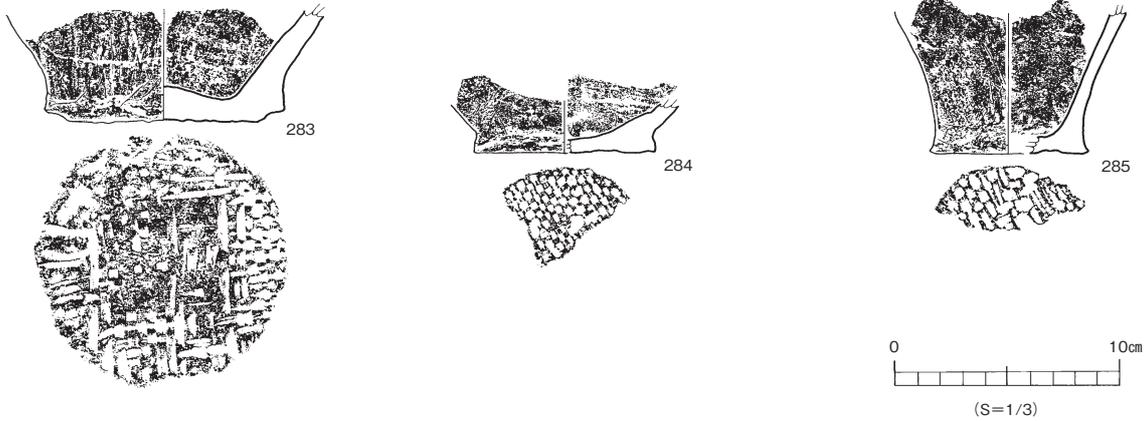
第41図 縄文時代出土土器実測図 (19) V b類



第42図 縄文時代出土土器実測図 (20) V b類



第43図 縄文時代出土土器実測図 (21) VI類



第44図 縄文時代出土土器実測図 (22) VI類

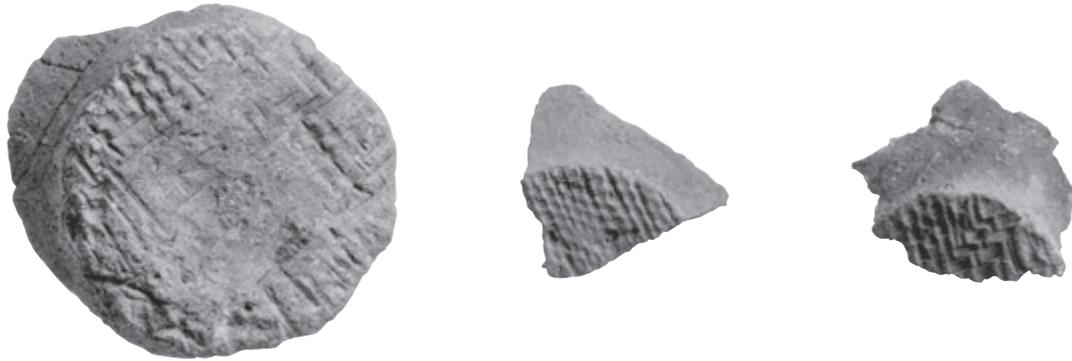


写真15 VI類 (底面の様子)

オ VII類 (第45図286～第46図318)

貝殻腹縁による刺突文 (擬似縄文) と沈線文を組み合わせたもので、33点を図化した。

286は波状口縁の波頂部にあたり、文様は、貝殻腹縁による刺突文を施した後、沈線文を施している。さらに波頂部直下に鈎手状の繋ぎ文を施す。裏から指頭により表面を押し上げることで、頂部に立体感を出している。287・288も同様に波状口縁の波頂部で、穿孔の周囲に貝殻腹縁による刺突文を施している。289・290は、貝殻腹縁による刺突文を施した後に、2本の沈線文を施している。291は、摩耗が激しく沈線文の下部にかすかに刺突痕が残る。299～318は胴部であり、いずれも貝殻腹縁による刺突文を施した後に、沈線文を施している。315～317は刺突文の施した後、細い沈線文を横位に施している。286～317までは2枚貝を利用した刺突文であるが、318は、巻き貝であるヘナタリを回転させて施文している。

カ VIII類 (第47図319～第48図356)

器面に磨消縄文が施されるものを一括して、48点を図化した。2本の平行する沈線文間に、縄文を施文するものがほとんどである。

319は波状口縁で、波頂部に3本の鋭く深い刻みを施している。321は口唇部を肥厚させ、その部分に文様を施している。口唇部表面に縄文を施した後、先端が丸い棒状の工具で深い沈線文を施している。322は、口縁部から胴部にかけて縄文を施した後、2本の平行沈線文を幾何学的な文様で描き、表面を磨いて器面調整を行っている。325・328は肥厚させた口唇部に文様を施している。335～449は、胴部である。336は沈線文下位に縄文を施した後、表裏共にミガキによる器面調整を行っている。351は、縄文を施した後に沈線文によって施文しているが、その後にまた縄文による施文を行っている部分が認められる。356は、縄文が残る底部である。

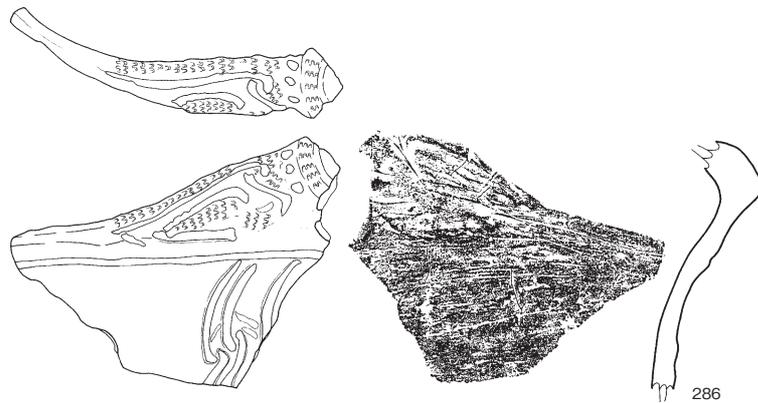
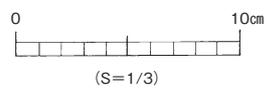
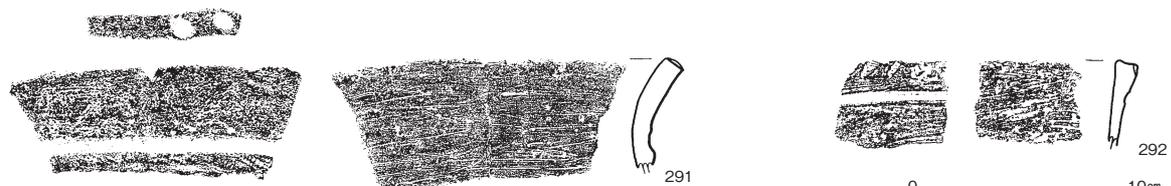
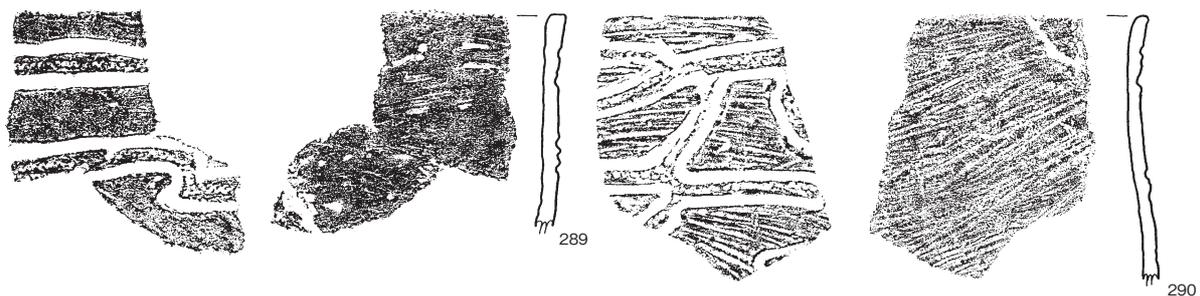
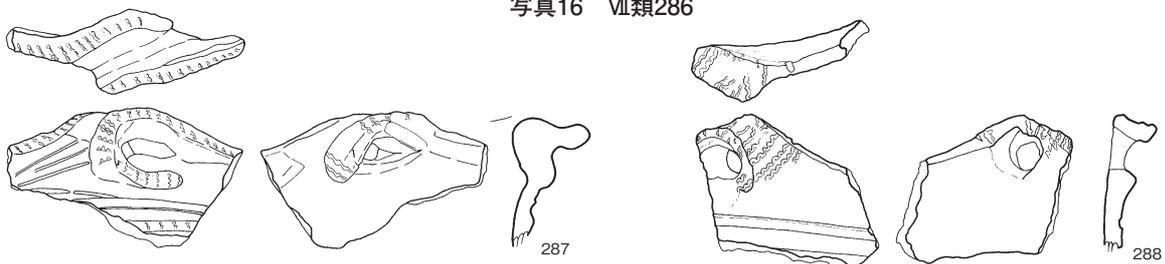
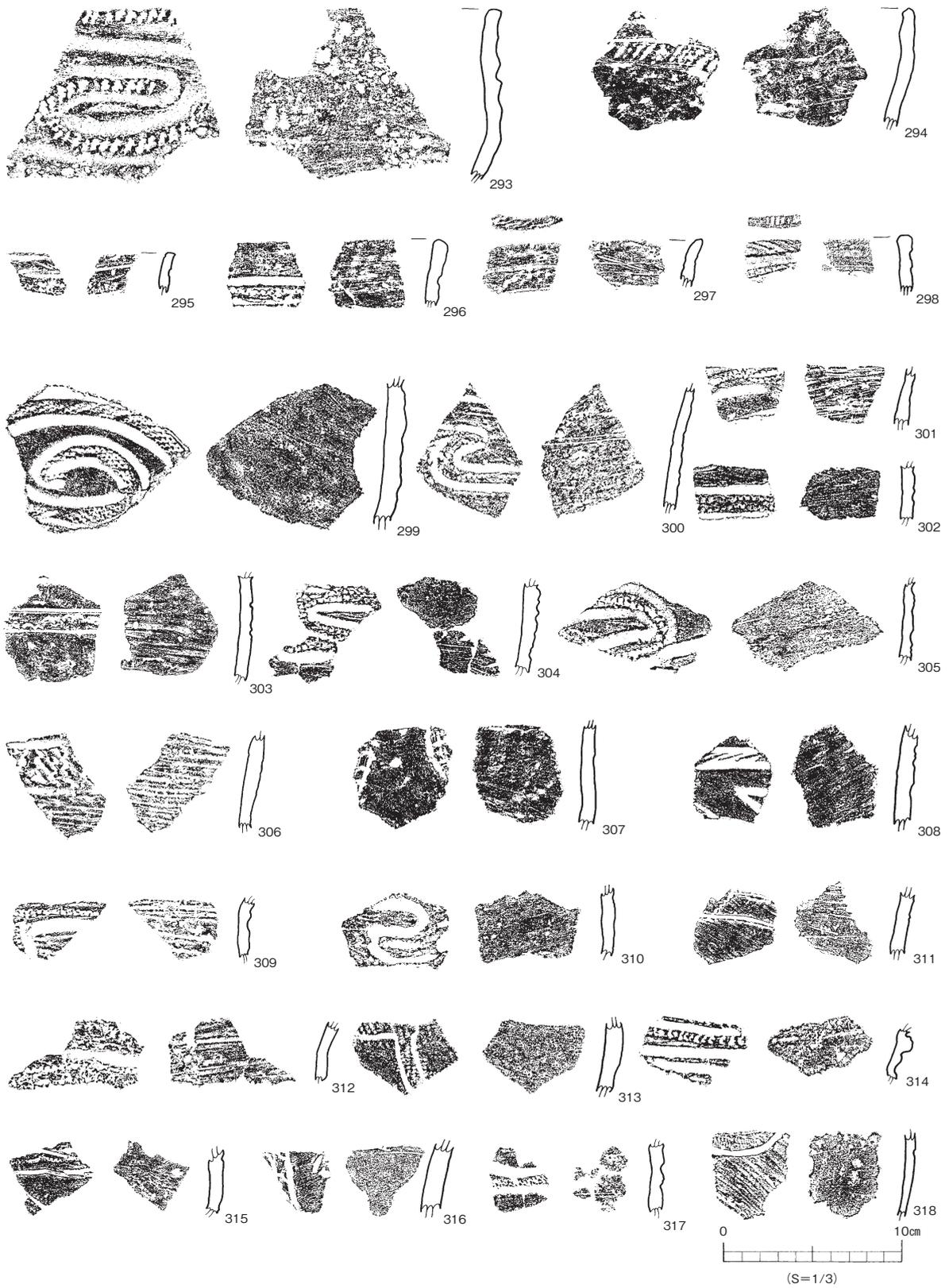


写真16 VII類286



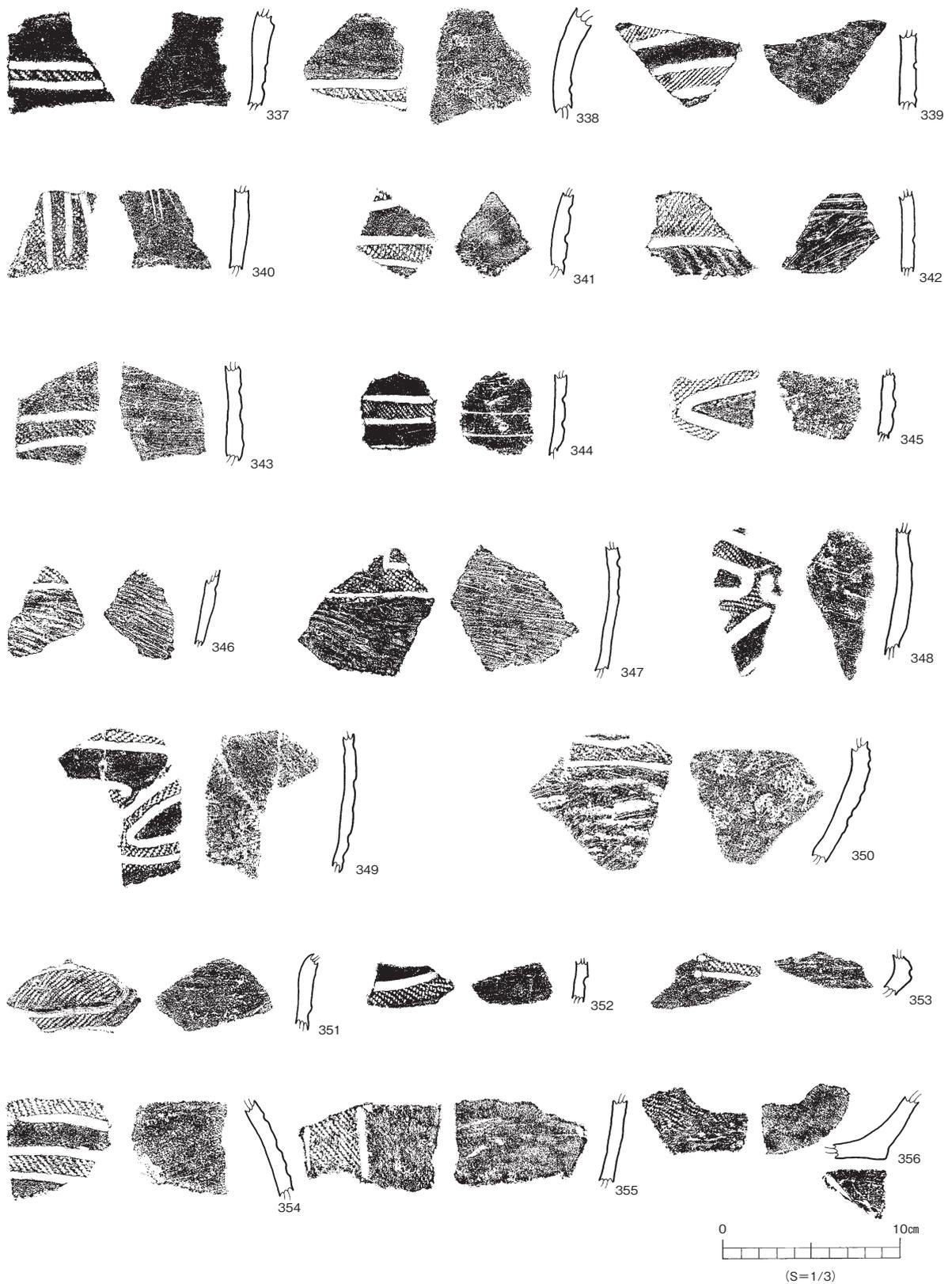
第45図 縄文時代出土土器実測図 (23) VII類



第46図 縄文時代出土土器実測図 (24) VII類



第47図 縄文時代出土土器実測図 (25) VIII類



第48図 縄文時代出土土器実測図 (26) VIII類

キ 区類

口縁部が断面三角形タイプのものを一括した。口縁部自体を肥厚させるものと、粘土紐で肥厚帯を形成するものに大別できる。

Ⅹ a 類 (第49図357～第53図391)

口縁部自体を肥厚させ、断面が三角形を呈す。口縁部は直行もしくは外反している。文様は、篋状施文具による連続的な刺突文を施しているものが多い。

357・358は波状口縁で、357は復元口径の最大は口唇部にあり、30cmを測る。359は口唇部に連続的な深い刺突文を施す。360は波状口縁で、口縁上部に横位の沈線を施している。361・362は、口縁部下をナデ調整により肥厚を強調させている。365は、連続的に斜位の沈線文を施す。口縁部下位を指頭圧痕後にナデ調整することで、口縁部の肥厚を強調させている。381～387は、波状口縁であり、口縁のラインに沿って連続的に刺突文を施している。381は、口縁部が大きく外向し、胴部から底部にかけてやや内湾している。復元口径の最大は口唇部にあり、37cmを測る大型の深鉢である。382は、口縁部を浅い2本の平行沈線で施文し、その間に細い棒状の工具によって連続刺突文を施している。385は、口縁部の隆起させた部分に連続した竹管文を施している。389は、ナデによる器面調整を行った後、口縁部を貝殻条痕によって横位に施文している。

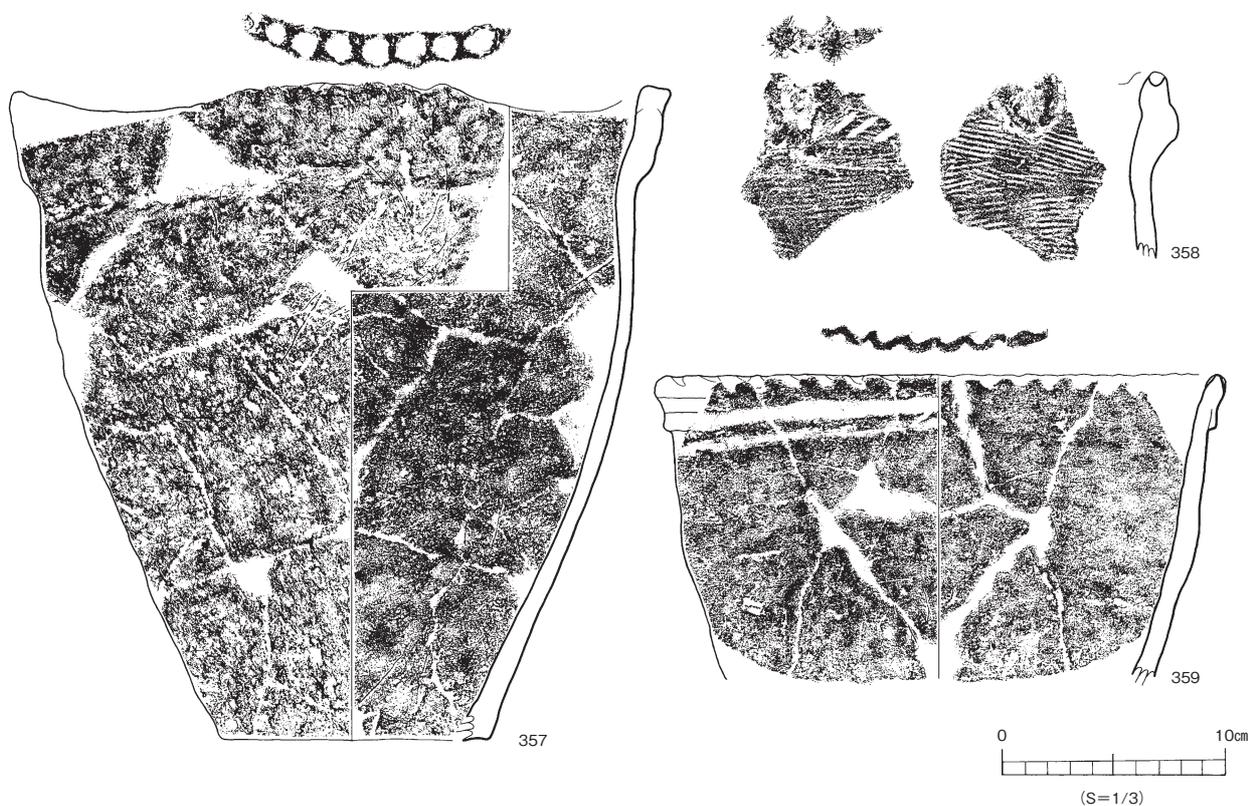
Ⅹ b 類 (第53図392～第55図418)

口縁部に粘土紐を貼り付けることにより肥厚させるもので、断面が三角形を呈す。口縁部は直行もしくは外反しているものが多い。文様を施すものは少なく、ほとんどが無文である。

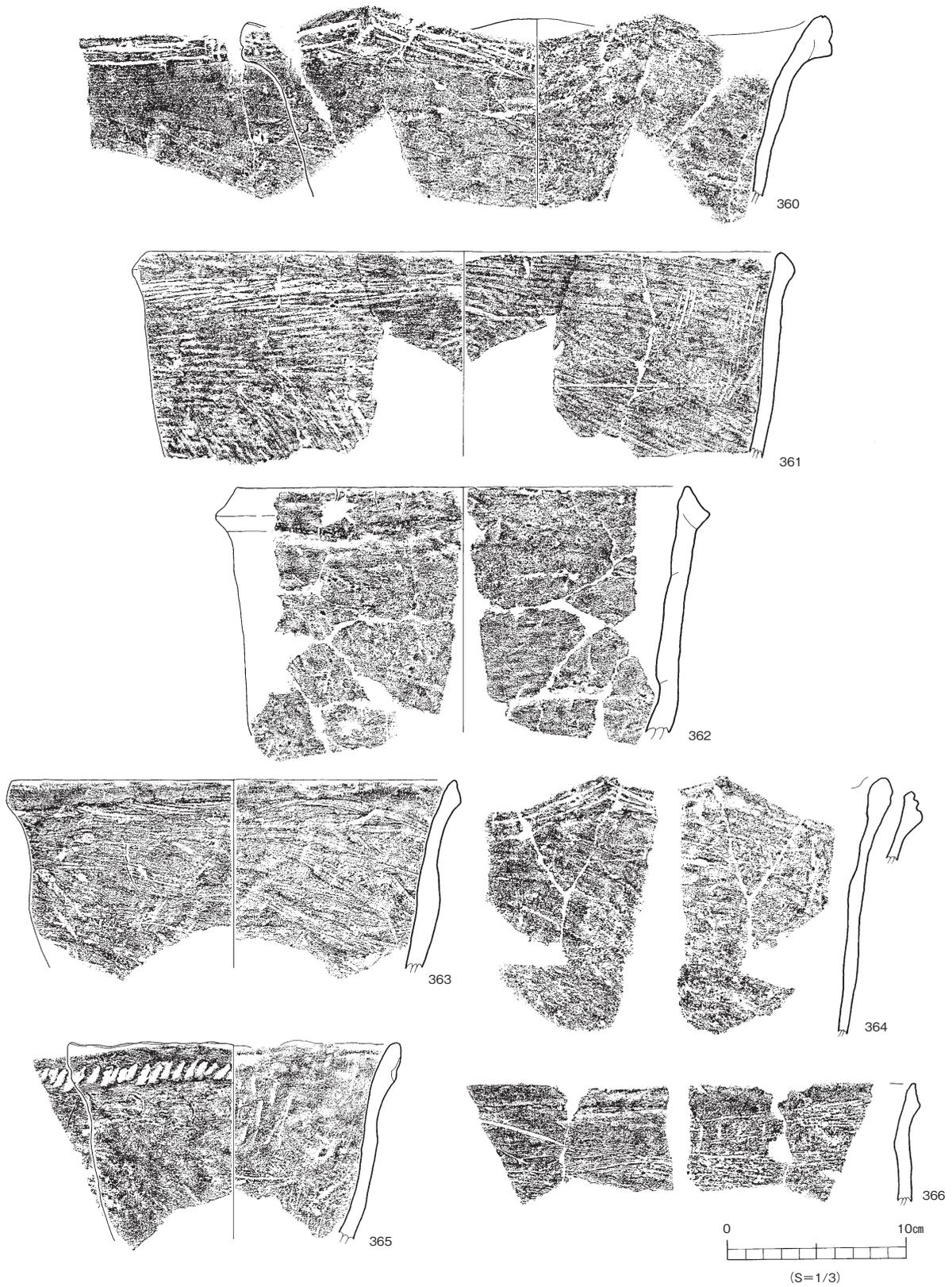
392～401は、口縁部の長さが比較的短いものである。392は波状口縁で、口縁部上位に粘土紐を貼り付け、さらにその下位にも同様の突帯を持つ。器面調整は粗いナデ仕上げである。

402～418は、口縁部の長さが比較的長いものである。402・403は、口縁部に粘土紐による肥厚帯を持ち、ナデ調整によってさらに強調させている。いずれも文様は施されていない。404は口唇部と粘土紐による肥厚帯の間に、細い棒状の工具の先端を使った刺突文を連点状に施している。407は山型口縁で、肥厚する三角形の口縁部に太形の2本の沈線文と、その上下に刻み目文を施す。408～412は、摩耗が激しく僅かに横位の沈線文が残る。413は指頭圧痕後にナデ調整を行うことで、粘土紐による肥厚帯をさらに強調させている。414は、口縁部の突帯に浅い刻み目を連続的に施している。417は、口唇部に連続刺突文を施す。口唇部の径が41.5cmを測る大型深鉢である。

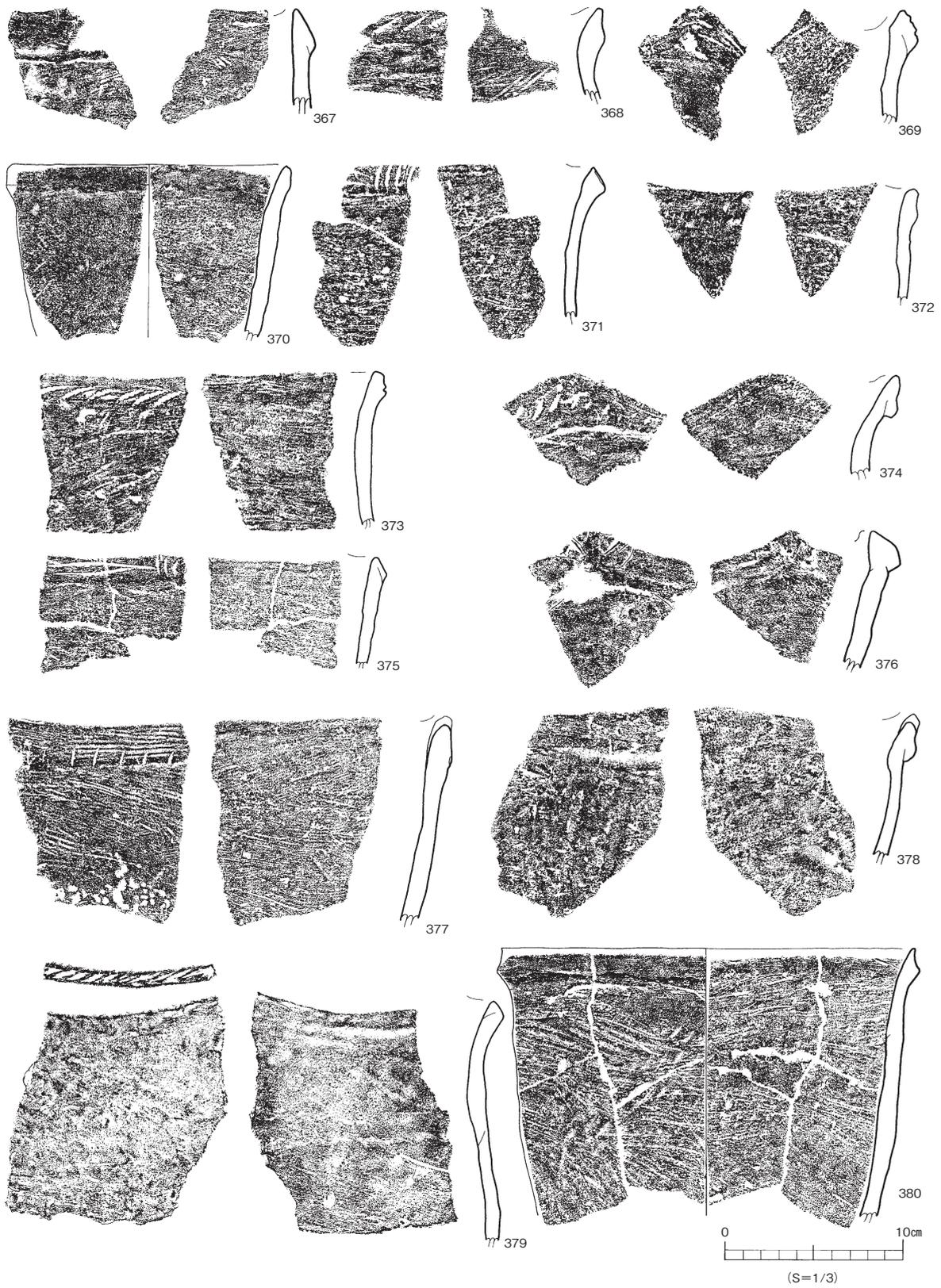
418は、口縁部の上部は欠損している。肥厚した口縁部に貝殻刺突文を逆くの字形に連続的に施す。



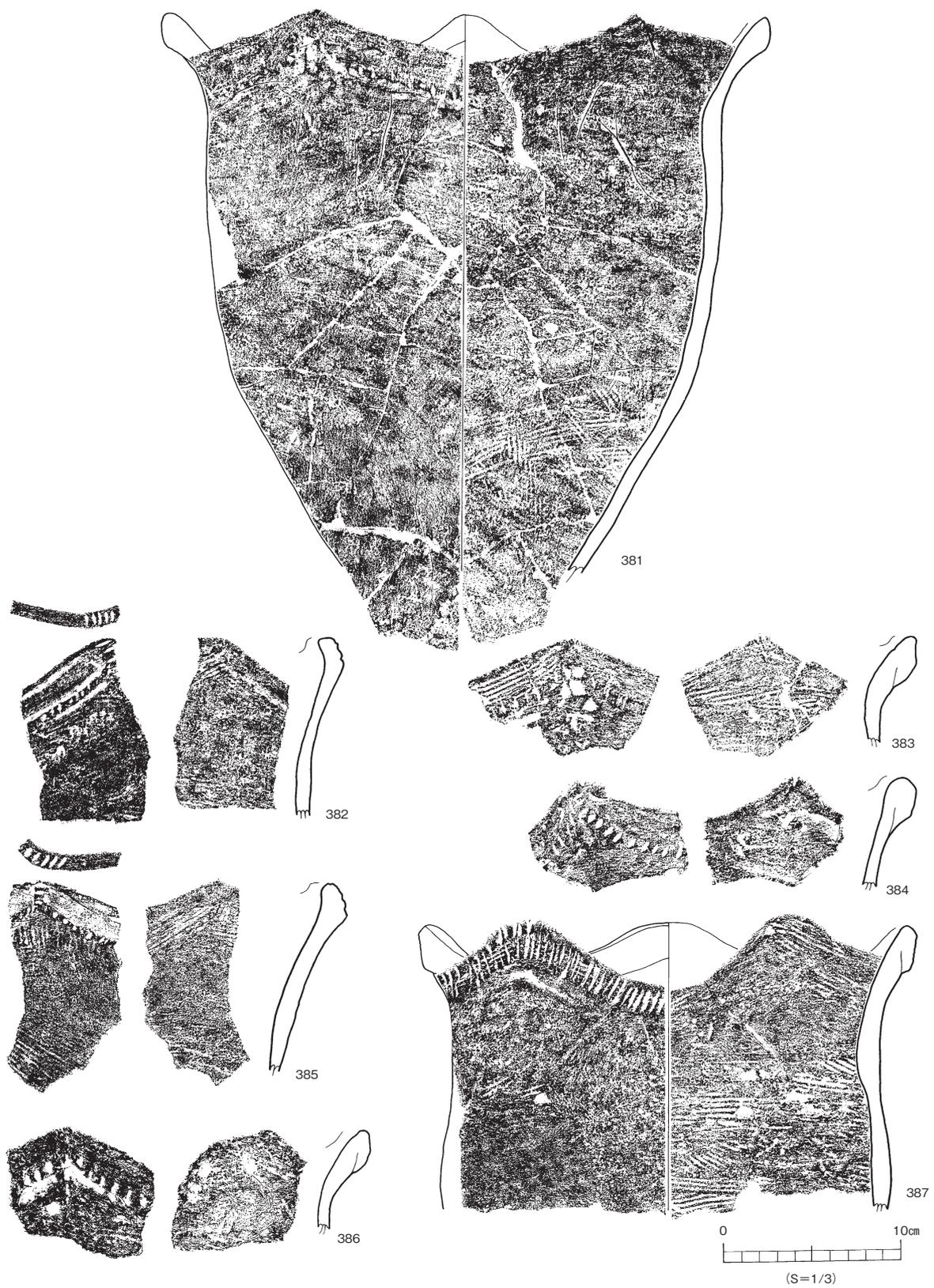
第49図 縄文時代出土土器実測図 (27) Ⅹ a 類



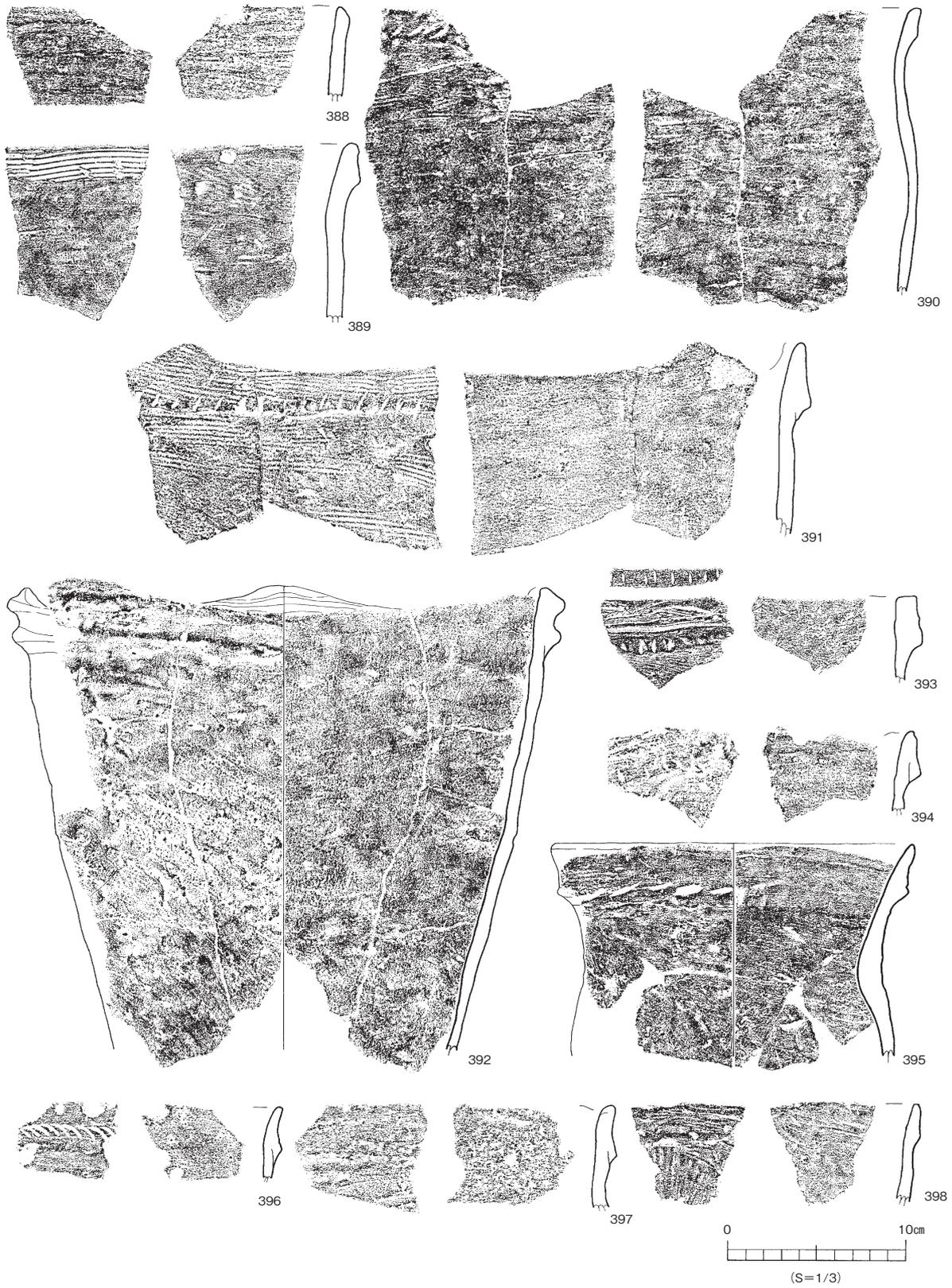
第50図 縄文時代出土土器実測図 (28) Ⅹa類



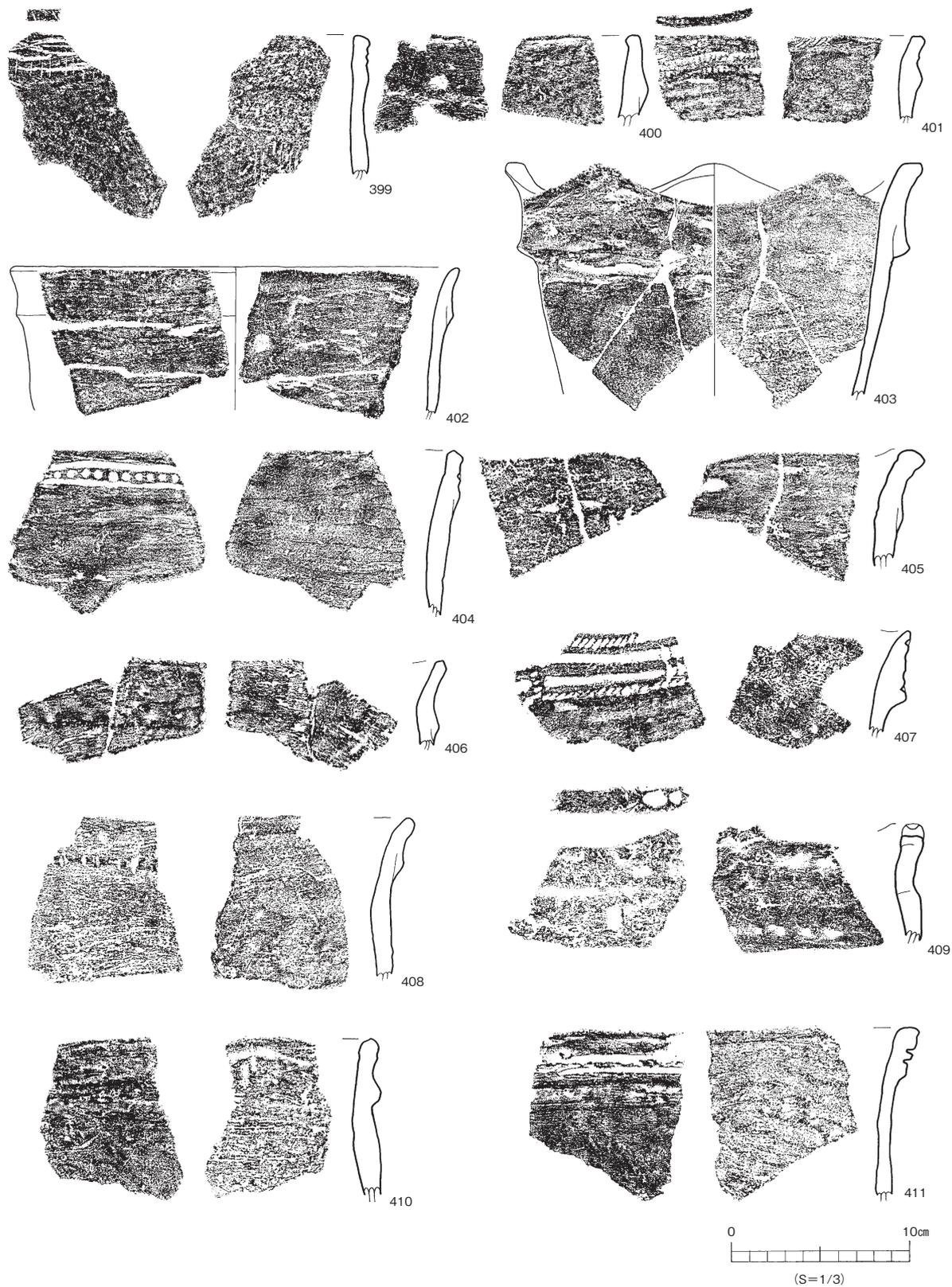
第51図 縄文時代出土土器実測図 (29) IX a類



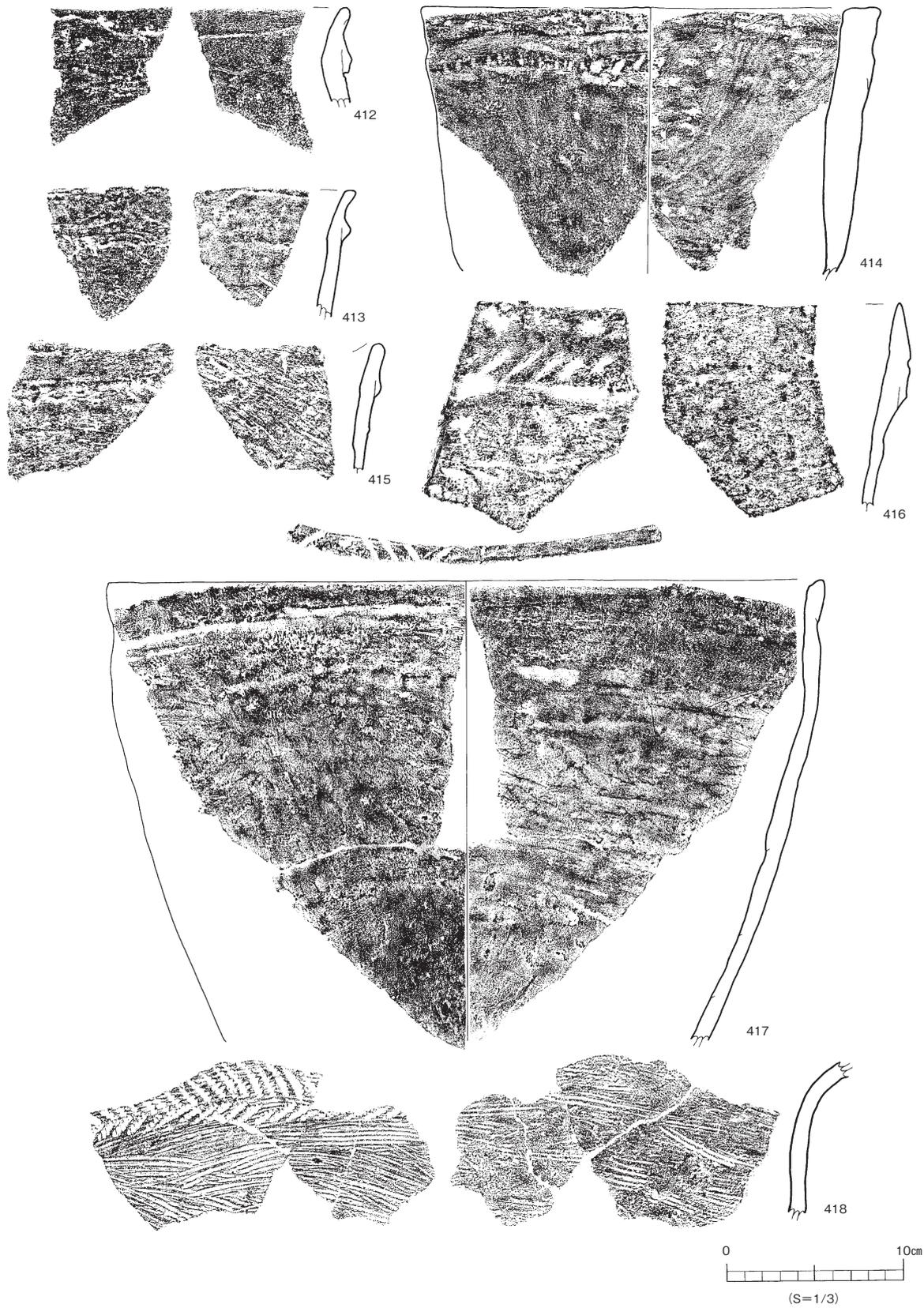
第52図 縄文時代出土土器実測図 (30) Ⅹa類



第53図 縄文時代出土土器実測図 (31) IXab類



第54図 縄文時代出土土器実測図 (32) Ⅹb類



第55図 縄文時代出土土器実測図 (33) Ⅸb類

## ク X類

器面が無文のものを一括した。大型の土器もあるが器形による分類が困難なものが多いため、口唇部に刺突文が施されていないものと、施されているものとに分類した。

### X a類 (第56図419～第59図462)

口唇部に刺突文が施されていないものを一括した。

419～456は、口縁部が肥厚しないものである。419～427は平口縁で、428～431は波状口縁である。口縁が直行、あるいはやや内湾しているものが多い。420は内面の摩耗が激しく、調整が不明である。421は復元口径の最大が口縁部にあり、30cmを測る大型の深鉢である。426は、内面を貝殻条痕による丁寧なナデ調整により仕上げている。428～431は波状口縁である。431は表面をミガキによる器面調整で丁寧に仕上げている。432～447は平口縁で、口縁部が外反している。432は、補修孔が施されている。442は波状口縁で、脚台状の底部を有する小型の鉢形土器である。文様はなく、胴部に対して長い脚を持つのが特徴である。443～446は、内面を貝殻条痕によるナデ調整を施している。448～450は波状口縁で、口縁部は外反している。449は口唇部に文様はないが、粘土塊を付着させてい

る。451～455は、口縁部が内湾しており、貝殻条痕によるナデ調整を両面に施している。456は器壁が薄く、口唇部が肥厚している。胴部はあまり膨らまず、口縁部はやや内湾している。

457～462は、口縁部が肥厚しているものである。457は粘土紐で肥厚帯を形成している。458～462は口縁部自体を肥厚させている。460・461は口唇部を肥厚させているが、文様は施されていない。

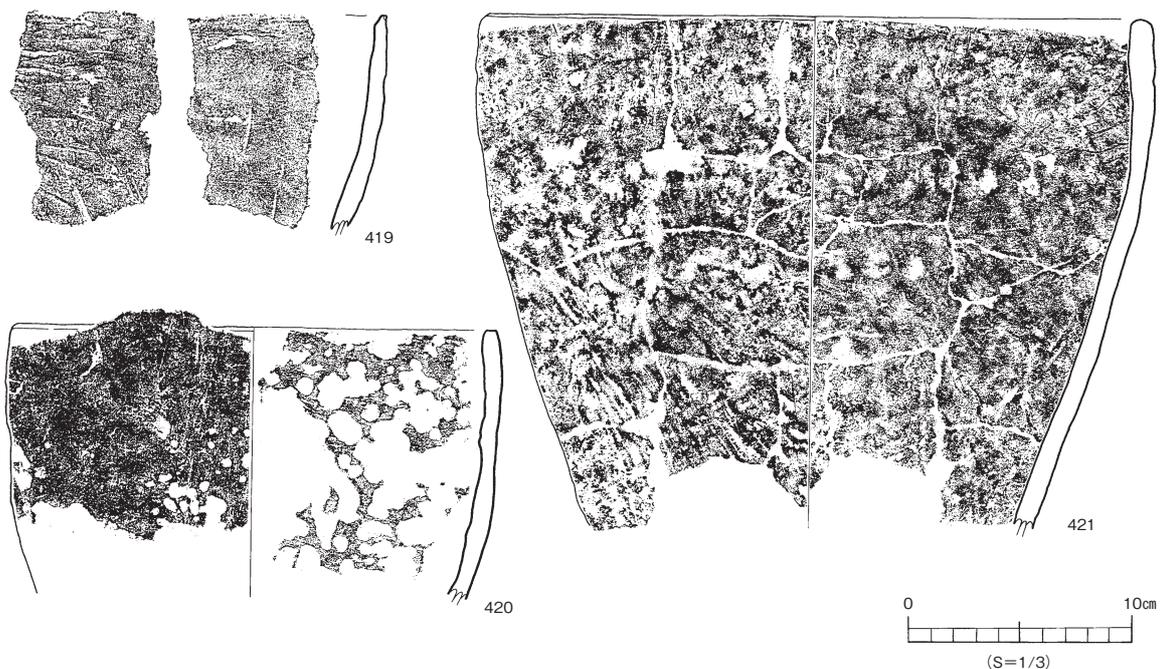
### X b類 (第60図463～476)

口唇部にのみ文様が施されているものを一括した。

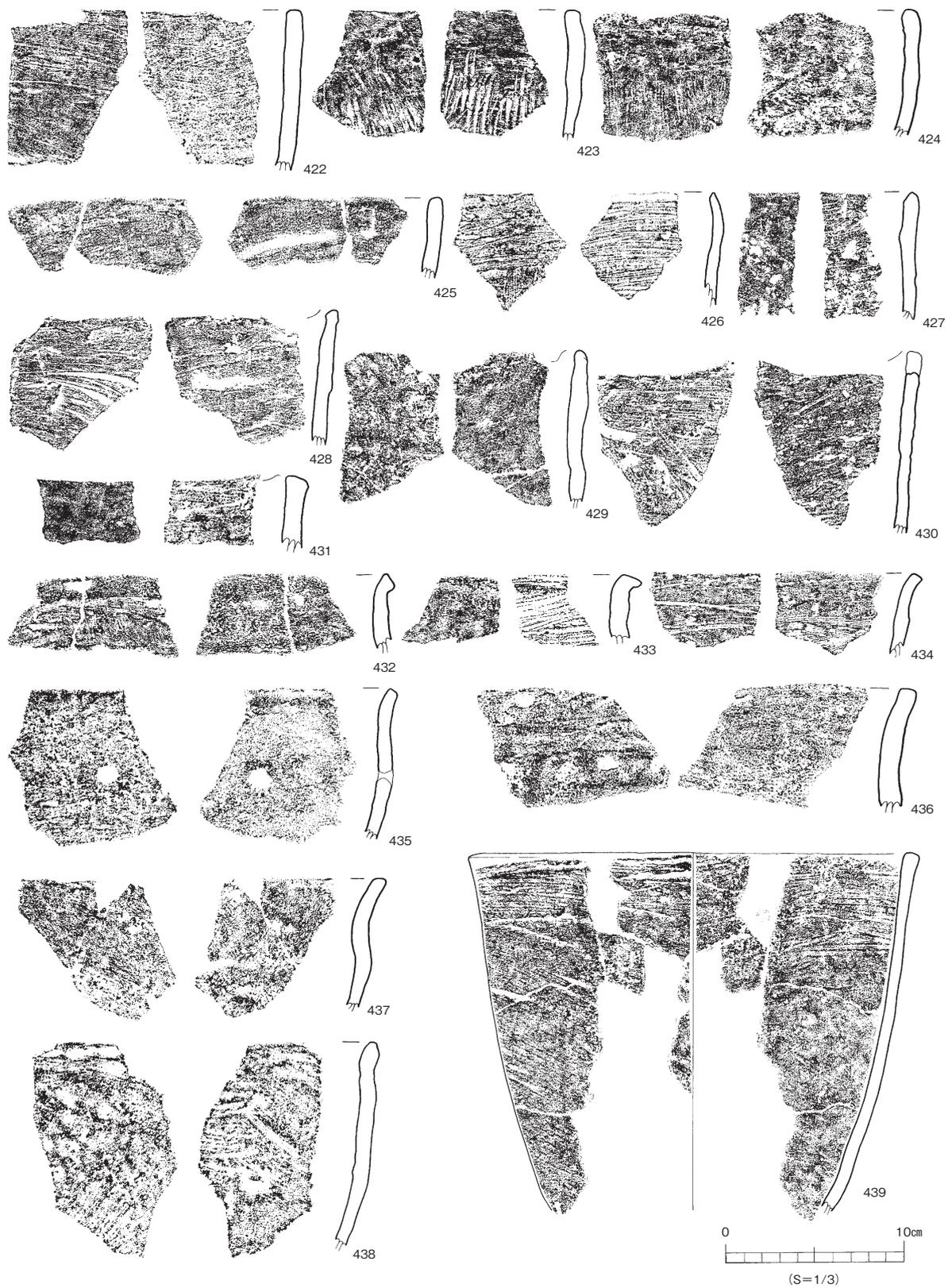
463は浅い刻みを施しているが、施文具は不明である。464～466は、棒状の工具を使って浅い刺突文を施している。467は爪型刺突文を施している。468～471は指圧によって器面調整を施した後、ナデ調整によって丁寧に仕上げている。472～476は、竹管を使って刺突文を施している。476の外表面は指頭圧痕による器面調整を行い、粗い調整のまま仕上げている。

### X c類 (第60図477～479)

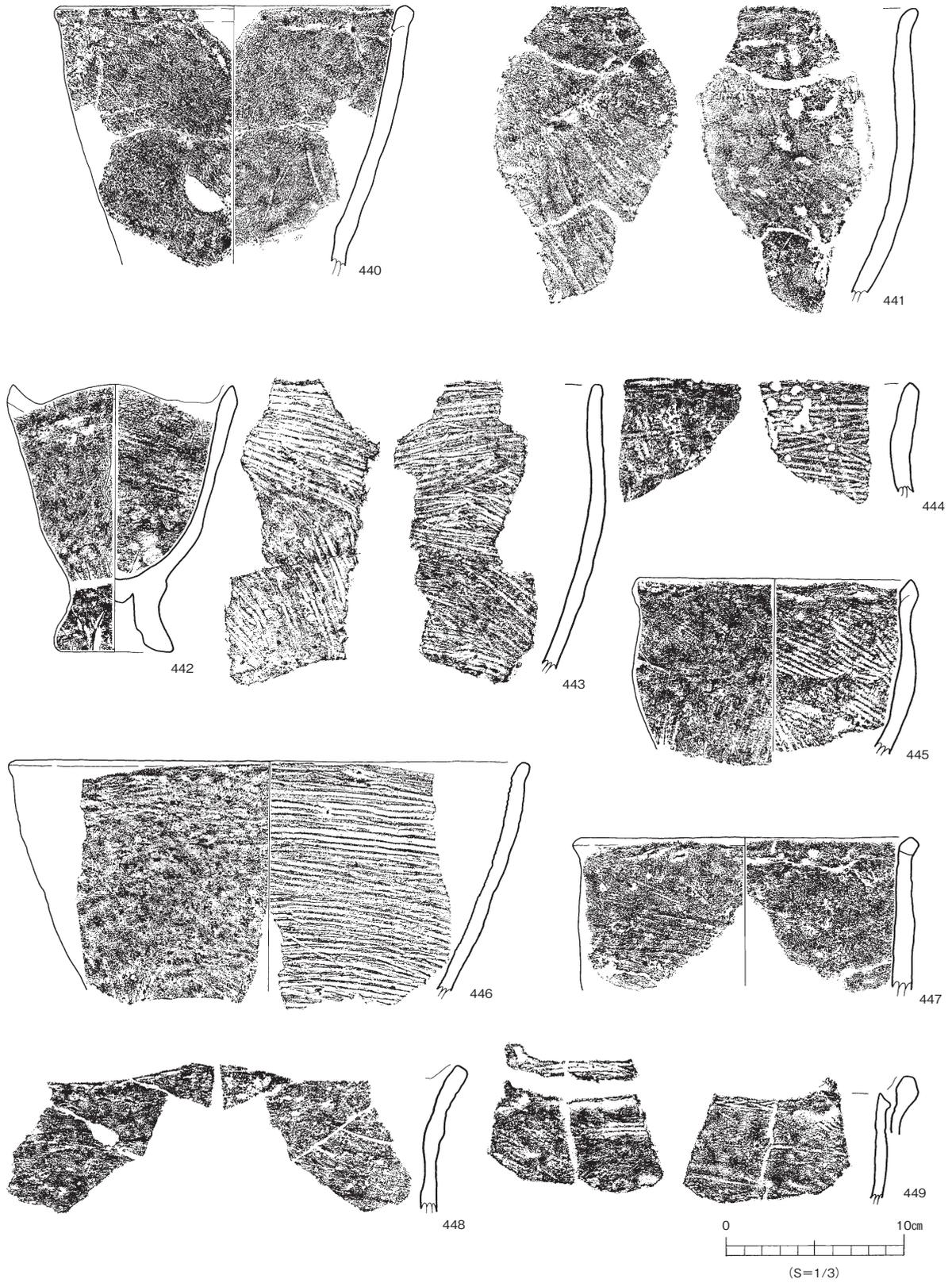
無文土器の胴部片である。477・478は、焼成後の穿孔が見られることから、補修孔であると考えられる。479は滑石粉を多く含むため、表面が滑らかである。



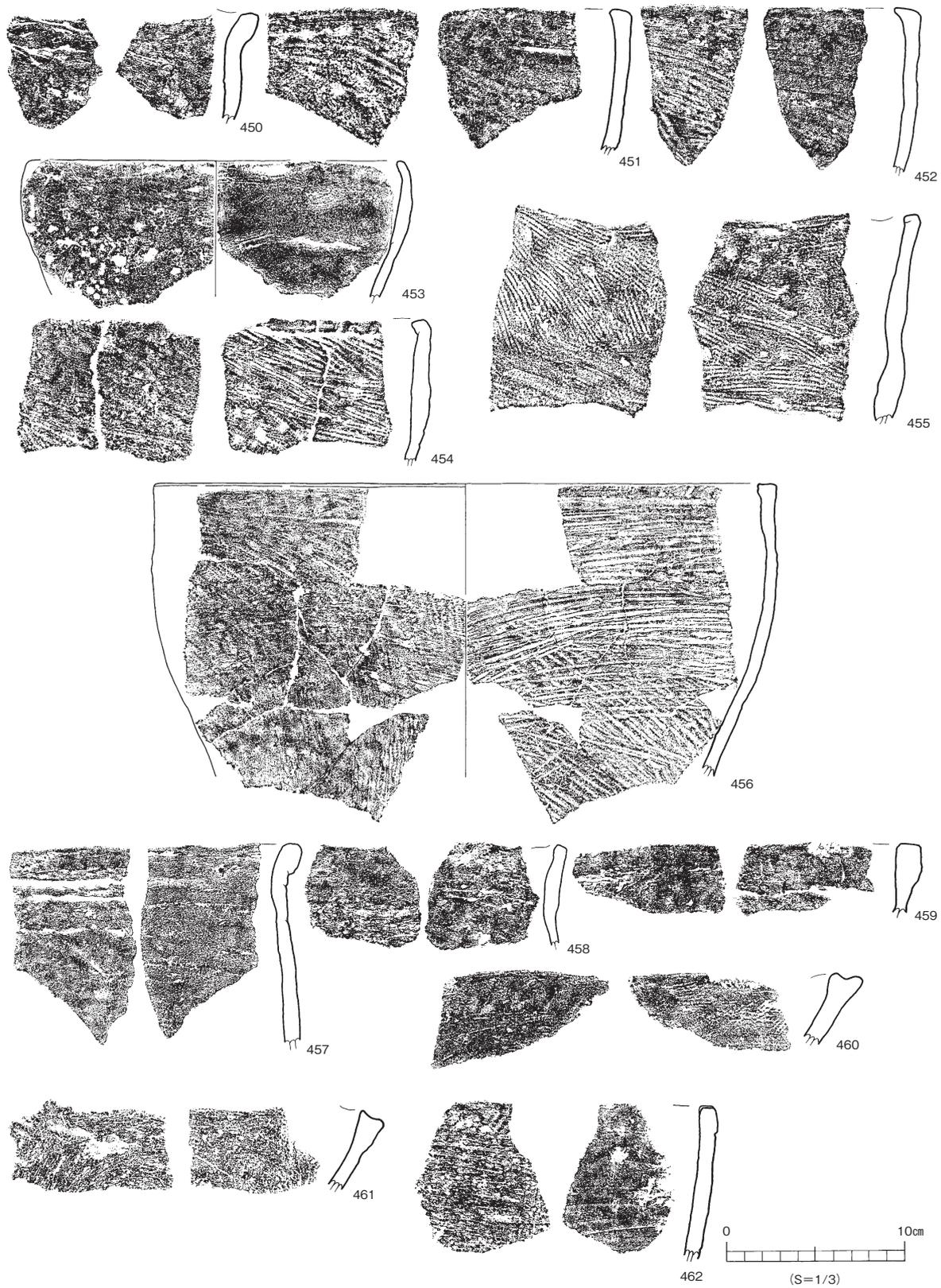
第56図 縄文時代出土土器実測図 (34) X a類



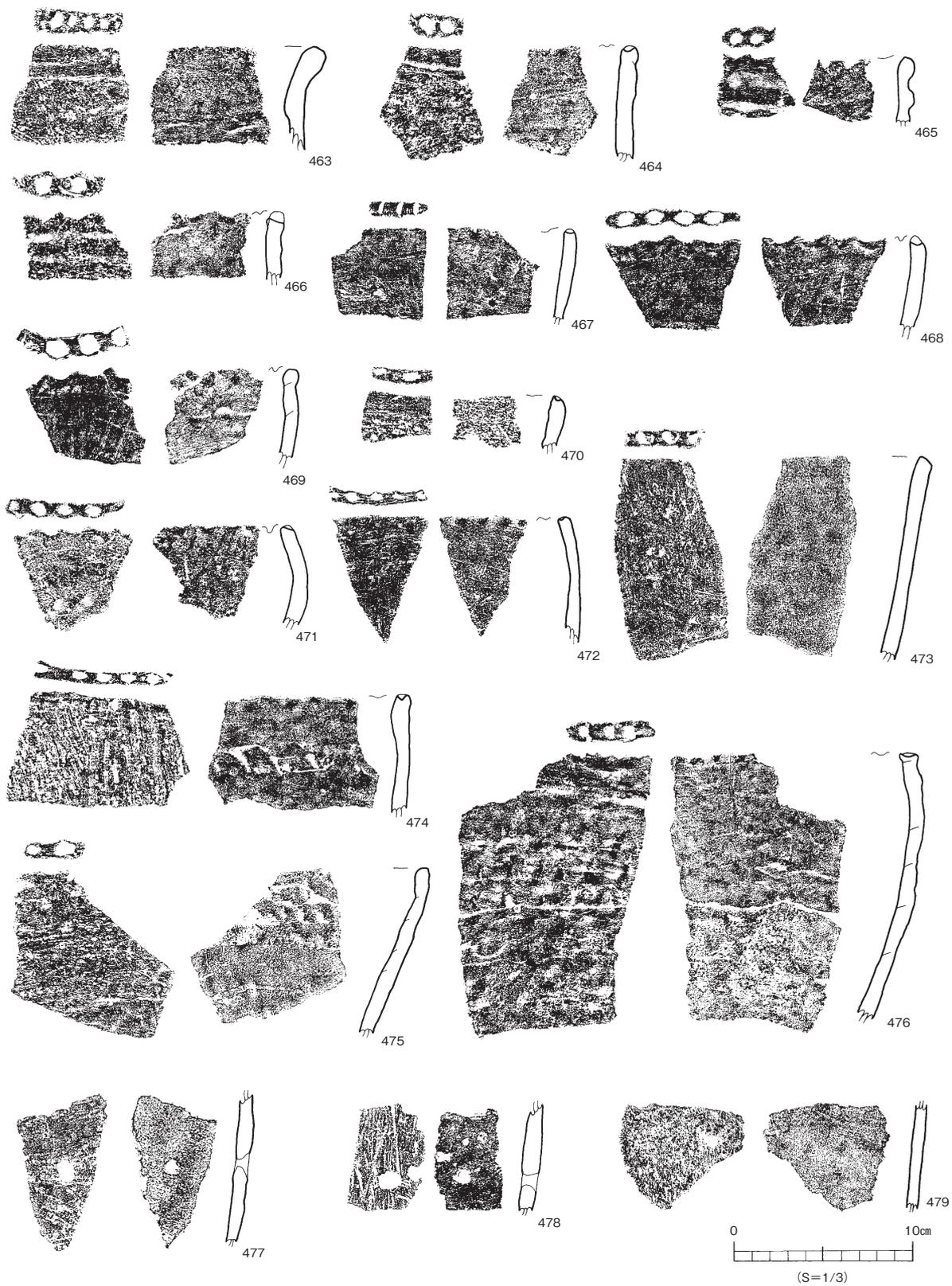
第57図 縄文時代出土土器実測図 (35) X a類



第58図 縄文時代出土土器実測図 (36) X a類



第59図 縄文時代出土土器実測図 (37) X a類



第60図 縄文時代出土土器実測図 (38) Xbc類

ケ XI類

時期が不明である土器を一括した。把手、台付皿と思われるものと型式不明の底部に分類できる。

XI a類 (第61図480~485)

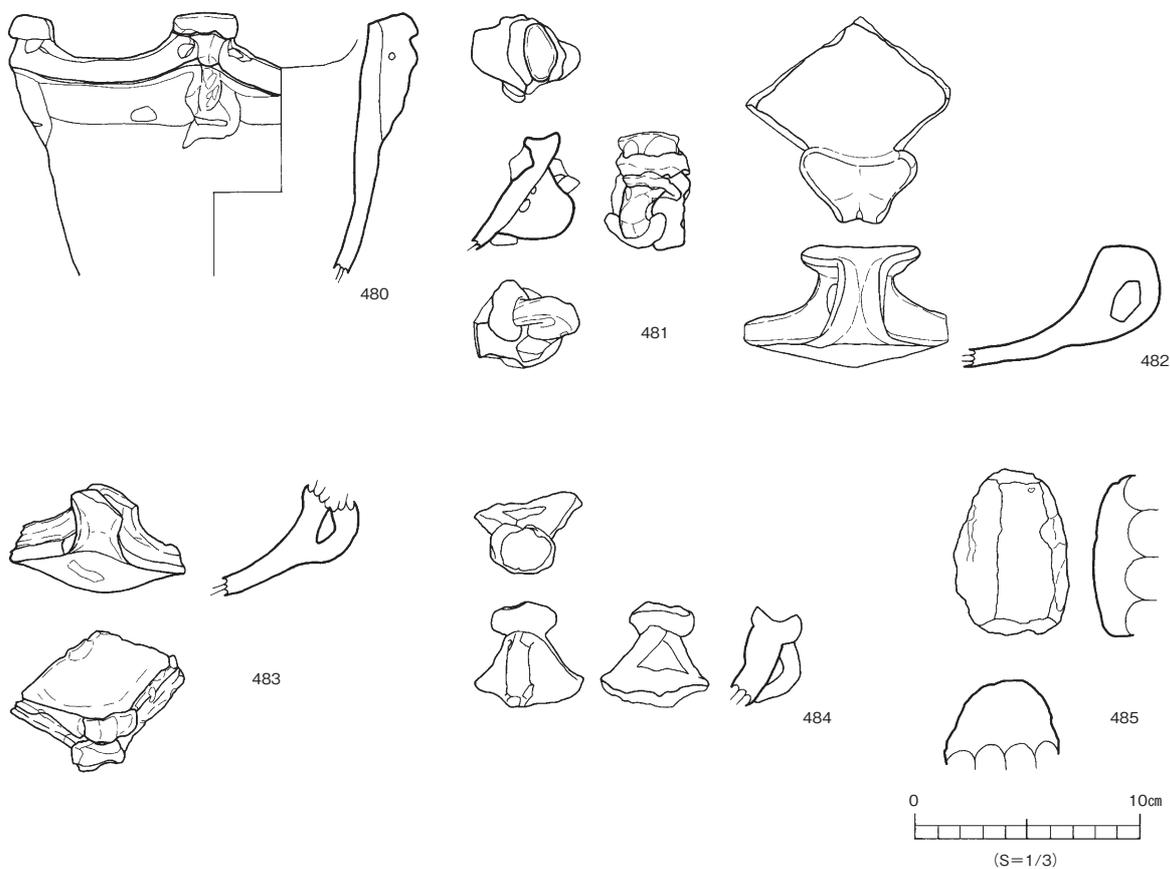
480・481は、型式不明の把手部である。480は波状口縁で橋状把手を備えており、2か所の穿孔と、切り抜きにより人面様を呈している。481は、口唇部に紐状の突帯を十字に貼り付けている。482~485は、台付皿形土器の装飾を施した側縁の一部と考えられる。

XI b類 (第62図486~第64図548)

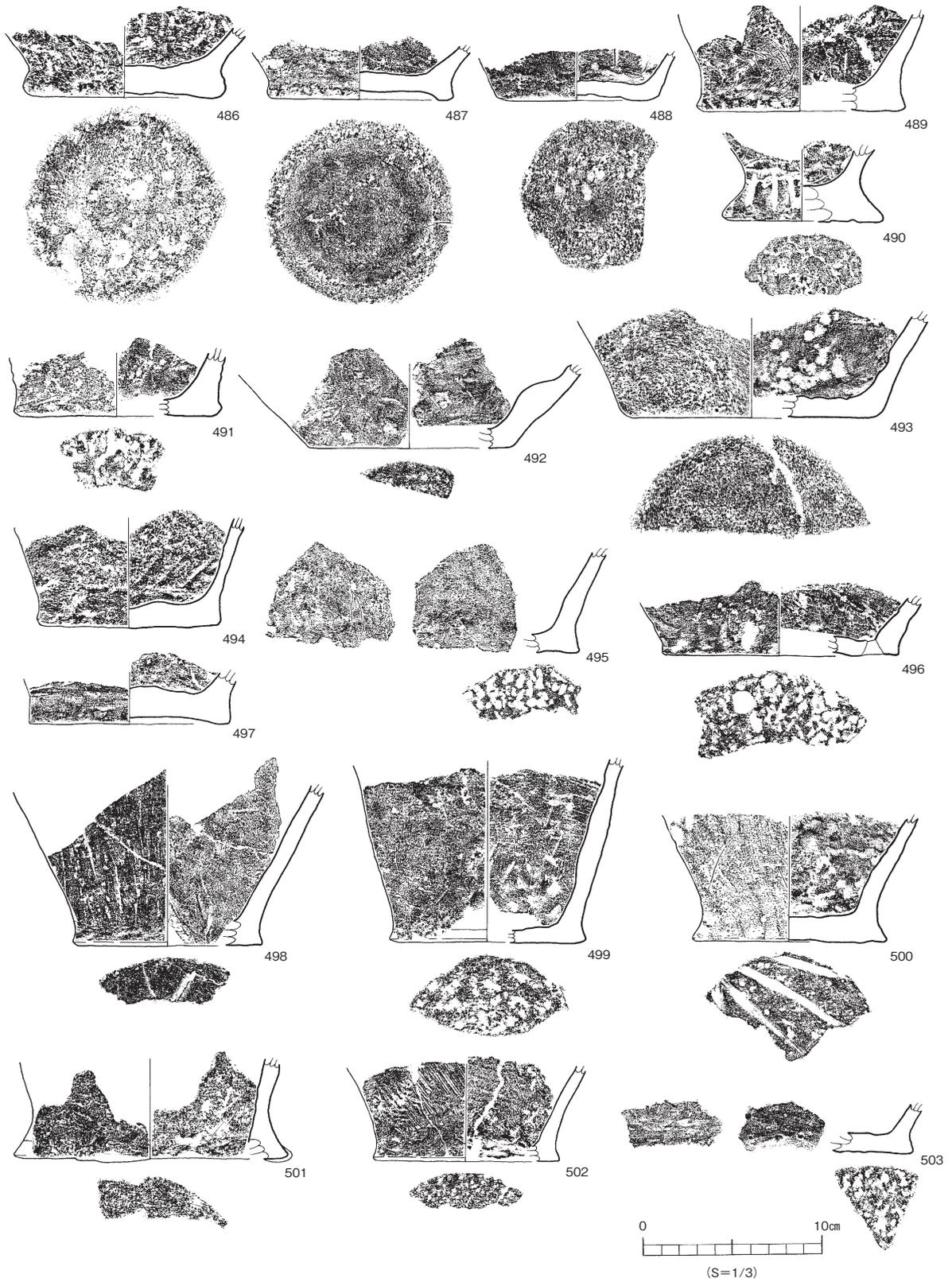
特に類別できない底部を一括して取り上げた。

486~531は平底を呈しており、外底部がやや内湾し、内底部は滑らかに立ち上がっている。

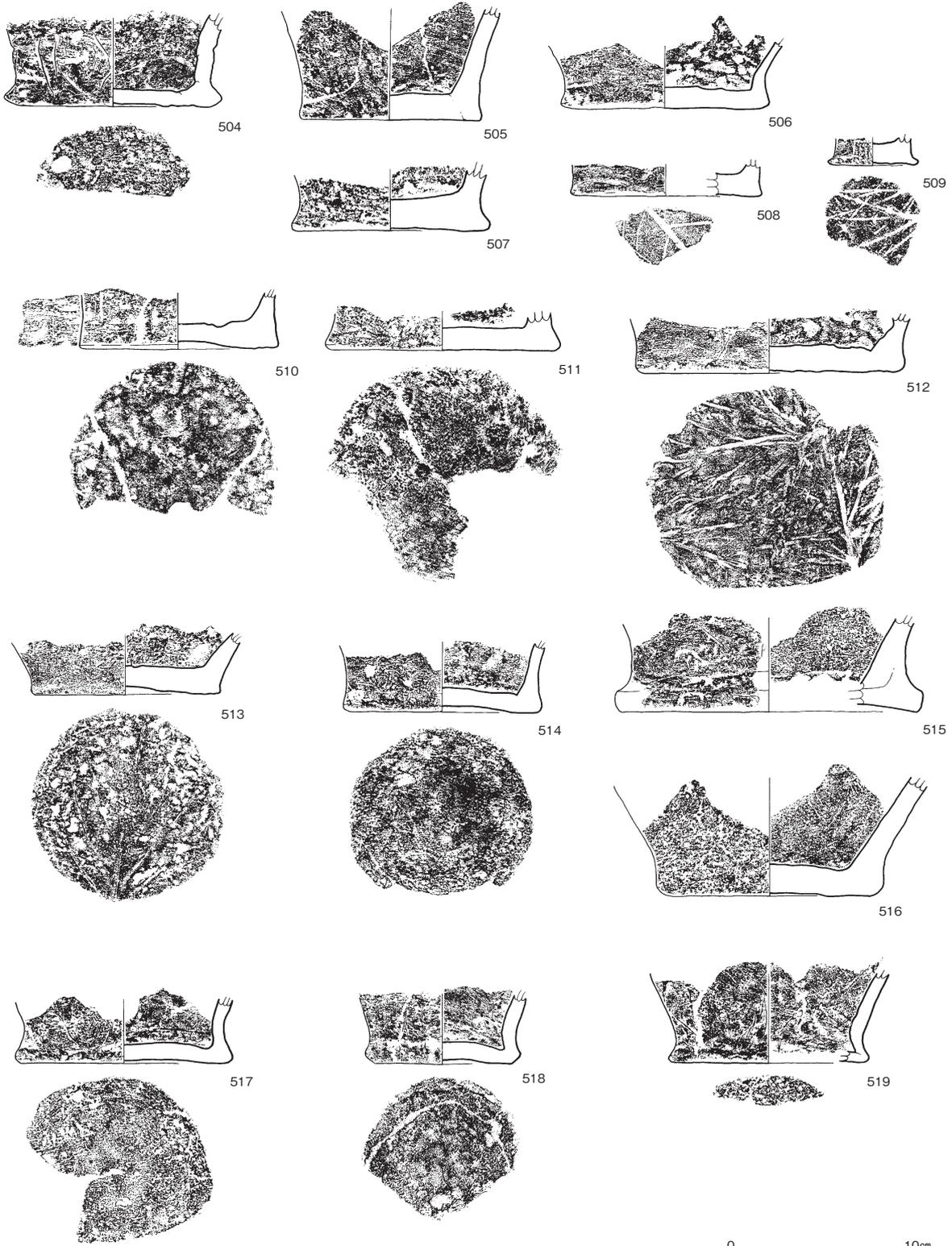
532~548は上げ底である。532は、脚部の底面が渦巻き状を呈している。脚部の高さは1.5cmで、一部欠損している。533は、脚部に二本の沈線文を施している。537は、沈線文を縦位に施している。



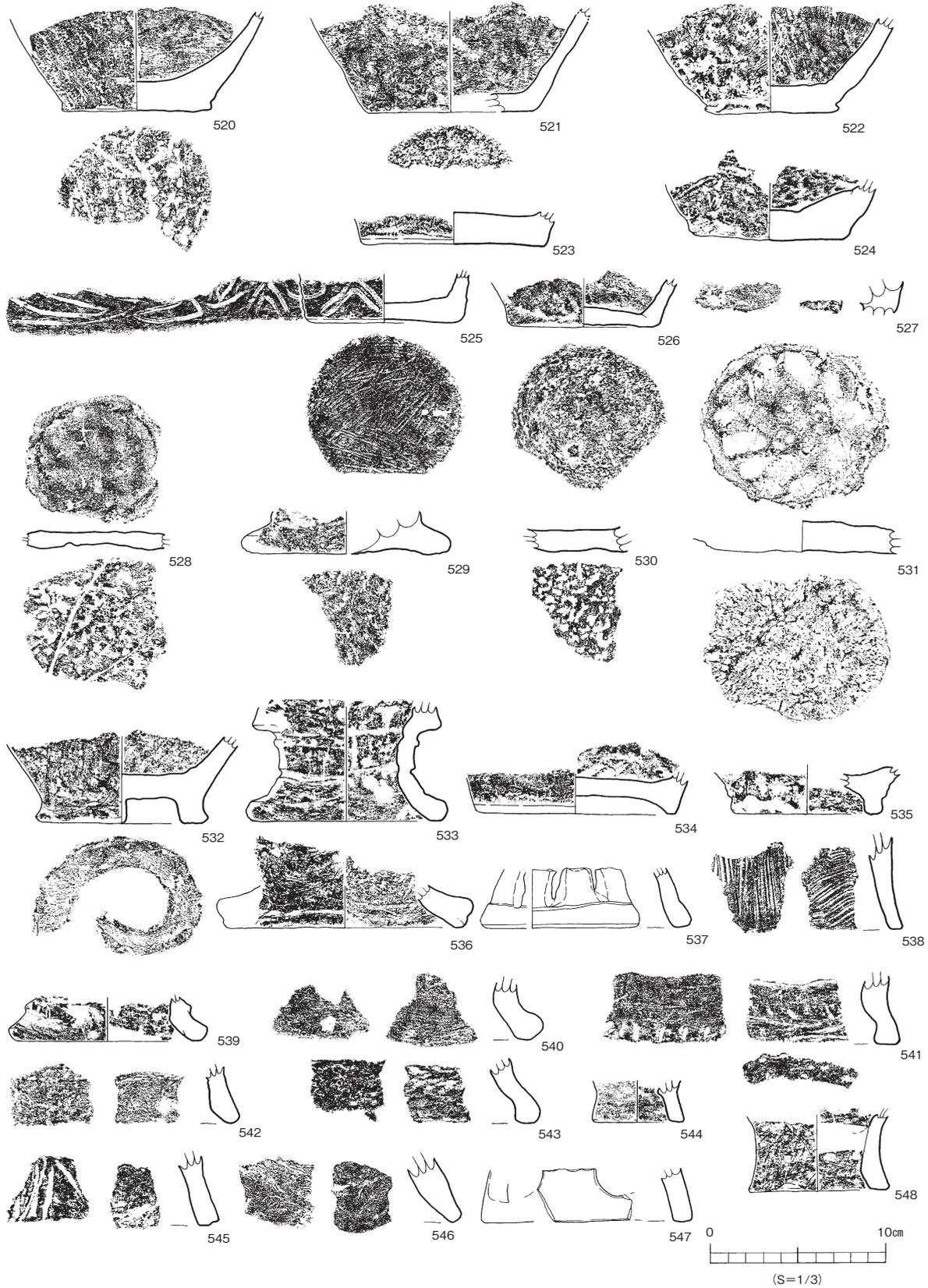
第61図 縄文時代出土土器実測図 (39) XI a類



第62図 縄文時代出土土器実測図 (40) XI b類



第63図 縄文時代出土土器実測図 (41) XI b類



第64図 縄文時代出土土器実測図 (42) XI b類

### (3) 縄文時代晩期出土土器

晩期出土土器は、72点を抽出し、図化した。先述の通り「粗製土器」「精製土器」「半粗半精製土器」の3つに分類し、器形と照合した結果、大まかに粗製土器には深鉢形土器、精製土器と半粗半精製土器には浅鉢形土器と分類された。

#### ア 粗製土器 (Ⅺ a 類)

器面内外共に、貝殻条痕やナデなどの調整を施すものを一括して粗製土器として位置づけた。小片が多いため、器形による分類よりも口縁部の施文による分類を優先した。

##### a 1 類 (第65図549～553)

口縁部に沈線を横位に数条施した深鉢形土器である。5点を図化した。

549は胴部が屈曲するところまで沈線が施されている。口縁部の端が直立し、外側にやや広がっている。胴部の形態は不明である。550～553は、口縁部のみである。553は、やや太めの沈線が施され、施文内に細かい筋が入る。

##### a 2 類 (第65図554～556)

深鉢形土器で、口縁部に文様を施していないものである。3点を図化した。

554は口縁部がやや長く直立している。胴部は緩やかに内向しており、口縁部と胴部の最大径がほぼ同じである。復元口径の最大は口唇部にあり、41cmを測る大型の深鉢である。555と556は、口縁部が長く、外側に広がっている。胴部の張り出しは、やや緩く内湾している。共に復元口径の最大は口唇部にあり、それぞれ25cmと23cmである。

##### a 3 類 (第66図557～568)

深鉢形土器の施文がない口縁部片のものを一括し、12点を図化した。

557～559は、口縁部が直立し、やや肥厚している。560は口縁部がやや内向している。585は口縁部が外向している。576～577は、口縁部が内向し、口縁部下をナデ調整を施すことで肥厚させている。

##### a 4 類 (第66図569～第68図587)

深鉢形土器の特徴を持つものの、細分が不可能である胴部や底部を一括して取り扱った。

569～578は、胴部片のみを一括し、9点を図化した。569は、胴部の張り出す角度が強く、口縁部は直立している。570～574は、胴部の張り出す角度が569と比較してやや弱くなっている。575・576は、さらに胴部の張り出す角度が弱く、やや丸みを帯びている。577は頸部から胴部上部にかけて内湾している。胴部の張り出す角度は不明である。578は、胴部の一部であるが、形状は不明である。

579～587は、底部のみを一括し、9点を図化した。

全て平底であるが、底部の端が張り出しを持たないものや、張り出しを持つものがある。579～581は平底で、底部の端に張り出しを持たない。582～585は平底で、底部の端にやや張り出しを持つ。586は底部から胴部まで直線的に立ち上がり、平底で底部の端にやや張り出しを持つものである。587は、平底で底部の端が大きく張り出している。

#### イ 精製土器 (Ⅺ b 類)

器面内外共に、ミガキ調整を施すものを一括して精製土器として位置づけた。器形が不明な口縁部は口縁部の長さを基準に、胴部は径の長さを基準に細分することにした。

##### b 1 類 (第69図588～591)

長い口縁部を持つ浅鉢である。4点を図化した。

588は、口縁部が直立に外向しており、胴部が僅かに屈曲する。また、最大径は口唇部である。590は胴部のみであるが、胴部の僅かな屈曲がほぼ同じであることから、588と同形になると思われる。589、591は口縁部のみであるが、589と同じく長い口縁部を持つことから同類の範疇とした。

##### b 2 類 (第69図592～606)

口縁部が直行もしくは外向し、長さはb 1 類と比較して短い浅鉢である。19点を図化した。

592・593は、胴部が逆くの字に屈曲している。胴部よりも口唇部の方が径が長い。594～603は、口縁部の長さが592・593とほぼ同じである。また、598～602は口唇部に玉縁を持つ。

##### b 3 類 (第69図607～第70図610)

口縁部が短く、口唇部より胴部の方が径が大きいものを一括した。

607は、口縁部に沈線を横位に施す。口縁部の器壁が薄く、長さは短い。608・609は玉縁を持つ。609・610は胴部が内湾している。

##### b 4 類 (第70図611～619)

器高が浅く、胴部に屈曲部を持たず椀状に口縁部に立ち上がる浅鉢である。9点を図化した。

611は丸底状を呈し、口縁部の器壁が薄い。615は口縁部にやや太めの沈線を施す。616は玉縁を持ち、口縁部に横位の沈線を施す。618は、口唇部が外向している。

#### ウ 半粗半精製土器

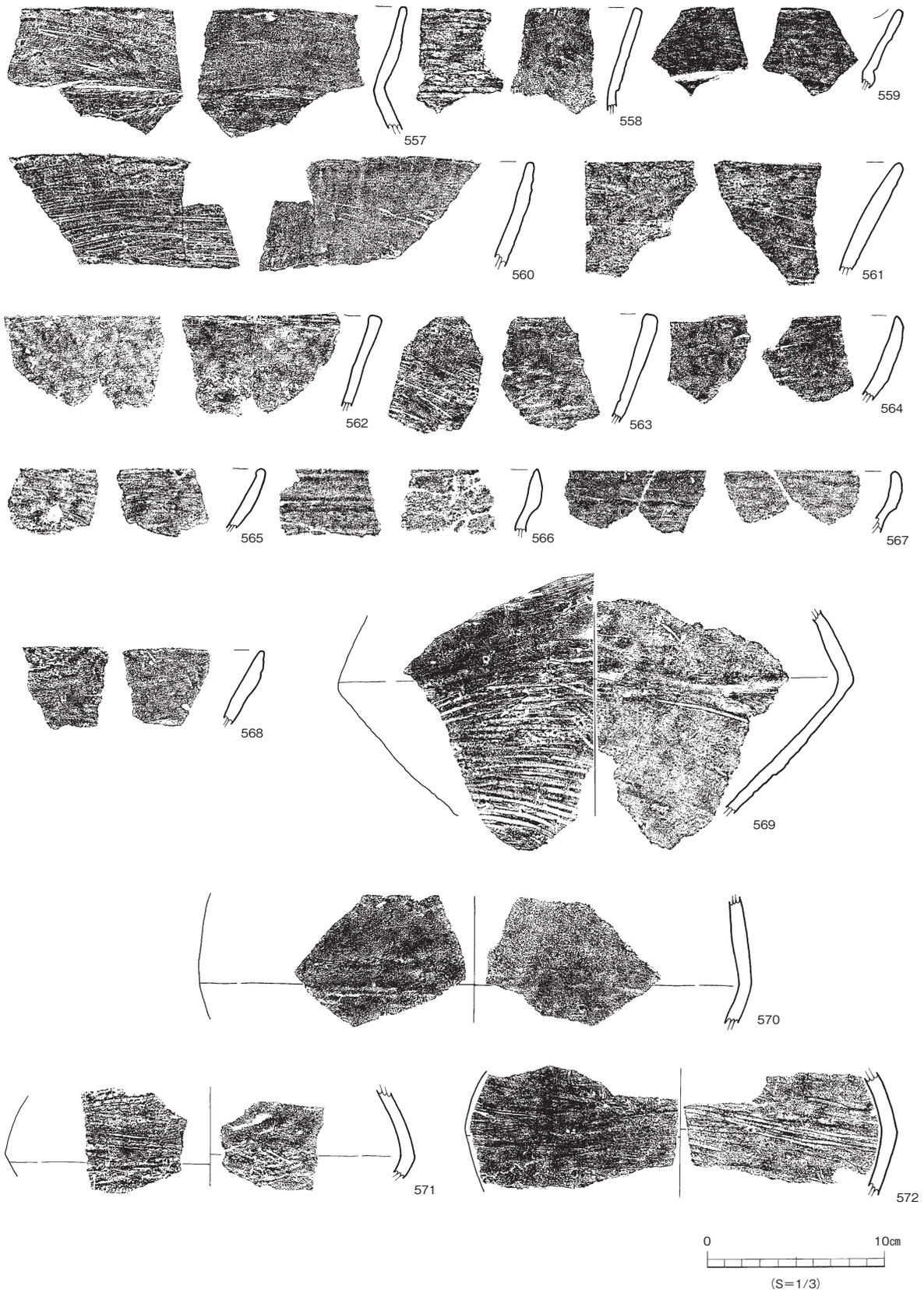
##### Ⅺ c 類 (第70図620)

器内面にミガキを施し、外面は条痕やナデなどが施されているものを半粗半精製土器として位置づけた。

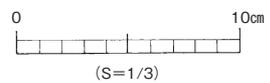
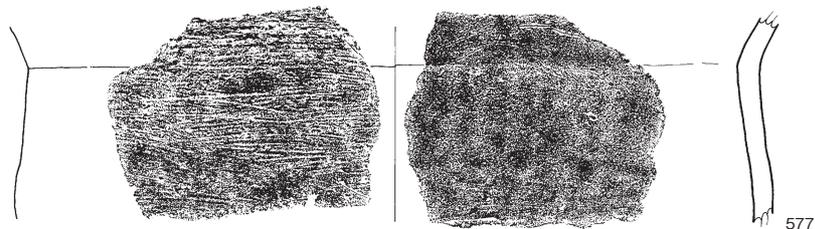
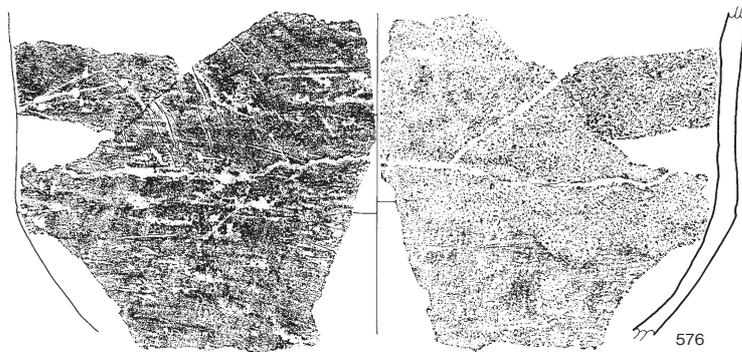
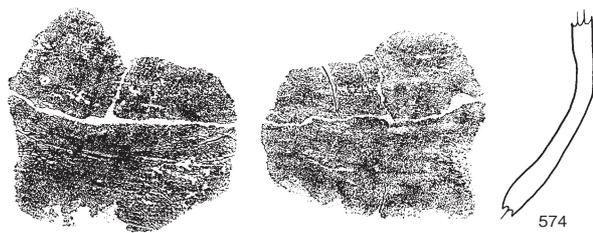
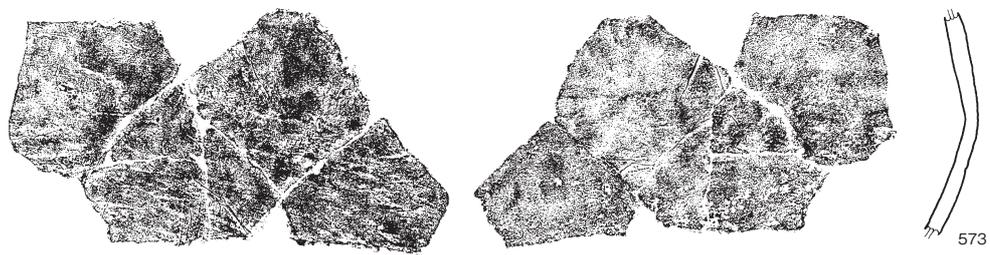
620の一点のみが確認された。胴部が屈曲を持たず、椀状に口縁部が立ち上がる浅鉢形である。



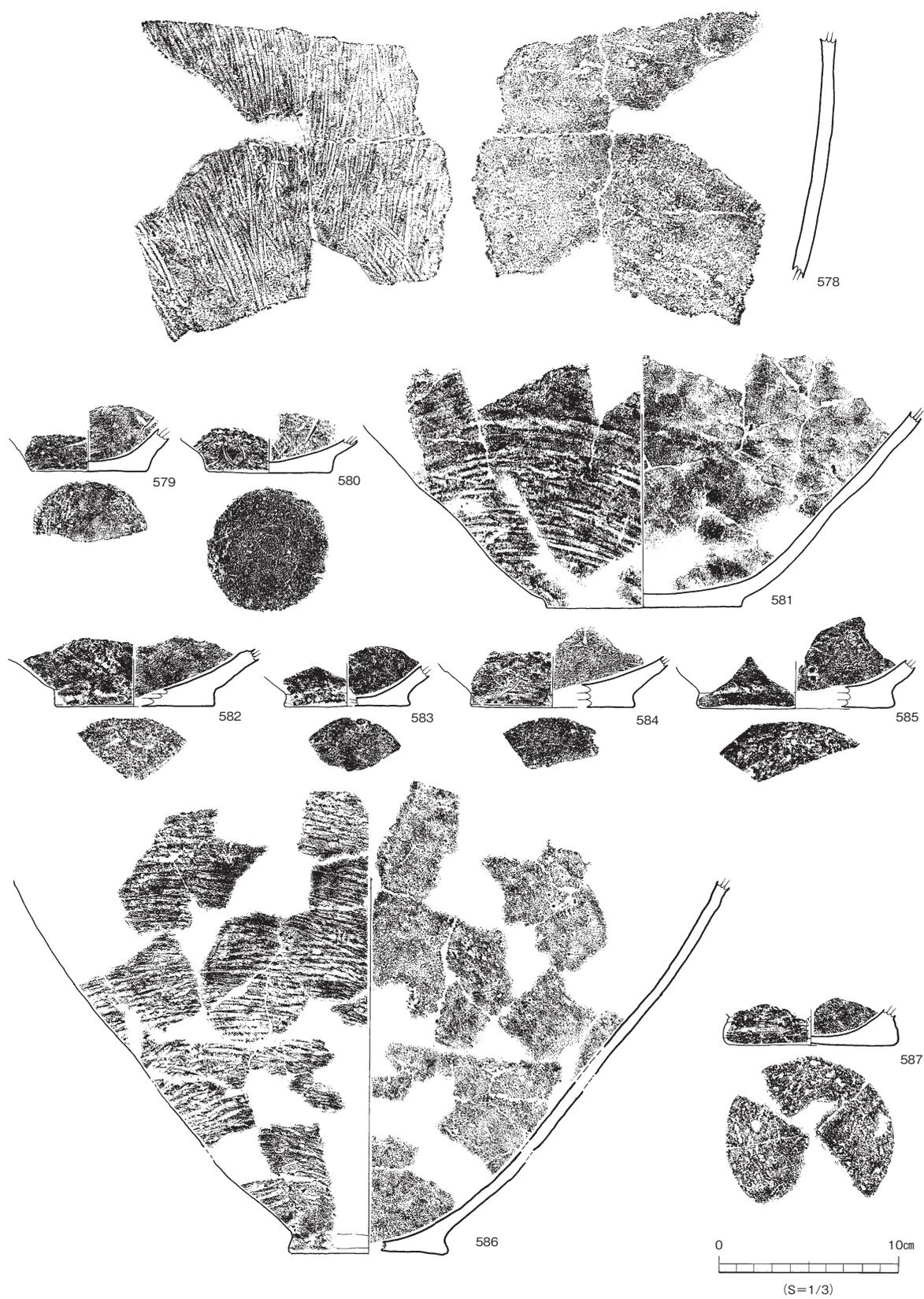
第65図 縄文時代出土土器実測図 (43) XII a類



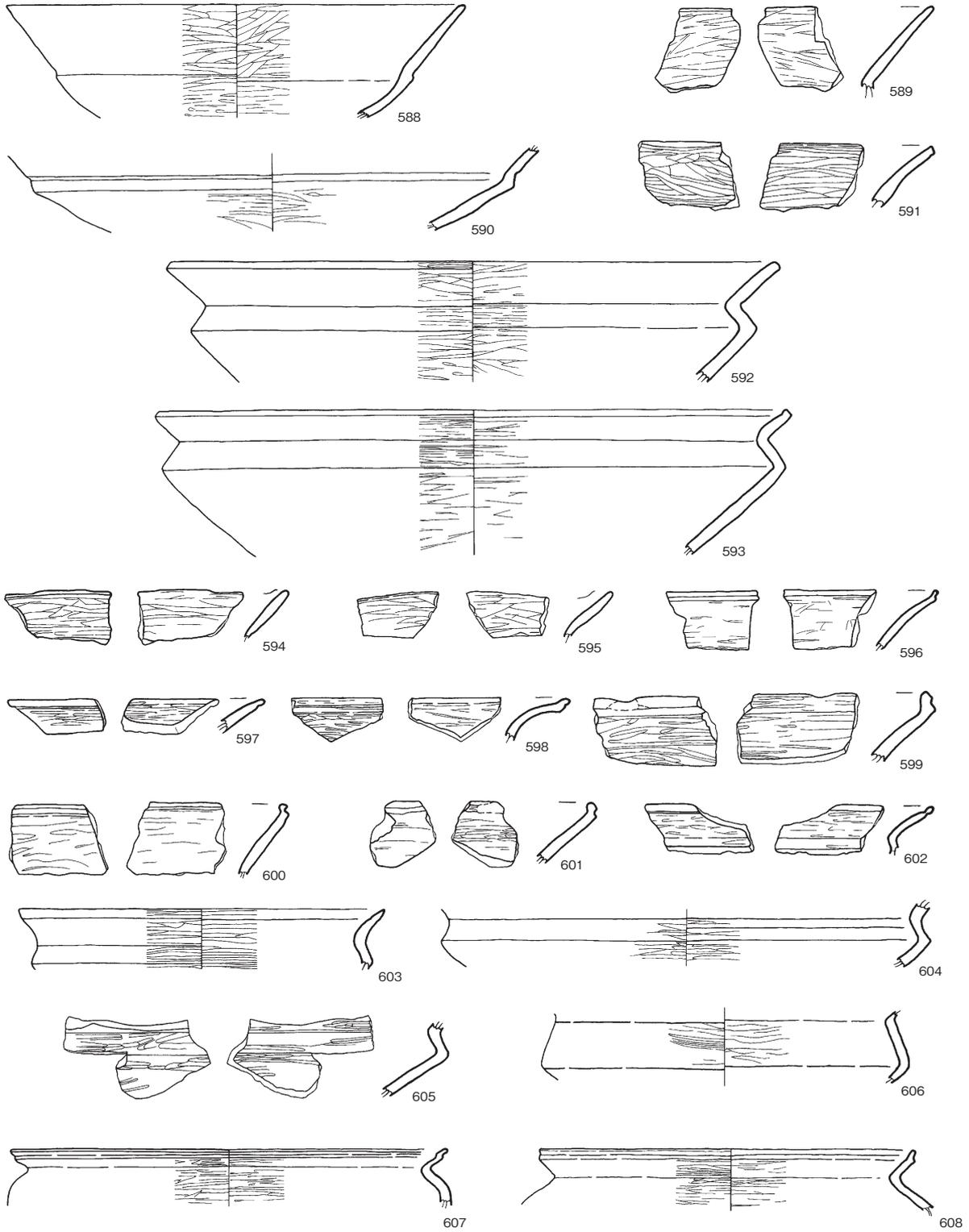
第66図 縄文時代出土土器実測図 (44) XII a 類



第67図 縄文時代出土土器実測図 (45) XII a類

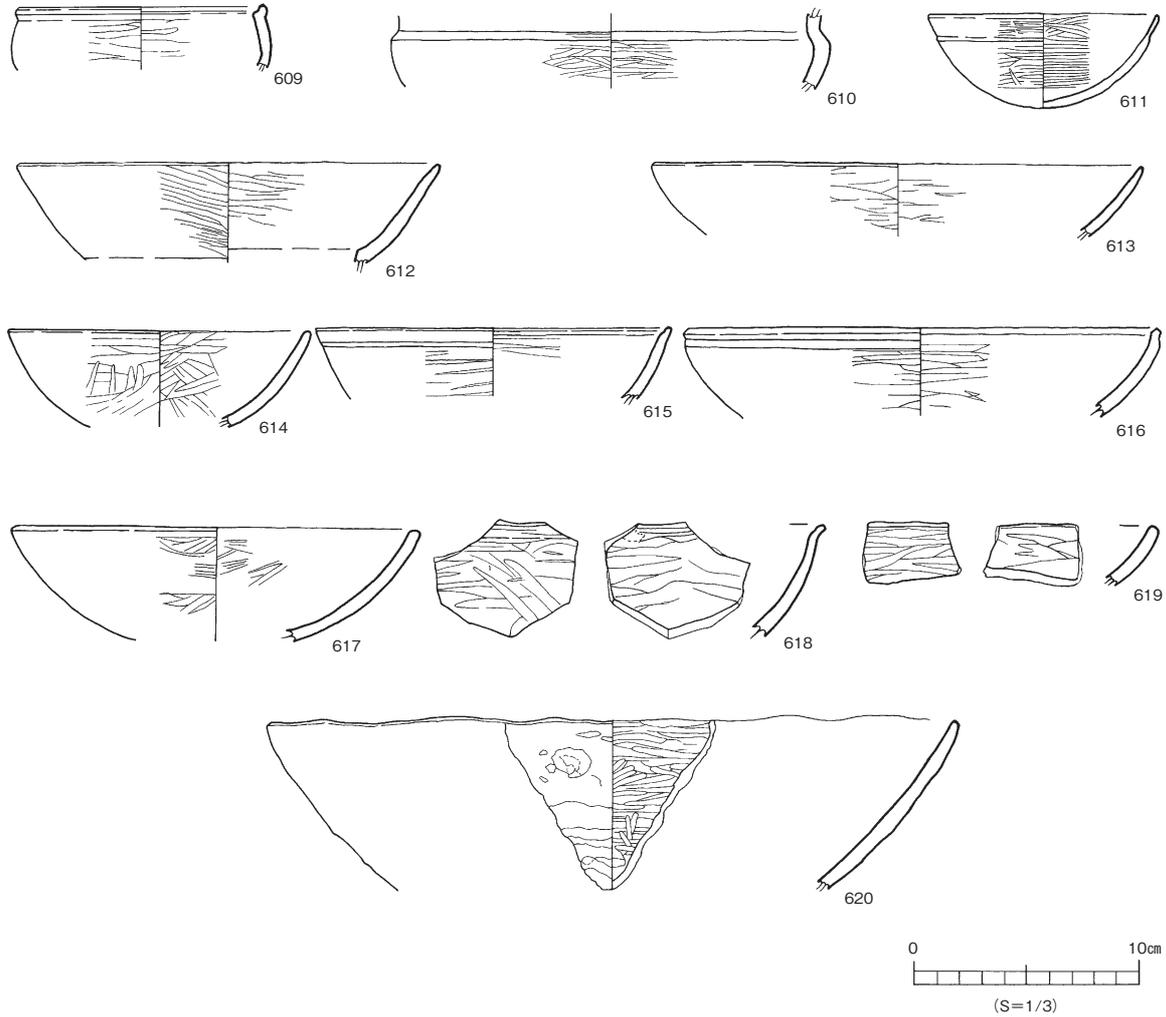


第68図 縄文時代出土土器実測図 (46) XII a類



0 10cm  
(S=1/3)

第69図 縄文時代出土土器実測図 (47) XII b類



第70図 縄文時代出土土器実測図 (48) XII b・c類

## 2 土製品

全国的にも類例を見ない足形土製品と時期及び用途が不明の土製品を一括した。

### (1) 足形土製品 (第71図621)

621は、足形を模型とした土製品である。本遺跡からは製品の足首にあたる部分がX-5区から出土した。その下の足部は隣接する芝原遺跡のW-36区から出土した。

接合時の高さは7.5cmを測る。足首部の高さは5.6cm、上部の長径は6.2cm、短径3.9cmを測る。下部の接合面は長径6.5cm短径3.3cmを測る。一方の側縁部には凹線を斜位に施しているが、他方の側縁部には凹線は施していない。側縁部に施文された凹線は、接合する足部と繋がっている。足部は、最大長径10.5cmで、指

先の部分の幅が6.4cm、厚さは2.1cmを測る。深い刻みを施すことによって、指先部を表現している。刻みは4カ所あり、これによって5本の指を表現している。右足と仮定した場合、親指にあたる部位は欠損している。また人差し指と中指の間は1.6cmも間隔があり、意図的に拡げていることが分かる。

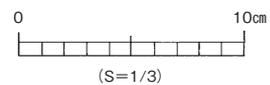
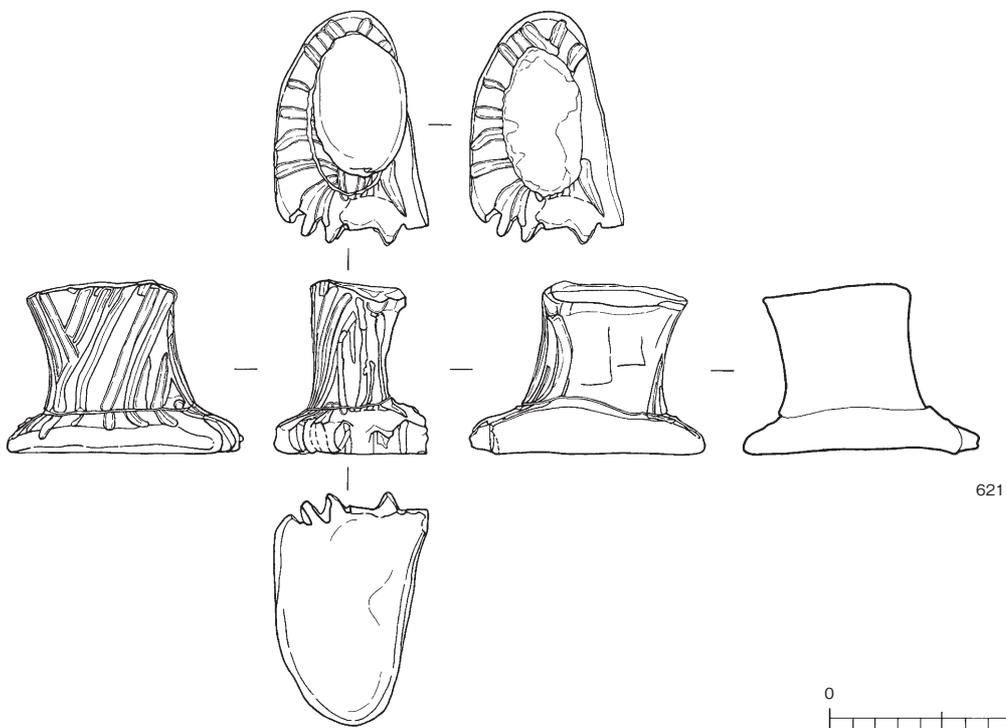
### (2) 円盤形土製品 (第72図622~644)

型式不明の底部を二次利用した円盤形土製品を一括した。メンコと称することにする。いずれも用途については不明で、今後検討する必要がある。

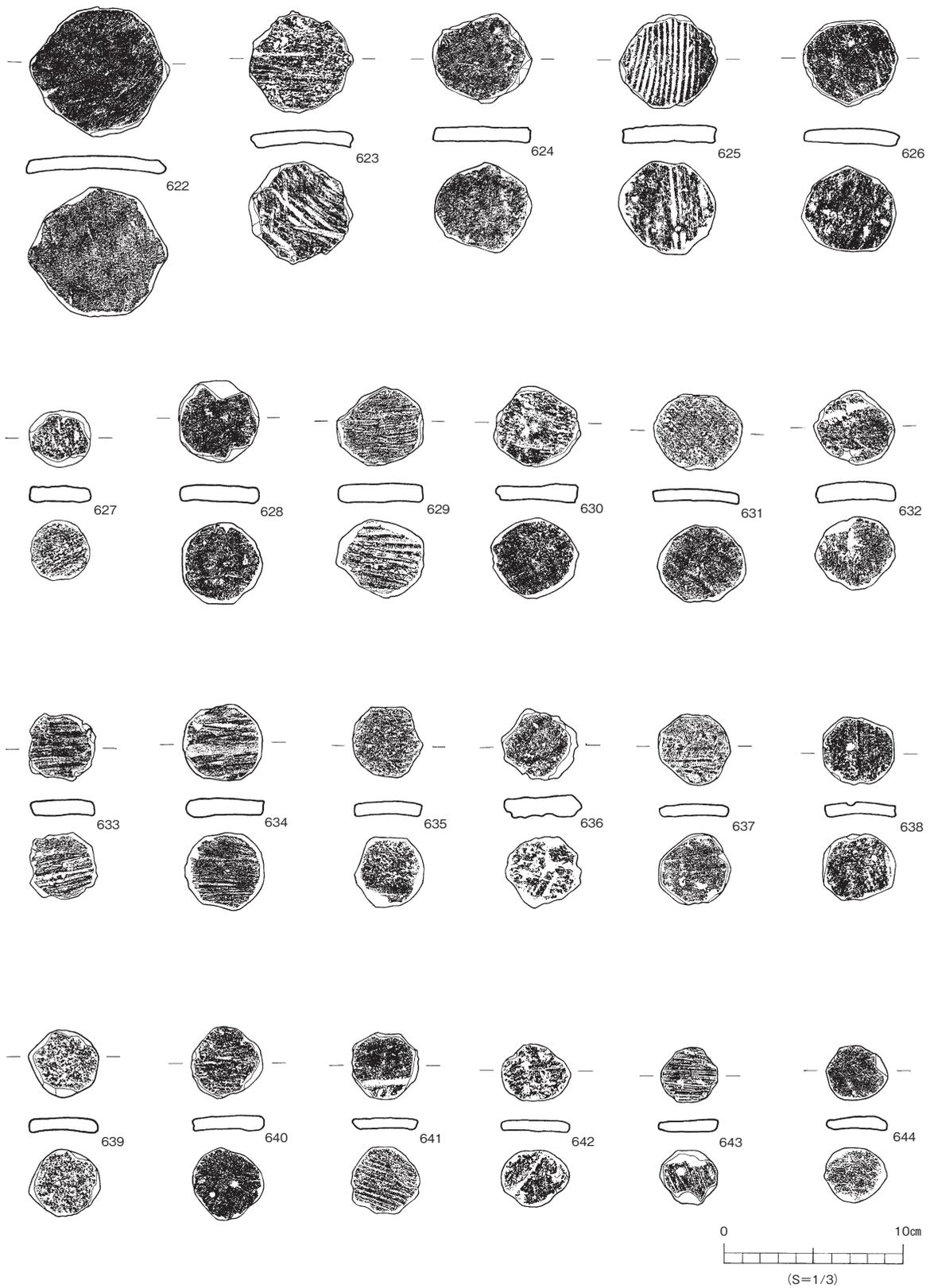
622は、径が8cmの大きめのメンコである。625は貝殻条痕による調整が明瞭に残っている。633~644は、径が3cmの小さめのメンコである。



写真17 足形土製品



第71図 縄文時代出土土製品実測図 (1)



第72図 縄文時代出土土製品実測図(2)

### 3 石器

X～XI層から出土した石器は、総数381点であり、その内、器種が明瞭であるものを49点抽出し掲載した。出土した石器類については、剥片石器と礫石器の2つに分類した。出土状況は、第72図の通りである。

器種の概要に関しては、第3章を参照されたい。

#### (1) 剥片石器

##### ア 石鏃 (第74図645～650)

石鏃は、製品として認められるもの6点を抽出した。形状により、二等辺三角形、正三角形、五角形の3つに分類できる。

645～648は、二等辺三角形形状を呈したものである。

645は両側縁を鋸歯状に仕上げている。基部の挟りを比較的浅い凹みで整形している。素材は、横長剥片と考えられる。石材は安山岩である。646は、645よりも基部の挟りを比較的深い凹みで仕上げ、両側縁を浅い鋸歯状に整形している。石材は、安山岩(サヌカイト)を使用している。647は、比較的大型のもので、両側縁の中央部がやや狭くなるように両面を押圧剥離で整形している。基部の挟りは、比較的浅い凹みである。石材は、針尾系の黒曜石と推定される。648は、全体形状を二等辺三角形形状に整形している。長さは、比較的長い。基部の挟りを僅かな凹みで仕上げている。石材は頁岩を使用し、両面の整形加工は粗い。先端部を欠損する。649は、正三角形形状で幅が広く、比較的大型の形状を呈しており、丁寧な二次加工を施し整形されている。基部の挟りは、僅かな凹みで整形してある。全体が著しく摩耗しているが欠損部分は見られない。石材は安山岩(サヌカイト)である。650は、全体形状が五角形状の縦長で、先端部分は三角形形状となる。両側縁は中央部で僅かに挟りを持ち、細くなっている。基部の挟りは、半円状の凹みで整形されている。石材は、玉髓である。

##### イ 鋸歯尖頭器 (第75図651～652)

651・652は形状や大きさから鋸歯尖頭器と考えられ、653～654の鋸歯縁石器を含め、組み合わせ銛の可能性が高い。

651は、安山岩(サヌカイト)を石材とするもので、粗い二次加工により、両側縁を弱い鋸歯状に仕上げている。基部の挟りはやや浅い。整形剥離が比較的粗いことと、かつ大型であることから、石鏃とするよりは鋸歯尖頭器とした。長さ2.6cm、基部幅2.5cmを測る尖頭器である。652は、同様に安山岩(サヌカイト)を石材とし、比較的粗い二次加工により全体を整形している。基部及び両側縁は、直線状に仕上げている。鋸歯縁とはならないが、かなり大型であることから鋸歯

尖頭器の範疇に区分した。先端部及び基部は、丁寧に整形している。長さ4.7cm、基部幅3.1cmを測る大型尖頭器である。

##### ウ 鋸歯縁石器 (第75図653～656)

653は、横長剥片を使用し、一方の側縁は鋸歯縁状、もう一方の側縁は弧状に、比較的丁寧な二次加工を施したものである。図の下端を一部欠損する。石材は黒色で質のいい黒曜石であることから、肉眼で腰岳産と判断される。654は、小型の横長剥片を利用して、末端部分を鋸歯状に仕上げたものである。さらに、打面部に僅かに二次加工を施して鋸歯縁石器としたものである。剥片の形状から鋸歯尖頭器の製作剥片を利用した可能性が高い。655は、針尾系の黒曜石を利用したもので、部分的に表皮の残る縦長剥片を利用している。一方の側縁を鋸歯状に、もう一方の側縁を直線状に、簡単な加工を施したものである。図の上端を一部欠損する。656は、安山岩(サヌカイト)の横長剥片を使用している。一方の側縁を鋸歯状に、もう一方の側縁を半円状に、二次加工を施し整形したものである。鋸歯縁石器の全体形状を窺わせる良好な製品である。鋸歯縁部分の長さ3.7cm、幅1.5cmを測る。

##### エ 石匙 (第76図657)

657は、末端部が薄くなる幅広剥片を使用している。剥片の末端に、比較的粗い二次加工を施し刃部としたものである。つまみ部分は、両面からの粗い剥離により、整形されている。

##### オ 二次加工片 (第76図658)

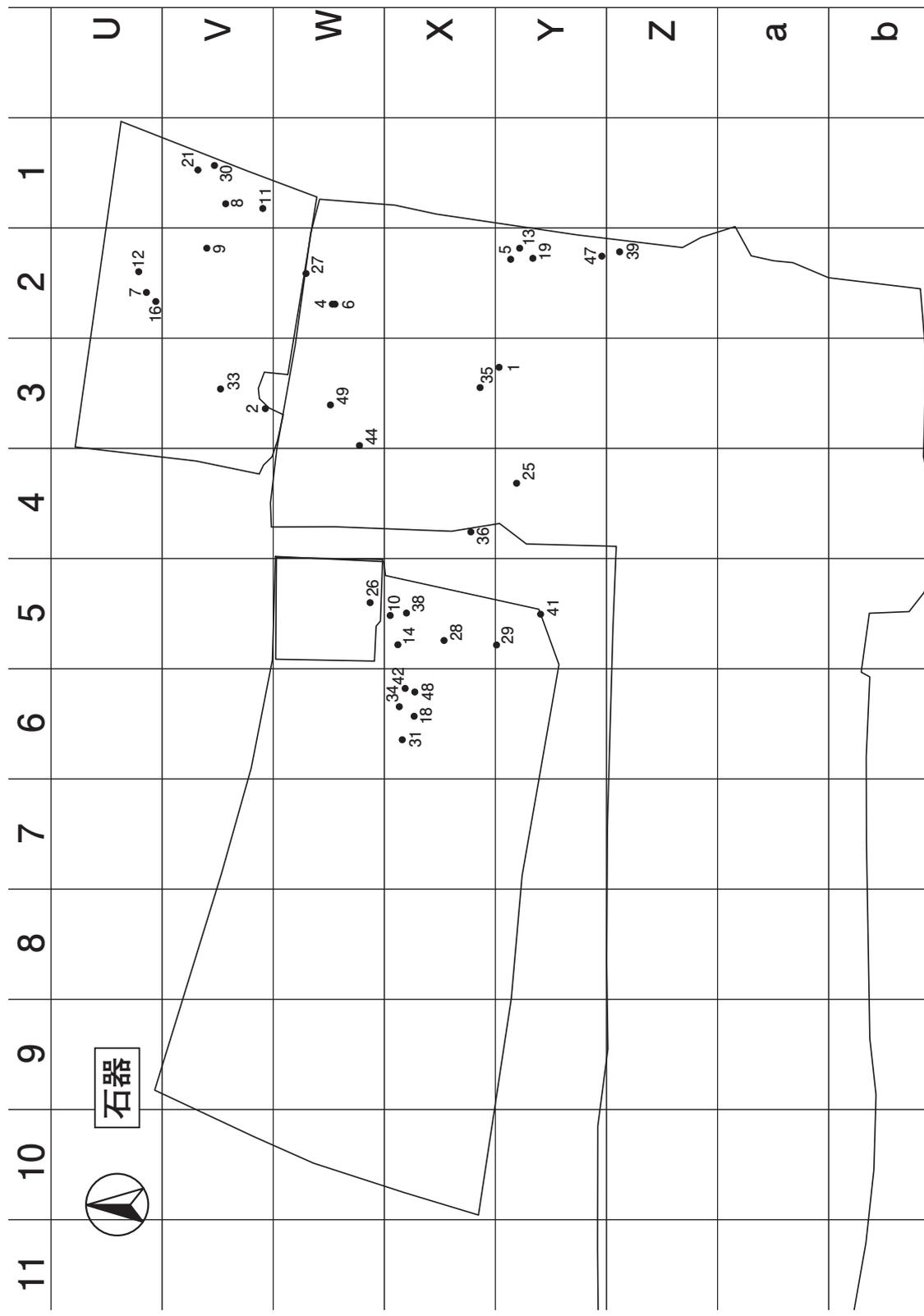
658は、表皮が残る剥片を利用し、部分的に二次加工を施したものである。石材は、腰岳産黒曜石と判断される。

##### カ スクレイパー (第76図659)

659は、比較的大きな剥片を素材とし、剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたものである。石材は腰岳産黒曜石と推定される。

##### キ 楔形石器 (第76図660)

660は、上下両端からの剥離が表裏両面に認められるもので、機能部はほぼ直線状となる。また断面はレンズ状を呈する。石材は特徴的な風化が見られる黒曜石であることから、上牛鼻産の黒曜石であると考えられる。



第73図 縄文時代石器出土状況図

### ク 石核 (第77図661~663)

661は、黒曜石の小角礫をそのまま使用したもので、平坦な自然面を打面にして小型の剥片を剥離しているものである。石鏃などの小型石器用の石核と推定される。石材は、上牛鼻産黒曜石と考えられる。662は、自然面の残る角礫を使用したもので、打面と作業面を交互に入れ替えながら剥片を剥いでいるものである。663は、自然面が残る安山岩（サヌカイト）を使用したもので、中型剥片を分割しているが、ここでは石核として取り扱った。

### ケ 研磨のある横刃型石器 (第78図664)

664は、頁岩の横長剥片を素材とし、両側の端片は敲打により整形を施している。表裏両面は研磨により整形し、下縁は丁寧な研磨により刃部としている。通常横刃型石器は打製であるが、これは研磨のある磨製の横刃型石器として位置づけた。刃部7.8cm、長さ5.2cmを測る。

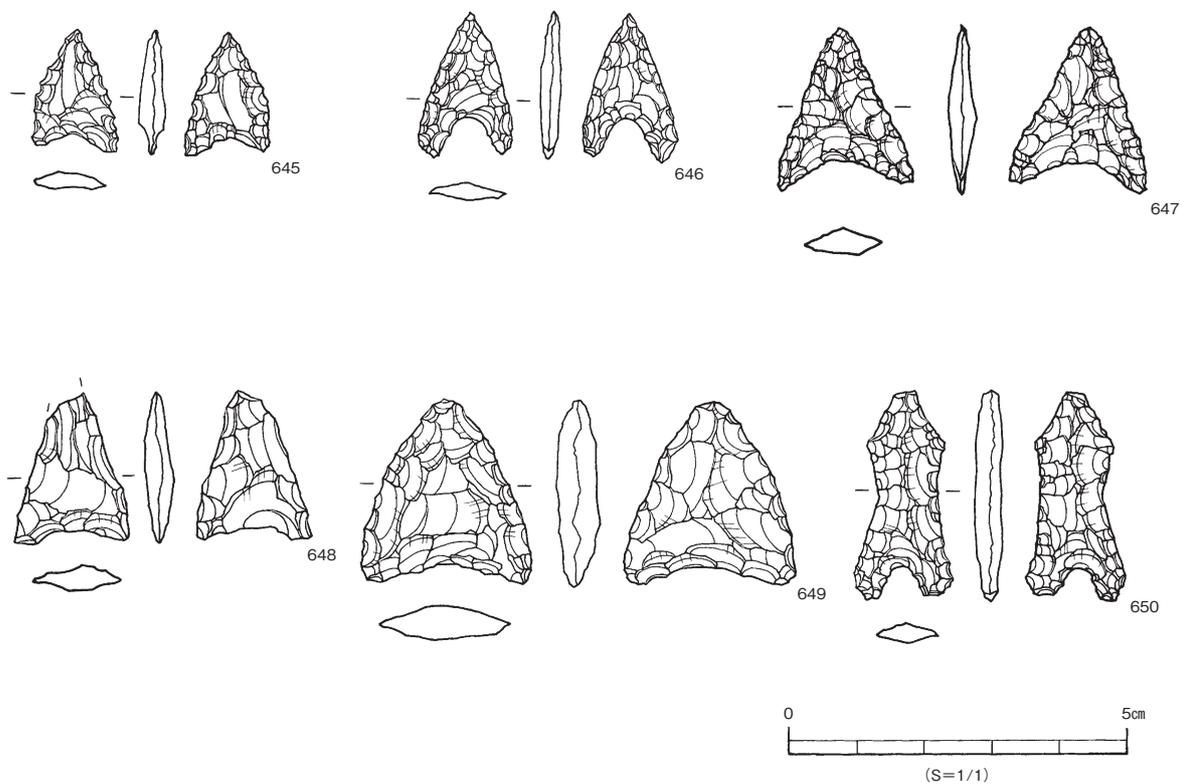
#### (2) 剥片石器

### ア 石斧 (第78図665~674)

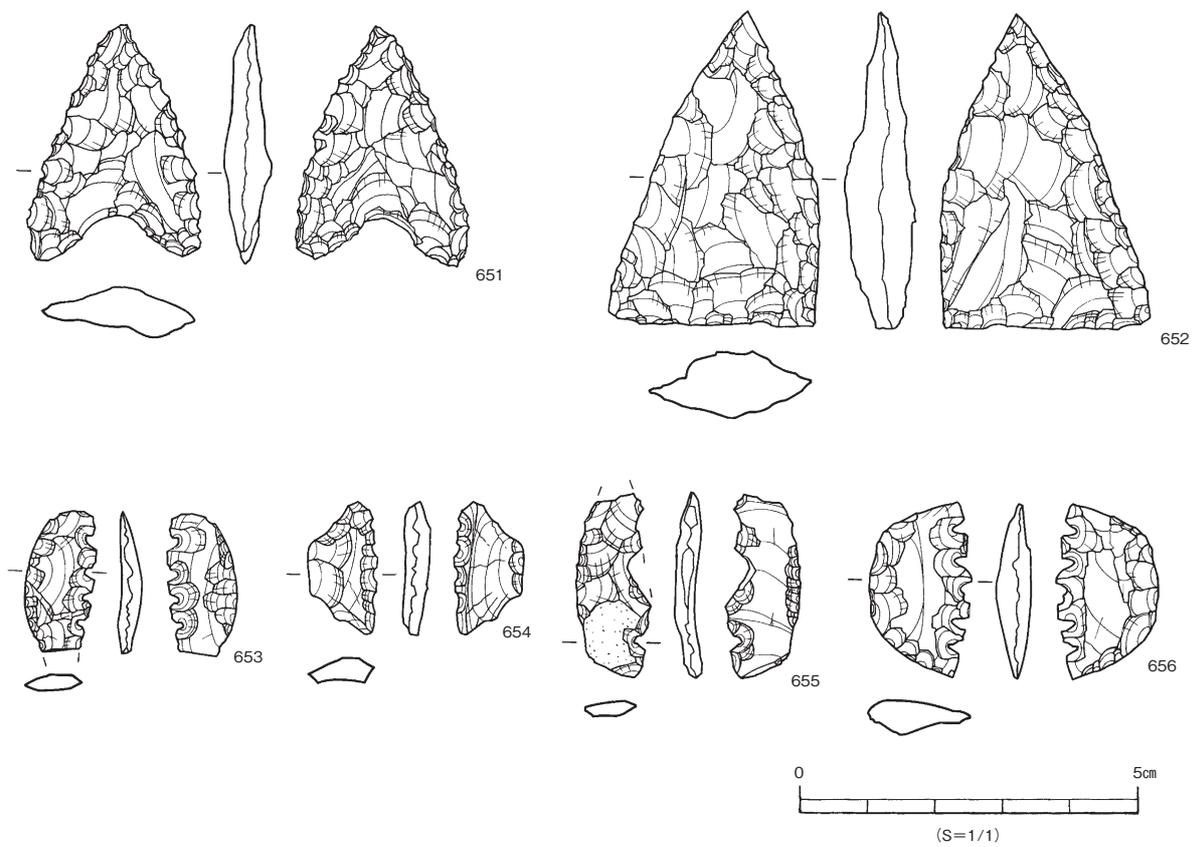
石斧は小型ノミ状のものと、やや小型のもの、大型

のものと大きく三種に区分できる。全て、磨製石斧であり、完形品を含む10点を掲載した。

665は、刃部幅2.55cm、長さ4.75cmを測る小型のノミ状のもので、表裏両面はほぼ平坦に研磨を施している。両側面は、比較的粗く研磨を施している。石材は蛇紋岩である。666は、刃部幅1.8cm、長さ6.3cmを測る小型の細長いノミ状のものである。刃部及び両側面は丁寧な研磨が施されている。石材は頁岩を使用している。667は、同様に刃部幅1.8cm、長さ5.2cmを測る小型のノミ状のものである。刃部は片刃に作られている。刃部には研磨痕のみでなく使用痕も明瞭に残っている。両側面と基部は平坦に研磨されている。石材は頁岩である。668は、表裏とも丁寧に研磨を施した小型の磨製石斧である。比較的薄く仕上げている。刃部は円刃であり、刃部幅4.4cmを測る。基部の部分は破損しているため、長さは不明である。669は、刃部のみの破損品である。刃部は片刃に丁寧に仕上げている。刃部には使用痕が顕著に残る。石材はホルンフェルス化した頁岩である。670も刃部のみの破損品である。ただし、刃部先端には、敲打痕が明瞭に残されており、破損後、敲打具として再利用されたものと思われる。石材は、頁岩である。



第74図 縄文時代出土石器実測図 (1)



第75図 縄文時代出土石器実測図 (2)



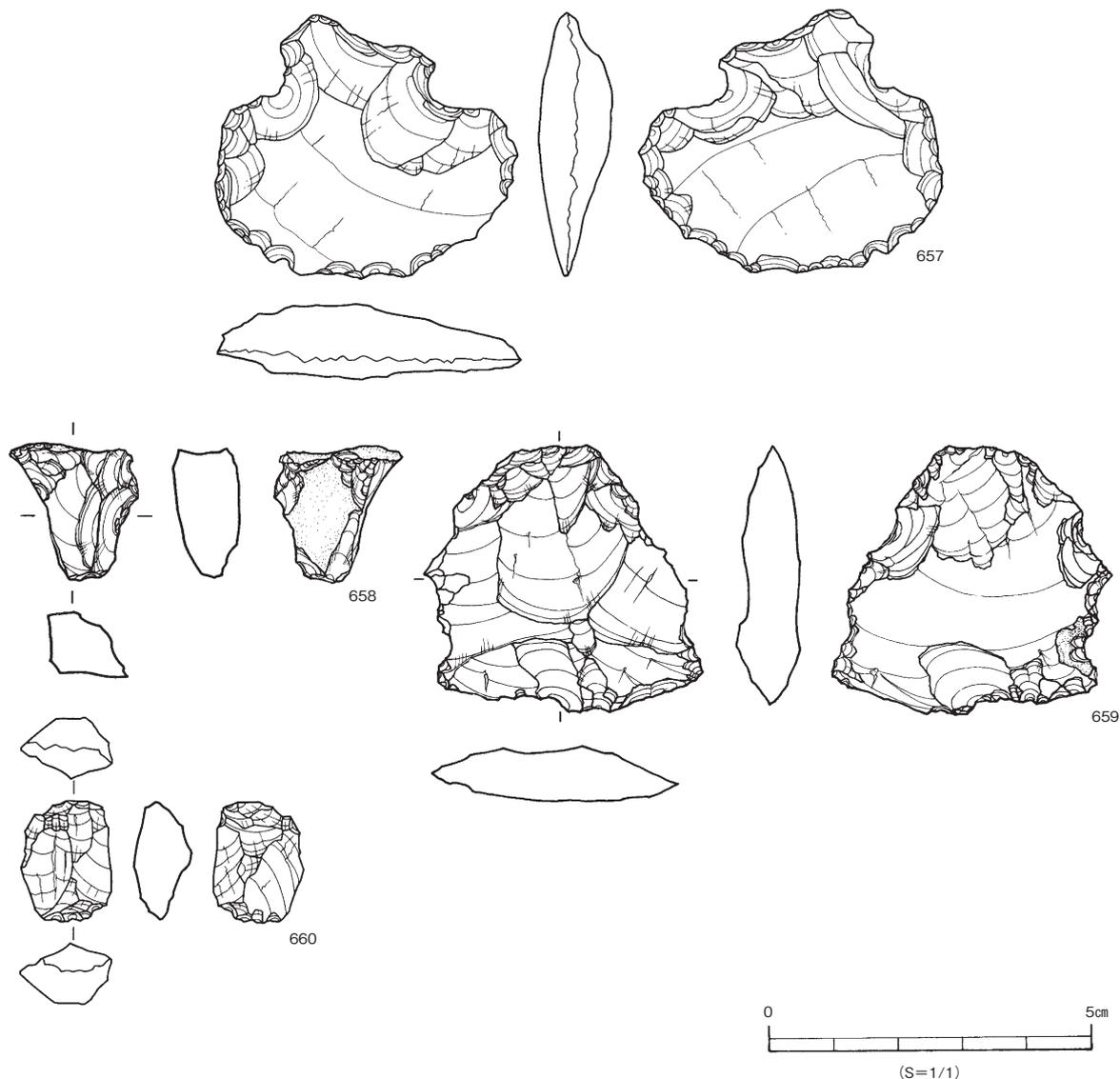
写真18 鋸齒縁尖頭器・鋸齒縁石器

671は、全長15.4cmで、刃部幅は6.9cmを測る。中心部はほぼ円形に近い形状であり、敲打により整形され、その後研磨が施されたものである。刃部は、蛤刃状を呈する。磨製石斧は研ぎ直しなどにより形状が短くなり、当初の大きさを予測することが困難である。しかし、本製品は全長から当時の大きさを推定できる貴重な資料である。672も、ほぼ671と同型の磨製石斧の基部と考えられる。基部のみの欠損品であるが、全体に敲打痕が明瞭に残る。基部の端部は丁寧な研磨が施されている。673も、大型の磨製石斧片と推定されるが、刃部および基部を欠損するものである。刃部が

折れた部分には、粗い剥離が施されており、その部分には細かい使用痕が認められることから、礫器として使用されたと考えられる。674は、やや小型の磨製石斧片であり、刃部を欠損する。表裏両面と両側縁に敲打痕が明瞭に残っている。

#### イ 磨製石斧片 (第78図675~677)

675, 676, 677は磨製石斧片と考えられるものである。675, 676は、僅かに残る整形痕から磨製石斧の一部と推定される。677には、僅かに研磨部分が残っている。



第76図 縄文時代出土石器実測図 (3)

ウ 礫器 (第79図678)

678は、扁平な円礫を素材とし、周縁に比較的粗い二次加工を施したものである。図の左右両端は、直線状に整形もしくは使用されており、その部分を機能部とした大型の楔形石器の可能性も考えられる。石材は砂岩である。

エ 削器 (第79図679)

679は、比較的大型の安山岩(サヌカイト)の剥片を使用し、縁辺に比較的丁寧な二次加工を施し、刃部としたものである。

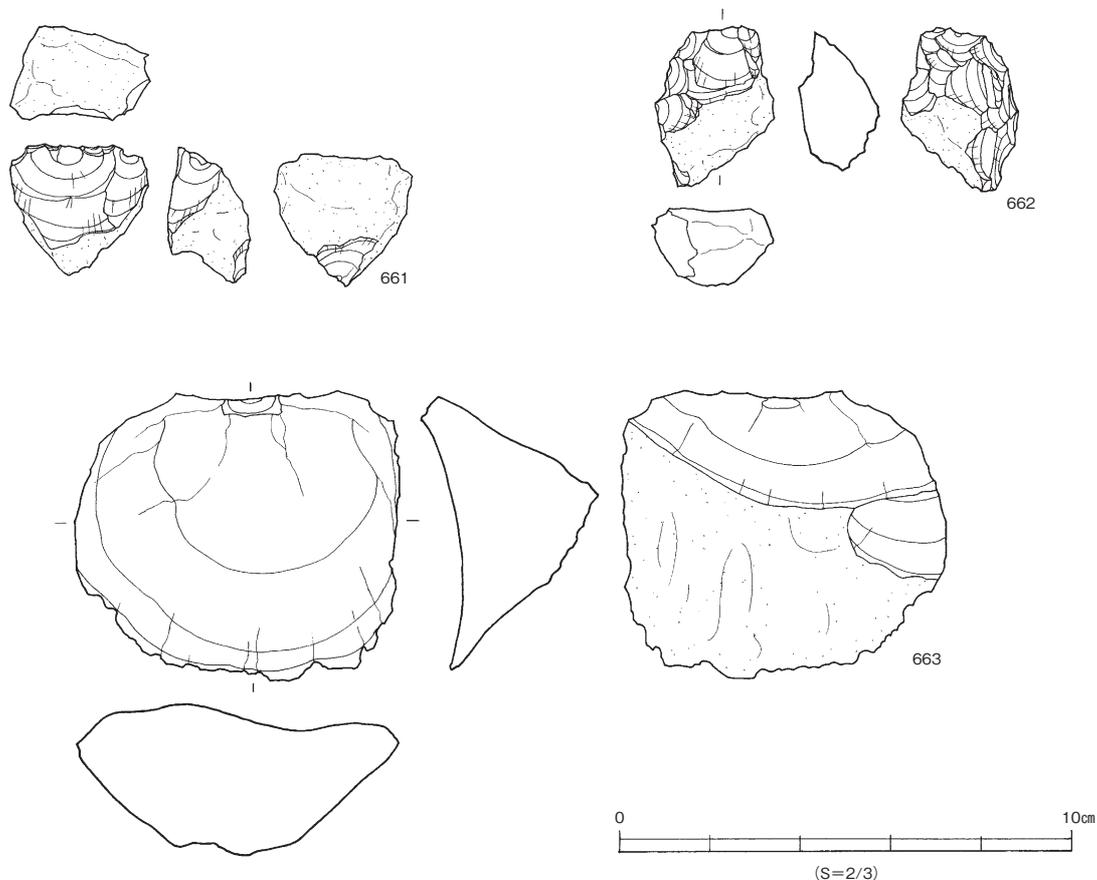
オ 磨石類 (第79図680～第80図686)

680～686は磨石である。敲打が認められる磨敲石も含めて、7点を掲載した。

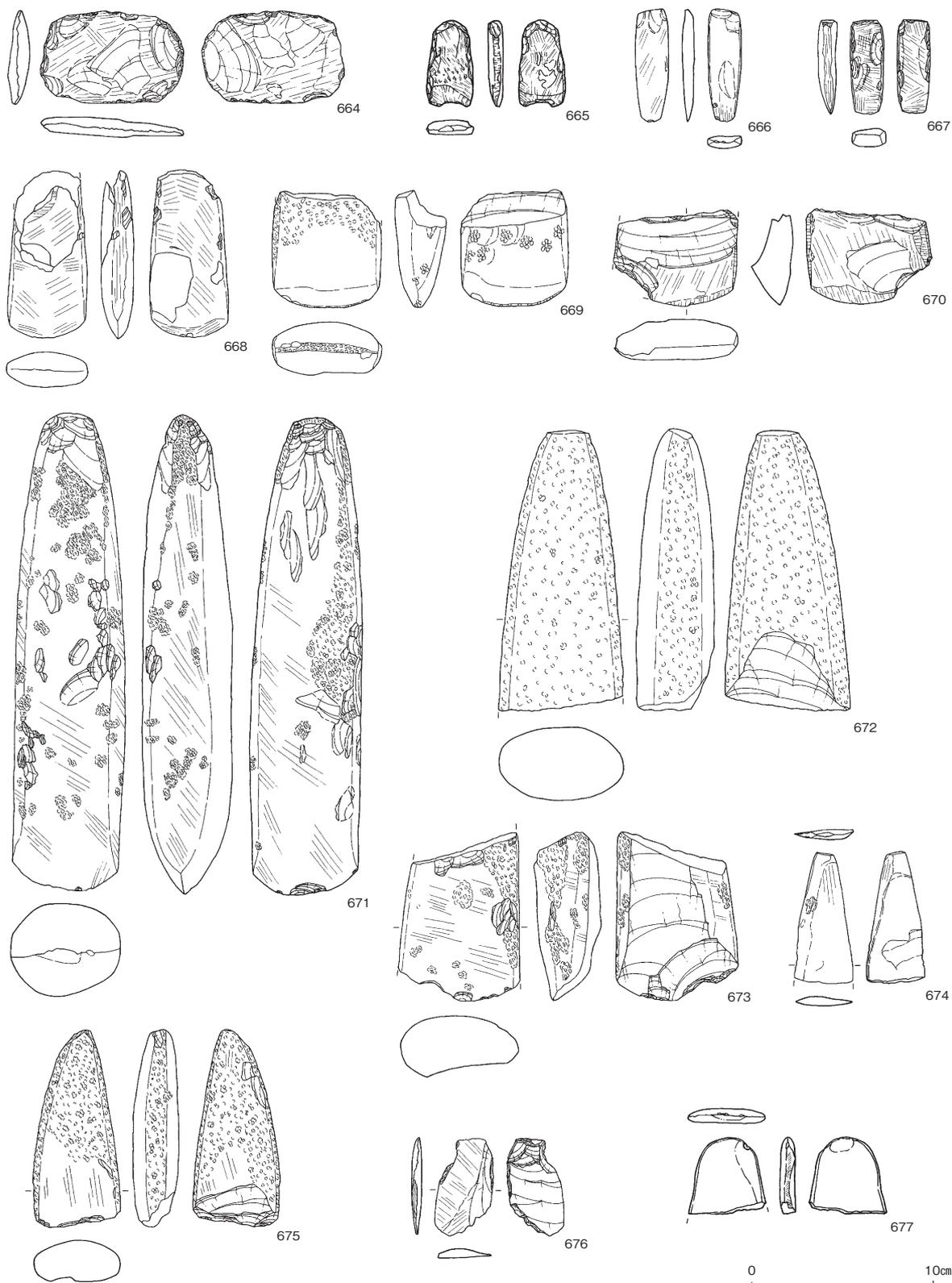
680は、やや扁平な円礫を使用したもので、表裏両面に磨面が認められる。また、側面部分にも部分的で

はあるが敲打痕が観察される。石材は安山岩である。

681は、砂岩の扁平な円礫を利用したもので、表裏両面に磨面のほか、それぞれの中央部分には敲打痕が円形に集中している部分がある。側縁部分にも敲打痕が観察される。通常、凹石とされるものである。682砂岩の河原石を利用したもので、表裏両面に磨面が認められる。なお、敲打痕が殆ど観察されていない。683は、表裏両面がほぼ平坦状に使用された磨面を有し、側面は全体にわたって平坦な磨面と敲打痕を持つ。部分的に使用による剥落が認められる。石材は砂岩である。684は、楕円形を呈するもので、表裏両面に磨面が認められる。長軸の両端には敲打痕も観察される。685は、図の裏面に磨面が認められる。また、長軸の縁辺には、敲打による使用痕が部分的に観察される。686は、裏面に磨面が観察され、長軸の一端には敲打痕が認められる。なお、加熱により赤化しており、その部分が二カ所剥落している。石材は砂岩である。

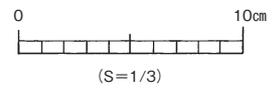
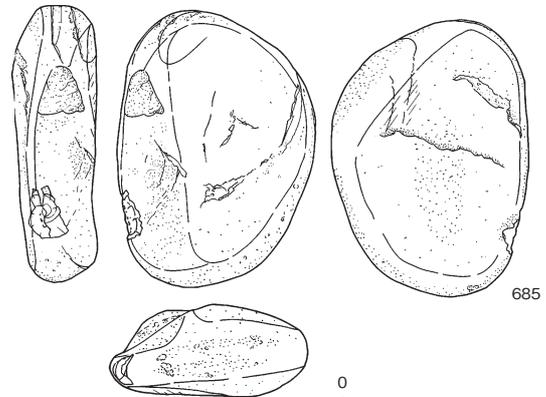
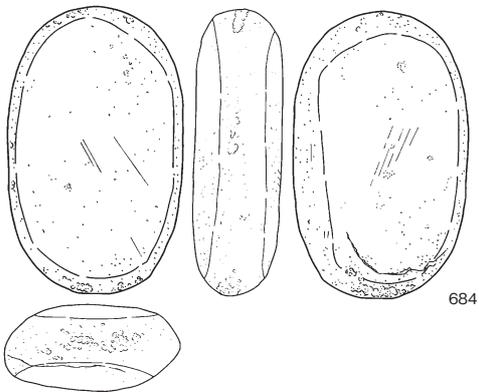
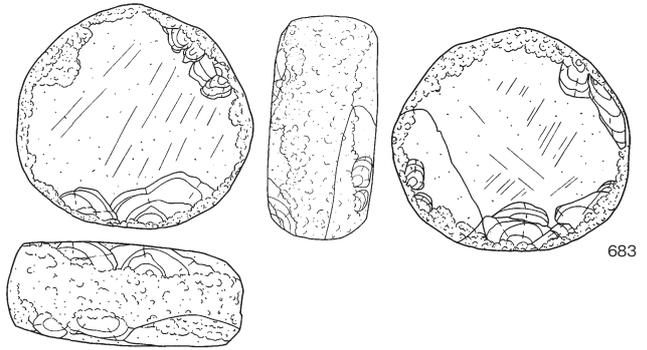
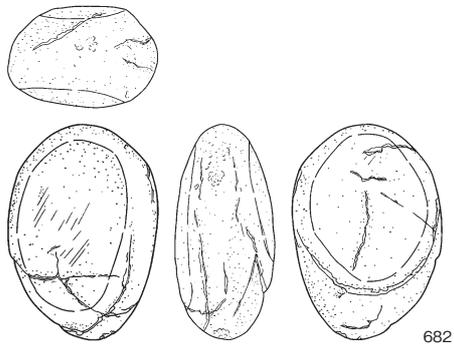
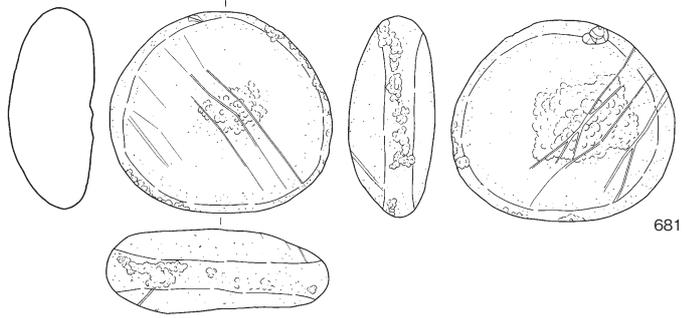
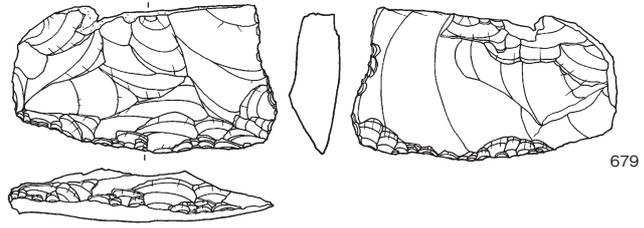
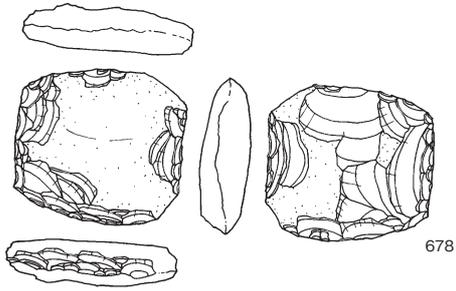


第77図 縄文時代出土石器実測図(4)



0 10cm  
(S=1/3)

第78図 縄文時代出土石器実測図 (5)



第79図 縄文時代出土石器実測図(6)

カ 敲石 (第80図687~690)

687~690は敲石である。多岐にわたって利用されたと考えられるものを含め、4点を掲載した。

687は、細長い円礫を使用したもので長軸の両端に敲打痕が観察される。688も細長い球状の礫を使用したもので、片側の突端には著しい敲打痕が観察される。石材は砂岩である。689は、比較的小型のものを使用し、平坦面に細かい使用によると考えられる線状の傷が観察され、石器の調整具である可能性が高い。そこで、ここでは敲打具の中に入れた690は、円形に近い頁岩の細長い円礫を利用し、長軸の両端に使用痕と思われる剥離痕が観察される。なお、両端は磨れて面状に潰れており、パンチ的に使用された可能性もあ

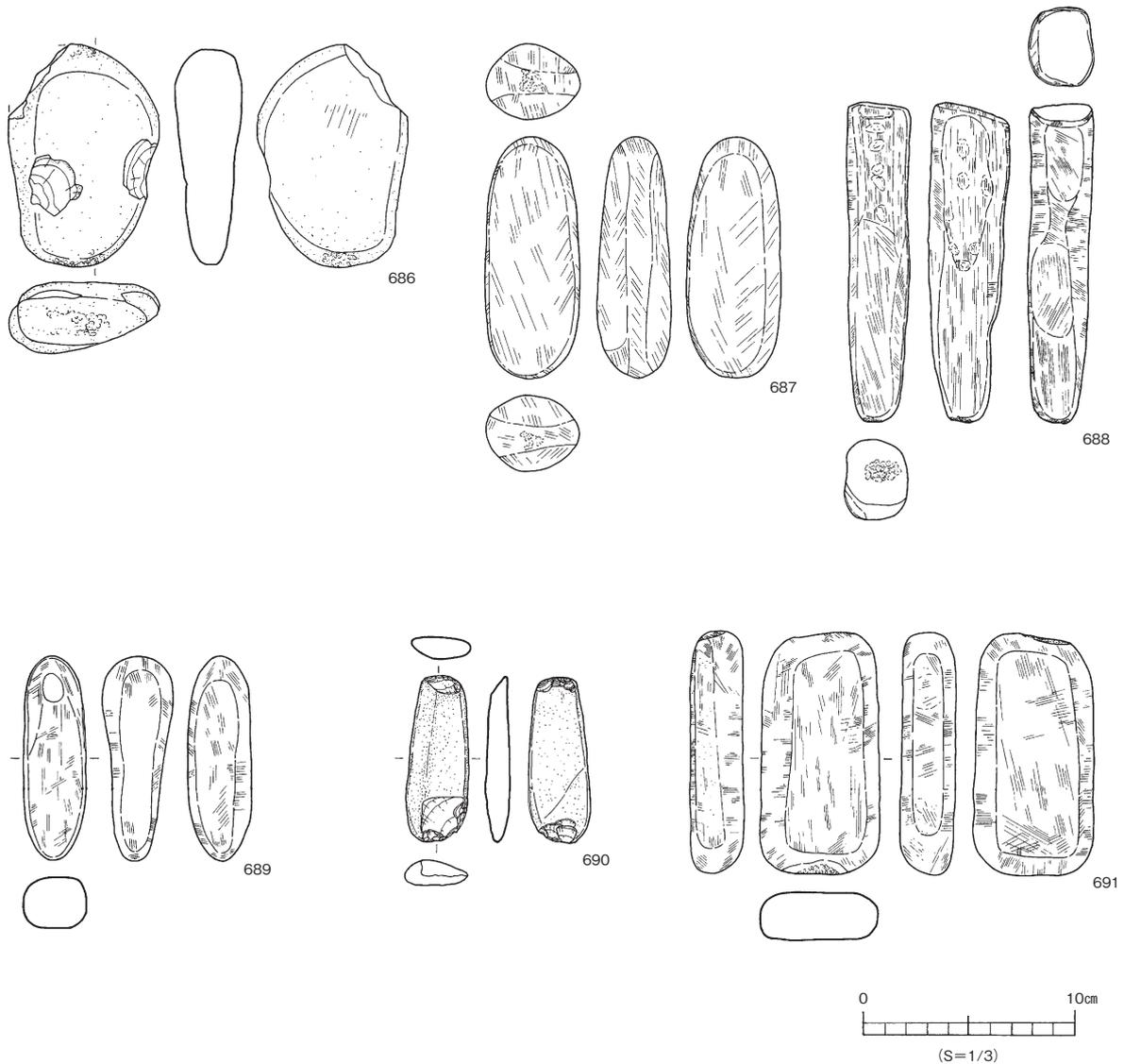
る。敲石の仲間として、本分類の範疇に区分した。

キ 砥石 (第80図691)

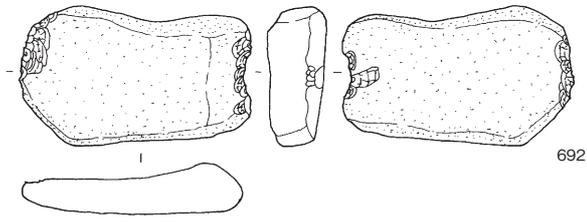
691は、長方形に近い礫を使用したもので、平坦な表裏両面を使用した砥石と考えられる。

ク 石錘 (第81図692~693)

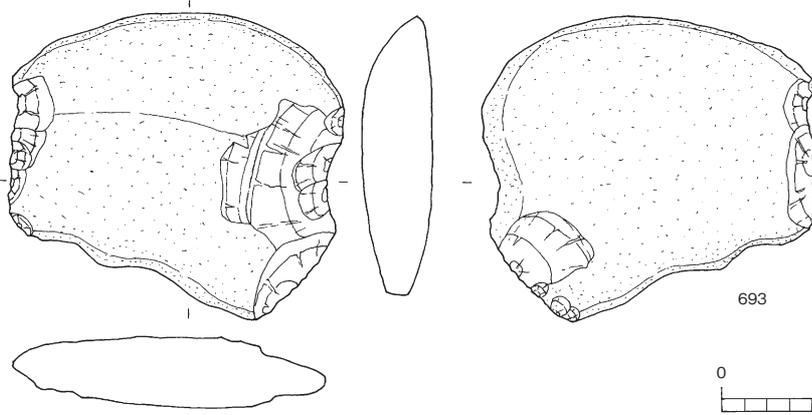
693は、頁岩の扁平に近い礫を使用し、長軸の両端に加撃を行い、凹状を形成したものである。49は、比較的大型の扁平礫を利用し、長軸の両端に粗い剥離を行い、その後敲打により、凹み状の部分形成して石錘としたものである。



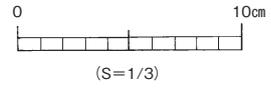
第80図 縄文時代出土石器実測図 (7)



692



693



第81図 縄文時代出土石器実測図(8)

表13 縄文時代後中期土器観察表

挿図	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土						備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他
23	1	X 5	X II	6872	I	黒褐	暗赤褐	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	2	X 5	X II	6957	I	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	3	X 5	X II	6583	I	暗褐	褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	4	X 6	X II	6157	I	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	5	Y 2	X I	1716 1726	II	にぶい褐	にぶい褐	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						接合

表14 縄文時代中・後期土器観察表

挿図	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土						備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他
24	6	Y 3	X I	1484	III a	にぶい橙	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	7	X 5	X II	一括	III a	黒	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	8	X 5	X II	7257	III a	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	9	W 2	X I	1949	III a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○			○	○		
	10	W 2	X I	1765	III a	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	11	U 2	X I	3695	III a	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	12	X 5	X II	7174	III a	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	13	W 2	X I	2147	III a	にぶい橙	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	14	X 4	X I	556	III a	黒褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○						
	15	Y 2	X I	1720	III a	褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	16	Y 3	X II	1551	III a	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○			○	○		
	17	W 2	X	1923	III a	黒褐	黒	ナデ	ナデ	○	○				○		
	18	X 5	X I	5856	III a	暗赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○				○		
	19	Y 2	X I	1709	III a	暗赤褐	黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	20	V 1	X I	4338	III a	暗灰黄	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○			○	○		
	21	W 5	X I	5304	III a	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○			○			
	22	W 5	X I	5178	III a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○			○	○		
	23	V 3	X	4771	III b	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	24	Z 5	X I	2373, 2374	III b	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○						接合
	25	25	W 4	X I	132	III b	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○				○	
	26	V 1	X I	4654	III b	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
27	V 2	X I	4753	III b	明赤褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
28	V 1	X I	4213	III b	褐灰	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							
29	V 2	X I	1697	III b	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○							
30	X 4	X I	一括	III b	にぶい橙	暗黄灰	ナデ	ナデ	○	○							
31	Y 5	X II	7389	III b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
32	V 1	X I	3965	III b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
33	U 2	X I	3605	III b	灰褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							
34	W 6	X I	6041	III b	明赤褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○							
35	Y 2	X I	1713	III b	明赤褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○				○			
36	X 5	X I	5216	III b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
37	Y 4	X I	2030	III b	にぶい橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
38	Y 3	X I	1032	III b	橙	灰オリブ	ナデ	ナデ	○	○							
39	U 2	X I	864	III b	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○				○			
40	X 6	X II	7200	III b	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
41	Y 4	X I	2064	III b	灰褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○							
42	Y 5	X II	7313	III b	褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
43	X 5	X I	6678	III b	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
44	X 5	X II	7222	III b	暗赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
45	Y 3	X II	1557	III b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
46	X 2	X I	2221	III b	にぶい赤褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
47	X 5	X I	6658	III b	黒褐	灰黄	ナデ	ナデ	○	○							
48	W 4	X I	133	III b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
49	U 3	X	4790	III b	灰黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
50	Y 5	X II	7024	III b	暗赤褐	暗赤灰	ナデ	ナデ	○	○							
51	X 5	X II	一括	III b	黒	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
52	Z 3	X	1932	III b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
53	Y 5	X II	7116	III b	黒褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○							
54	X 5	X I	—	III b	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
55	V 1	X I	3642	III b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
56	W 5	X	5572	III b	灰褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
57	X 5	X I	5922	III b	黒褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○							
58	X 5	X I	5803	III b	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○							
59	W 5	X I	一括	III b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
60	X 5	X II	7164	III b	明赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○			○				
61	W 5	X I	5118	III b	暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○							
62	U 2	X I	3739	III b	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
63	X 6	X II	7181	III b	灰褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
64	V 3	X I	4518	III b	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							
65	V 1	X	3218	III b	明褐赤	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
66	Y 2	X II	1685	III b	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							
67	V 3	VI	一括	III b	にぶい黄橙	灰褐	ナデ	ナデ	○	○				○			
68	X 2	—	2240	III b	黒褐	暗オリブ	ナデ	ナデ	○	○							

表15 縄文時代後中・後期出土土器観察表(2)

挿図	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調				調 整		胎 土						備考			
						外 面		内 面		外 面		内 面		石英	長石	角閃石	雲母		小礫	滑石	その他
						外	内	外	内	外	内	外	内								
27	69	U 2	X I	4023	III b	橙		橙		ナデ	ナデ	○	○								
	70	Y 2	X I	4263	III b	橙	にぶい褐			ナデ	ナデ	○	○								
	71	W 4	X I	520	III b	にぶい赤褐	にぶい赤褐			ナデ	ナデ	○	○								
28	72	W 2	X I	2134	IV	にぶい褐	明赤褐			ナデ	ナデ	○	○								
	73	Z 3	X	1408	IV	にぶい褐	にぶい黄褐			ナデ	ナデ	○	○								
	74	W 6	X.X I	5672, 6065	IV	明赤褐	橙			ナデ	ナデ後ハケ	○	○							接合	
	75	Y 3	X I	5759	IV	黒褐	オリフ褐			ナデ	ナデ	○	○								
	76	Y 5	X II	7134	IV	褐	明褐			ナデ	ナデ	○	○								
	77	V 1	X I	3984, 3985	IV	にぶい黄褐	明黄褐			ナデ	ナデ	○	○								接合
	78	Y 5	X II	6493	IV	黒褐	にぶい黄褐			ナデ	ナデ	○	○								
	79	W 6	X	5653, 6066	IV	にぶい赤褐	明赤褐			ナデ	ナデ	○	○								接合
	80	V 1	X I	4717	IV	にぶい褐	黄褐			ナデ	ナデ	○	○								
	81	V2.W3	X I	一括	IV	黒褐	にぶい黄褐			ナデ	ナデ後ハケ	○	○								接合
82	Z 3	X I	2330 2334	IV	明赤褐	橙			ハケ	ナデ	○	○								接合	
83	X 6	X II	7185	IV	にぶい黄褐	明褐			ナデ	ナデ	○	○			○						
84	X 7	X II	7411	IV	褐	明褐			ナデ	ナデ	○	○									
85	W 6	X I	6068	IV	明赤褐	明褐			ナデ	ナデ後ハケ	○	○									
86	V 1	X I	4240	IV	暗灰黄	明赤褐			ナデ	ナデ	○	○									
87	X 5	X II	6571	IV	暗赤褐	暗赤褐			ナデ	ナデ	○	○									
88	W 2	X I	865	IV	褐	にぶい黄褐			ナデ	ナデ	○	○									
89	W 6	X	5656, 6062, 6063	IV	明赤褐	明褐			ナデ	ハケ	○	○								3点接合	
90	W 3	X	675	IV	明赤褐	にぶい黄褐			ナデ	ナデ	○	○									
91	W4.5	X I	一括	IV	橙	橙			ナデ後ハケ	ナデ	○	○								接合	
92	Y 2	X II	1661	IV	赤褐	褐			ナデ	ナデ後ハケ	○	○									
93	Z 3	X	1424	IV	暗褐	にぶい褐			ナデ	ナデ	○	○									
94	U 3	X I	4491	IV	黒褐	褐			ナデ	ナデ	○	○									
95	U 3	X I	4107	IV	褐	明褐			ナデ	ナデ	○	○									
96	W 3	X I	594	IV	にぶい黄褐	にぶい黄褐			ナデ	ナデ	○	○									
97	Y 5	X II	7387	IV	橙	にぶい赤褐			ナデ	ナデ	○	○			○						
98	W 2	X	1917	IV	にぶい褐	にぶい橙			ナデ	ハケ	○	○									
99	Z 4	X I	439	IV	褐	にぶい橙			ナデ	ナデ	○	○									
100	W 1	X I	399	IV	黒褐	明赤褐			ナデ	ナデ	○	○									
101	Y 3	X II	1604	IV	明赤褐	褐			ナデ	ナデ	○	○			○						
102	W 5	X I	4889	IV	にぶい黄褐	灰褐			ナデ	ハケ	○	○									
103	U 2	X I	4005	IV	明赤褐	赤褐			ナデ	ハケ	○	○									
104	V 1	X I	4345	IV	明赤褐	明赤褐			ナデ	ナデ	○	○									
105	X 5	X II	6532	IV	赤褐	にぶい赤褐			ナデ	ハケ	○	○									
106	X 6	X II	6900	IV	にぶい橙	にぶい黄橙			ナデ	ナデ	○	○									
107	X 6	X II	一括	IV	暗明褐	橙			ナデ	ナデ	○	○									
108	V 1	X I	4660	IV	にぶい橙	灰褐			ナデ	ナデ	○	○									
109	W 2	X	1903	IV	にぶい橙	明褐灰			ナデ	条痕後ナデ	○	○									
110	Y 5	X II	6858	IV	黒褐	橙			ナデ	ナデ	○	○									
111	Y 4	X I	1990	IV	黒褐	にぶい褐			ナデ	ナデ	○	○									
112	U 2	X I	3600	IV	橙	橙			ナデ	ナデ	○	○									
113	W 6	X	5598	IV	にぶい黄橙	黄褐			ナデ	ナデ	○	○									
114	U 2	X I	3796	IV	明赤褐	にぶい褐			ナデ	ナデ	○	○									
115	Y 2	X II	1663, 1662	IV	灰褐	赤褐			ナデ	ナデ	○	○								接合	
116	V 2	X I	4417	IV	褐灰	にぶい赤褐			ナデ	ナデ	○	○									
117	U 1	X I	3902	IV	にぶい褐	橙			ナデ	ナデ	○	○									
118	U 2	X I	3746	IV	黒褐	橙			ナデ	ナデ	○	○									
119	W 3	X I	651	IV	にぶい褐	にぶい褐			ナデ	ナデ	○	○									
120	X 2	X II	2264	IV	橙	にぶい黄橙			ナデ	ナデ	○	○									
121	Y 2	X II	1690	IV	にぶい黄褐	にぶい黄褐			ナデ後ハケ	ナデ	○	○									
122	X 6	X II	6792	V a	にぶい橙	明褐			ナデ	ナデ	○	○									
123	X 5	X II	一括	V a	にぶい褐	黄橙			ナデ	ナデ	○	○									
124	X 5	X II	一括	V a	黒褐	にぶい黄橙			ナデ	ナデ	○	○									
125	X 2	X II	2278	V a	灰褐	にぶい黄褐			ハケ	ハケ	○	○									
126	X 6	X II	6410	V a	にぶい黄褐	明黄褐			ナデ	条痕後ナデ	○	○									
127	X 4	X I	547	V a	黄褐	橙			ナデ	ナデ	○	○									
128	Z 2	X I	1747	V a	明橙	黄褐			ナデ	ナデ	○	○									
129	X 5	X II	6579	V a	灰黄褐	にぶい黄橙			ナデ	ナデ	○	○									
130	W 2	X	1888, 755	V a	にぶい黄橙	浅黄橙			ナデ	ナデ	○	○								接合	
131	X 5	X II	一括	V a	暗赤褐	にぶい橙			ナデ	ナデ	○	○									
132	X 5	X I	6085	V a	灰黄褐	褐灰			ナデ	ナデ	○	○									
133	V 1	X I	4339	V a	にぶい赤褐	暗灰黄			ナデ	ナデ	○	○									
134	X 6	X II	6961	V a	黒褐	黄			ナデ	ナデ	○	○									
135	V 1	X I	4342, 4330	V a	黒褐	黄褐			ナデ	条痕	○	○								接合	
136	X 5	X II	6154, 6335	V a	赤褐	明赤褐			ナデ	条痕後ナデ	○	○			○					接合	
137	Z 2	X I	1748	V a	にぶい褐	黒褐			ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○									
138	Y 4	X I	2060	V a	明赤褐	灰黄褐			ナデ	ハケ	○	○									
139	X 6	X II	6922	V a	黒褐	にぶい赤褐			ナデ	ナデ	○	○									
140	V 1	X I	2902, 3503, 3902, 3903	V a	明赤褐	明赤褐			ナデ	ナデ	○	○								4点接合	
141	Y 2	X I	1706	V a	にぶい黄橙	にぶい褐			ナデ	ナデ	○	○			○						
142	X 5	X II	6154	V a	褐	黒褐			ナデ	ナデ	○	○									
143	Y 3	X II	1520	V a	灰黄褐	褐灰			ナデ	ナデ	○	○									

表16 縄文時代後中・後期出土土器観察表(3)

挿図	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調				調 整						胎 土						備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他							
35	144	U 2	X I	3723	V a	にぶい赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
	145	X 5	X II	6371	V a	黒	極暗赤褐	ナデ	条痕	○	○												
	146	V 2	X I	3355, 3571, 3856	V a	暗褐	褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○											3点接合	
	147	W 5	X I	5063	V a	褐	にぶい黄橙	ナデ	条痕後ナデ	○	○												
	148	X 5	X I	6688	V a	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○												
	149	Z 5	X I	2392, 2393, 2388, 2403, 2402	V a	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ後ハケ	○	○											5点接合	
	150	Y 3	X I	1496	V a	暗茶褐	暗赤灰	ナデ	ナデ	○	○												
	151	W 5	X I	4896	V a	にぶい黄	オリブ褐	ナデ	ナデ	○	○												
152	W4.5	X I	一括	V a	にぶい赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○											接合		
36	153	W 5	X I	5050	V a	明黄褐	明黄褐	ナデ	条痕	○	○												
	154	X 5	X II	6156	V a	赤黒	明赤褐	ナデ	条痕	○	○												
	155	V 1	X I	4363	V a	灰黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
	156	Y 3	X I	1454	V a	明赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○												
	157	V 1	X I	4646	V a	にぶい褐灰	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○											○	
	158	W 5	X I	5235	V a	にぶい赤褐	灰黄褐	ナデ	ハケ	○	○												
	159	V 1	X I	4221	V a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○												
	160	V 1	X I	4713	V a	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○												
	161	X 6	X II	6202	V a	淡橙	淡橙	ナデ	ナデ	○	○												
	162	X 6	X II	7062	V a	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○												
163	X 4	X I	一括, 106	V a	暗褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○											接合		
37	164	Y 2	X II	1624	V a	にぶい黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	○	○												
	165	Z 2	X I	1745	V a	灰褐	橙	ナデ	ナデ	○	○												
	166	V 1	X I	3966	V a	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○											○	
	167	X 5	X II	6553, 6554, 6543, 6542, 6864, 6565	V a	にぶい橙	明褐灰	ナデ	条痕後ナデ	○	○												6点接合
38	168	W 5	X I	4900, 5268	V a	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○											接合	
	169	X 4	X I	一括	V a	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○												
	170	W 2	X	765	V a	オリブ黒	きぶい黄	ナデ	ナデ	○	○												
	171	X 5	X I	5878	V a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○												
	172	V 1	X I	4643	V a	灰黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
	173	V 2	X I	3823	V a	にぶい褐	浅黄	ナデ	ナデ	○	○												
	174	X 6	X II	6755	V a	黒褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○											○	
	175	W 5	X I	4992	V a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○												
	176	W 5	X I	4892	V a	黒	黒褐	ナデ	条痕	○	○											○	
	177	U 2	X	3526	V a	灰黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
	178	X 6	X I	6833	V a	黒褐	黄褐	ナデ	条痕	○	○												
	179	X 2	X I	2191	V a	オリブ黒	オリブ黒	ナデ	ナデ	○	○												
	180	V 1	X I	3632	V a	明黄褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○												
	181	X 5	X II	一括	V a	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○												
	182	V 2	X I	3809	V a	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	条痕	○	○												
	183	V 1	X I	4756, 4758	V a	にぶい黄橙	黄橙	ナデ	条痕後ナデ	○	○												接合
	39	184	V 1	X I	3634	V a	にぶい黄橙	オリブ褐	ナデ	条痕	○	○											
		185	U 1	X I	4142	V a	にぶい黄	黄灰	ナデ	ナデ	○	○											
186		Y 4	X I	2067	V a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○											○	
187		X 5	X II	6518	V a	褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
188		Z 3	X	1946, 988	V b	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○												接合
189		Y 4	X I	2038	V b	明赤褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○												
190		Z 4	X I	480	V b	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
191		U 2	X I	4045	V b	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○												
192		Z 3	X	1413	V b	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
193		W 3	X I	624	V b	明褐	橙	ナデ	ナデ後ハケ	○	○												
194		Y 4	X I	2037	V b	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○												
195		V 1	X I	4621	V b	灰オリブ	灰オリブ	ナデ	ナデ	○	○												
196		X 5	X II	一括	V b	明赤褐	灰褐	ナデ	ハケ	○	○												
197		V 1	X I	4366	V b	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ハケ	○	○												
198	Y 5	X II	7354	V b	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○													
40	199	Y 5	X II	6969	V b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○												
	200	W 4	X I	331	V b	橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○												
	201	Y 3	X I	1486	V b	黒	にぶい赤褐	ナデ	ハケ	○	○												
	202	V 2	X I	2841	V b	赤褐	褐灰	ナデ	指頭圧痕	○	○												
	203	Y 5	X II	6485	V b	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ハケ	○	○												
	204	V 1	X I	4173	V b	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
	205	Y 4	X I	1993	V b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○												
	206	X 4	X I	554	V b	黒褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○												
	207	Y 4	X I	2054	V b	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○												
	208	X 5	X II	6333	V b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○												○
	209	X 4	X I	5224	V b	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○												
	210	W 6	X	5673	V b	黒	暗褐	ナデ	ナデ	○	○												
	211	X 2	X I	2192	V b	にぶい褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○												
	212	Y 2	X II	1675	V b	明赤褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
	213	X 5	X I	6607	V b	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○												
	214	X 5	X II	6299	V b	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○												
	215	Z 2	X I	1755	V b	暗赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○												
	216	X 5	X II	一括	V b	暗褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○												
	217	V 3	X I	4525	V b	赤褐	褐	ナデ	ナデ	○	○												
	218	X 2	X	1806	V b	黒褐	暗オリブ褐	ナデ	ナデ	○	○												

表17 縄文時代中・後期出土土器観察表(4)

採掘	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土							備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他		
41	219	U 1	X I	4132	V b	黄灰	灰黄	ナデ	ナデ	○	○							
	220	X 5	X II	一括	V b	暗赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	221	Y 1	X I	一括	V b	褐灰	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							
	222	X 4	X I	501	V b	暗褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○							
	223	Y 4	X I	1270, 1989	V b	褐灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○							接合
	224	X 5	X II	6359, 6358	V b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	条痕	○	○							接合
	225	Z 2	X I	1742	V b	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	226	Y 5	X II	7362	V b	にぶい赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							
	227	W1.2	X I	2169, 1836	V b	明赤褐	赤褐	ナデ	ハケ	○	○							接合
	228	X 6	X II	7200	V b	黒	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	229	V 1	X I	4177	V b	灰褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	230	Y 6	X II	7079	V b	暗赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	231	X 6	X II	一括	V b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	232	V 1	X I	4636, 3970	V b	明赤褐	黄褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○							接合
	233	Y 3	X I	1463	V b	灰黄	暗オリーブ褐	ナデ	ハケ	○	○				○			
	234	X 5	X II	7223	V b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
	235	W 2	X I	734, 2115	V b	褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							接合
	236	Y 4	X I	1043	V b	赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	237	U 1	X I	4296	V b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
	238	W 2	X I	4441	V b	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	239	V 1	X I	4224	V b	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	240	W 3	X I	629	V b	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ハケ	○	○							
	241	Z 4	X I	2085	V b	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
242	U 1	X	3170	V b	暗褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
243	X 5	X I	6602	V b	暗赤褐	橙	ナデ	ハケ	○	○								
244	X 5	X I	5215	V b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○								
245	V 1	X I	4168	V b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○								
246	Y 5	X II	2144	V b	極暗赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○				○				
247	X 5	X II	一括	V b	灰褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○								
248	V 1	X I	4159	V b	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○								
249	X 6	X II	6799	V b	黒	黒褐	ナデ	ナデ	○	○								
250	V 1	X I	3631	V b	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ハケ	○	○								
251	Y 5	X I	6968	V b	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○								
252	V 2	X I	3824	V b	灰褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○								
253	X 5	X I	5723	V b	暗褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○								
254	Z 3	X I	1968	V b	黒褐	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○								
255	W 2	X I	2126	V b	橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○								
256	U 3	VI	一括	V b	灰褐	橙	ナデ	ナデ	○	○				○				
257	X 6	X II	6777	V b	暗褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○								
258	X 5	X II	一括	V b	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
259	X 5	X II	一括	V b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○								
260	Y 3	X	1442	VI	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○								
261	X 6	X II	7111	VI	にぶい黄褐	橙	ナデ	ナデ	○	○								
262	X 5	X II	一括	VI	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○								
263	X 5	X	5738, 9788	VI	灰	橙	ナデ	ナデ	○	○							接合	
264	X 5	X I	-	VI	黄灰	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○								
265	V 2	X I	3553	VI	暗灰黄	橙	ナデ	ナデ	○	○								
266	X 6	X II	6385	VI	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
267	W 5	X I	5080	VI	灰黄	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
268	Y 3	X I	1979	VI	黄灰	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
269	U 3	X I	4508	VI	にぶい黄褐	橙	ナデ	ナデ	○	○								
270	X 5	X I	5833	VI	にぶい黄橙	黒	ナデ	ナデ	○	○								
271	U 2	X	3399	VI	にぶい赤褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○								
272	X 5	X II	6883	VI	暗赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
273	U 2	X.X I	2509, 4017, 4021, 4051	VI	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○							4点接合	
274	W5.6	X I	4950, 5981	VI	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							接合	
275	Z 4	X I	2082	VI	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○								
276	X.W5	X.X I	4970, 5903	VI	にぶい黄	橙	ナデ	ナデ	○	○							接合	
277	X 5	X	5410	VI	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	○	○								
278	Y 4	X I	2074	VI	にぶい赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
279	X 2	X I	2250	VI	にぶい黄橙	灰	ナデ	ナデ	○	○								
280	X 6	X II	6384	VI	明赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○								
281	Y 3	X	1432	VI	にぶい黄褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○								
282	Y 2	X I	1729, 1733, 1734	VI	橙	暗褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○							3点接合	
283	Y 4	X I	2061	VI	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○								
284	W 4	X I	257	VI	浅黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○				○				
285	X 6	X II	6805	VI	褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○				○				
286	X 6	X II	6895	VII	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○								
287	X 2	X I	2273	VII	灰黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○				○				
288	W 2	X	750	VII	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○								
289	X 6	X II	6783, 6912	VII	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○							接合	
290	W 2	X I	4272	VII	黄褐	暗灰黄	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○								
291	U 2	X I	3724, 3793	VII	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○							接合	
292	X 5	X II	6537	VII	暗褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○								
46	293	X 6	X II	6223	VII	暗灰黄	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							

表18 縄文時代中・後期出土土器観察表(5)

挿図	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土						備考		
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他	
46	294	W	5	X I	5969	VII	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	295	U	2	X I	一括	VII	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	296	X	5	X II	一括	VII	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	297	X	6	X II	6148	VII	黒褐	黒	ナデ	ナデ	○	○						
	298	V	1	X I	1994	VII	黒	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	299	W	5	X I	5277	VII	褐灰	オリブ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	300	X	5	X II	6503	VII	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	301	W	2	X I	1817	VII	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	302	X	2	X II	2271	VII	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	303	W	2	X	1905	VII	灰黄褐	灰	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	304	V1,W2	X I		43-1, 1773	VII	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	305	Y	5	X II	7029	VII	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	306	U	3	X I	4094	VII	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	307	V	1	X I	4192	VII	黒褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	308	V	1	X I	4715	VII	暗灰黄	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	309	Y	5	X II	6856	VII	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	310	Y	5	X II	6487	VII	黒	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	311	U	2	X I	4018	VII	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	312	V	2	X I	3638	VII	浅黄橙	浅黄	ナデ	ナデ	○	○						
	313	Y	4	X I	1271	VII	浅黄橙	黒	ナデ	ナデ	○	○						
	314	V	1	X I	3910	VII	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	315	Y	1	X I	3950	VII	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	316	X	5	X II	一括	VII	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	317	X	2	X	1804	VII	灰オリブ	オリブ黒	ナデ	ナデ	○	○						
	318	W	3	X I	939	VII	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						ヘナタリによる条痕
	319	W	5	X I	一括	VIII	黒褐	にぶい黄	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	320	X	5	X I	5751	VIII	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	321	Y	3	X II	1517	VIII	灰褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	322	Z	5	X I	2396	VIII	橙	橙	ミガキ	ナデ	○	○						
	323	V	1	X I	4172	VIII	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	324	W	2	X	745	VIII	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	325	W	4	X I	374	VIII	黒褐	暗オリブ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	326	Y	4	X I	1279	VIII	灰黄褐	灰白	ナデ	ナデ	○	○						
	327	W	2	X	1864	VIII	橙	黒	ナデ	ナデ	○	○						スス付着
	328	U	2	X I	3804	VIII	褐灰	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	329	Z	3	X I	1019	VIII	灰褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	330	Z	3	X	954	VIII	明黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	331	X	6	X II	6407	VIII	灰褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
332	U	1	X I	4291	VIII	黒褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							
333	X	5	X II	一括	VIII	黒褐	にぶい褐	ミガキ	ナデ	○	○							
334	U	2	X I	3724	VIII	極暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○							
335	W	1	X I	1365	VIII	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
336	W	5	X I	5106	VIII	黄灰	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○							
337	Y	4	X I	1281	VIII	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							
338	Y	3	X I	1985	VIII	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
339	X	1	X	1346	VIII	暗灰黄	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○							
340	V	1	X I	4227	VIII	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○							
341	W	2	X I	2162	VIII	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							
342	W	2	X I	2211	VIII	灰黄	黄灰	ナデ	ナデ	○	○							
343	V	1	X I	4214	VIII	暗赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
344	W	2	X I	4589	VIII	にぶい黄褐	黄褐	ミガキ	ナデ	○	○							
345	U	1	X I	3868	VIII	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							
346	W	5	X I	5827	VIII	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							
347	Y	4	X I	2095	VIII	灰黄褐	褐灰	ナデ	条痕後ナデ	○	○							
348	V	1	X I	4362	VIII	暗褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							
349	U	1	X I	3867	VIII	灰黄	黄灰	ナデ	ナデ	○	○							
350	Y	4	X I	1070	VIII	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
351	V	1	X I	4185	VIII	黄灰	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○							
352	Y	5	X II	6470	VIII	橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
353	Z	3	X	1250	VIII	橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
354	W	2	X	1915	VIII	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							
355	U	2	X I	4065	VIII	暗灰黄	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○							
356	W	5	X	5569	VIII	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
357	V	2	X I	4556,4566,4567,4568,4569,4723,4724,4725,4737	IX a	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			9点接合	
358	Z	3	X	1957	IX a	褐灰	明褐	ナデ	条痕	○	○							
359	W	2	X I	1830	IX a	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
360	Z	4	X I	1148, 1155	IX a	褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合	
361	W	5	X X I	4984	IX a	にぶい黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							
362	Z	3	X	950	IX a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						ナデ, 指頭圧痕	
363	Y	4	X I	1077	IX a	暗褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合	
364	Z	4	X I	1326, 1144	IX a	明褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合	
365	Y	3	X II	1590	IX a	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
366	Z	3	X	1234, 1235	IX a	暗褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合	
367	X	2	X	1795	IX a	褐灰	明赤褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○			○				
368	Y	3	X II	1602	IX a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							

表19 縄文時代中・後期出土土器観察表(6)

挿図	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土							備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他		
51	369	Z 4	X I	1151	IX a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	370	Z 3	X I	1025	IX a	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○							
	371	Z 3	X	1240	IX a	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	372	Z 3	X	1239	IX a	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							
	373	Y 3	X II	1591	IX a	暗赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	374	W 2	X	1920	IX a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	375	Z 4	X I	1325	IX a	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	376	Z 3	X	1244	IX a	灰褐	赤褐	ナデ	ハケ	○	○							
	377	Z 4	X I	1181	IX a	にぶい赤褐	橙	ナデ後ハケ	ハケ	○	○							
	378	Y 3	X II	1593	IX a	赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	379	Y 2	X II	1624	IX a	にぶい褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○							
	380	Z 4	X I	1135	IX a	暗赤褐	橙	ナデ後ハケ	ナデ	○	○				○			
52	381	Z 3	X I	1030	IX a	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	382	Y 4	X I	2015	IX a	暗褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	383	W 2	X I	887	IX a	褐	明黄褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○							
	384	B 4	X I	1188	IX a	暗褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	385	Z 3	X	1255	IX a	にぶい黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
	386	Z 3	X	968	IX a	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	387	Z 4	X I	1156, 1157, 1158	IX a	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							3点接合
	388	Y 3	X II	1592	IX a	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
53	389	X 2	X I	2188	IX a	橙	黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	390	Z 4	X I	1191, 1192	IX a	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							接合
	391	Z 4	X I	1124, 1166	IX a	明赤褐	橙	条痕後ナデ	ナデ	○	○							接合
	392	Y 3	X II	1599	IX b	赤褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○							
	393	Z 3	X	1954	IX b	明赤褐	橙	ナデ後ハケ	ナデ	○	○							
	394	Y 3	X	936	IX b	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							
	395	Z 4	X I	1179	IX b	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	396	Z 3	X	1963	IX b	橙	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○							
	397	Z 3	X	1933	IX b	暗赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	398	W 2	X I	909	IX b	灰オリブ	オリブ黒	ナデ	ナデ	○	○							
	399	Y 2	X II	1626	IX b	明赤褐	灰赤	ナデ	ナデ	○	○							
	54	400	W 1	X I	1383	IX b	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
401		Z 3	X	1224	IX b	赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○							
402		Z 3	X	1249	IX b	にぶい黄褐	明黄褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○							
403		W 2	X	1860, 1866	IX b	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							接合
404		Z 4	X I	1327	IX b	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
405		W 1	X I	2178, 1376	IX b	明黄褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							接合
406		W 2	X I	1764, 898	IX b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							接合
407		U 2	VI	一括	IX b	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
408		Y 3	X	938	IX b	にぶい黄橙	灰褐	ナデ	ナデ	○	○							
409		W 5	X I	5232	IX b	明赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
410		Z 3	X	1425	IX b	褐灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
411		Z 3	X	1211	IX b	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○							
55	412	Z 3	X	1934	IX b	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	413	Z 3	X	1219	IX b	黒褐	暗赤灰	ナデ	ナデ	○	○							
	414	Z 3	X	1227	IX b	暗赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	415	Y 3	X II	1600	IX b	赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	416	Z 3	X I	2326	IX b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	417	V 1	X I	一括	IX b	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
	418	Z3.4	X I	1428, 1113	IX b	黒褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○							接合
	419	Y 3	X I	1482	X a	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
56	420	X 2	X II	2266	X a	褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	421	X 6	X II	6910 6911	X a	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○							接合
57	422	W 2	X	753	X a	にぶい黄褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○							
	423	V 1	X I	4299	X a	黒褐	にぶい黄	ナデ	条痕	○	○							
	424	W 1	X I	4605	X a	黒褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							
	425	Y 5	X II	7265, 7262	X a	暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○							接合
	426	Y 3	X I	2012	X a	黒褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
	427	X 6	X I	6923	X a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
	428	Y 3	X I	1498	X a	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
	429	U 1	X I	3874	X a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	430	X 2	X II	2268	X a	にぶい黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○							
	431	W 5	X I	5013	X a	黒褐	暗灰黄	ミガキ	ナデ	○	○							
	432	Z 3	X	一	X a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	433	W 3	X I	615	X a	明赤褐	明赤褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○							
	434	X 6	X II	6140	X a	にぶい赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							
	435	X 6	X II	6303	X a	黒褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○							
	436	Y 3	X II	1599	X a	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
437	Z 5	X I	2378	X a	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○								
438	Y 3	X II	1593	X a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○								
439	X 6	X II	6790	X a	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○								
58	440	W 1	X	3475	X a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	441	Z 4	X I	1145	X a	赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	442	Y 3	X II	1602	X a	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
	443	W 2	X I	4601	X a	明褐	明黄褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○							

表20 縄文時代中・後期出土土器観察表(7)

挿図	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土						備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他
58	444	Y 2	X I	1704	X a	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	445	Y 3	X I	1971	X a	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	446	Y 3	X I	1506	X a	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	447	Z 4	X I	1324	X a	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	448	W 2	X I	4587, 4594, 4595	X a	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	449	Y 3	X I	1033, 1265	X a	にぶい赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
59	450	Z 3	X	1938	X a	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	451	X 4	X I	476	X a	橙	明褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	452	X 2	X II	2261	X a	にぶい赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	453	Y 2	X I	1717	X a	明褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	454	V 2	X I	4264	X a	明赤褐	オリーフ褐	ナデ	条痕	○	○						
	455	Y 3	X II	1607	X a	褐	橙	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	456	W 5	X	5591	X a	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	457	V 2	X I	4749	X a	明赤褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	458	W 1	X I	1366	X a	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	459	W 5	X I	5095	X a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	460	Z 3	X	943	X a	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	461	Y 4	X I	1081	X a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	462	W 5	X I	5336	X a	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	60	463	W 6	X I	6046	X b	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○					
464		V 1	X I	4322	X b	にぶい褐	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
465		Y 6	X II	7039	X b	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
466		V 2	X I	3845	X b	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
467		Y 5	X II	6966	X b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
468		W 5	X I	5196	X b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
469		Y 5	X II	7294	X b	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
470		V 1	X	3508	X b	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
471		X 5	X I	一括	X b	明褐赤	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
472		Z 3	X	986	X b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
473		X 6	X II	6806	X b	灰褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
474		X 6	X II	7207	X b	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
475		V 2	X I	4694	X b	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
476		W 2	X I	1812, 1813	X b	灰オリーフ	橙	指頭圧痕	指頭圧痕後ナデ	○	○			○			接合
477		Y 5	X II	7129	X c	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
478		Y 2	X I	1681, 2225	X c	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
479		X 2	X II	2225	X c	灰褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○			○	○		
61		480	Y 3	X II	1601	X I a	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○					
	481	Y 3	X II	1594	X I a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	482	Z 4	X II	1319	X I a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	483	Z 3	X	947	X I a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	484	Z 3	X	1212	X I a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	485	V 1	X I	3913	X I a	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
62	486	Y 3	X I	1034	X I b	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	487	V 1	X I	4151	X I b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	488	V 1	X I	3946	X I b	にぶい黄橙	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	489	X 5	X I	6672	X I b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	490	X 5	X I	5904	X I b	褐灰	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	491	V 1	X I	4648	X I b	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	492	Y 3	X II	1588	X I b	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	493	V 1	X I	3960	X I b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	494	Y 3	X II	1595	X I b	橙	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	495	Y 3	X II	1545	X I b	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	496	Y 3	X II	1564	X I b	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	497	X 2	X	1796	X I b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	498	Y 5	X II	7031	X I b	橙	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	499	Z 3	X I	1122	X I b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
63	500	Y 3	X I	1472	X I b	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	501	Y 3	X I	1264, 1036	X I b	明赤褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						接合
	502	X 5	X I	6591	X I b	灰黄褐	にぶい黄橙	条痕	ナデ	○	○						
	503	X 6	X II	6942	X I b	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	504	W 5	X I	5234	X I b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	505	U 3	X I	4492	X I b	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	506	W 2	X I	888	X I b	浅黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	507	W 2	X I	4445	X I b	にぶい黄	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	508	W 2	X I	1350, 1775	X I b	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	509	V 1	X I	43-	X I b	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	510	Z 3	X	1417, 1418	X I b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	511	Y 3	X	931, 930	X I b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	512	W 5	X I	5325	X I b	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	513	Y 4	X I	2099	X I b	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
514	Z 3	X	1237	X I b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
515	W 2	X	726	X I b	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○							
516	U 2	X I	3754	X I b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○							
517	Z 3	X	1258	X I b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							
518	VI,W2	X I	杭	X I b	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○							

表21 縄文時代中・後期出土土器観察表(8)

挿入	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土						備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他
63	519	Z 3	X	1933, 1936	X I b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	520	X5.6	X II	6517, 6884	X I b	にぶい橙	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	521	X 1	X	1350	X I b	にぶい橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	522	W 2	X I	888, 885, 1811	X I b	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	523	X 5	X I	5781	X I b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	524	U 2	X I	3792	X I b	浅黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	525	Z 3	X I	2320	X I b	黒	黒褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						
	526	Z 3	X	1247	X I b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	527	Y 5	X II	6453	X I b	褐灰	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	528	X 5	X I	5927	X I b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	529	X 5	X I	5717	X I b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	530	V 1	X I	4297	X I b	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	531	X 5	X II	7160	X I b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○			○			
	532	Z 2	X I	1752	X I b	橙	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	533	Z 3	X	1252	X I b	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	534	X 5	X I	6083	X I b	黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	535	V 1	X I	3938	X I b	黒褐	黒	ナデ	ナデ	○	○						
	536	Y 4	X I	1041	X I b	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	537	X 6 V 2	X II X I	7292 4742	X I b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	538	Y 4	X	42	X I b	にぶい橙	にぶい赤褐	条痕後ナデ	条痕	○	○						
	539	U 3	X	2508	X I b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	540	W 2	X I	1884	X I b	橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	541	Y 3	X I	2311	X I b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	542	W 5	X I	5265	X I b	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	543	X 6	X II	6465	X I b	赤褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	544	V 6	X II	7918	X I b	褐灰	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	545	X 5	X II	6570	X I b	灰黄褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	546	W 3	X I	535	X I b	褐灰	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	547	Y 6	X II	7083	X I b	にぶい褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	548	W 5	X I	5061, 4968, 5060	X I b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合

表22 縄文時代晩期土器観察表(1)

挿入	レイアウト 番号	出土区	層	取上番号	類	色 調		調 整		胎 土						備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他
	549	Y 4	X	204, 205, 一括	X II a	暗灰黄	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	550	Y 14	X I	2346	X II a	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	551	V 2	X I	4271	X II a	暗灰黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	552	W 2	X	3164	X II a	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	553	V 3	X	一括	X II a	黄褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
		3	X I	4772													
	554	V 2	X I	4752	X II a	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
		3	X	2667													
	555	Z 3	X	969	X II a	黄灰	にぶい黄	ナデ	条痕後ナデ	○	○			○			
	556	V 2	X I	4752	X II a	にぶい黄	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						外面スリ付着
	557	X 5	X	5488	X II a	にぶい黄褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	558	V 2	X	2779	X II a	暗灰黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	559	Y 4	X	229	X II a	灰	灰オリブ	ナデ	ナデ	○	○						
	560	W 2	X	3488, 3424	X II a	黄褐	オリブ黒	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	561	Z 4	X I	1183	X II a	黄褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	562	V 2	X I	2684	X II a	灰	灰オリブ	ナデ	ナデ	○	○						
	563	Y 4	X I	1074	X II a	灰	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	564	V 2	X	2427	X II a	オリブ黒	オリブ黄	ナデ	ナデ	○	○						
	565	X 5	X	5559	X II a	灰	灰黄	ナデ	条痕後ナデ	○	○			○			
	566	X 6	X I	6004	X II a	黒	灰褐	ナデ	ナデ	○	○						
	567	X 6	X I	6010, 6012	X II a	暗灰黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	568	W 2	X	792	X II a	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	569	X 2	X II	2274	X II a	灰黄	にぶい黄褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○						
	570	X 6	X	5564	X II a	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	571	X 5	X I	5815	X II a	黒褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	572	Y 3	X I	1495	X II a	暗褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	573	X 6	X	5565	X II a	黄灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	574	V 2	X	3482	X II a	暗褐	オリブ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	575	X 5	X I	6284	X II a	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	576	Y 3	X I	1505, 1508	X II a	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	577	V 2	X	3483	X II a	黒褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	578	X 4	X I	326	X II a	にぶい黄褐	黒褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○						
	579	X 5	X I	一括	X II a	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	580	U 3	X	2720	X II a	明黄褐	暗灰黄	条痕後ナデ	ナデ	○	○						
	581	Y 4	X	205, 一括	X II a	にぶい黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						3点接合
		W 3	X I	357													
	582	X 5	X I	5864	X II a	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	583	Y 4	X	5	X II a	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	584	V 3	X	2937	X II a	にぶい黄	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						

表23 縄文時代晩期出土土器観察表(2)

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調		調整		胎土						備考	
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他
68	585	W 2	X II	—	X II a	明褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	586	V 3	X X I	2663, 2662, 2914 4772	X II a	橙	明黄褐	糸痕後ナデ	ナデ	○	○						4点接合
	587	W 2	X I	4275	X II a	にぶい黄	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
69	588	X 4	X X I	94 一括	X II b	にぶい黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	589	X 5	X	5451	X II b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○		○				
	590	Y 4	X	11, 31, 32	X II b	にぶい黄	にぶい黄	ミガキ	ミガキ	○	○						3点接合
	591	X 2	X I	2193	X II b	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	592	V 3	X	3332	X II b	にぶい黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						ス入付着
	593	V 2 3	X	2444, 2013 2469, 2467, 2213	X II b	灰オリーブ	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						5点接合
	594	Z 5	X	一括	X II b	灰黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	595	U 2	X	2527	X II b	浅黄	にぶい黄	ミガキ	ミガキ	○	○						
	596	U 2	X	3074	X II b	黒褐	黄灰	ミガキ	ミガキ	○	○						
	597	X 6	X	6183	X II b	黄褐	黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	598	Y 3	X I	1462	X II b	黒	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	599	V 1	X	2602	X II b	暗オリーブ褐	明黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	600	Y 5	X	5474	X II b	にぶい黄	にぶい黄	ミガキ	ミガキ	○	○						
	601	U 3	X	2894	X II b	黒褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○			○			
	602	V 4	X	3309	X II b	黒	黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	603	W 6	X	5597	X II b	オリーブ黒	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
604	X 5	X	一括	X II b	黄褐	黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○							
605	W 2	X I	4702	X II b	黒褐	暗灰黄	ミガキ	ミガキ	○	○							
606	Z 14	X	一括	X II b	黒	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○							
607	X 6	X I	6932	X II b	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○							
608	X 2	X I	2227	X II b	灰	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○							
70	609	V 3 U 2	X	2865 3031	X II b	浅黄	浅黄	ミガキ	ミガキ	○	○						接合
	610	V 3	X	2691	X II b	にぶい黄橙	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						虫喰い跡
	611	X 5	X I	5867, 5872	X II b	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○			○			接合
	612	Z 3	X	976	X II b	橙	橙	ミガキ	ミガキ	○	○						
	613	Y 5	X	5471	X II b	暗灰黄	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○						
	614	V 3	X	2918	X II b	黒褐	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	615	Y 5	X I	5961, 5962	X II b	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○				○		接合
	616	U 2	X	3463	X II b	にぶい黄橙	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
	617	V 2 V 3 U 3 V 3	X	2450 2704 2721 2482	X II b	黒	黒褐	ミガキ	ミガキ	○	○						4点接合
	618	U 3	X	一括	X II b	オリーブ黒	オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	○	○						
619	U 3	X	4809	X II b	浅黄	浅黄	ミガキ	ミガキ	○	○				○			
620	X 5	X I	5869	X II c	黒褐	黒褐	ナデ	ミガキ	○	○							

表24 縄文時代土製品観察表

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調		調整		胎土						備考	
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他
71	621	X 5	X II	7307	—	橙	—	糸痕後ナデ	—	○	○						足形土製品
	622	X 5	X II	一括	—	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
72	623	X 4	X I	5222	—	黄灰	暗灰黄	ナデ	糸痕後ナデ	○	○						
	624	X 1	X I	1347	—	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	625	X 6	X II	6626	—	暗褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	626	X 6	X I	6016	—	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	627	X 5	X II	7242	—	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	628	W 3	X I	1851	—	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	629	X 4	X I	5227	—	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	630	X 5	X II	6624	—	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	631	X 6	X II	一括	—	暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	632	U 1	X I	4126	—	にぶい褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	633	X 4	X I	5225	—	にぶい褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	634	Y 5	X II	6850	—	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	635	X 5	X II	6567	—	褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	636	X 5	X II	6519	—	浅黄	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	637	X 6	X II	6629	—	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	638	X 5	X II	7258	—	褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	639	U 2	X I	3997	—	明赤褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	640	19T	III	1170	—	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	641	X 5	X II	6534	—	にぶい橙	黒褐	ナデ	糸痕後ナデ	○	○						
	642	U 1	X I	3608	—	暗赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
643	W 5	X I	5005	—	明赤褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							
644	W 6	X	一括	—	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○							

表25 縄文時代出土石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	出土区	層位	器種	分類	石材 I	石材 II	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上 番号
74	645	Y 3	X II	石鏃	II	安山岩(サヌカイト)	IV	1.8	1.3	0.3	0.51	1523
	646	V 3	X I	石鏃	II	安山岩(サヌカイト)	IV	2.2	1.4	0.2	0.48	4527
	647	Y 3	VI	石鏃	II	黒曜石(針尾)	V	2.4	1.9	0.3	1.05	-
	648	W 2	X	石鏃	II	頁岩	I	2.2	1.7	0.4	1.02	1894
	649	Y 2	X II	石鏃	I	安山岩(サヌカイト)	IV	2.7	2.6	0.6	3.76	1657
	650	W 2	X	石鏃	IV-I bc	めのう(玉髓)	-	3.1	1.5	0.3	1.37	1896
75	651	U 2	X	鋸歯尖頭器	-	安山岩(サヌカイト)	IV	3.6	2.5	0.6	3.92	2540
	652	V 2	X	鋸歯尖頭器	-	安山岩(サヌカイト)	IV	4.7	3.1	1.05	10.3	3252
	653	V 2	X I	鋸歯縁石器	-	黒曜石(腰岳)	IV	2.1	1.1	0.3	0.56	3827
	654	X 5	X I	鋸歯縁石器	-	安山岩(サヌカイト)	IV	2	1.1	0.5	0.65	5769
	655	V 1	X I	鋸歯縁石器	-	黒曜石(針尾)	V	2.7	1.1	0.4	0.86	4387
	656	U 2	X	鋸歯縁石器	-	安山岩(サヌカイト)	IV	3.7	1.5	0.6	1.56	3072
76	657	Y 2	X II	石匙	II b	安山岩(サヌカイト)	IV	4.1	4.7	1.15	18.7	1667
	658	X 5	X I	二次加工剥片	-	黒曜石(腰岳)	IV	2.1	2	1.1	3.74	5923
	659	A 27	V	スクレイパー	-	黒曜石(腰岳)	IV	4.2	4	1	17.06	-
	660	U 2	X	楔形石器	-	黒曜石(上牛鼻)	I	1.9	1.4	0.9	2.31	3053
77	661	Z 3	III	石核	I a	黒曜石(上牛鼻)	I	2.9	3.1	1.8	14.57	-
	662	X 6	VII	石核	II c	黒曜石(上牛鼻)	I	3.6	2.7	1.6	14.52	7055
	663	Y 2	VII	石核	III c	安山岩(サヌカイト)	I a	6.5	7.2	3.3	147.3	1682
78	664	a 5	VI	磨製横刃型石器	-	頁岩	III	7.8	5.2	1.1	51.88	-
	665	V 1	X I	磨製石斧	II	蛇紋岩	-	4.75	2.55	0.8	14.23	4175
	666	W 5	X I	磨製石斧	II	頁岩	I	6.3	1.8	0.7	11.89	-
	667	X 3	VIII	磨製石斧	II	頁岩	II	5.2	1.8	1	14.97	-
	668	a 3	VIII	磨製石斧	I	変成岩	-	9.2	4.4	1.8	107.6	-
	669	Y 4	X I	磨製石斧	I	ホルンフェルス	-	6.4	6	2.8	140.8	2097
	670	W 5	X I	磨製石斧	I	頁岩	II	5.3	6.8	2.2	84.1	5138
	671	W 2	X	磨製石斧	I	ホルンフェルス	-	26.4	6	5.1	1238.2	800
	672	X 5	X II	磨製石斧	I	安山岩	IV	15.4	6.9	4.3	606.7	6372
	673	Y 5	X II	磨製石斧	II	砂岩	-	9.3	6.7	3.7	311.8	6477
	674	V 1	X I	磨製石斧	III	頁岩	II	7.2	3.3	0.6	15.08	4350
	675	X 6	X II	磨製石斧片	III	頁岩	I	10.9	4.8	2.6	182.4	6800
	676	X 3	VI b	磨製石斧片	-	頁岩	III	5.4	3.2	0.6	9.18	-
	677	W 2	X	磨製石斧片	-	頁岩	II	4.2	4.1	0.85	21.86	760
79	678	X 6	X	礫器	V	砂岩	-	6.9	7.4	2.2	121.55	5526
	679	Y 3	X II	削器	VI	安山岩(サヌカイト)	II	11.6	6.7	2.1	178.5	1515
	680	Y 4	X I	磨石	I b	安山岩	IV	8.4	7.3	3.9	338.7	2073
	681	X 1	VI	磨石	II b	砂岩	-	8.9	9.8	4.9	473.4	-
	682	X 5	X I	磨石	II a	砂岩	-	9.6	6.6	4.5	389	6682
	683	Y 2	X I	磨石	II b	砂岩	-	10	10.45	4.65	810.9	1724
	684	W 2	VI	磨石	II b	砂岩	-	12.6	7.7	3.9	601.7	-
	685	Y 5	X	磨石	II b	砂岩	-	12.4	8.7	4.1	588.8	5473
	686	X 6	X II	磨石	II b	砂岩	-	10.5	7	3.4	318.3	6640
80	687	W 2	VI	敲石	III	砂岩	-	11.4	4.4	3.6	252	-
	688	J 30	III c	敲石	III	砂岩	-	15.6	2.95	3.75	246	272
	689	a 2	VI b	敲石	III	頁岩	I	9.6	2.95	3.3	133.75	-
	690	X 2	VI	敲石	III	頁岩	II	7.8	3	1.2	42.42	-
	691	Y 2	X I	砥石	-	砂岩	-	11.4	5.6	2.2	335.4	1718
81	692	X 6	X II	石錘	I a	頁岩	II	4.2	6.9	1.7	71.9	6625
	693	W 3	X	石錘	I a	安山岩	IV	9.1	9.97	2.5	266.8	278

## 第6章 弥生・古墳時代の調査（A地点）

### 第1節 調査の概要

弥生時代・古墳時代は、V層を包含層とする。遺構はともに検出されず、遺物は土器がほとんどである。弥生時代の土器はI類からVII類とし、古墳時代の土器はVIII類・IX類に分類した。

### 第2節 遺物

弥生時代・古墳時代の遺物包含層での出土状況は、V層を中心に遺物の出土が見られた。包含層の出土状況は小破片が多い。これらに関しては、区一括で取り上げを行い、比較的大きい破片については、番号を付けて取り上げを実施した。

包含層の概要としては、弥生時代前期から古墳時代後期の遺物が出土している。

#### 1 甕形土器

甕形土器は、I類からIX類に分類した。

##### (1) I類（第82図694・695）

口縁部に刻目突帯が貼り付けられた土器である。694は、口縁部が直立し、棒状工具で刺突される。695は、口縁端部に刻目突帯が施され、口唇部は平坦になっている。

##### (2) II類（第82図696～699）

口縁端部が逆L字状になるもので断面が丸みを帯びる三角形状、方形状を呈するタイプに分けられる。また、口縁端部がまっすぐ伸びるものと上方へあがるものがある。696・697は、口縁部断面が丸みを帯び、口唇部の上面は平坦になっている。口縁部外面は、丁寧なナデ調整が施されている。698・699は、口縁部（突帯）の断面が方形に近く、わずかに凹みがある。口縁部上面は凹み、内側は強く張り出し尖っている。口唇部は丸く仕上げられている。698は、口縁部上面に沈線が施されている。

##### (3) III類（第82図700～702）

口縁部は、肥厚して逆L字状になっている。口縁部上面は凹み、内側は強く張り出し尖っている。口唇部は丸く仕上げられている。700・701は、口縁部内側の張り出しが強く、上面に凹みがある。702は、口縁部内側への張り出しは小さく、口縁部が上方へ立ち上がっている。

##### (4) IV類（第82図703）

IV類は1点のみである。703は、口縁部外面は逆L字状になっている。口縁部内側への張り出しは弱く、口唇部は丸くなっている。内外面ともに赤色顔料が塗布されている。口縁部上面には、暗文が施され、丁寧にミガキ調整が施されている。

##### (5) V類（第82図704）

V類は1点のみである。704は、口縁部はくの字状で、内側への張り出しは小さいが、明瞭な稜が残る。口縁部上面は平坦で、直線的に伸びている。口縁部は細長く、口縁部下に断面三角形の突帯が廻っている。

##### (6) VI類（第82図705～707）

口縁部がくの字状に強く外反し、口縁部内面に稜線が認められる。705は、口縁部内面に明確な稜線が確認できる。胴部はあまり膨らまず、直線的に立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。口縁部上面に、赤色顔料が塗布される。屈曲部外面付近にはススが付着している。屈曲部から口唇部の内外面には、横方向にナデ調整が施され、屈曲部から胴部内面にはハケ目調整が施されている。706は、口縁部内面に稜線は認められるが屈曲は弱い。胴部はわずかに膨らみ、口縁端部は丸みを帯びる。屈曲部から胴部への内外面には工具によるナデ調整が施されている。707は、口縁部片で、くの字状の外反が弱い。口縁部内面に稜線は認められるが、張り出しは見られない。

##### (7) VII類（第82図708～第83図710）

口縁部がくの字状に外反するものである。口縁部内面に弱い稜が見られる。708・710は、胴部がわずかに膨らみ、口唇部は平坦でやや丸みを帯びる。屈曲部から口唇部の外面は、横方向にナデ調整が施されている。709は、胴部があまり膨らまないタイプである。屈曲部外面は縦方向にハケ目調整が施されている。

##### (8) VIII類（第83図711～715）

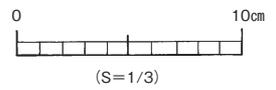
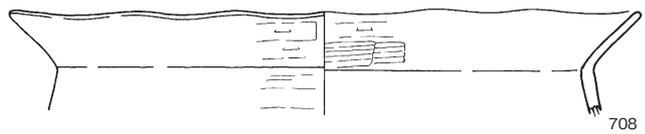
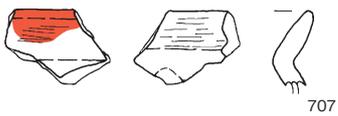
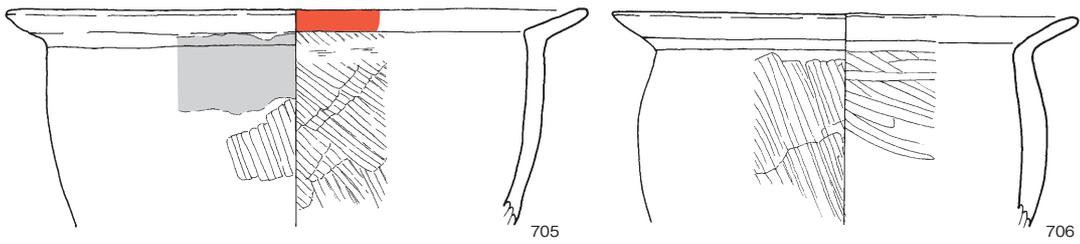
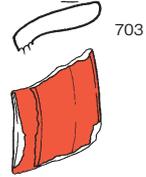
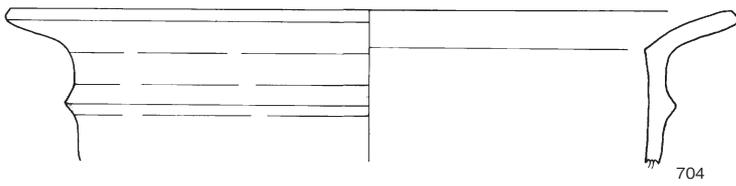
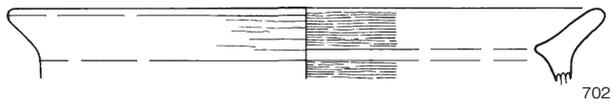
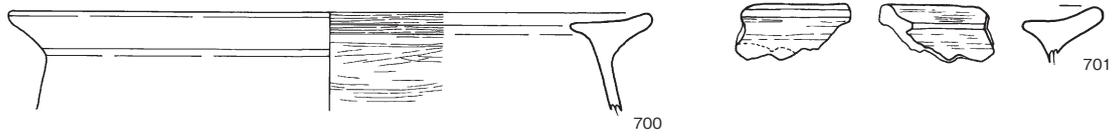
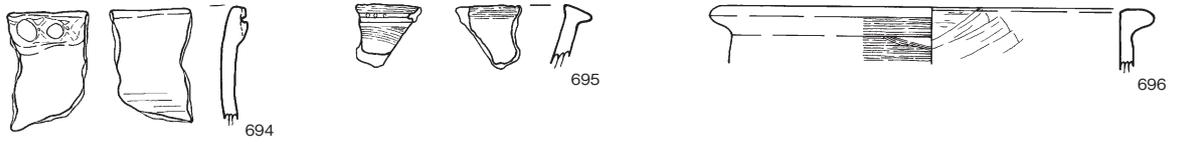
口縁部がゆるやかに外反するものである。口縁部の稜はほとんど見られない。712は、口縁部がゆるやかに外反するものである。頸部はしまり、胴部が膨らみ直線的に底部へ至る。内外面ともにハケ目調整が施されている。713は、口縁部がゆるやかに外反し、口唇部は丸みを帯びる。屈曲部から口唇部に向かって縦方向のハケ目調整の後ナデ調整が施されている。

##### (9) IX類（第83図716～721）

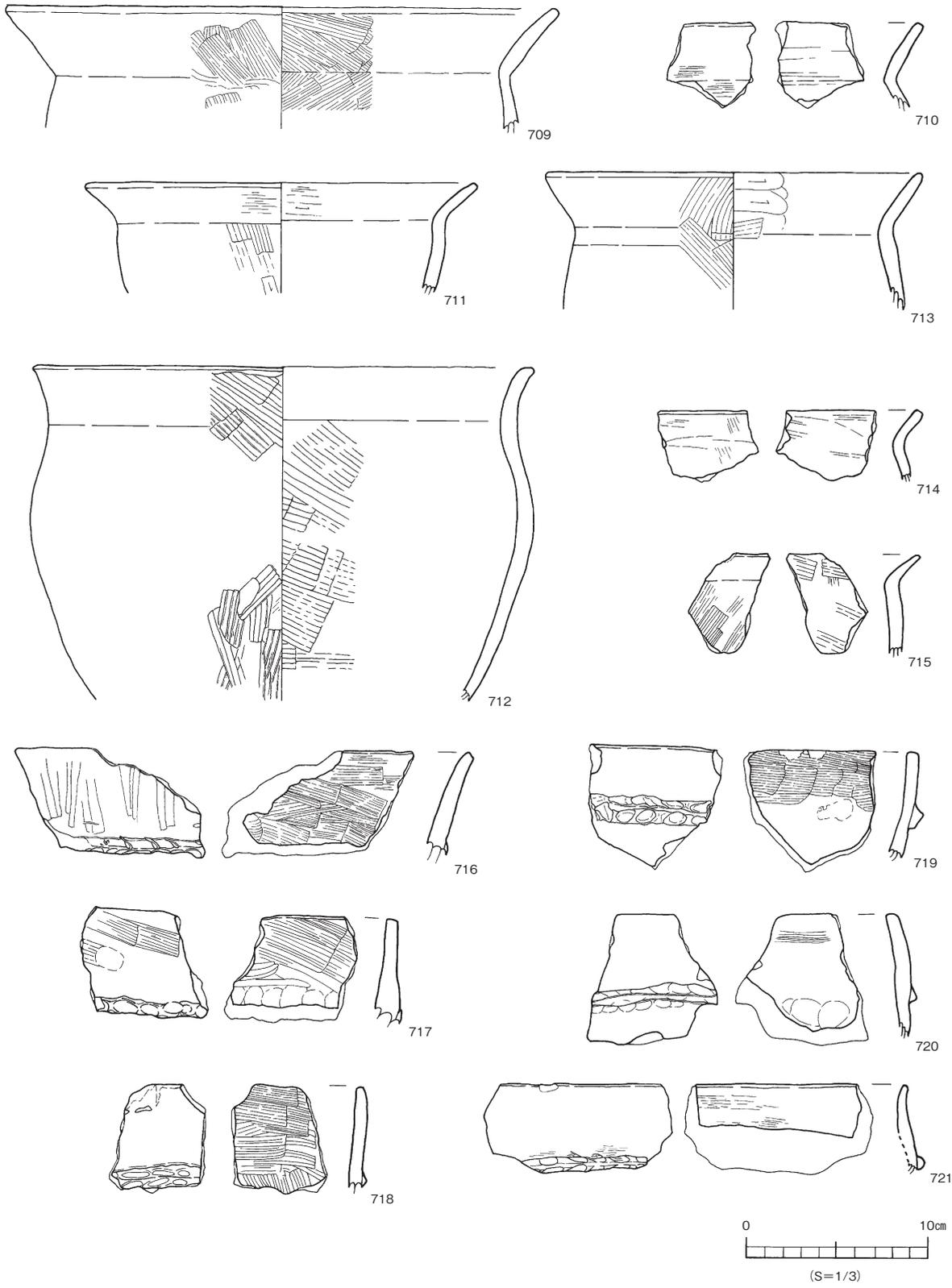
口縁が直立、もしくは内湾するものである。外面に1条の突帯が施される。719は、口縁部が直立し、外面に1条の絡縄突帯が施されている。内面に横方向のハケ目調整が施されている。720・721は、口縁部が内湾し、外面に1条の絡縄突帯が施され、棒状工具で刻目が施されている。

##### (10) 胴部（第84図722～724）

722～724は胴部片である。722は、絡縄突帯が施されている。外面は、ナデ調整で仕上げられ指頭玉痕が見られる。



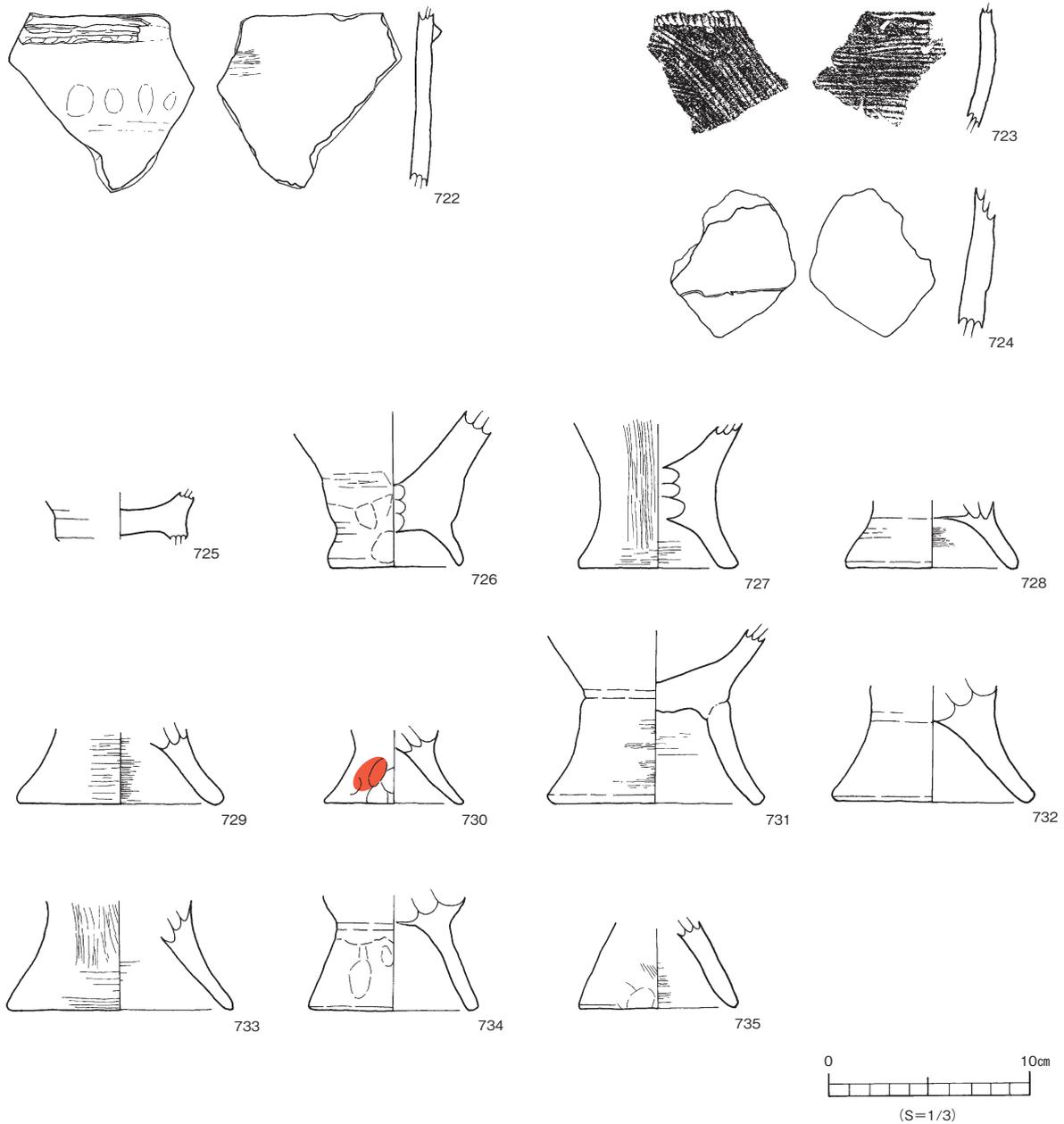
第82図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（1）



第83図 古墳時代出土遺物実測図(2)

(1) 底部 (第84図725~735)

底部は中空の脚台である。725~735は直線的に開く低脚のタイプである。726の天井部は平坦になっている。外面は横方向にナデ調整が施され、指頭圧痕が見られる。729~735は、やや高い脚である。731は、やや外反気味に開く。天井部は平坦で、内外面とも横方向にナデ調整が施されている。



第84図 古墳時代出土遺物実測図 (3)

## 2 壺形土器 (第85図736～第87図754)

壺形土器については、全体形状の把握できるものが少なく、分類はできなかった。

736は、頸部から胴部にかけての破片である。外面には赤色顔料が塗布され、ミガキ調整が施されている。737～740は口縁部片である。737・738は口縁部が頸部から直立気味に外反するものである。737は頸部に1条の絡縄突帯が廻る。739・740は湾曲して外反し、口唇部が丸みを帯びる。739の外面はケズリ調整が施されている。741～745は胴部～底部である。741は胴部が膨らみ、平底のタイプである。内外面ともにハケ目後ナデ調整が施されている。胴部上半に炭化物の付着がみられる。742は、頸部から胴部上半で、胴部は膨らみ1条の刻目突帯が廻る。743は、胴部の最大径が上方にあり、肩が張るタイプである。746～751は、胴部片である。747は、断面が四角形の突帯が廻り、大型の壺形土器と考えられる。746・748・751は断面三角形の突帯が廻るものである。746は、突帯の外面にヘラ状工具により左斜め方向の刻目が施されている。752～754は、壺形土器の底部である。いずれも平底で、754はやや上げ底状になっている。

## 3 鉢形土器 (第87図755～757)

755は、口縁端部が外側へ屈曲し口唇部は丸みを帯びる。756は、底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は直立し平坦となっている。757は、口縁部がやや内湾する。脚台は付かず、器形はコップ状と思われる。

## 4 高坏形土器 (第87図758～760)

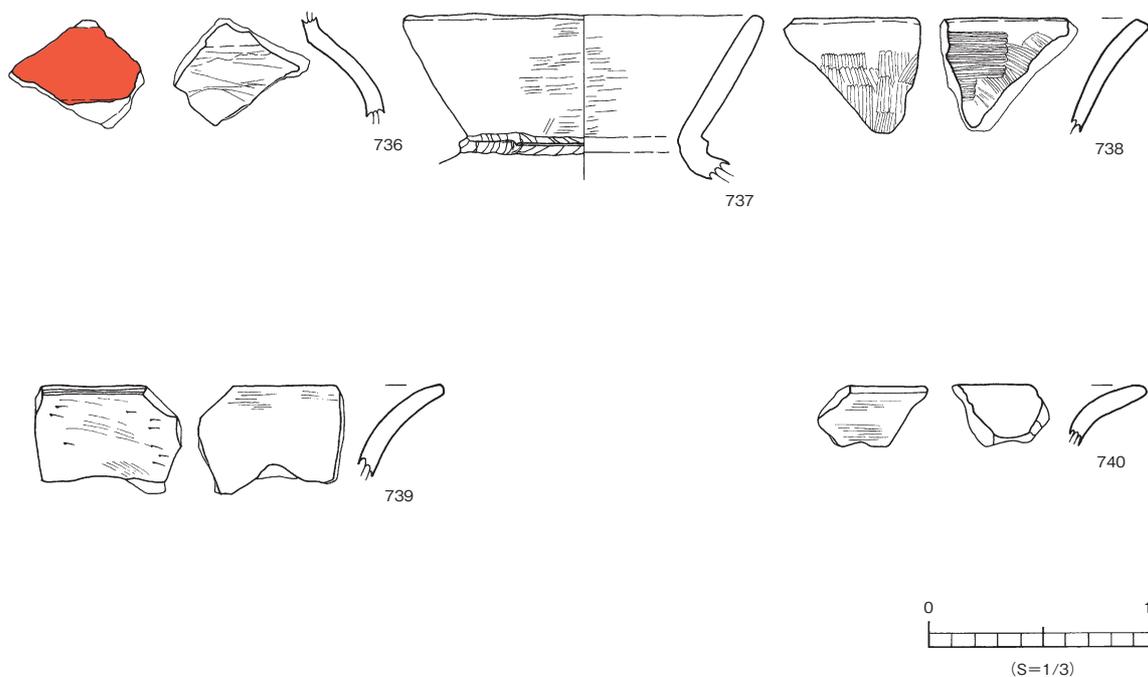
758・759は、坏部で口縁部に向かってゆるやかに内湾し、碗状を呈する。外面には赤色顔料が塗布され、ミガキ調整で仕上げられている。760は、脚部である。上部から接地面方向にまっすぐ下がり、裾部は外へ広がると考えられる。

## 5 甑形土器 (第87図761)

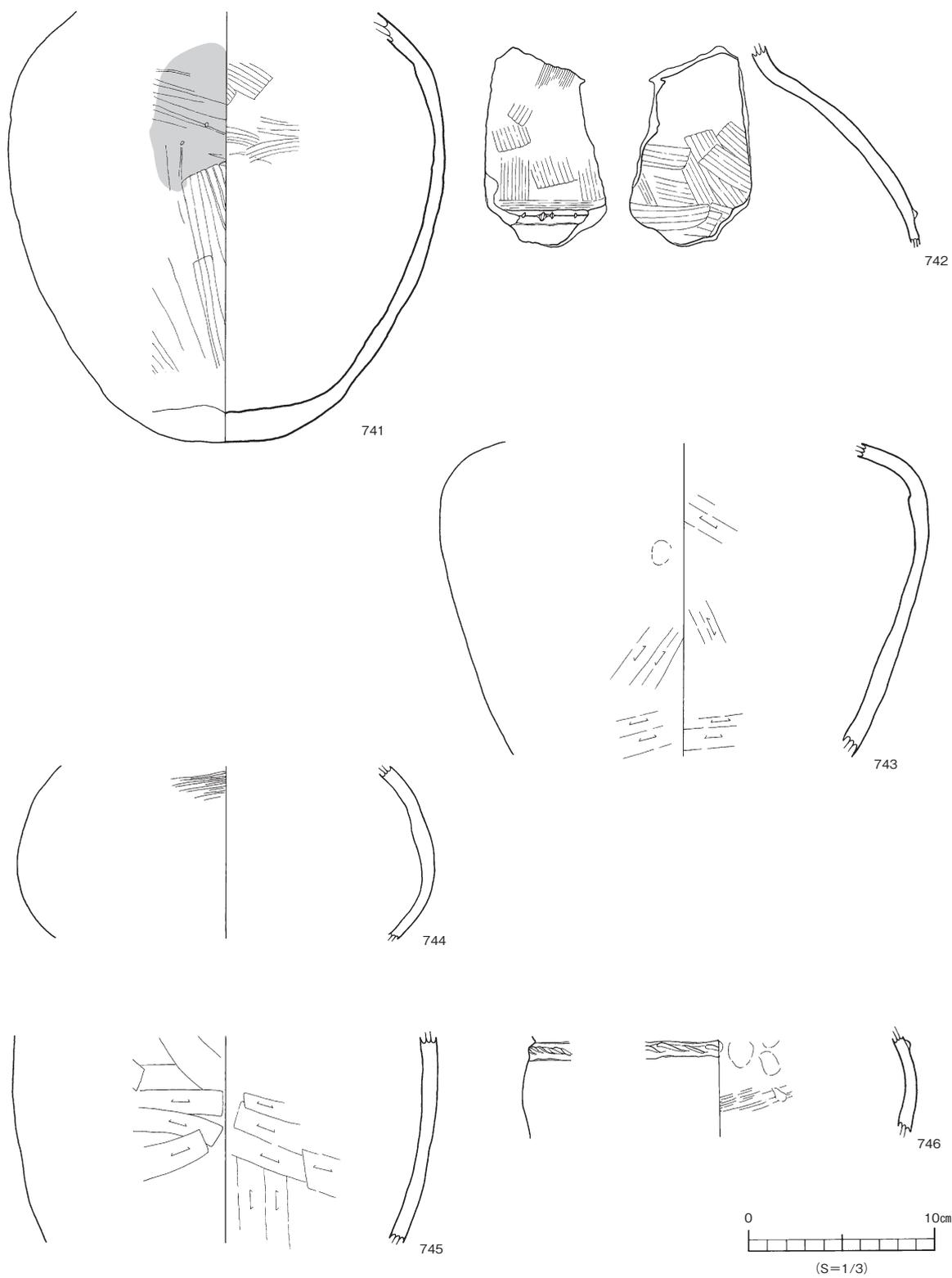
761は、口径22cm・器高13.7cm・底径7cmの「つつぬげタイプ」である。底部からゆるやかに立ち上がり、口唇部はやや尖り気味となっている。蒸気孔端部は、指頭圧痕が確認できる。内外面は、ナデや工具ナデで仕上げられている。

## 6 手づくね土器 (第87図762～764)

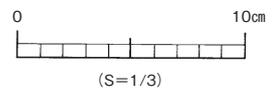
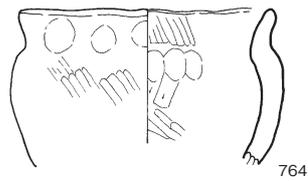
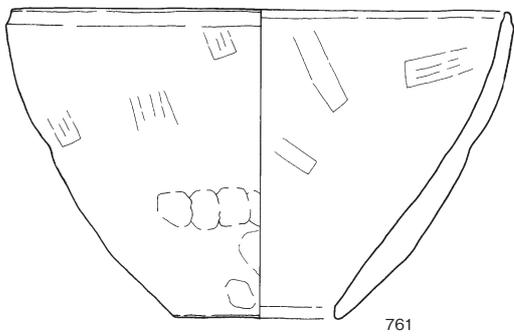
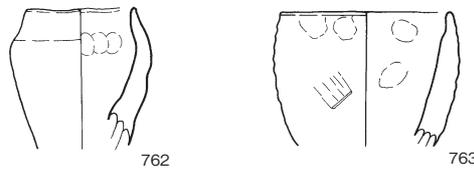
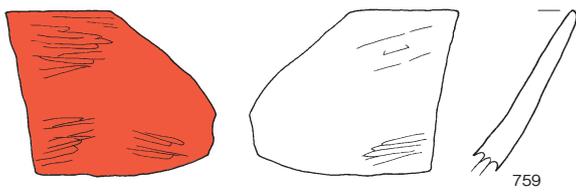
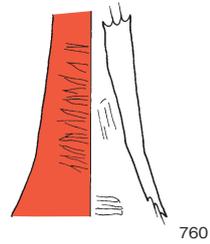
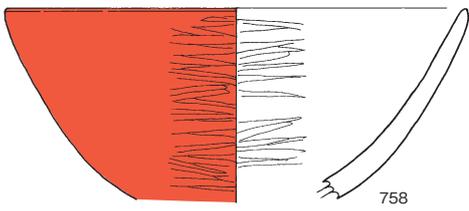
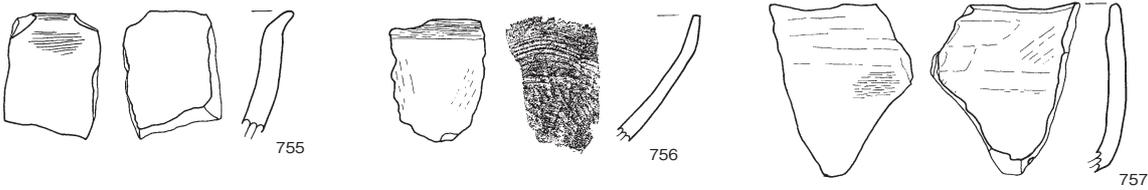
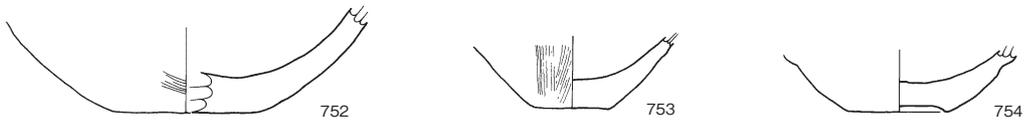
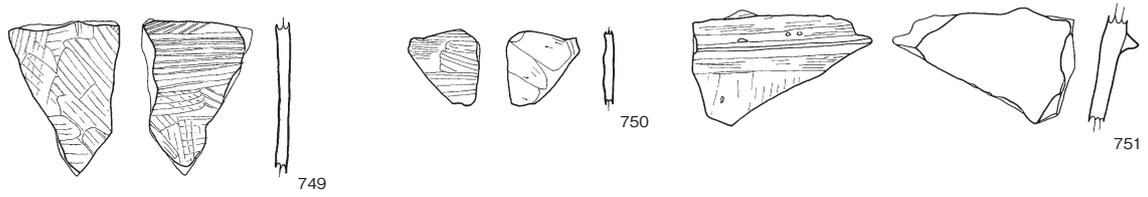
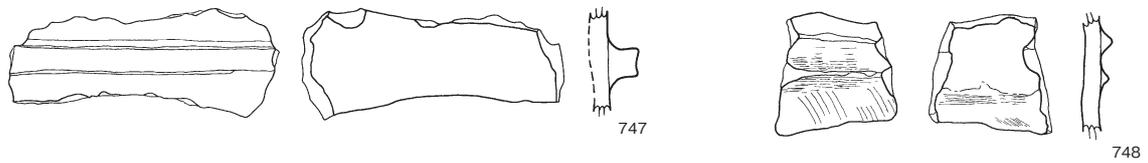
口縁部が内湾するもの(762)、直立するもの(763)、外反するもの(764)がある。



第85図 古墳時代出土遺物実測図(4)



第86図 古墳時代出土遺物実測図(5)



第87図 古墳時代出土遺物実測図(6)

表26 弥生・古墳時代出土遺物観察表

挿図	番号	出土区	層	取上番号	器種	類	部位	色調		調整		胎土						備考		
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石		その他	
82	694	D	27	III	一括	甕形土器	I	口縁	にぶい黄褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	695	D	25	IIb	一括	甕形土器	I	口縁	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	696	J	30	III	150	甕形土器	II	口縁	黒	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	697	K	30	IIb	一括	甕形土器	II	口縁	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	698	K	30	III	99	甕形土器	II	口縁	黒	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	699	K	30	III	114	甕形土器	II	口縁	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ			○					
	700	J	30	IIIc	176	甕形土器	III	口縁	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	701	J	30	IIIc	246	甕形土器	III	口縁	にぶい褐	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	702	D	27	III	一括	甕形土器	III	口縁	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	703	K	30	III	124	甕形土器	IV	口縁	赤褐	赤褐	ミガキ	ミガキ	○	○						赤色顔料, 暗文
	704	D	28	III	一括	甕形土器	V	口縁	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	705	J	30	IIIc	260	甕形土器	VI	口縁	にぶい黄橙	明黄褐	横ナデ	ハケ目横ナデ	○	○						スス付着, 赤色顔料
	706	J	30	IIIc	267	甕形土器	VI	口縁	赤褐	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
	707	K	30	III	107	甕形土器	VI	口縁	にぶい橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						赤色顔料
708	N	2	VII	一括	甕形土器	VII	口縁	黒褐	褐	工具ナデ	ナデ	○	○							
83	709	N	2	VII	一括	甕形土器	VII	口縁	褐	にぶい橙	ハケ目, ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
	710	N	2	VII	一括	甕形土器	VII	口縁	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	711	J	30	IIIc	243	甕形土器	VIII	口縁	黒褐	暗褐	工具ナデ, ナデ	工具ナデ後ナデ	○	○						
	712	B	31	III	一括	甕形土器	VIII	口縁	橙	橙	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	713	F	28	III	一括	甕形土器	VIII	口縁	にぶい橙	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
	714	K	30	IIc	14	甕形土器	VIII	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目	○	○	○					
	715	K	30	IIIc	223	甕形土器	VIII	口縁	浅黄	にぶい橙	ナデ, ハケ目	ナデ, ハケ目	○	○						
	716	D	28	III	一括	甕形土器	IX	口縁	にぶい黄橙	橙	工具ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						絡縄突帯
	717	D	26	III	一括	甕形土器	IX	口縁	橙	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						絡縄突帯
	718	J	30	IIIc	249	甕形土器	IX	口縁	浅黄橙	明黄褐	ナデ	ハケ目	○	○						絡縄突帯
	719	C	28	III	一括	甕形土器	IX	口縁	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						絡縄突帯
	720	F	26	IIb	一括	甕形土器	IX	口縁	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○						絡縄突帯
	721	J	30	IIIc	257 258	甕形土器	IX	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						絡縄突帯
	84	722	F	27	IIb	一括	甕形土器	-	胴部	淡黄	浅黄	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	○	○					
723		C	23	IIb	一括	甕形土器	-	胴部	にぶい褐	黒	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○						
724		J	30	IIIc	一括	甕形土器	-	胴部	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
725		A	27	III	一括	甕形土器	-	脚部	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
726		J	30	IIIc	191	甕形土器	-	脚部	橙	橙	指頭圧痕, ナデ	ナデ	○	○						
727		J	30	IIIc	283	甕形土器	-	脚部	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	○	○						
728		J	30	IIIc	273	甕形土器	-	脚部	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
729		I	30	IIIc	255 270	甕形土器	-	脚部	黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
730		D	28	III	一括	甕形土器	-	脚部	にぶい黄橙	黄灰	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	○	○						赤色顔料
731		J	30	IIIc	274	甕形土器	-	脚部	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
732		D	27	III	一括	甕形土器	-	脚部	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
733		N	2	VII	一括	甕形土器	-	脚部	橙	明黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
734		A	27	III	一括	甕形土器	-	脚部	橙	にぶい橙	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	○	○						
735		J	30	IIIc	251	甕形土器	-	脚部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	○	○						
85	736	J	30	IIIc	一括	壺形土器	-	頸部	にぶい赤褐	褐灰	ミガキ	ナデ	○						赤色顔料	
	737	E	29	III	一括	壺形土器	-	口縁	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	738	F	26	IIb	一括	壺形土器	-	口縁	橙	橙	ハケ目	ハケ目	○	○						
	739	C	23	IIb	一括	壺形土器	-	口縁	橙	灰白	ケズリ, ナデ	ナデ	○	○						
	740	J	30	IIIc	220	壺形土器	-	口縁	淡橙	淡橙	工具ナデ	ナデ	○	○						
	86	741	J	30	IIIc	189	壺形土器	-	肩部~ 底部	橙	橙	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	○	○					
742		B	24	IIb	一括	壺形土器	-	肩部	にぶい黄橙	にぶい黄	ハケ目	ハケ目	○	○						
743		J	30	IIIc	178,27 3	壺形土器	-	胴部	にぶい黄橙	黄橙	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	○	○						
744		J	30	IIIc	182	壺形土器	-	胴部	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
745		J	30	IIIc	177 278	壺形土器	-	胴部	明黄褐	浅黄	工具ナデ	工具ナデ		○	○	○				
746		C	23	IIb	一括	壺形土器	-	胴部	橙	橙	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○	○	○				刻目突帯
87	747	J	30	IIIc	204	壺形土器	-	胴部	橙	橙	ナデ, ハケ目	ナデ, ハケ目	○	○						突帯
	748	N	2	VII	一括	壺形土器	-	胴部	橙	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						突帯
	749	E	29	III	一括	壺形土器	-	胴部	黄橙	浅黄橙	ハケ目	ハケ目	○	○						
	750	D	25	IIb	一括	壺形土器	-	胴部	橙	浅黄橙	ハケ目	ケズリ	○	○	○					赤色顔料
	751	J	30	IIIc	一括	壺形土器	-	胴部	明褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						突帯
	752	J	30	IIIc	192	壺形土器	-	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	753	C	23	IIb	一括	壺形土器	-	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	754	E	24	IIb	一括	壺形土器	-	底部	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	755	J	30	III	161	鉢形土器	-	口縁	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	756	N	2	VII	一括	鉢形土器	-	口縁	橙	明褐	ナデ	ハケ目	○	○						
	757	J	30	IIIc	266	鉢形土器	-	口縁	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	工具ナデ, ナデ	○	○						
	758	J	30	IIIc	192	高坏形土器	-	口縁	赤褐	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○						赤色顔料
	759	J	30	IIIc	132 143	高坏形土器	-	口縁	赤	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○							赤色顔料
	760	C	24	IIb	一括	高坏形土器	-	脚部	明赤褐	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	○	○						赤色顔料
761	J	30	IIIc	264	甕形土器	-	口縁~ 底部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ	○	○	○						
762	H	25	IIb	一括	手捏ね土器	-	口縁	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○							
763	H	25	IIb	一括	手捏ね土器	-	口縁	浅黄橙	浅黄橙	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	○	○	○						
764	D	27	III	一括	手捏ね土器	-	口縁	赤褐	暗赤褐	ヘラケズリ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	○	○	○						

## 第7章 古代の調査 (A地点)

### 第1節 遺構

古代の遺構は、IV層の上面で検出され、埋土はⅢ層を中心としている。この時期の遺構としては、土坑が1基検出されている。



第88図 土坑実測図

### 土坑 (第88図)

F-30区で検出された。長軸方向は、東西方向で1.15m、短軸方向は南北方向で0.65mである。平面形は、略楕円形を呈する。検出面からの深さは、約15cmと浅い。底面は丸みを帯び、ゆるやかに立ち上がる。底面近くから軽石や頁岩などの礫が見付かっている。埋土中から礫以外の遺物は出土しなかった。

### 第2節 遺物

#### 1 土師器

##### (1) 坏 (第89図765~771)

765・766は、口縁部片である。765は、口径が15.4cmで口縁部はやや外反する。766は、口径が約12cmで、体部は丸みをもって開く。767~771は、底部である。768は、底径が6.4cmで底部は厚い。見込みは平坦ではなく、中央部が盛り上がっている。

##### (2) 埴 (第89図772~783)

772~778は、口縁部である。775~777は、胴部が直線的に開くものである。778は、口縁部が外反している。779~783は、高台の付いた埴の底部である。「ハ」の字状に広がる高台のもの(779)、低い高台で高台端部が尖るもの(780)、低い高台で端部が丸いもの(781・782)などがある。783は、刻書土器である。文字であるか記号であるか判読できない。

##### (3) 蓋 (第89図784・785)

784・785は、口径12~13cm程度で天井部端部は下方に折り曲げられている。

##### (4) 内黒土師器 (第89図786~789)

22は、坏の底部で底径は6.0cmである。底部からの立ち上がりは丸みをもつ。787・788は、埴である。体部は丸みをもって立ち上がる。789は、埴の底部で高台は短い。

##### (5) 赤色土器 (第89図790~795)

I類(790~793)内面に赤色顔料が施されるもの  
790・791の高台はやや高く、「ハ」の字状に広がる。792・793は高台が低く、あまり開かない。

II類(794)外面に赤色顔料が施されるもの  
794は、埴である。摩耗による顔料の剥落が著しい。

III類(795)内外面に赤色顔料が施されるもの  
795は、埴である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。

##### (6) 土師甕 (第89図796)

796は、口縁部は逆L字状に大きく外反し、胴部が張らないものである。口径は、24.4cmで外面はハケ目、内面はヘラケズリ調整が施されている。

#### 2 須恵器

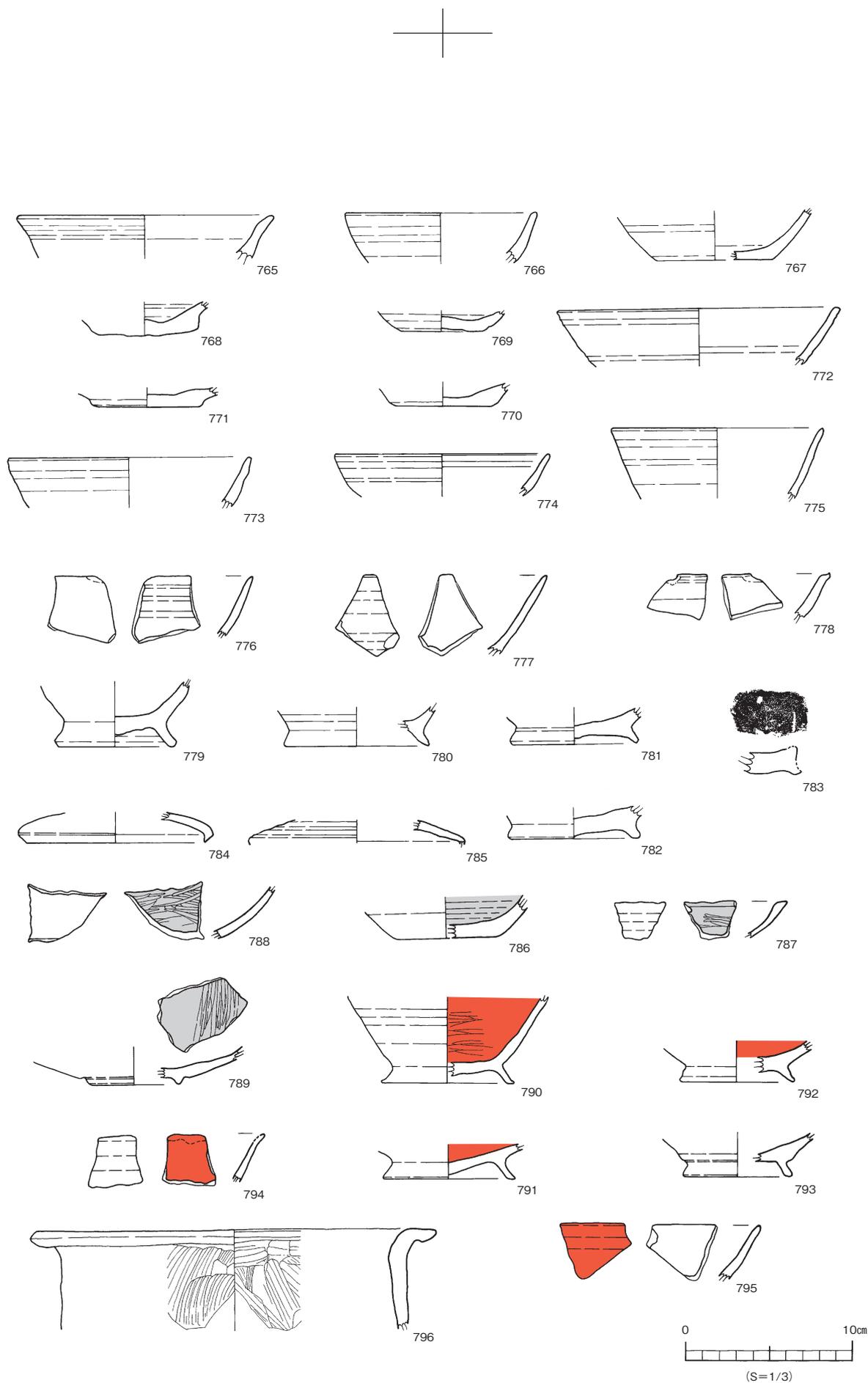
須恵器には、埴・蓋・甕・壺などが出土している。

##### (1) 埴 (第90図797)

797は、口径が13.0cmで胴部は直線的に開き、口縁端部は丸みを帯びる。

##### (2) 蓋 (第90図798~800)

798・799は、端部近くの内面に小さなかえりがつくものと考えられる。かえりは、断面三角形で天井部端部は細くなっている。800は、つまみのない蓋と思われる。



第89图 古代出土遺物実測図(1)

(3) 甕 (第90図801～第92図814)

801～803は口縁部である。801～803は、外反する口縁部が端部近くで屈曲し、二重口縁状となる。801は、櫛描波状文が施され、口径は47.0cmの大型の甕である。804～814は、胴部である。805は、外面に平行文タタキ、内面には車輪文タタキが見られる。808は、外面に格子目タタキ、内面に同心円当て具痕がみられる。809～813は、外面に平行タタキが見られるものである。814は、外面には擬格子目タタキ、内面に平行当て具と同心円当て具痕が見られる。

(4) 壺 (第92図815～822)

815は、短く外反し口唇部は丸みを帯びる。816は、口縁部から頸部である。口縁端部がくの字状に屈曲し、甕のような二重口縁状となる。817～822は頸部(胴部)である。821は、胴部で球状を呈する。822

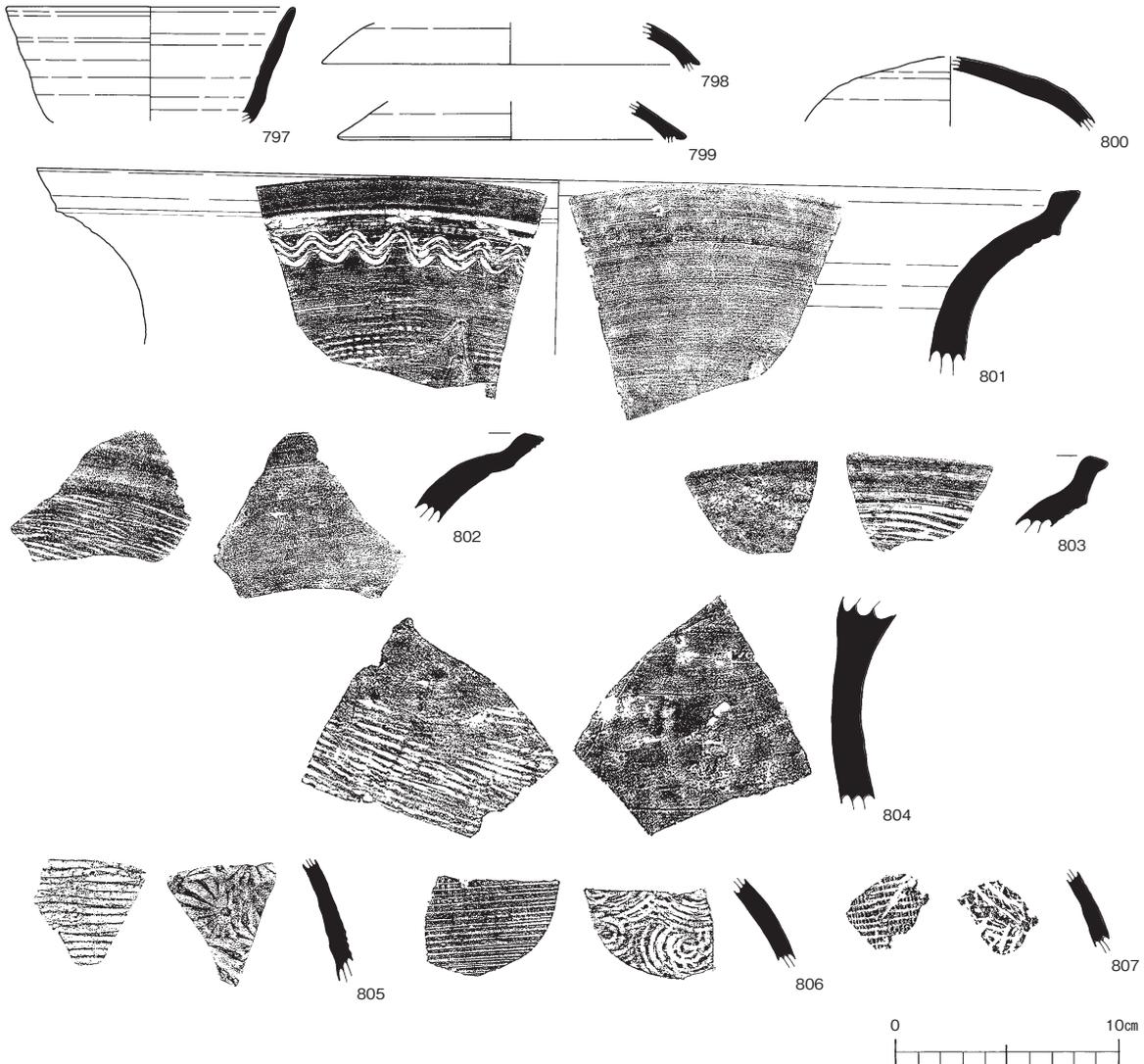
は、壺の胴部下半である。直線的に立ち上がり、外面は格子目タタキ、内面は粘土接合痕や指頭圧痕が見られる。

3 土製品 (土錘) (第92図823・824)

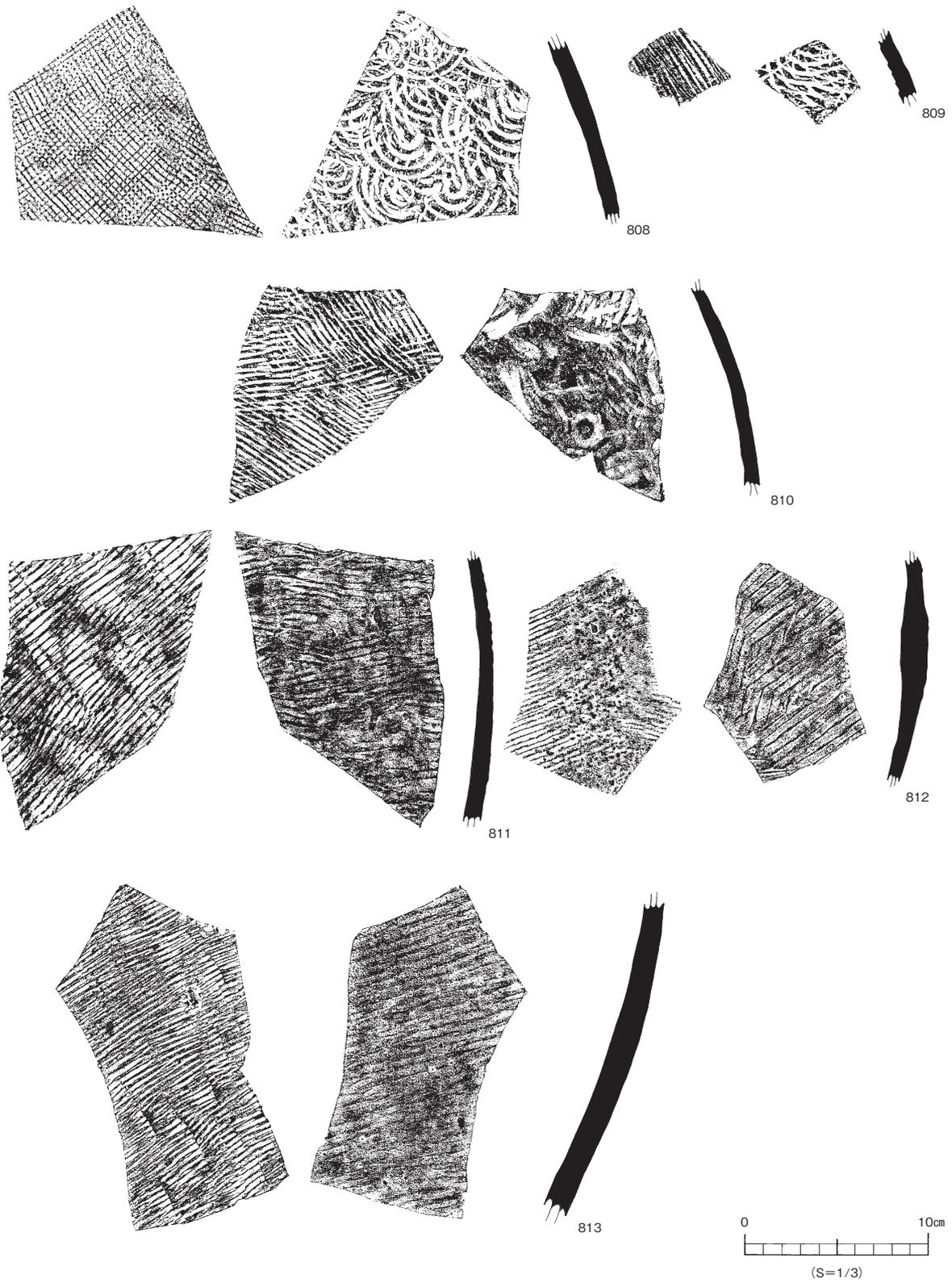
円筒状を呈する粘土の長軸方向に孔を穿った管状土錘である。823は、最大長5.0cm、最大幅1.8cm、孔径0.7cmである。824は、最大長3.6cm、最大幅1.2cm、孔径0.4cmである。

4 瓦 (第92図825)

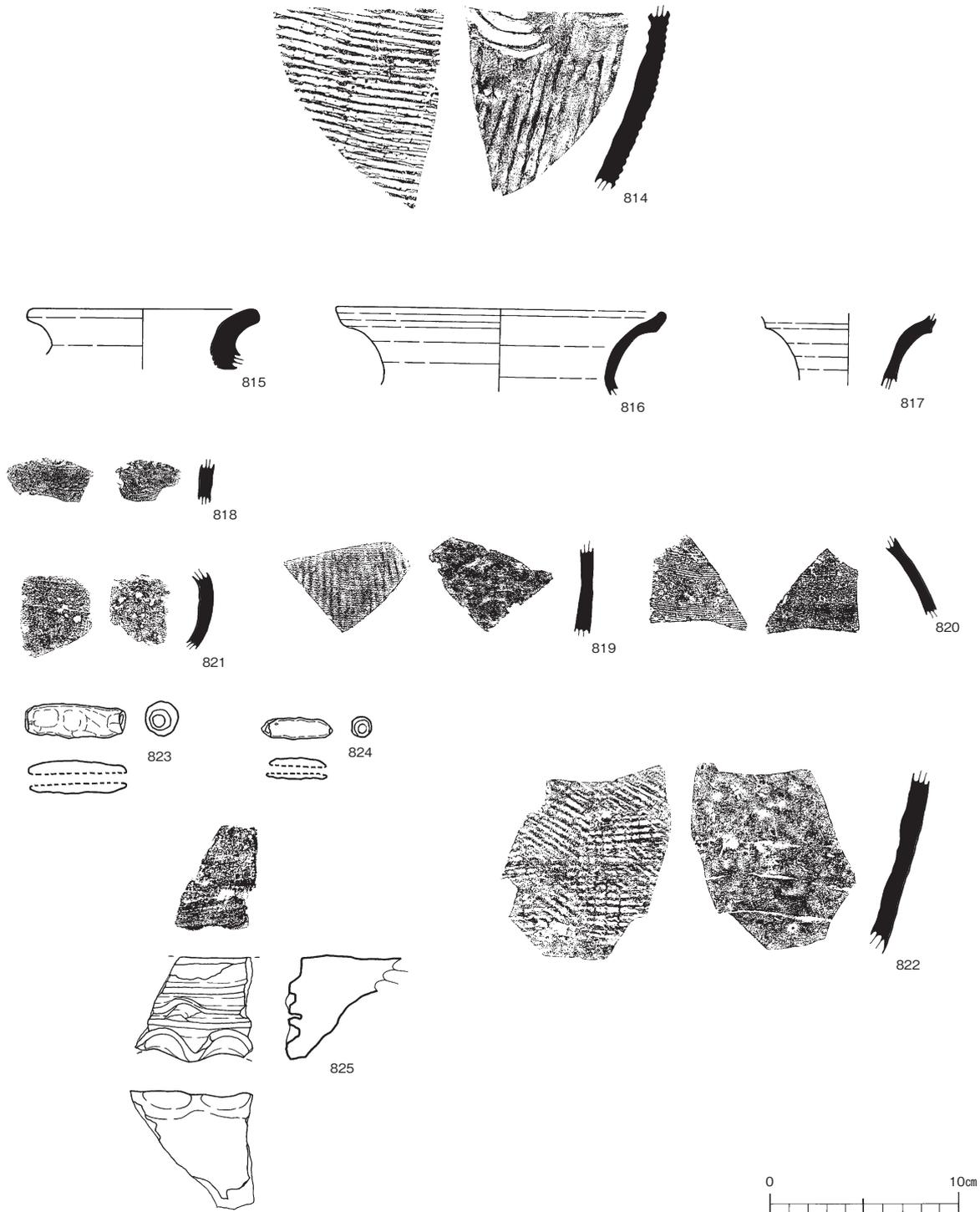
1点を図化した。825は、軒平瓦と思われる。古代で取り上げたが、それ以降の時期の可能性も考えられる。



第90図 古代出土遺物実測図 (2)



第91図 古代出土遺物実測図(3)



第92図 古代出土遺物実測図(4)

表27 古代出土遺物観察表 (1)

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備考	
										外面	内面	外面	内面		
89	765	F	29	VIII	畝	土師器	坏	15.4	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	766	C	28	III	一括	土師器	坏	11.6	—	—	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	767	J	30	IIIc	一括	土師器	坏	—	6.8	—	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	768	J	30	IIIc	281	土師器	坏	—	6.4	—	にぶい黄橙	淡黄	回転ナデ	回転ナデ	底面にスス付着
	769	I	30	IIIc	一括	土師器	坏	—	5.0	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	770	J	30	IIc	71	土師器	坏	—	6.0	—	淡黄	淡黄	回転ナデ	回転ナデ	
	771	J	30	IIIb	174	土師器	坏	—	6.8	—	浅黄	にぶい黄	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	772	J	30	IIc	39	土師器	壺	17.0	—	—	橙	にぶい黄褐	回転ナデ	回転ナデ	
	773	F	29	VIII	畝	土師器	壺	14.6	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄褐	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	774	J	30	IIIe	289	土師器	壺	13.0	—	—	灰黄	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	775	A	26	III	一括	土師器	壺	12.8	—	—	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	776	I	30	IIIc	一括	土師器	壺	—	—	—	明黄褐	にぶい黄褐	回転ナデ	回転ナデ	
	777	J	30	IIb	一括	土師器	壺	—	—	—	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	
	778	D	27	III	一括	土師器	壺	—	—	—	黄橙	黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	779	C	24	IIb	一括	土師器	壺	—	6.8	—	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	780	J	30	IIIc	277	土師器	壺	—	8.6	—	浅黄橙	浅黄	回転ナデ	回転ナデ	
	781	J	30	IIIe	305	土師器	壺	—	7.5	—	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	782	J	30	IIIe	292	土師器	壺	—	8.0	—	黄橙	黄橙	回転ナデ	回転ナデ	外底面にスス付着
	783	J	30	IIc	44	土師器	壺	—	—	—	にぶい黄橙	明黄褐	回転ナデ	回転ナデ	刻書土師器
	784	A	27	III	一括	土師器	蓋	11.6	—	—	黄橙	黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	785	J	30	IIc	40	土師器	蓋	—	—	—	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	786	I	30	IIIe	303	内黒土師器	坏	—	6.0	—	黒褐	黒褐	回転ナデ	回転ナデ	
	787	C	23	IIb	一括	内黒土師器	坏	—	—	—	浅黄	黒	回転ナデ	へラミガキ	
	788	I	30	IIIc	—	内黒土師器	壺	—	—	—	にぶい黄	黒	回転ナデ	へラミガキ	
	789	H	26	IIb	一括	内黒土師器	壺	—	5.2	—	浅黄	黒	回転ナデ	へラミガキ	
	790	I	30	IIIe	297	赤色土器Ⅰ類	壺	—	11.0	—	浅黄橙	橙	回転ナデ	へラミガキ	
	791	A	27	III	一括	赤色土器Ⅰ類	壺	—	8.0	—	浅黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	792	J	30	IIIe	294	赤色土器Ⅰ類	壺	—	6.9	—	にぶい橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	793	D	26	III	一括	赤色土器Ⅰ類	壺	—	6.6	—	にぶい橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	
	794	K	30	IIb	一括	赤色土器Ⅱ類	壺	—	—	—	橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
795	C	22	IIb	一括	赤色土器Ⅲ類	壺	—	—	—	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ		
796	A	27	III	一括	土師器	甕	24.4	—	—	暗褐	暗褐	ナデ、ハケ目	ナデ、ケズリ		
90	797	C	25	IIb	一括	須恵器	壺	13.0	—	—	にぶい橙	にぶい橙	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	798	I	30	IIIc	239	須恵器	蓋	—	—	—	にぶい橙	オリーフ灰	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	799	E	25	IIb	一括	須恵器	蓋	—	—	—	灰オリーフ	灰オリーフ	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	800	F	27	IIb	一括	須恵器	蓋	—	—	—	灰	灰	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	801	D	24	IIb	一括	須恵器	甕	47.0	—	—	暗赤褐	オリーフ黄	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	802	G	26	IIb	一括	須恵器	甕	—	—	—	にぶい黄褐	灰オリーフ	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	803	J	30	III?	293	須恵器	甕	—	—	—	オリーフ黒	黄褐	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	804	E	25	IIb	一括	須恵器	甕	—	—	—	黒褐	にぶい黄褐	平行タタキ	叩口によるナデ	布巻小石(調整内面)
	805	I	30	IIIe	一括	須恵器	甕	—	—	—	浅黄	にぶい黄橙	平行タタキ	車輪文当て具	
	806	D	27	III	一括	須恵器	甕	—	—	—	灰	灰	平行タタキ	同心円当て具	
91	807	I	30	IIb	一括	須恵器	甕	—	—	—	灰	灰オリーフ	平行タタキ→ハケ目	同心円当て具	
	808	J	30	IIIe	291	須恵器	甕	—	—	—	灰オリーフ	灰	格子目タタキ	同心円当て具	
	809	J	30	IIIc	一括	須恵器	甕	—	—	—	灰	暗灰黄	平行タタキ	同心円当て具	
	810	J	30	IIIb	171	須恵器	甕	—	—	—	灰白	にぶい黄	平行タタキ	同心円当て具→平行当て具	
	811	I	30	IIIe	295	須恵器	甕	—	—	—	にぶい橙	にぶい黄	平行タタキ	平行当て具→同心円当て具	
	812	I	30	IIIe	304	須恵器	甕	—	—	—	暗オリーフ	暗褐	平行タタキ	平行当て具→ナデ	
92	813	J	30	IIIc	218	須恵器	甕	—	—	—	にぶい赤褐	にぶい橙	平行タタキ	平行当て具	
	814	I	30	IIIb	242	須恵器	甕	—	—	—	にぶい橙	灰オリーフ	擬格子目タタキ	平行当て具→同心円当て具	
	815	F	26	IIb	一括	須恵器	壺	12.2	—	—	明黄褐	黄橙	叩口によるナデ	同心円当て具	
	816	K	30	II?c	一括	須恵器	壺	17.2	—	—	にぶい黄褐	にぶい橙	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	817	J	30	IIIc	271	須恵器	壺	—	—	—	にぶい黄褐	にぶい橙	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	818	H	24	IIb	一括	須恵器	壺	—	—	—	青灰	青灰	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	819	E	29	III	一括	須恵器	壺	—	—	—	灰	灰オリーフ	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	820	C	27	III	一括	須恵器	壺	—	—	—	灰	灰	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	821	G	26	IIb	一括	須恵器	壺	—	—	—	暗青灰	青灰	叩口によるナデ	叩口によるナデ	
	822	J	30	IIb	一括	須恵器	壺	—	—	—	オリーフ黒	灰黄褐	平行タタキ	叩口によるナデ	

表28 古代出土遺物観察表 (2)

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	色 調	備考	
92	823	J	30	IIIc	253	土製品	管状土錘	5.1	1.7	13.0	0.6	にぶい黄	
	824	H	26	IIb	一括	土製品	管状土錘	3.6	1.1	3.0	0.4	浅黄	

表29 古代出土遺物観察表 (3)

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種類	文様	叩目	厚さ(cm)	色 調		焼成	備考	
									凸面	凹面			
92	825	—	—	—	—	軒平瓦	—	布目	3.5	灰	灰	軟質	

## 第8章 中世の調査（A地点）

### 第1節 調査の概要

A地点における中世の調査では、遺構は検出されなかった。遺物は、Ⅲ層及びⅣ層を中心に、土師器や須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、滑石製品、鉄製品・古銭等が出土した。

### 第2節 出土遺物の分類

土師器、須恵器（東播磨系・樺万丈窯系など）、類須恵器（カムイヤキ）、輸入陶磁器（陶器・青磁・白磁）などが出土している。遺物の分類は、『持躰松遺跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター2007）、『上水流遺跡2』（同センター2008）、『上水流遺跡3』（同センター2009）の中近世の遺物分類を参考に以下のとおりに行う。

#### 1 器種分類

- (1)食膳具 碗・坏・皿
- (2)貯蔵具 壺・有耳壺・須恵器甕
- (3)煮炊具 鍋・釜・土師器甕
- (4)調度具 合子・瓶・水注・小壺
- (5)その他 器種が特定できないものなど

#### 2 中世の遺物分類

- (1)土師器 坏・碗・皿・蓋
- (2)須恵器 甕・捏鉢・壺
- (3)瓦質土器 播鉢・羽釜・火鉢・蓋・その他
- (4)類須恵器（カムイヤキ） 甕・壺・その他
- (5)国産陶器 甕・壺・碗・蓋・片口鉢・播鉢
- (6)輸入陶磁器

碗・皿・口折皿・瓶・壺・甕・盤・合子・その他

- ① 陶器
- ② 青磁

分類は、基本的に上田分類（上田1982）と太宰府分類（太宰府市教育委員会【山本信夫】2000ほか）を参考とした。

#### ③ 白磁

分類は、基本的に森田分類（森田1982）と太宰府分類（太宰府市教育委員会【山本信夫】2000ほか）を参考とした。

#### ④ 青花（景德鎮窯系・漳州窯系）

#### 【参考文献】

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁器研究』No.2 日本貿易陶磁研究会  
太宰府市教育委員会（山本信夫）2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会  
森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁器研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

### 第3節 遺物

#### 1 土師器

坏・皿が出土している。外底面には、糸切りによる切り離し痕がみられる。

##### (1) 坏（第93図826～830）

826は、口縁部から底部で、体部は直線的に立ち上がる。827は、直線的に立ち上がり、口縁端部がやや外反するタイプである。見込みは、ほぼ平坦で指頭圧痕が見られる。828は、内湾しながら見込みから口縁部までゆるやかに立ち上がる。829・830は、底部である。829の見込みは、ほぼ平坦でナデ調整が施されている。底径は、11.6cmである。

##### (2) 小皿（第93図831～834）

口径11cm未満、器高2cm以下を小皿とした。831・832は、口縁端部は丸みを帯び、底部から体部への立ち上がりやや外に張り出している。832は、見込みから口縁部までゆるやかに立ち上がり、体部との境ははっきりしない。833は、見込みから口縁部までゆるやかに立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。外底面には、糸切り痕とともに板状の圧痕が確認できる。834は、見込み中央は凸状で口縁部はやや尖り気味となる。

##### (3) 黒色土器（第93図835）

内外面とも黒く燻した黒色土器（黒色土器B）である。835は、小皿で内外面ともにヘラミガキが施されている。

##### (4) 赤色土器（第93図836）

外面に赤色顔料が施された赤色土器である。836は、坏で見込みは平坦で底径は7.2cmである。

#### 2 須恵器

樺万丈窯系の甕や東播磨系の捏鉢等が出土している。

##### (1) 甕（第93図837～839）

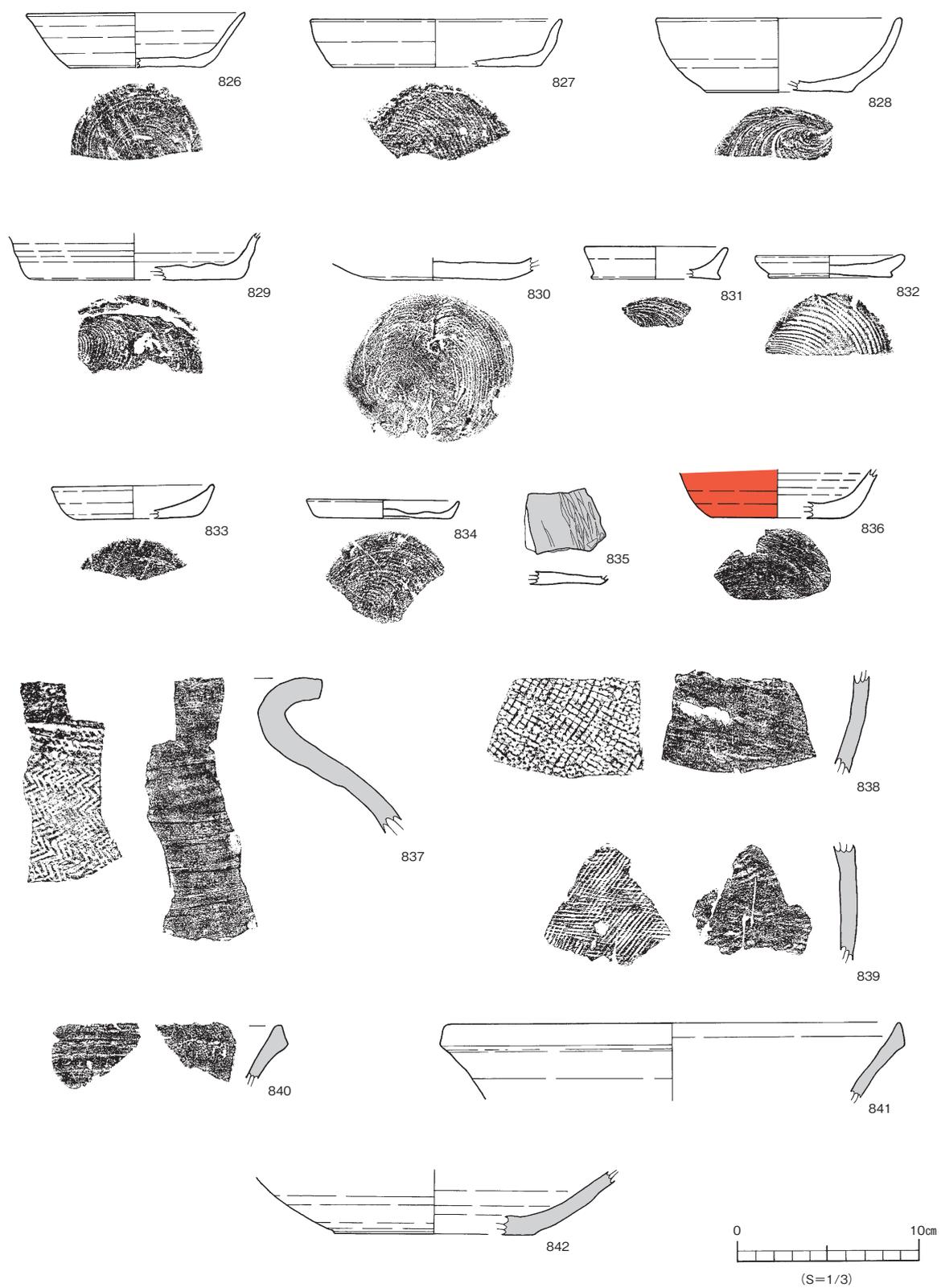
837～839は、樺万丈窯系と考えられる。837は、口縁部で逆L字状に屈曲し、大きく外反する。外面は、ナデ及び平行タタキが見られ、内面はハケ目調整が施されている。838・839は胴部である。838は、外面に格子目タタキ、内面はナデ調整が施されている。

##### (2) 捏鉢（第93図840～842）

840～842は、東播磨系の捏鉢である。840・841は、口縁部内面に段が無く直線的になっている。842は、底部で糸切りによる切り離し痕が残る。

#### 3 瓦質土器（第94図843～848）

843～848は播鉢である。スリメが斜め方向につけ



第93図 中世出土遺物実測図(1)

られるもの (843), スリメが縦方向につけられるもの (844・846・847・848), ハケメが施された後に縦方向にスリメがつけられるもの (845) などがある。

#### 4 類須恵器 (カムイヤキ) (第94図849)

849は、壺の底部と考えられる。復元底径は12.0cmである。外面は、ナデ調整が施される。内面は、粘土接合痕が残り平行タタキの後ナデ調整で仕上げられている。

#### 5 国産陶器 (第95図850)

850は、常滑焼の片口鉢と思われる。

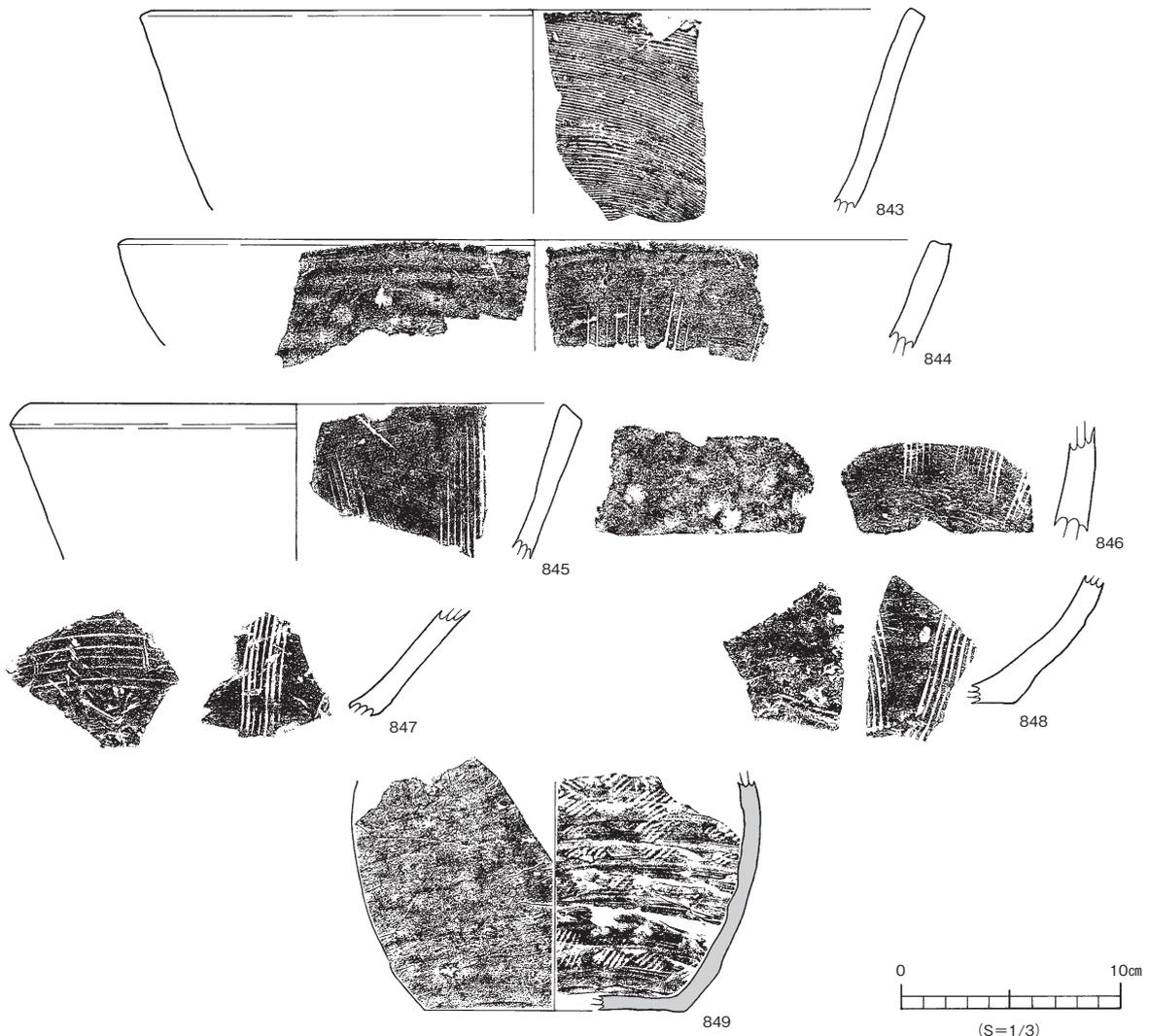
#### 6 輸入陶器

##### (1) 碗 (第95図851)

851は、内外面に赤褐色の鉄釉が掛かる天目碗である。外面の胴部下位は露胎している。

##### (2) 壺 (第95図852~855)

852・853は、内・外面ともに施釉される。852は、口縁部内外面に釉の掛け残しが見られ、内面には目跡が残る。853は、外面にヘラ状工具による器面調整が施され、底部外面にはケズリ痕が見られる。854は、やや上げ底状となり、底部外面には墨書がある。文字であるか記号であるかは判読できない。855は、甕の可能性もある。



第94図 中世出土遺物実測図 (2)

## 7 青磁

竜泉窯系青磁Ⅰ類は、12世紀中頃から後半、Ⅱ類は13世紀前後から前半、Ⅲ類は13世紀中頃から14世紀初頭前後、Ⅳ類は14世紀初頭から後半に編年されるものである。

### (1) 竜泉窯系青磁碗Ⅰ類 (第95図856~861)

口縁端部は丸く肉厚で直口となる例が多く、わずかに外反するものである。体部下位は腰が張り、重心が低い。高台は断面四角形で高台内部は削りが若干浅く、このため底部は肉厚となる。口縁部直下から底部外面まで丁寧なヘラケズリを行う。高台部畳付及び内部は露胎である。釉は半透明で平均的にかかる。

### ア 竜泉窯系青磁碗Ⅰ-1類 (856~858)

体部内外面は無文である。857・858は、肉厚の底部で、畳付けは断面四角形である。底径は、それぞれ6.2cm、6.4cmである。

### イ 竜泉窯系青磁碗Ⅰ-4類 (859・860)

二又片刀または櫛刀によって、体部内面を5分割し、その中に飛雲文を入れる。見込みに花卉文の片彫り、文字印刻がされる例もある。

### ウ 竜泉窯系青磁碗Ⅰ-6類 (861)

体部外面に縦の櫛目を入れ、片彫りで蓮弁文を一周させるものである。内面に片彫草花文や櫛目文をする。861は口縁部がやや外反し、内面は劃花文が施される。

### (2) 竜泉窯系青磁碗Ⅱ類 (第95図862~867)

体部外面に蓮弁文の文様を有するものである。口縁端部は直口またはわずかに外反する。862~864は、片彫蓮弁文で弁の中心線に鑄(稜)はない。865~867は、弁の中心線は稜をなす、いわゆる鑄蓮弁文である。867は、畳付から高台内面は露胎である。

### (3) 同安窯系青磁碗Ⅱ類 (第96図868)

胎土は粘性が強く、硬質であり、灰色、淡黄灰色を基調とする。逆台形状の厚い高台を有する。内面見込みと体部との境に大きく段があり、内面上位には沈線を入れる。868は、口縁部はわずかに外反し、内外面ともに無文である。

### (4) 同安窯系青磁皿Ⅰ類 (第96図869)

口縁端部は薄く尖り気味で、体部中位で屈曲する。869は、全面施釉された後、底部外面の釉は掻き取られている。内面見込みに櫛点描文が確認できる。

### (5) 竜泉窯系青磁坏Ⅲ類 (第96図870)

体部は丸みを持ち内湾気味に立ち上がる。口縁部は鋭く外反し、上端は平坦面をなす。870は、体部外面に鑄蓮弁文を有する。

### (6) 竜泉窯系青磁Ⅳ類 (第96図871~875)

871・872は、稜花皿である。いずれも明代のものでG期(14世紀以降)のものと思われる。873~875

は、碗の底部である。873は、全面施釉後に高台畳付及び高台内の釉は削りとられている。高台内面の中央は凸状となっている。見込みには、草花文の印刻がある。高台内側には墨書が見られるが、記号であるか文字であるかは判読できない。

## 8 白磁

### (1) 白磁碗Ⅳ類 (第96図876)

口縁部は肉厚な玉縁状を呈する。体部の器肉は厚い。高台は幅広で削り出しが浅いため、底部の器肉も厚い。体部下半以下、底部には施釉されない。876は、口縁部外面に釉垂れが確認できる。

### (2) 白磁碗Ⅲ類 (第96図877)

口縁部は外反する浅形碗である。体部下位は横に延び、体部中位で湾曲する。877は、無文で上質のつくりである。

### (3) 白磁小碗 (第96図878)

口縁部は外側に大きく開き、高台は細めで高い。全体的に薄手である。

### (4) 白磁碗Ⅴ類 (第96図879~884)

高台は細く高く直立する。口縁部は外反あるいは屈曲し、上端部は水平にする。体部と高台部の境付近まで施釉される。内面は無文や櫛目で花文が描かれているものがある。880~882は、端部内面に鋭い稜が確認できる。883は、内面見込みに短い櫛目文がみられる。

### (5) 白磁碗Ⅵ類 (第96図885・886)

口縁部周辺は施釉後に釉を掻き取り、口禿げとする。胎土は灰白色を呈し、釉は空色を帯びた灰白色や灰緑色を呈し厚く不透明なものが多い。885・886は、碗としたが皿の可能性もある。

### (6) 白磁皿Ⅶ類 (第96図887)

体部はわずかに内湾気味で口縁部に向かって薄く引き上げている。底部外面はわずかに削り込み小さな高台状となる。887は無文で、底径は7.0cmである。

### (7) 白磁皿Ⅷ類 (第96図888)

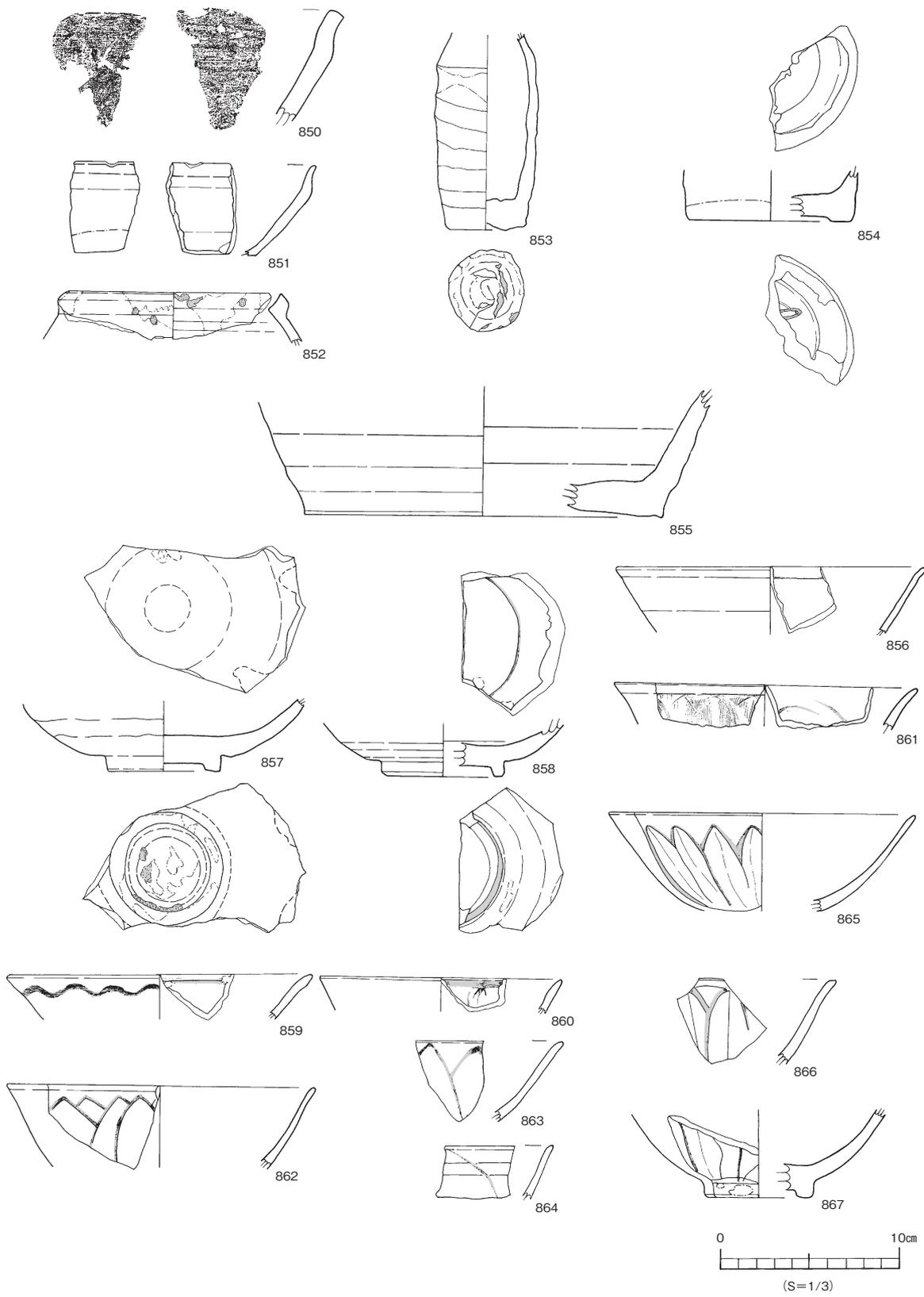
口縁は直口し、底部は平底である。底部の釉は施釉した後削り取る。888は、内面見込みは平坦で草花文の凹印が施されている。

### (8) 白磁皿Ⅸ類 (第97図889~892)

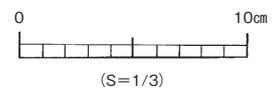
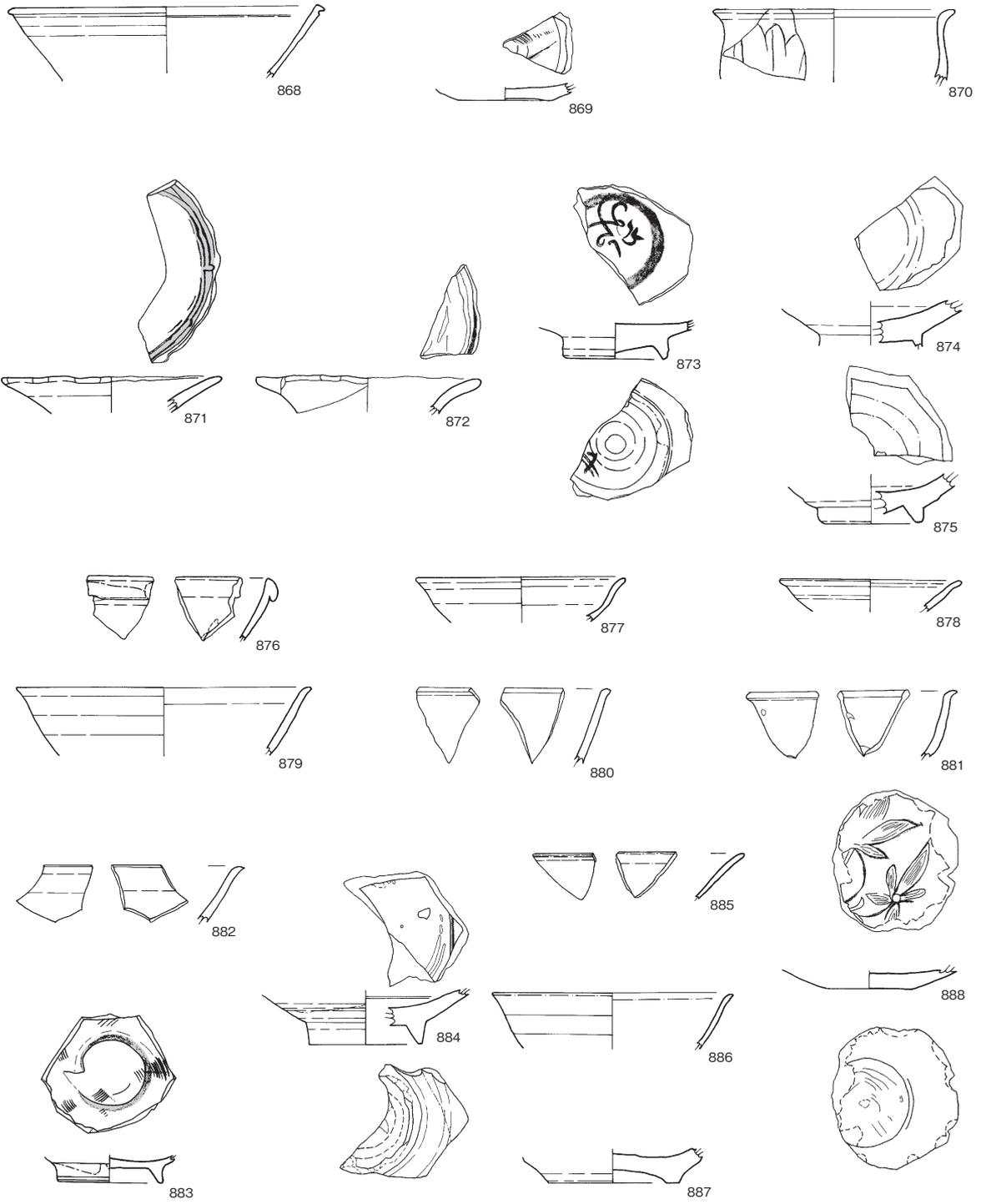
白磁碗Ⅸ類と同様に、口縁端部が口禿げとなったものである。胎土は灰白色で硬質である。釉は粘性が強く空色を帯びた灰白色を呈する。889~891は、平底で全面施釉されるものである。底部外面は板状の工具で釉をのぼしていると思われる。892は、底部外面は施釉されていない。

### (9) 四耳壺 (第97図893)

893は、四耳壺の頸部(胴部)と考えられる。



第95図 中世出土遺物実測図 (3)



第96図 中世出土遺物実測図(4)

9 青白磁 (第97図894・895)

型造りによる合子の身である。894は、無文である。底部外面は、焼成前に釉を掻き取っている。895は、側面に菊弁文を有する。胴部下半と受け部は露胎となっている。

10 青花 (第97図896~901)

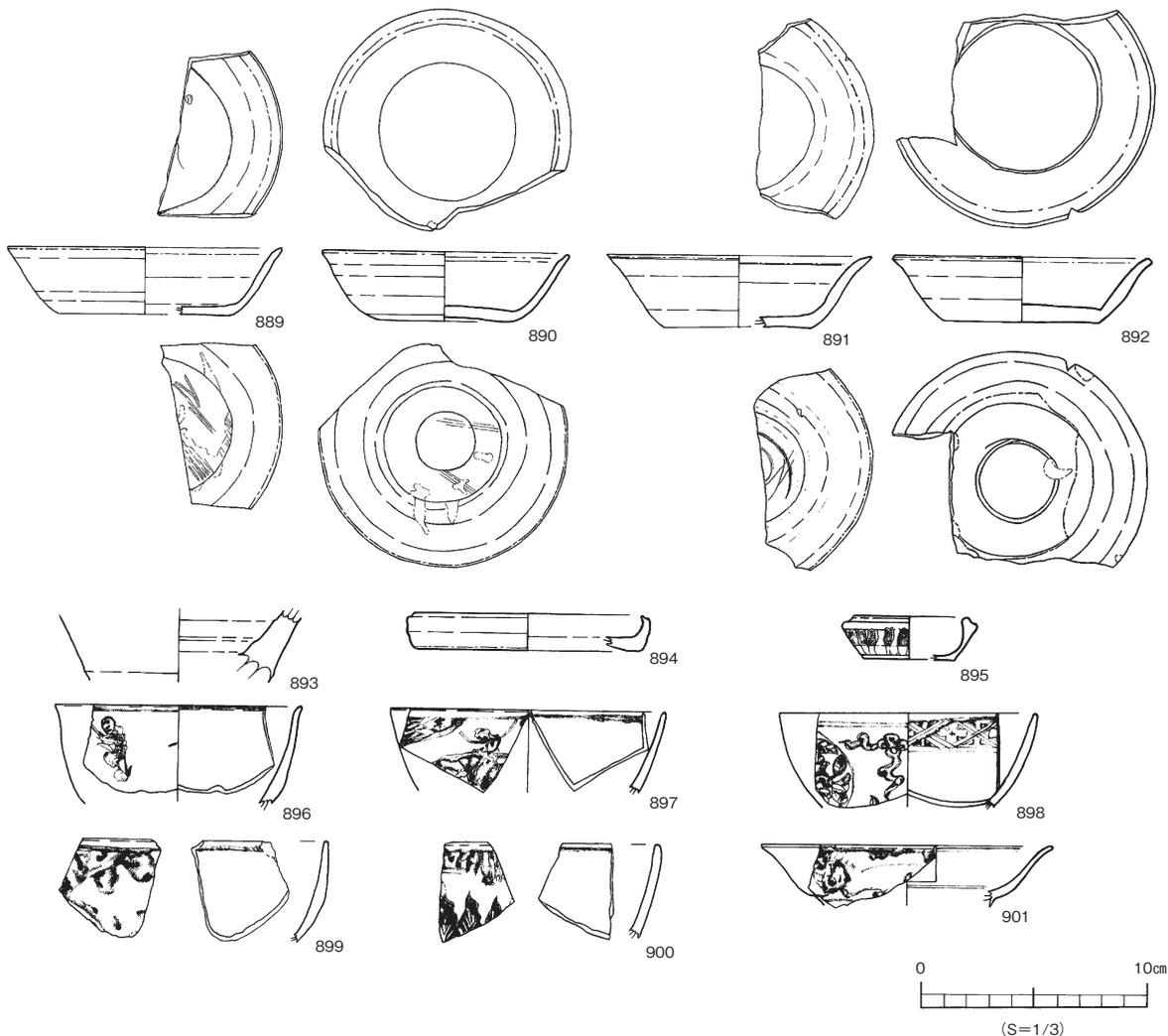
6点を図化した。いずれも景德鎮窯系で、時期は中世後半期(15~16世紀)のものと思われる。896~900は碗である。898・899は、16世紀後半のものと考えられる。900は、胴部外面に芭蕉葉文が描かれ、15世紀後半から16世紀中頃のものである。901は、皿で15世紀中頃から16世紀中頃のものと考えられる。

11 滑石製品 (第98図902・903)

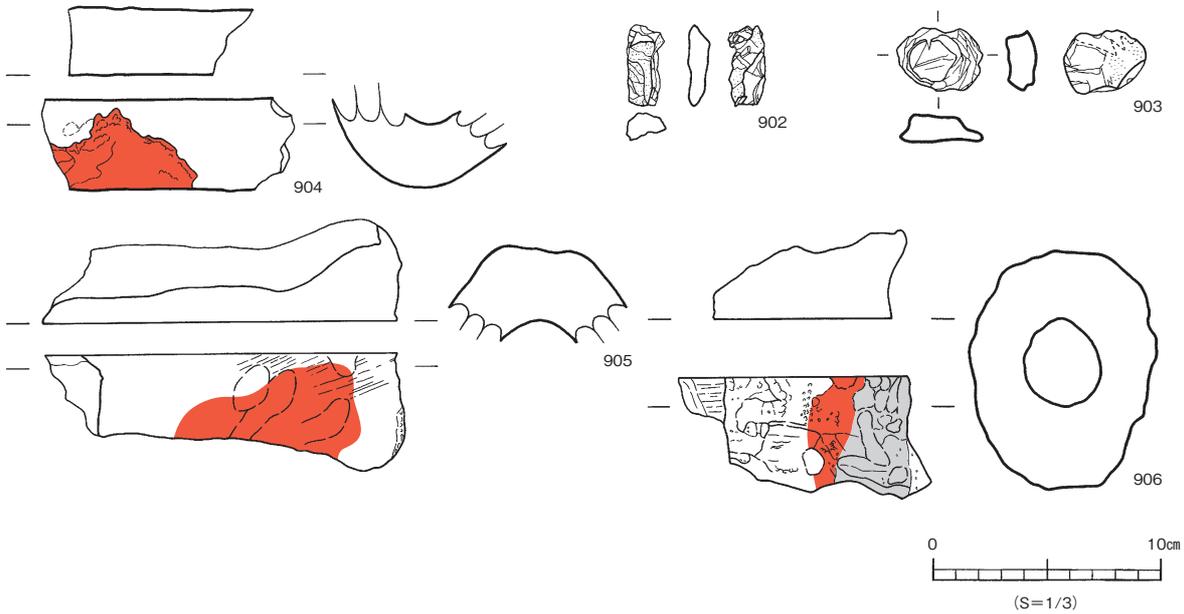
902・903は、石鍋の再加工品である。902は、滑石製石鍋の把手部分を加工したものと思われる。使用目的は不明である。

12 土製品 (第98図904~906)

904~906は、ふいごの羽口である。明確な時期は分からないが、出土層からこの時期に掲載した。904は、最大幅は8cmで、外面には赤色化した部分が見られる。906は、先端に鉄滓が付着し、ガラス質や赤色化した部分が帯状にめぐる。



第97図 中世出土遺物実測図(5)



第98図 中世出土遺物実測図(6)

表30 中世出土遺物観察表(1)

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		調整		備考
										外面	内面	外面	内面	
93	826	B	27	V	一括 土師器	坏	12.0	7.4	3.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	827	E	28	III	一括 土師器	坏	13.8	11.6	2.6	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	828	J	30	IIb IIIc	一括 土師器	坏	13.5	8.0	4.0	橙	にぶい褐	回転ナデ	回転ナデ	
	829	A	27	V	一括 土師器	坏	—	11.6	—	にぶい黄	にぶい黄	回転ナデ	回転ナデ	
	830	C	28	IV	一括 土師器	坏	—	11.0	—	にぶい橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	831	E	27	III	一括 土師器	小皿	7.8	6.8	1.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	内面にスス付着
	832	I	30	IIIb	241 土師器	小皿	8.2	6.8	1.2	にぶい黄	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	833	C	28	III	一括 土師器	小皿	8.8	6.8	1.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	834	C	28	III	一括 土師器	小皿	8.4	7.4	1.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	
	835	E	35	IIb	一括 黑色土器	小皿	—	—	—	黒	黒	回転ナデ	へラムガキ	
	836	E	25	IIb	一括 赤色土器	坏	—	7.2	—	橙	黒褐	回転ナデ	回転ナデ	
	837	F	27	IIb	一括 棒万文窯系須恵器	甕	—	—	—	灰	灰	平行タタキ	ロクロによるナデ	
	838	C	28	III	一括 棒万文窯系須恵器	甕	—	—	—	灰	灰	格子目タタキ	ロクロによるナデ	
	839	C	23	IIb	一括 棒万文窯系須恵器	甕	—	—	—	灰	灰	平行タタキ	ロクロによるナデ	
840	H	25	IIb	一括 東播磨系須恵器	捏鉢	—	—	—	灰	灰		ロクロによるナデ		
841	B	27	II	一括 東播磨系須恵器	捏鉢	25.0	—	—	浅黄	浅黄		ロクロによるナデ		
842	D	27	III	一括 東播磨系須恵器	捏鉢	—	11.0	—	灰オリーブ	灰オリーブ		ロクロによるナデ		
94	843	H	30	XII	一括 瓦質土器	擂鉢	35.8	—	—	灰	灰		ロクロによるナデ	
	844	C	23	IIb	一括 瓦質土器	擂鉢	38.0	—	—	浅黄橙	浅黄橙		ロクロによるナデ	
	845	G	27	IIb	一括 瓦質土器	擂鉢	26.0	—	—	灰	灰		ロクロによるナデ	
	846	E	26	IIb	一括 瓦質土器	擂鉢	—	—	—	にぶい黄橙	灰		ロクロによるナデ	
	847	F	27	III	一括 瓦質土器	擂鉢	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄		ロクロによるナデ	
	848	D	24	IIb	一括 瓦質土器	擂鉢	—	—	—	にぶい橙	灰黄褐		ロクロによるナデ	
	849	C	28	III	一括 類須恵器	不明	—	12.0	—	青灰	暗青灰		ロクロによるナデ	平行タタキ後ナデ カマイヤキ

表31 中世出土遺物観察表 (2)

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種・分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	釉薬	備考	
95	850	D	25	II b	一括	国産陶器	片口鉢	—	—	—	灰白	にぶい橙	
	851	D	26	III	一括	輸入陶器	天目碗	—	—	—	灰白	灰黄褐	
	852	E	27	III	一括	輸入陶器	壺	12.0	—	—	灰黄	灰オリーブ	
	853	A	26	III	一括	輸入陶器	壺	—	4.2	—	黄灰色	灰オリーブ	
	854	D	27	III	一括	輸入陶器	壺	—	9.0	—	灰オリーブ	灰白	高台内側に墨書
	855	E	28	III	一括	輸入陶器	壺	—	20.0	—	灰白	灰	
	856	C	24	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・I-1類	17.2	—	—	灰白	オリーブ灰	
	857	F	30	VII	一括	竜泉窯系青磁	碗・I-1類	—	6.2	—	灰白	灰オリーブ	
	858	D	29	III	一括	竜泉窯系青磁	碗・I-1類	—	6.4	—	灰白	灰オリーブ	
	859	B	25	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・I-4類	17.0	—	—	灰	灰オリーブ	
	860	F	26	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・I-4類	13.6	—	—	灰白	灰オリーブ	
	861	F	30	VII	一括	竜泉窯系青磁	碗・I-6類	16.8	—	—	灰	オリーブ灰	
	862	B	28	V	一括	竜泉窯系青磁	碗・II類	17.2	—	—	灰白	灰オリーブ	
	863	B	26	III	一括	竜泉窯系青磁	碗・II類	—	—	—	灰白	灰オリーブ	
	864	K	30	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・II類	—	—	—	灰白	灰オリーブ	
865	B	27	I b	一括	竜泉窯系青磁	碗・II類	17.0	—	—	灰白	灰オリーブ		
866	B	25	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・II類	—	—	—	灰白	灰オリーブ		
867	G	27	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・II類	6.0	—	—	灰白	灰オリーブ		
96	868	E	25	II b	一括	同安窯系青磁	碗・II類	16.8	—	—	灰白	灰オリーブ	
	869	B	27	V	一括	同安窯系青磁	皿・I類	—	4.8	—	灰白	オリーブ灰	外底部の釉掻取り
	870	B	27	V	一括	竜泉窯系青磁	坏・III類	12.7	—	—	灰白	緑灰	
	871	A	26	III	一括	竜泉窯系青磁	皿・IV類	11.6	—	—	灰白	オリーブ灰	稜花皿
	872	E	28	III	一括	竜泉窯系青磁	皿・IV類	11.8	—	—	灰白	オリーブ灰	稜花皿
	873	H	25	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・IV類	—	5.6	—	灰白	灰オリーブ	高台内側に墨書
	874	C	24	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・IV類	—	—	—	灰白	オリーブ灰	見込み釉掻取り
	875	I	30	II b	一括	竜泉窯系青磁	碗・IV類	—	5.4	—	灰白	浅黄	
	876	D	27	III	一括	白磁	碗・IV類	—	—	—	灰白	灰白	玉縁口縁
	877	C	23	II b	一括	白磁	碗・XIII類	11.0	—	—	灰白	灰白	
	878	E	24	II b	一括	白磁	小碗	9.6	—	—	灰白	灰白	
	879	D	25	II b	一括	白磁	碗・V類	15.6	—	—	灰白	灰白	
	880	G	27	II b	一括	白磁	碗・V類	—	—	—	灰白	灰白	
	881	E	28	III	一括	白磁	碗・V類	—	—	—	灰白	灰白	
	882	B	24	II b	一括	白磁	碗・V類	—	—	—	灰白	灰白	
883	J	30	II b	一括	白磁	碗・V類	—	5.6	—	灰白	灰白		
884	C	22	II b	一括	白磁	碗・V類	—	6.0	—	灰白	灰白	胴部下位露胎	
885	D	24	II b	一括	白磁	碗・IX類	—	—	—	灰白	灰白	口禿	
886	I	30	II b	一括	白磁	碗・IX類	—	—	—	灰白	灰白	口禿	
887	D	26	III	一括	白磁	皿・VII類	—	7.0	—	灰白	灰白	胴部下位露胎	
888	H	24	II b	一括	白磁	皿・VII類	—	4.6	—	灰白	灰白	外底面釉剥ぎ取り	
97	889	B	28	V	一括	白磁	皿・IX類	12.2	7.4	3.0	灰白	灰白	口禿
	890	B	28	V	一括	白磁	皿・IX類	11.0	6.0	3.0	灰白	灰白	口禿
	891	B	27	II	一括	白磁	皿・IX類	11.8	6.4	3.2	灰白	灰白	口禿
	892	B	27	I b	一括	白磁	皿・IX類	11.6	7.0	3.0	灰白	灰白	口禿
	893	E	28	III	一括	白磁	四耳壺	—	—	—	灰白	灰白	
	894	H	26	II b	一括	青白磁	合子身	6.0	1.9	4.0	灰白	灰白	
	895	D	24	II b	一括	青白磁	合子身	—	5.0	—	灰白	灰白	
	896	C	22	II b	一括	青花	碗	11.0	—	—	灰白	灰白	景德鎮窯系
	897	B	25	II b	一括	青花	碗	12.2	—	—	灰白	透明	景德鎮窯系
	898	B	28	III	一括	青花	碗	11.4	—	—	灰白	透明	景德鎮窯系
	899	G	24	II a	畝	青花	碗	—	—	—	灰白	青みがかった釉	景德鎮窯系
	900	E	26	II b	一括	青花	碗	—	—	—	灰白	青みがかった釉	景德鎮窯系
	901	F	24	II b	一括	青花	皿	13.0	—	—	灰白	青みがかった釉	景德鎮窯系

表32 中世出土遺物観察表 (3)

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	口径 (cm)	備考
98	902	D	23	II b	一括	滑石製品	石鍋再加工品	—
	903	E	25	II b	一括	滑石製品	石鍋再加工品	—

表33 中世出土遺物観察表 (4)

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調	備考	
98	904	C	23	—	トレンテ	土製品	羽口	10.8	8.2	3	280	にぶい黄橙	被熱
	905	C	28	IV	一括	土製品	羽口	15.5	9.8	3.5	559	浅黄橙	被熱
	906	C	28	III	一括	土製品	羽口	11	10.2	4.7	691	灰黄	先端部にガラス質が熔着

## 第9章 近世の調査（A地点）

### 第1節 遺構

#### 1 遺構の概要

近世の調査では、畝間状遺構（畝跡）がⅡb層から検出されたが、それ以外に遺構は確認されなかった。

#### 2 遺構

##### 畝間状遺構（第100図～第106図）

畝間状遺構は、A～I-22～30区で検出されA地点の調査区の大部分を占める。その様相から次のように細かく6枚に分層し検出した。畝間が検出されていない部分は、何らかの施設があった可能性も考えられる。以下、層ごとの検出状況を述べる。

##### (1) Ⅱb層1（第101図）

A～I-22～28区で検出された。この層で検出された畝跡が大部分を占める。調査区の北東側でほぼ南北方向に確認された畝跡である。1条の幅は約40～120cmで、検出された畝で最も長いものは約20mある。一部には、以前耕作された東西方向の畝跡が下面に見られる。畝跡の検出状況から、調査区内の畝の一区画を推定することができる。

##### (2) Ⅱb層2（第102図）

A～G-24～30区で検出された。Ⅱb1層で検出された畝跡と同じく南北方向に確認された。1条の幅は、約20～90cmで、検出された畝で最も長いものは約13mある。畝は合計で45条ほど検出された。

##### (3) Ⅱb層2.5（第103図）

C・D-27・28区で検出された。調査区の北西側で東西方向に確認された畝跡である。1条の幅は約40～60cmで25条ほど検出された。

##### (4) Ⅱb層3（第104図）

C・D-27・28区でⅡb2.5層のほぼ下面から検出

された。南北方向に確認され、上層の畝跡と直交する。1条の畝の幅は、約30～60cmで7条ほど検出された。

##### (5) Ⅱb4層（第105図）

A-26・27区、D-28区、F～H-29・30区と3か所で検出された。南北方向に確認され、一部には以前耕作された東西方向の畝跡が下面に見られる。1条の幅は約50cmである。

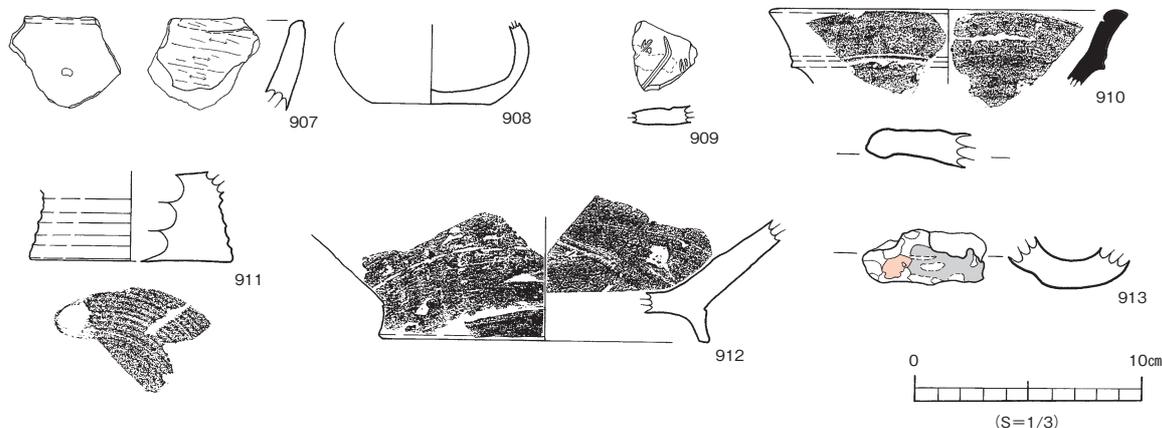
##### (6) Ⅱb5層（第106図）

A・B-26・27区で検出された。ほぼ南北方向に確認され、1条の幅は約40～80cmである。検出された畝で最も長いものは約3mある。

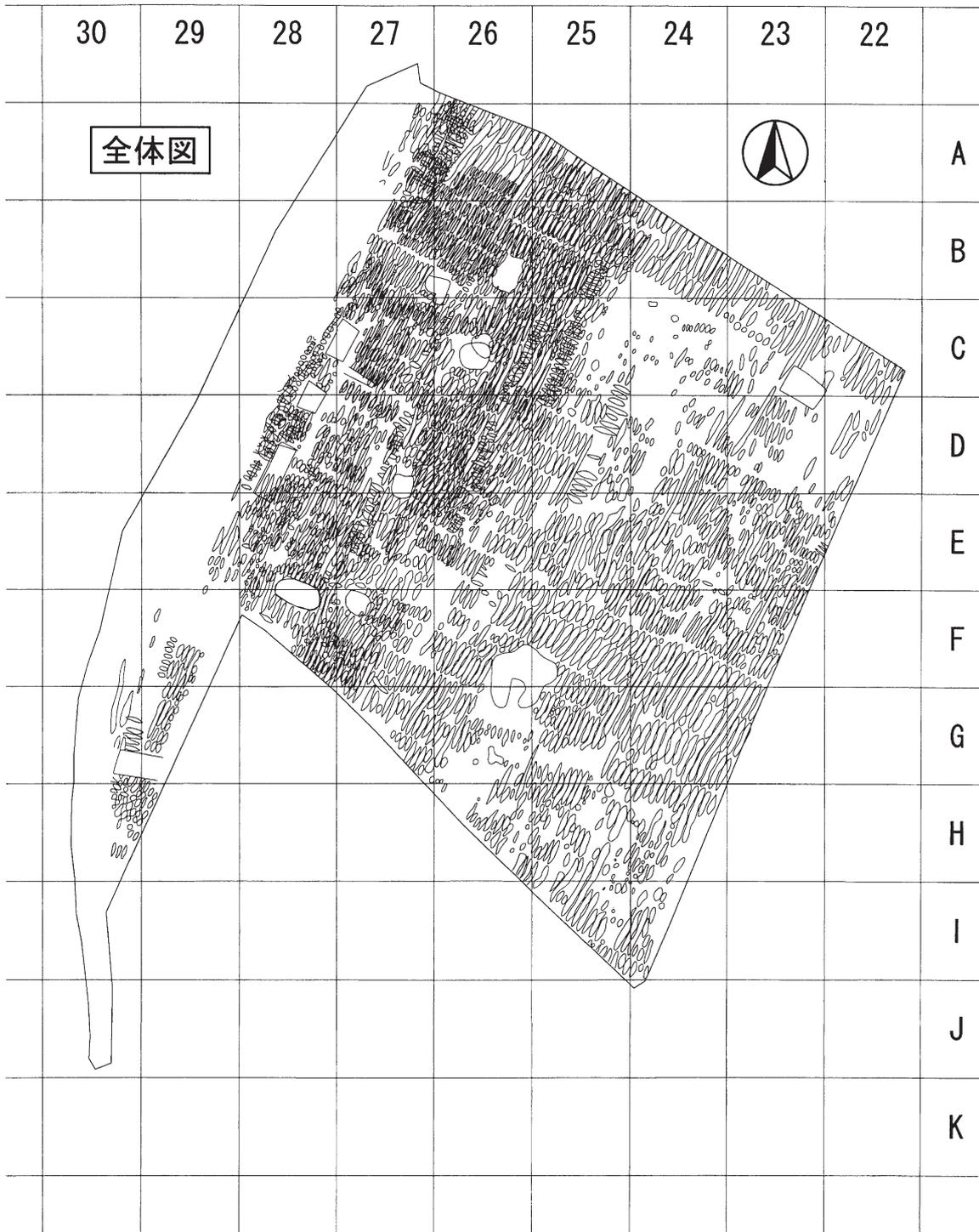
### 3 遺構内出土遺物（第99図・第107図）

畝間状遺構の埋土中より古墳時代から近世の遺物が出土している。12点を図化した。907・908は、古墳時代の鉢形土器、埴形土器と考えられる。909は、古代の篋書き土器である。器種は不明で、見込みに書かれている。文字か記号かは判読できない。910は、古代の須恵器壺と思われる。911は、中世の柱状高台である。912は、中世の輸入陶器の鉢と考えられる。913は、近世のふいごの羽口である。外面にはガラス質の部分と黒色化した部分が見られる。

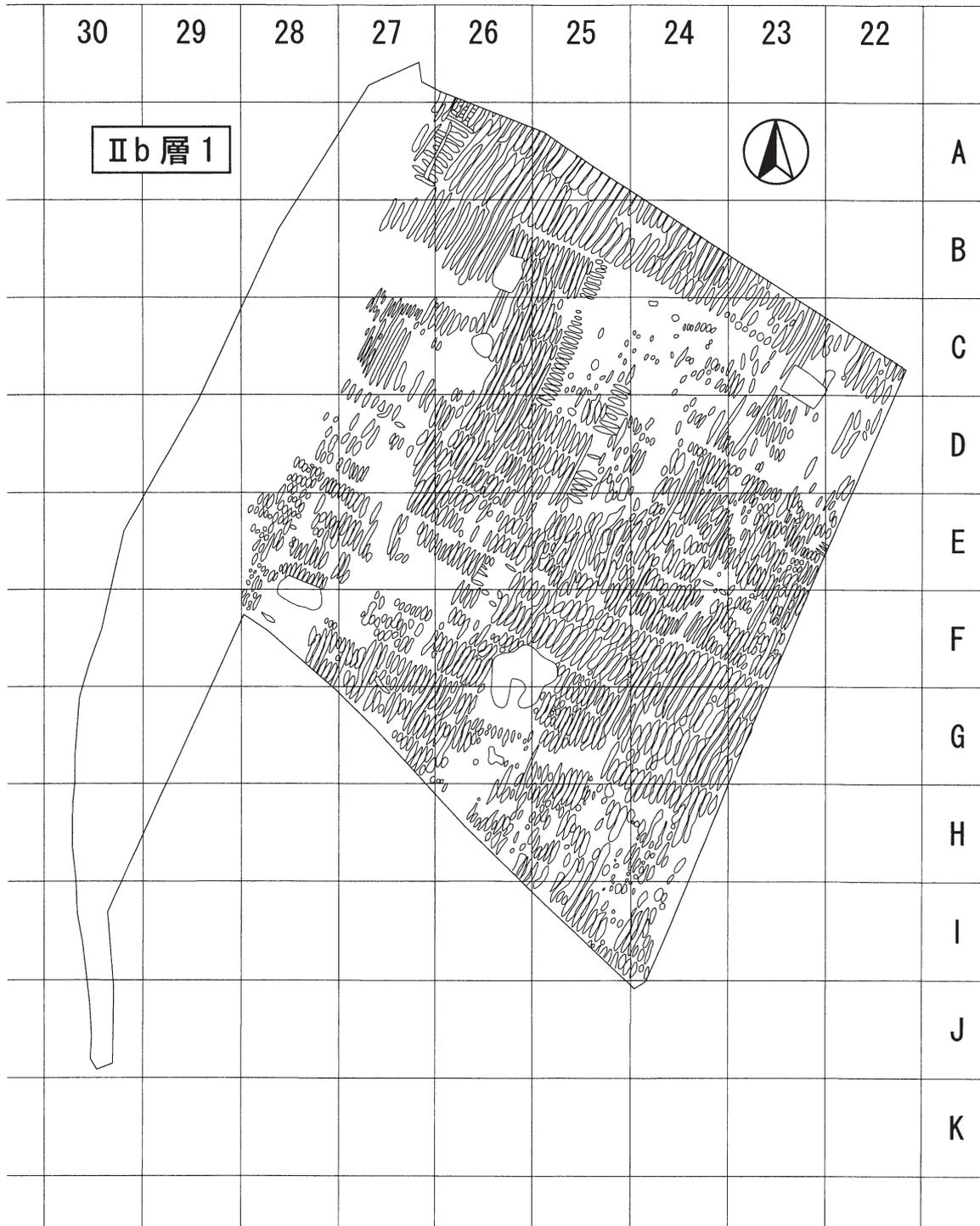
914～918は、古銭である。914は、北宋の「熙寧元寶」で、初鑄年は西暦1068年である。915は、北宋の「皇宋通寶」で、初鑄年は西暦1038年である。916～918は、明銭の「洪武通寶」である。いずれも背面は無文である。この洪武通寶に関しては、3枚積み重ねられた状態で出土している。これらは祭祀や埋納などに関わる可能性がある。



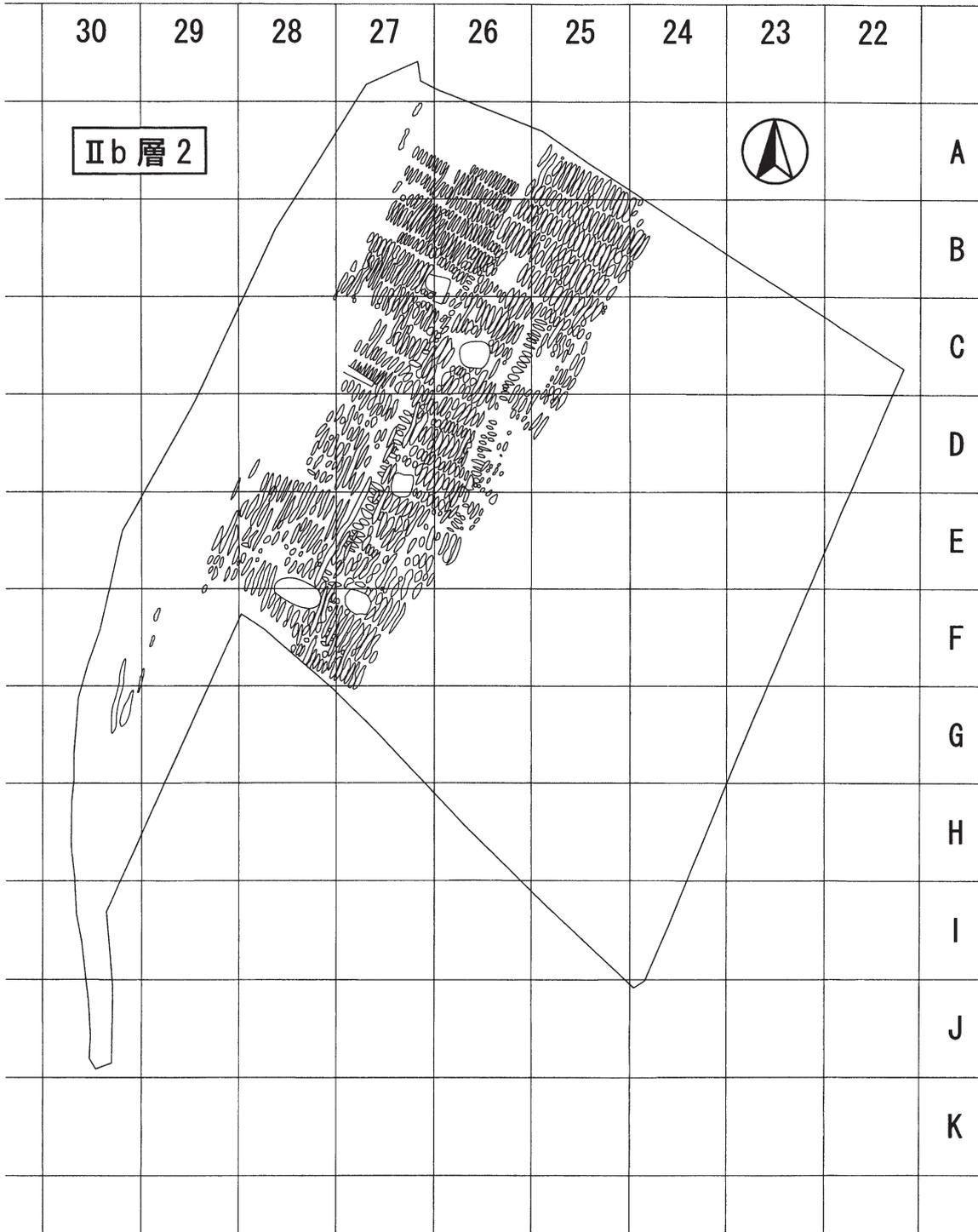
第99図 畝間状遺構内遺物実測図（1）



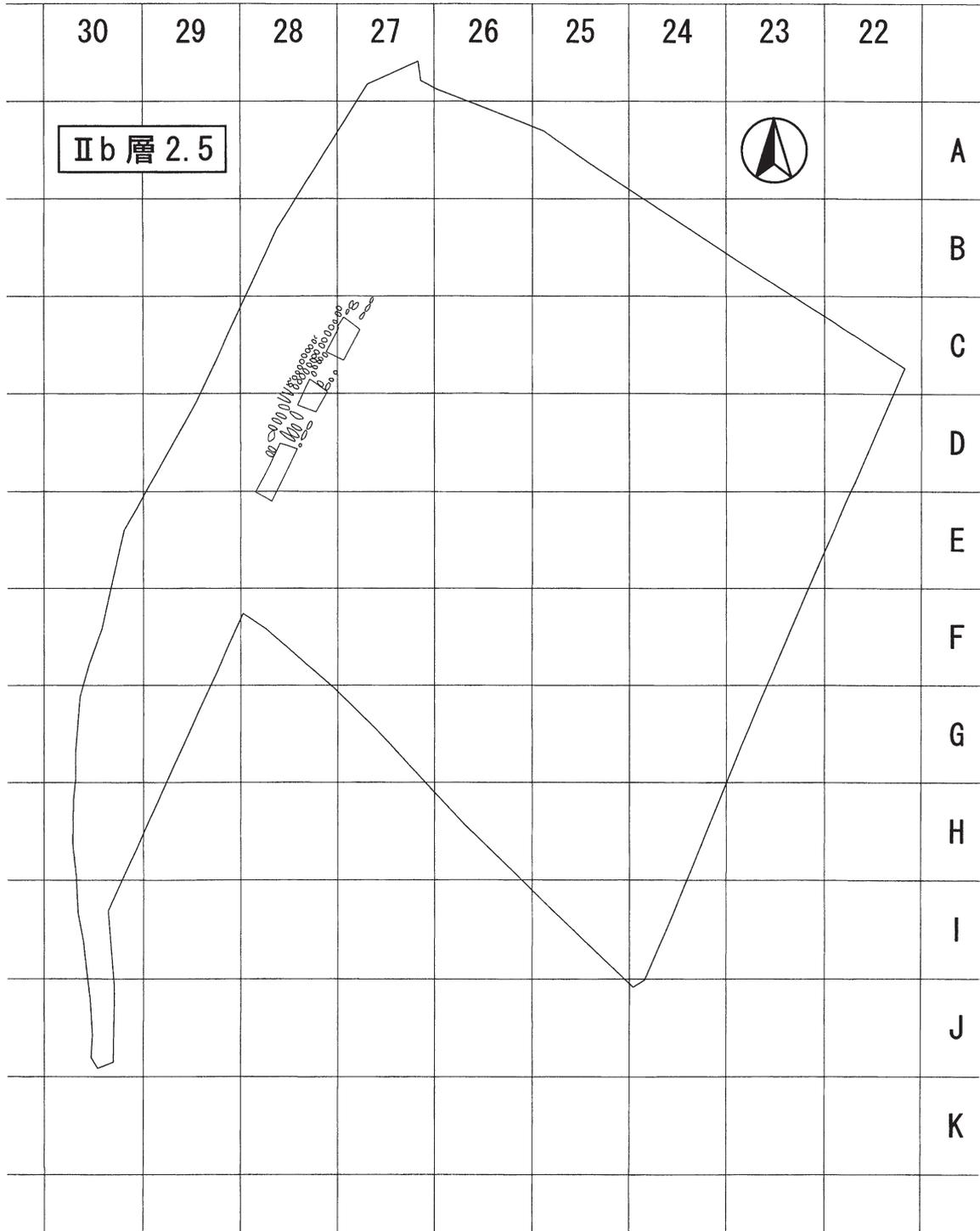
第100図 畝間状遺構検出状況（1）



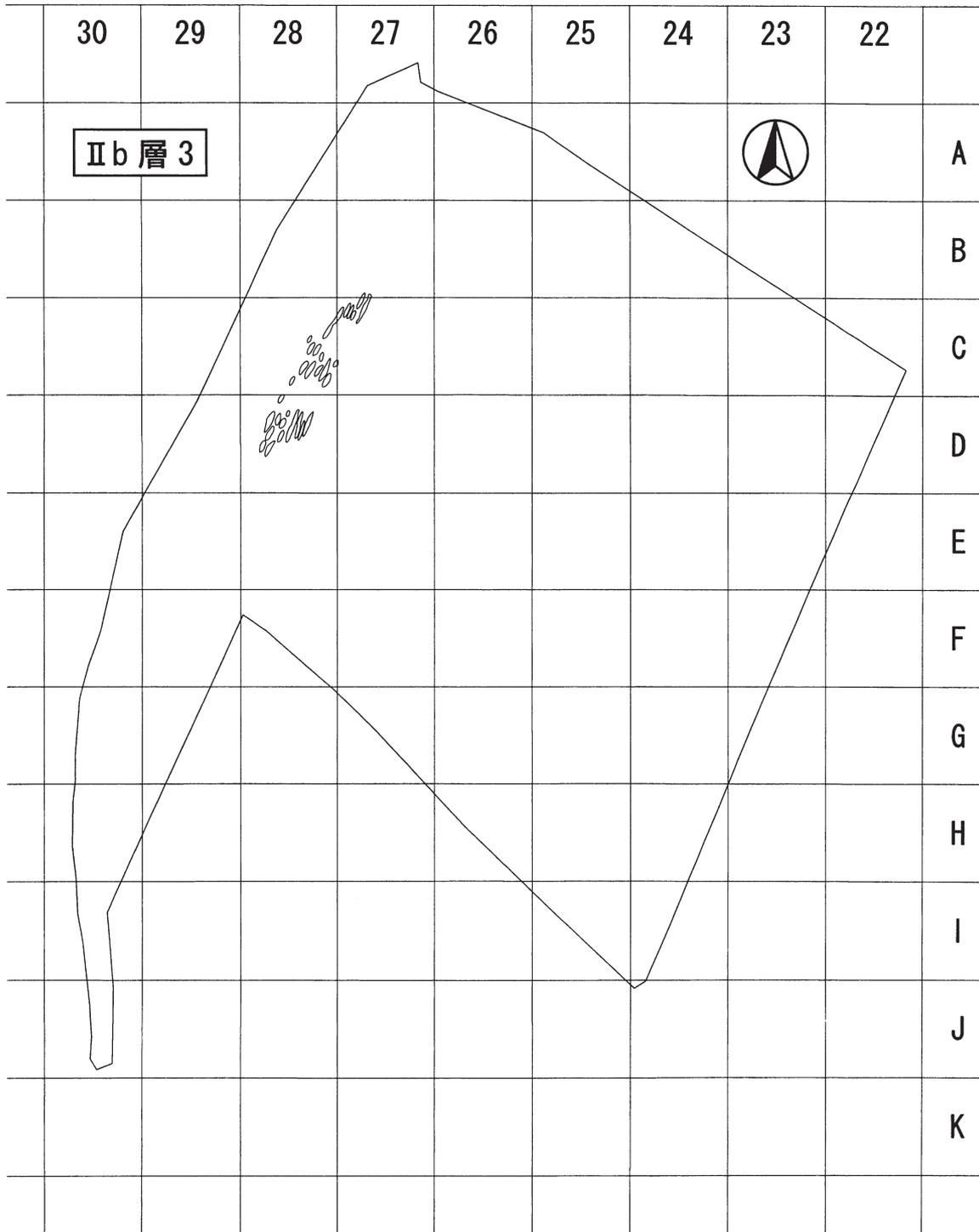
第101図 畝間状遺構検出状況 (2)



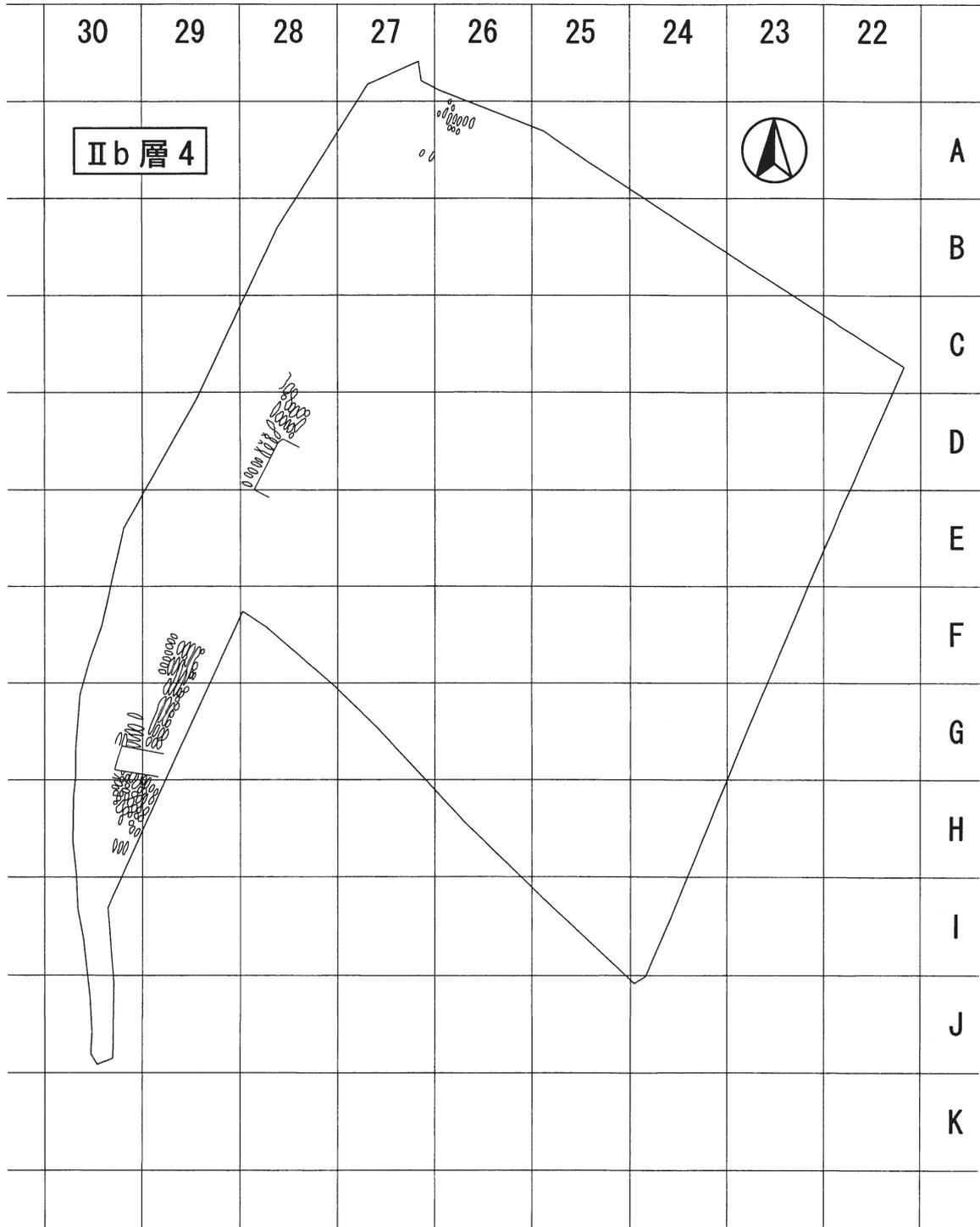
第102図 畝間状遺構検出状況 (3)



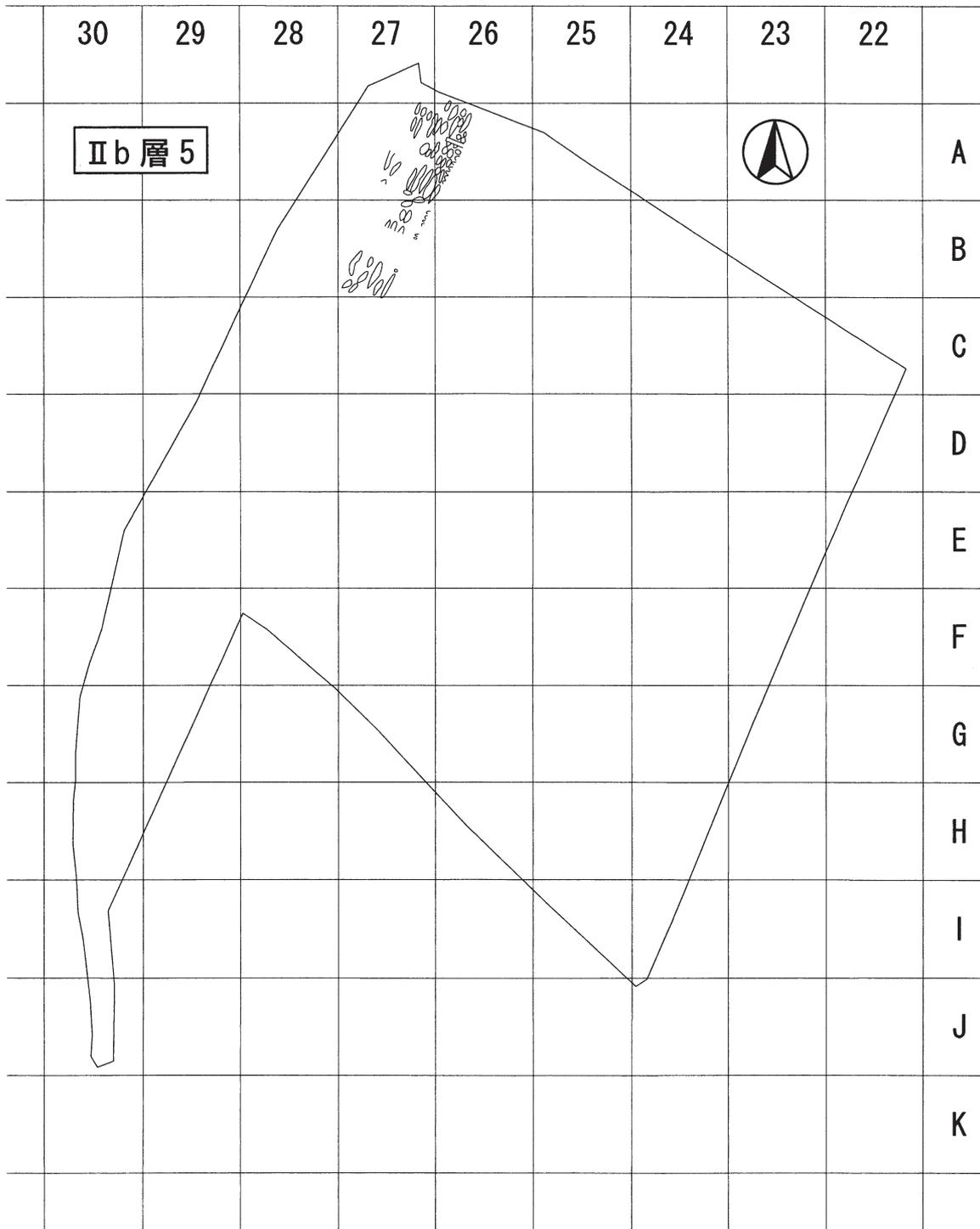
第103図 畝間状遺構検出状況（4）



第104図 畝間状遺構検出状況（5）



第105図 畝間状遺構検出状況（6）



第106図 畝間状遺構検出状況（7）

## 第2節 遺物

### 1 薩摩焼 (第107図919)

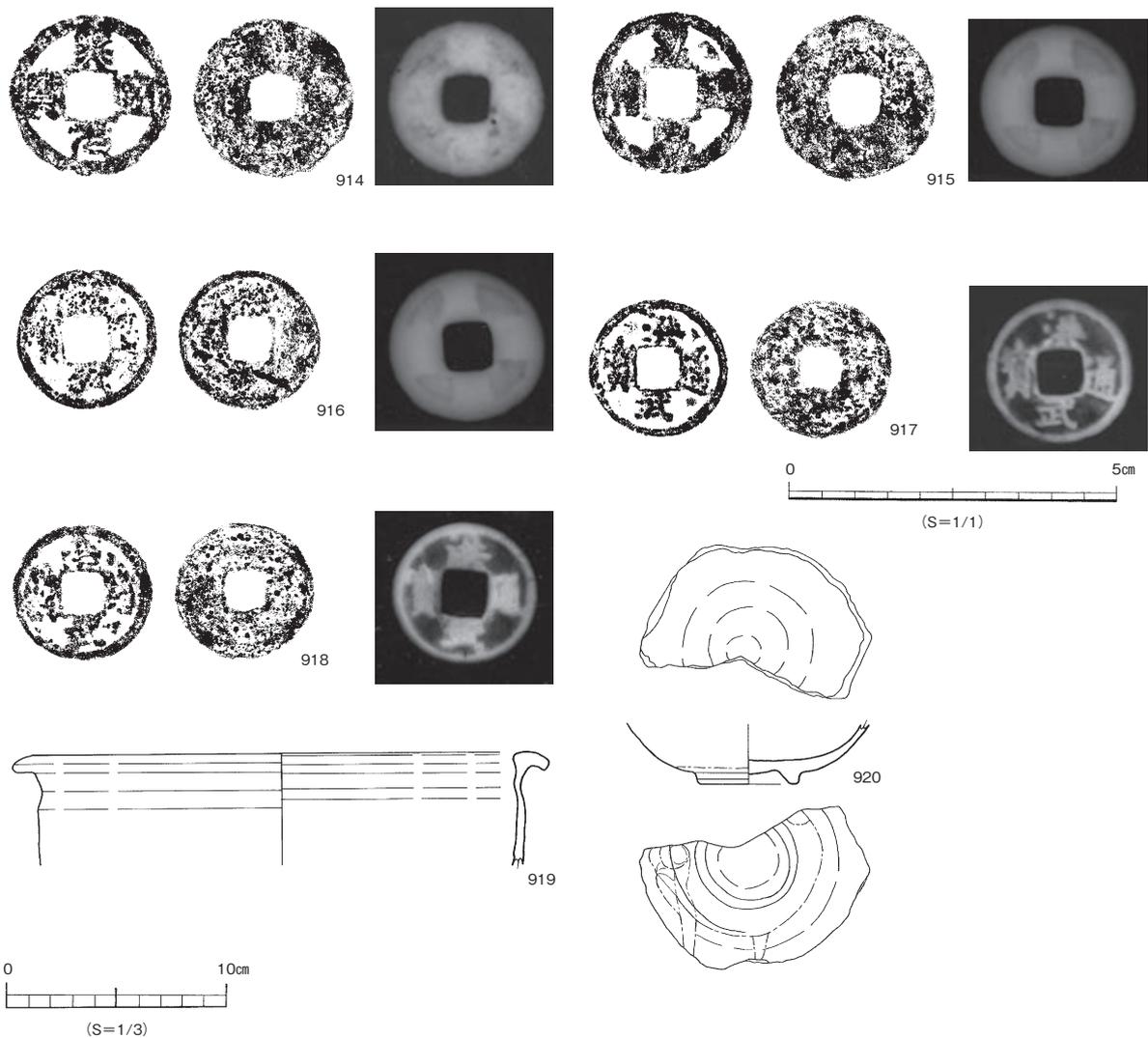
919は、片口鉢である。苗代川系で時期は17世紀代と考えられる。

### 2 肥前系陶磁器 (第107図920)

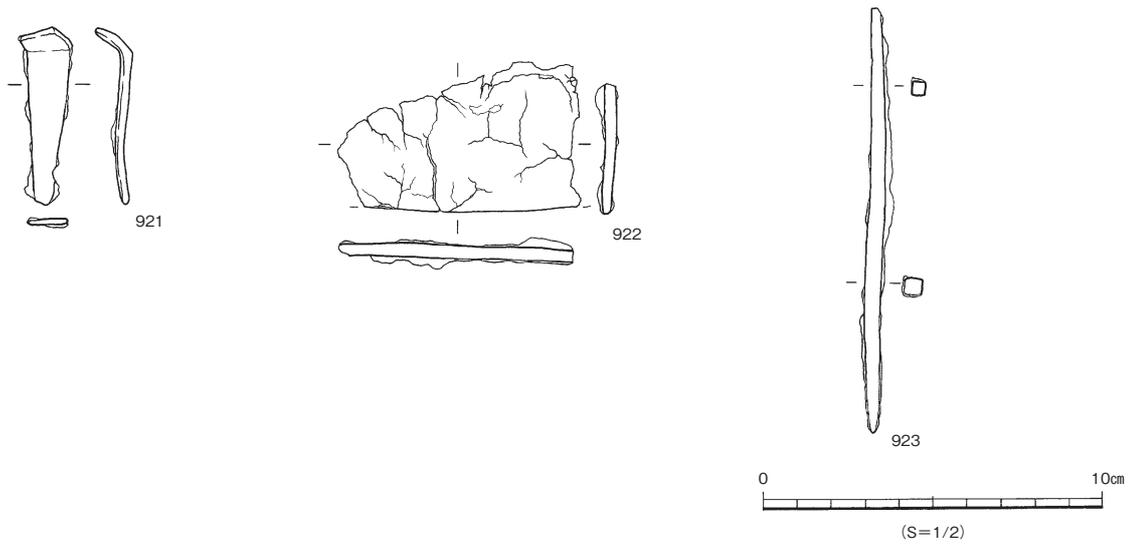
920は、皿で時期は17世紀代と考えられる。

### 3 時期不明鉄製品 (第107図921~923)

921~923は、鉄製品である。近世の包含層からの出土だが、いずれも時期は不明である。921は、舟釘とよばれるものに類似する。922は、ひび割れの状況から鑄鉄であると考えられる。鉄鍋の一部の可能性もある。923は、断面が正方形で、棒状のものである。先端が尖るが、用途は不明である。



第107図 畝間状遺構内遺物実測図 (2) 近世出土遺物実測図



第108図 時期不明遺物実測図

表34 畝間状遺構内遺物観察表 (1)

挿図	番号	出土区	取上番号	器種	色調		調整		胎土					備考			
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫		滑石	その他	
99	907	E	25	畝間	鉢形土器	暗灰黄	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	908	H	25	畝間	柑形土器	黄褐	橙	ナデ	ナデ		○	○					

表35 畝間状遺構内遺物観察表 (2)

挿図	番号	出土区	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		調整		備考
								外面	内面	外面	内面	
99	909	E	25	土師器	不明	—	—	浅黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ書土器
	910	X	2	須恵器	壺	15.8	—	暗灰黄	灰黄	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	
	911	H	26	土師器	柱状高台	—	9	浅黄	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	
	912	H	26	国産陶器	甕	—	14.6	灰白	灰白	ロクロによるナデ	ロクロによるナデ	内底面に淡緑色の灰釉
	913	H	26	土製品	ふいごの羽口	—	—	褐灰	にぶい橙	—	—	ガラス質付着

表36 畝間状遺構内遺物観察表 (3)

挿図	番号	出土区	取上番号	種別	器種	直径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
107	914	F	27	畝間	古銭	北宋銭	2.4	0.1	3.0	熙寧元寶
	915	F	27	畝間	古銭	北宋銭	2.5	0.1	3.0	皇宋通寶
	916	F	27	畝間	古銭	明銭	2.1	0.1	2.0	洪武通寶
	917	F	27	畝間	古銭	明銭	2.1	0.1	2.0	洪武通寶
	918	F	27	畝間	古銭	明銭	2.1	0.1	2.0	洪武通寶

表37 近世出土遺物観察表

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種・分類	胎土	釉薬	備考	
107	919	B	24	II b	一括	薩摩焼	片口鉢	灰黄	内外面鉄・こげ茶	苗代川系
	920	E	25	II b	一括	肥前系陶器	皿	灰	内オリーブ	内外面とも施釉

表38 時期不明遺物観察表

挿図	番号	出土区	取上番号	種別	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	
108	921	I	30	一括	鉄製品	舟釘?	5.3	1.4	0.4	8	
	922	E	17	一括	鉄製品	鑄鉄	7	4.6	0.5	40.6	鉄銅片か
	923	I	30	242	鉄製品	不明	12.8	0.7	0.5	14.5	

## 第10章 化学分析

### 第1節 観察・分析方法

本遺跡出土の南福寺式土器口縁部内面に、わずかに残された赤色顔料を確認した。この顔料について、形状観察と成分分析を行った。

なお、復元後の調査であったことと残存量が微量であったことから、非破壊での観察・分析は困難とみて、電子顕微鏡用の試料を作成して調査を行った。また、比較のための胎土の分析についても、同様に試料を作成し、同じ条件で分析した。

#### 1 形状観察

双眼実体顕微鏡 (Nikon SMZ1000) による8～20倍観察及び走査型電子顕微鏡 (日本電子製JSM-5300LV) による1000～3500倍観察を行った。

#### 2 蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (堀場製作所製XGT-1000, X線管球ターゲット: ロジウム, X線照射径100 $\mu$ m) を使用した。分析条件は次のとおりである。

表39 成分分析表

X線照射径	: 100 $\mu$ m
測定時間	: 100s
X線管電圧	: 50kV
電流	: 自動設定
パルス処理時間	: P3
X線フィルタ	: なし
試料セル	: なし
定量補正法	: スタンダードレス

元素	質量濃度 [%]	3 $\sigma$ [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	20.53	1.55	32.25
Si けい素	41.94	1.30	114.31
K カリウム	0.48	0.15	4.97
Ca カルシウム	4.38	0.25	66.62
Ti チタン	1.67	0.14	41.34
Mn マンガン	0.25	0.07	10.49
Fe 鉄	30.68	0.83	1536.14

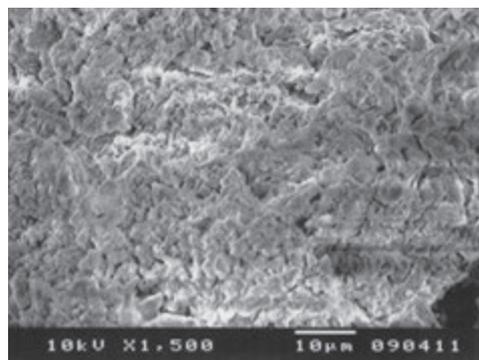


写真19 電子顕微鏡画像

### 第2節 結果

#### 1 形状観察

残存している赤色粒子はわずかであったが、目視及び双眼実体顕微鏡観察により周囲の色調や胎土とは明らかに異なる赤褐色の粒子を確認した。電子顕微鏡観察により、胎土部分とは異なる不定形の粒子を確認した (写真19)。

#### 2 蛍光X線分析

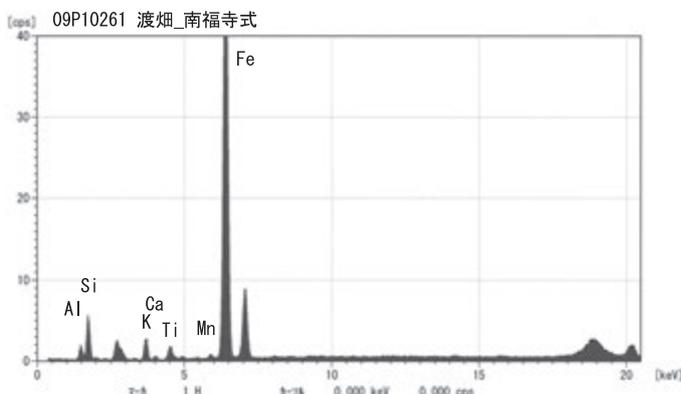
分析の結果、強い鉄 (Fe) のピークが得られた (第109図スペクトル図)。胎土についても鉄のピークが見られる部分があったが、ケイ素 (Si) やカルシウム (Ca) などのピークとの比較や分析結果 (表参照) の検討、及び電子顕微鏡観察の結果から、この粒子は鉱物由来のベンガラであると考えられる。

### 第3節 鹿児島県内における赤色顔料の観察例

顔料とは着色剤の一種で、水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」、「朱」、「鉛丹」の3種類に分けられ、ベンガラは酸化第二鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、朱は硫化水銀 (HgS)、鉛丹は四酸化三鉛 (Pb<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) を主成分とする。

これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は、ほとんどが土器に付着したベンガラであり、朱の検出は数例しかない。これまでに蓄積した分析事例を次項観察表にまとめた。なお、当センターでは、遺跡から出土するベンガラについて、電子顕微鏡観察により次の2種類に分類している。

- 【パイプ】 *Leptothrix* などの鉄バクテリアに由来する、パイプ状の形状をもつ粒子
- 【非パイプ】 天然の鉱物に由来する不定形の粒子



第109図 スペクトル図

表 40 鹿児島県内出土赤色顔料観察表

(成分分析により同定した資料のみ掲載)

時期	地図	遺跡名	所在地	観察対象	ベンガラ		水銀朱	その他	
					ハイ	ホハイ			
早期 初頭	1	岩本	指宿市	岩本式土器		○			
	2	加栗山	鹿児島市	岩本式土器		○			
	3	稲荷原	伊集院町	岩本式土器3点		○			
	4	上山路山	伊集院町	岩本式土器4点		○			
	5	ホケノ頭	田代町	岩本式土器1点(完形品)		○			
早期 後葉	58	市ノ原3地点	日置市東市来町	岩本式土器	○				
	6	上野原	国分市	平椋式土器(深鉢壺)耳栓	○	○		○	
	7	城ヶ尾	福山町	塞ノ神式土器共伴の耳栓状土製品	○	○		○	
	8	桐木B	末吉町	土器付着	○	○			
	48	関山	曾於市末吉町	変形懸糸文土器(入れ子)	○	○			
中期	9	星塚	横川町	深浦式土器	○	○		○	
	10	山ノ脇	伊集院町	深浦式土器	○	○			
	11	千迫	加治木町	深浦式土器	○	○			
	49	上水流	南さつま市金峰町	深浦式土器ほか	○	○			
	12	前床	輝北町	石皿(春日式土器共伴)	○	○			
中期末	13	市来貝塚	市来町	南福寺式土器	○	○			
	14	柿内	高尾野町	南福寺式土器	○	○			
	59	渡畑	南さつま市金峰町	南福寺式土器		○			
縄文時代	15	上ノ平	伊集院町	土器付着、土坑内					
	16	出水貝塚	出水市	出水式土器	○	○		○	
	17	山ノ中	鹿児島市	土器、戴石(指宿式土器共伴)	○	○			
	13	市来貝塚	市来町	市来式土器(台付皿形土器)	○	○		○	
	後期	18	草野貝塚	鹿児島市	市来式土器(台付皿形土器)	○	○		
					二枚貝に入ったベンガラ	○	○		
					市来式土器(台付皿形土器)	○	○		
					軽石加工品		○		
		11	千迫	加治木町	市来式土器(台付皿形土器)		○		白色顔料
				市来式深鉢形土器(1点)		○			
				鐘崎式土器		○			
				加曾利B式土器類似の注口土器(移入品)			○		
	19	佐土(宮崎県)	高原町	市来式土器(台付皿形土器)		○		白色顔料	
20	滝ノ下	枕崎市	市来式土器に伴う磨石	○	○		○		
21	楢元	川内市	台付皿形土器		○				
22	中原	始良町	鐘崎式土器		○				
晩期	23	一湊松山	上屋久町	鐘崎式土器		○			
				市来式土器(台付皿形土器)		○			
	24	終原貝塚	垂水市	軽石製品	○	○			
	6	上野原	国分市	土坑内出土	○	○			
	25	榎崎B	鹿屋市	黒川式土器(浅鉢)		○外面	○内面		
	26	千河原	加世田市	黒川式土器(浅鉢深鉢)	○	○		○	
	27	杉掘	松元町	黒川式土器(深鉢)		○			
	28	出口	根占町	突帯文に伴う壺形土器	○	○		○	
	49	上水流	南さつま市金峰町	黒川式土器(浅鉢)		○外面	○内面		
	50	関山西	曾於市末吉町	黒川式土器		○			
弥生時代	51	チシャノ木	曾於市大隅町	黒川式土器	○	○			
	24	終原貝塚	垂水市	板付I式土器(壺形土器)	○	○			
	29	東田	高山町	口唇部に櫛描波状文のある壺形土器	○	○			
	30	西牟田	東串良町	北部九州から移入された壺形土器		○			
	52	市ノ原4地点	日置市東市来町	壺型土器		○		黒色顔料	
	53	堂園A	南九州市川辺町	土坑内埋土	○	○			
	54	上苑A	志布志市有明町	竪穴住居内出土の浅鉢等	○	○			
	31	鳥越古墳	阿久根市	小口積み石の石室内面と割り竹型木棺跡(4c中)	○	○			
	古墳時代	32	島内地下式横穴4号	えびの市	鹿角製刀装具1994年			○	
					石室内面1994年	○	○		
33		飯隈地下式横穴	大崎町	軽石製石棺の内面		○			
34		神領地下式横穴	大崎町	軽石製石棺の内面		○			
35		中尾1号地下式横穴	吾平町	玄室床面		○			
36		岡崎4号墳	串良町	土師器		○			
36		岡崎1号地下式横穴	串良町	朱玉	○	○			
37		北後田地下式横穴	高山町	頭蓋付着			○		
38		天神原地下式横穴	高山町	石棺内側付着	○	○			
39		原田地下式横穴	有明町	石棺内側付着	○	○			
40		平田地下式板石積石室	大口市	丹粉	○	○			
41		成川	山川町	磨石付着	○	○			
42		保養院	始良町	成川式土器(鉢高杯)	○	○		○	
29		東田	高山町	成川式土器(手づくね土器)	○	○			
古代		43	鹿大構内L-6区	鹿児島市	竪穴住居炉周辺の床面	○	○		
	55	塚崎古墳	肝付町高山	埴輪付着	○				
	44	西ノ平	川内市	内赤土師器		○			
	45	フミカキ	松元町	土師器		○			
	46	下永迫A	伊集院町	土師器		○			
	47	六反ヶ丸	出水市	土師器		○			
	52	市ノ原4地点	日置市東市来町	土師器		○			
49	上水流	南さつま市金峰町	土師器碗・杯ほか		○				
56	芝原	南さつま市金峰町	土師器		○				
57	持躰松	南さつま市金峰町	土師器		○				

※ 一部宮崎県を含む

## 第11章 発掘調査のまとめ

### 第1節 縄文時代の概要

#### 1 遺構

縄文時代中期中葉～晩期の遺構は、U～Z-1～10区を中心に分布しており、特にW～Y-5・6区において、遺構と遺物が集中している。

該期の遺物包含層はX～XII層に相当するが、河川による氾濫堆積層などを含んでいることから層が混在しており、時期と層の関係を明確に示すことは困難である。したがって、該期の遺構はX～XII層から検出されたものを一括して取り上げることにした。

検出された遺構は、集石3基、土坑29基、焼土跡1基、ピット255基である。集石1・2号が検出された一帯からは、焼土跡や炭化物を含むピットや土坑が検出された。住居跡や竪穴状遺構は、層位の攪乱や、該期の住居跡の検出自体が困難であるなどから、はっきりと確認することはできなかった。

しかし、本遺跡を含めた一帯は河川沿岸ということから、生活に適した好環境に位置している。さらには、隣接する芝原遺跡から、該期の竪穴状遺構が検出された。これらのことを踏まえると、当時、本遺跡ではある程度の規模を持った集団生活を営んでいたと考えられる。

#### 2 中期中葉～後期出土土器

該期の土器については、様々なバリエーションのものが出土した。

I類に示した4点とII類に示した1点は、既存の形式で言う春日式土器である。施文位置と施文方法から、I類を前谷段階、II類を轟木ヶ迫段階とした。

東和幸氏は、春日式土器の初期段階である北手牧段階を中期中葉に位置づけた。その後、春日式土器は前谷段階で盛行を迎え、轟木ヶ迫段階から南宮島段階で衰退していくとしている(東2009)。そこで、I・II類を中期中葉～後葉と位置づけることにした。尚、先述した芝原遺跡の竪穴状遺構からは、同系列の遺物が出土している。

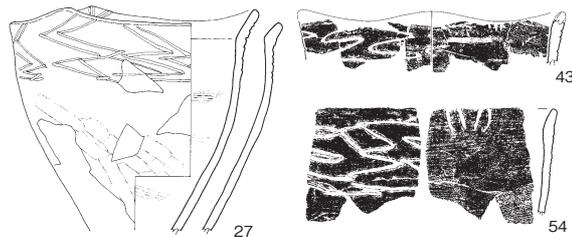
III類は、太い凹線文を施すものを一括している。既存の型式で言うと、阿高式土器から南福寺式土器の範疇に相当する。田中良之氏は、阿高式土器の編年指標を文様帯数と文様帯の伸縮により示すことができるとし、施文の伸長によりI式は胴部上半部、II式は胴部最下端まで、III式を口縁部のみとしている(田中1979)。また、前川氏は、南福寺式土器を器形や文様要素の主体は阿高式から踏襲するが、口縁部の肥厚や簡素な曲線による施文法など細かな変化を唱えている

(前川1979)。これを受けて、III類はa類(阿高式土器)とb類(南福寺式土器)に細分することにした。

しかし、両者の時期を中期・後期として明確に位置付けることについては、未だ解決をみない状況である。そのため、本書ではIII類を中期～後期の移行段階の土器として捉えることにした。

IV類は、III b類で示した南福寺式土器の器形文様を踏襲する出水式土器である。太い凹線文から細い沈線へと推移し、文様も簡単な直線を口縁部に集中して施すようになる。河口貞徳氏が提唱する縄文時代中・後期の土器編年によると、両者の変遷期が縄文時代中期から後期への移行期となる(河口1957)。これを踏まえ、IV類以降を後期出土土器とした。

V類は指宿式土器に類し、VI類は同型式の底部を一括した。指宿式土器は、2本の平行沈線による曲線文、直線文が特徴的である。段階的には、曲線から直線へ、複雑なものから単純なものへと変遷している。このような施文様に加え、ここでは99に見られるような横W字文が施されているものも出土している。縦方向の施文が横に展開するような施文は、指宿式土器本来の文様モチーフではなく、後期阿高式系に多く認められるとしている(黒川2009)。しかし、黒川氏は類例は少ないが、これまでに同様の出土例があることも示している。その中には、本遺跡と近い同市に位置する上水流遺跡(第110図)や、隣市の堂園遺跡B地点も含まれ、本遺跡との関連性が窺える。



第110図 指宿式土器(上水流遺跡出土)

VII類は、貝殻腹縁部による刺突文で擬似縄文的な効果を上げている土器を一括して掲載した。ほとんどが2本の沈線間に貝殻刺突文を施す文様であることから、指宿式期に該当すると考えられる。VIII類は、磨消縄文土器を一括して掲載した。VII類同様2本の沈線間に縄文を施しているものが多い。IX類は、口縁部の断面部が三角形ないし長三角形を呈すもので、既存の型式で言う市来式土器である。ただ、418については、丸尾式土器と判断した。X・XI類は、器形による判別が困難な無文土器及び型式不明の把手、底部を一括して掲載した。

### 3 晩期出土土器

晩期の土器は、時期を位置付ける明確な鍵層がないことから、器面調整に重きを置いて、器形と文様などによる分類を優先させた。その結果、Ⅻ類をa類（粗製土器）、b類（精製土器）、c類（半粗半精製土器）に分けた。

晩期土器の型式については、堂込秀人氏が作成した編年図をもとに分類を行った（堂込 1997）。

a類は、粗製深鉢形土器である。器形が判明しているものについては、549～553が入佐式土器の旧段階で、554～556が入佐式土器の新段階に属する。b類は、精製浅鉢形土器である。588～603が入佐式土器に属する。607・608は黒川式土器に属する。c類は、半粗半精製の浅鉢形土器で、黒川式土器に属する。

### 4 土製品

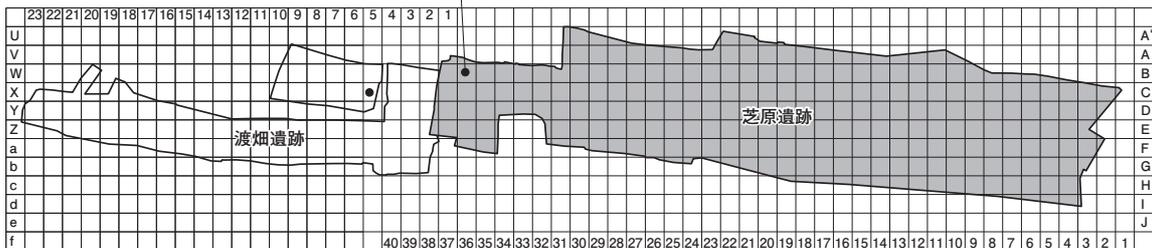
足形土製品とメンコ類を土製品として一括した。足形土製品については、隣接する芝原遺跡出土の足平部と接合する足首部が出土した（第111図、写真20）。

土製品として、身体を表現するものに土偶がある。土偶の初現は関東地方で縄文時代の早期前半であり、九州の中・北部では、後期初頭で出土している。本製品は、膝から下部にかけてのみである。土偶の多くは壊されて出土していることから、上部が存在していた可能性も否定できない。ただ、本製品は膝から足の指に至る細部まで表現しており、このような土偶は他に類を見ない。

土偶に関しては、その用途や目的について、これまで祭祀的な意味合いを持つという指摘もあったが、明確には示されていない。本製品については、当時の生活文化を知る上で貴重な資料となり得るため、今後検討していく必要がある。



写真20 足形土製品出土状況



第111図 足形土製品出土状況図

メンコについては、土器の底部を二次的加工により利用したものであるが、用途並びに時期は不明である。

### 5 石器

河川沿岸という立地条件のため石材が容易に獲得できることから、量は少ないが、食材加工具である磨石・敲石の割合が大きい。また、磨製石斧も鑿形のものや大型のものが出土しており、当時の生活様式が窺える。さらに特筆すべきは、鋸歯尖頭器と鋸歯縁石器が少量ではあるが出土したことである。隣接する芝原遺跡でもその出土が確認された。山崎純男氏は、石銛・組み合わせ銛は漁撈文化が、西九州に広く展開していたことを示すものであると指摘している（山崎 1988）。本遺跡及び芝原遺跡で出土したことは、それが南九州まで及んでいたことを窺える資料となる。

#### 引用・参考文献

- 東 和幸 2009 「鹿児島県の縄文時代中期土器」『南九州縄文通信』第20号刊行記念研究会 南九州縄文研究会
- 田中 良之 1979 「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会
- 前川 威洋 1979 「縄文後期文化—九州—」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会
- 河口 貞徳 1957 「南九州後期の縄文式土器」『考古学雑誌』第42巻第2号
- 黒川 忠広 2009 「上水流遺跡出土の指宿土器—後期阿高式系土器との接点—」『南九州縄文通信No.20 南の縄文・地域文化論考 上巻 新東晃一代表還暦記念論文集』南九州縄文研究会
- 「上水流遺跡1」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（113）「掲載遺物No.27, 41, 54」
- 堂込 秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古No.31』鹿児島県考古学会
- 山崎 純男 1988 「西九州漁撈文化の特性—石製銛頭（石銛）を中心に—」『季刊 考古学 第25号』

## 第2節 弥生・古墳時代の概要

A地点からは、遺構は検出されなかった。遺物は、少数ではあるが弥生時代前期から古墳時代後期と考えられる土器が出土している。

甕形土器の分類に土器形式をあてはめると以下のとおりである。Ⅰ類からⅦ類が弥生時代、Ⅷ・Ⅸ類が古墳時代とした。

Ⅰ類：刻目突帯文 Ⅱ類：入来Ⅱ式 Ⅲ類：黒髪式  
Ⅳ類：須玖式 Ⅴ類：弥生後期前半 Ⅵ類：松木蘭式  
Ⅶ類：中津野式 Ⅷ類：東原式 Ⅸ類：笹貫式

弥生時代中期後半のⅢ類とⅣ類は搬入品とみられ、他地域との交流が考えられる。Ⅳ類の703は、口縁部上面に暗文があり、赤色顔料が塗布され丁寧なつくりである。Ⅶ類の中津野式土器は、弥生時代終末に位置づけられるが、一部は古墳時代に入る可能性もある。

古墳時代後半期は、Ⅸ類の笹貫式土器が出土した。甕の口縁部は直立あるいは内湾しており、1条の突帯が貼付されるものである。突帯には貼り付けの際の指頭圧痕がみられるもの(717・719・720)がある。高坏は、坏部が碗形で外面に赤色顔料が塗布されたもの(758・759)がみられる。古墳時代の甕形土器(761)が出土したことは特筆される。包含層からの出土で詳しい時期は分からないが、「つつぬけタイプ」(杉井1999)で、南九州で出土している甕の多くがこのタイプである。

## 第3節 古代の概要

### 1 土師器

坏・碗ともに全体形状の把握できるものは少ない。碗については、高台の低いもの(781・782)が出土しており、9世紀頃と思われる。見込みに刻書された碗(783)が出土している。黒色土器は、内面のミガキが顕著で体部が丸みをもつもの(787・788)があり、9世紀末～10世紀前半と考えられる。

### 2 須恵器

出土数はそれほど多くはないが、碗・蓋・甕・壺などがある。主体は、甕・壺のような大型貯蔵具である。渡畑遺跡の近くには、「中岳山麓窯跡群」が所在し、出土している須恵器の多くはこの窯で焼かれたもので、時期は9世紀中頃と思われる。

## 第4節 中世の概要

A地点は調査面積が小さく、遺構は検出されず、出土遺物も少ない。以下述べる内容は、A地点の出土遺物を整理し報告書を作成する段階で分かったこと、考えたことをまとめたものである。今後、B地点の調査成果が明らかとなり、中世における渡畑遺跡の位置付

けや評価は変更される可能性もあることをあらかじめ断っておく。

### 1 輸入陶磁器の時期

今回、器種ごとの組成を集計していないが、出土遺物は太宰府の貿易陶磁編年によればC～G期、つまり11世紀後半から15世紀頃のもので構成される。A地点の傾向としては、E・F期(13世紀前後～14世紀初頭)のものがやや多いようである。

### 2 海の道と物流—墨書のある陶磁器、滑石製品、カムイヤキの出土からみえてくるもの—

A地点から、2点の墨書のある陶磁器が出土した。輸入陶器(853)と竜泉窯系青磁(873)で、2点とも底部外面にみられる。残念ながら破片であり、墨書が文字なのか記号なのかは判読できなかった。青磁は、G期(14世紀以降)のものと思われる。

博多遺跡群からは、墨書陶磁器が3千点以上出土している。墨書された文字や記号は、種類が様々で、それらがどこで書かれたのかについても諸説ある。

県内での出土例は少ないが、万之瀬川下流地域の遺跡から数点ではあるが出土している。上水流遺跡では、見込みに「立」に類似した墨書がある青磁の香炉が出土している。時期は、G期のものである。正式な報告書は刊行されていないが、芝原遺跡から「十」「大」の墨書白磁が2点、「大」の朱書青磁が1点出土している(中村・栗林 2003, 鹿児島県教育委員会 2005)。

滑石製品がA地点から2点(902・903)出土した。B地点では、滑石製石鍋も出土していることから、それらは石鍋を再加工したのと考えられる。

滑石製石鍋は、長崎県西彼杵半島を原産地として、中世を通じて使用され、県本土はもとより奄美諸島・琉球諸島まで広く分布することがわかっている(栗林 1994, 堂込1999)。また、県内で出土する石鍋の中心年代は、12世紀から13世紀の中世前期と指摘されている(栗林1994)。

万之瀬川下流地域では、持躰松遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡で滑石製石鍋が出土している。また、最近の発掘成果から新たに出水市大坪遺跡、いちき串木野市安茶ヶ原遺跡、日置市市ノ原遺跡・向栴城跡などで出土していることが知られている。これら出土地点は、先に栗林氏が指摘しているように、薩摩半島西岸地域が多く、河川流域に分布している。

A地点では、カムイヤキ(849)も出土した。県本土において小片で出土する例が多いが、本遺跡では底径が12cmの比較的大きな壺の胴部下半が見付かっている。

カムイヤキは、11～13世紀に徳之島で生産され南

西諸島に広く分布していることがわかっている(堂込1999)。

最近の発掘成果によれば、万之瀬川下流地域の上水流遺跡、芝原遺跡、持鉢松遺跡で出土している。また、いちき串木野市柵城跡、日置市向柵城跡などでも出土している。カムイヤキの県本土における出土分布も、滑石製石鍋のものと重なる部分もある。

墨書陶磁器をはじめこれらの遺物は、在地のものではなく外部から持ち込まれた広域流通品である。

以前、考古学と文献史学の側から万之瀬川下流地域と南方(奄美諸島-琉球-中国)や九州西北部(肥前)との密接な関係が指摘され、中世の流通経路の復元が行われたことがある(栗林1994, 堂込1999, 柳原1999・2003)。

今回の出土事例からも、博多-肥前-薩摩半島-南島をめぐる交易ルート(海の道)を想定することができ、海を介した中世のヒトやモノの動きがあったことを考古学的に裏付けることになるだろう。

#### 【引用・参考文献】

- 鹿児島県教育委員会 2005『先史・古代の鹿児島(資料編)』
- 鹿児島県教育委員会 2006『先史・古代の鹿児島(通史編)』
- 栗林文夫 1994「滑石製石鍋出土遺跡地名表-鹿児島県」『大河』第5号 大河同人
- 堂込秀人 1999「中世南九州の竪穴建物跡」『南九州城郭研究』1 南九州城郭談話会
- 中村和美・栗林文夫 2003「持鉢松遺跡(2次調査以降)・芝原遺跡・渡畑遺跡について」『古代文化』第529号 古代学協会
- 中村和美 1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
- 柳原敏昭 1999「中世前期南薩摩の湊・川・道」『中世のみちと物流』山川出版社
- 柳原敏昭 2003「平安末~鎌倉期の万之瀬川下流地域-研究の成果と課題」『古代文化』第529号 古代学協会

### 第5節 南九州における古墳時代の甑形土器

#### 1 はじめに

古墳時代の甑形土器については、南九州では宮崎県地域に集中して出土しており(杉井2002)、鹿児島県内での出土例は極めて少ない。薩摩半島や鹿児島湾岸地域は、点的にしか存在せず、基本的に製作・使用していなかったとされる(中村2004・2009)。

薩摩半島西岸地域に所在する渡畑遺跡(B地点)か

ら古墳時代の甑形土器が1点出土した。以前、県内の類例が紹介されたことがあったが(三垣2005)、その後の発掘調査で出土事例も増えている。本稿では、南九州地域で出土した甑形土器を集成し、その地域性を探っていきたい。

#### 2 甑形土器の分類

甑のさまざまな要素の中で、大きさ、蒸気孔、把手に着目し分類が行われてきた(杉井1999・2002)。本稿でも甑の分類は基本的に杉井氏の蒸気孔による形態分類(表41, 図112)を用いる。

大きさ:容量1ℓ前後は小型、5~15ℓ程度は大型に区分できる。弥生時代後期の鉢形有孔土器は小型、古墳時代中期以降の把手付甑は大型に分類できる。

蒸気孔:スノコ状のものを入れて使用されたと想定されスノコを支える工夫が行われているかどうかで分類する。大きくはスノコ支え有りタイプとスノコ支え無しタイプである。さらに、蒸気孔の形態により多孔タイプ、粘土による棧を渡すタイプ(棧作り付けタイプ)、棧渡し用の小円孔を有するタイプ(棧後付けタイプ)、つつぬけタイプの4つに細分できる。

把手:把手の有無による

#### 3 南九州の甑形土器の様相

##### (1)薩摩半島および鹿児島湾岸地域(図114)

これらの地域からの出土例は極めて少なく、いずれも「つつぬけタイプ把手無大型甑」である。薩摩半島では、日置市吹上町入来遺跡と南さつま市金峰町渡畑遺跡で出土している。入来遺跡の6号住居跡から出土した甑(図114-2)は完形品で、器面調整はハケ目で仕上げられている。他に須恵器も共伴しており6世紀中頃のものと思われる。渡畑遺跡から出土した甑(図108-3)は、包含層から出土したもので、調整は工具ナデで指頭圧痕が確認できる。鹿児島大学構内遺跡では、河川跡から出土しており、出土地点の近くには古墳時代後半期の集落跡が見付かっている(中村2004)。

##### (2)川内平野(図115)

薩摩川内市東大小路町の大島遺跡では、古墳時代から古代の甑がある程度まとまって出土している。「多孔タイプ」「棧作り付けタイプ」「つつぬけタイプ」など複数のタイプが出土しているのが特徴である。

「多孔タイプ」(図115-1)の蒸気孔は、円孔の周囲に4~5つの円孔がある。「棧作り付けタイプ」(図115-3)は、胴部に貼付突帯がめぐり、外面にはナデ調整が施され成川式土器の特徴がよく表れている。口径も20cmを超えらると思われ、大型甑に分類できる。

「つつぬけタイプ」(図115-4～6)は、外面の調整がタタキ目であるのが特徴である。4は、「つつぬけタイプ把手付大型甑」で口径・器高とも20cmを超えるものと思われる。器形は、ゆるやかに外反するもので把手は牛角状のものを押しつぶした平たいものである。外面にはタタキ目が残り、須恵器に類似する。古代の大型竪穴状遺構からの出土であるが、時期は6世紀頃と推定されている(宮田2005)。

大島遺跡では、「在地色の強い成川式土器の特徴がみられる甑」と九州北部地域で分布が多い「つつぬけタイプ把手付甑」の両方がみられる。また、古代の竪穴住居跡が23軒発見され、その中の2軒は竈付住居跡である。以前竈付住居跡の発見から、肥後国からの入植者の存在が想起されたが(川口2007)、「つつぬけタイプ把手付甑」の出土からも九州中・北部地域との何らかのつながりを考えることができる。

2つのタイプの甑が出土した事実は、古代の竈付住居跡の出現の仕方、つまり「全ての住居跡に竈が設置されているわけではないこと」と関連があらう。大島遺跡の8世紀の集落跡について「遺跡を形成した集団の主体は在地の人々であった可能性も考慮すべき」との指摘もあるが(川口2007)、古墳時代の甑からも他地域からの影響を受けながらも在地の人々は自分たちの方法で甑を製作した可能性を想起させる。

### (3)えびの盆地(図116)

宮崎県えびの市佐牛野遺跡、上田代遺跡から「多孔タイプ」、「つつぬけタイプ」の甑が出土している。

「多孔タイプ」(図116-1)は、溝状遺構から出土した甑の底部で、8～9つの小円孔がある。

「つつぬけタイプ把手無甑」(図116-4)は、竪穴住居跡から出土したものである。口縁部がやや内弯気味で口径16.5cm、器高18.2cmで外面はハケ目調整で仕上げられている。蒸気孔の端部は肥厚し、やや尖り気味になっている。須恵器や須恵器模倣坏(以下模倣坏とよぶ)も共伴しており、甑の時期は5世紀後半から6世紀初頭と考えられる。

### (4)都城盆地(図117)

都城市鶴喰遺跡では、竈付住居跡とともに多くの甑が出土している。これらの甑は「つつぬけタイプ」や「棧後付けタイプ」に分類できる。出土している大部分は「つつぬけタイプ」で、把手付のものと無いものがある。

「つつぬけタイプ把手付大型甑」(図117-1)は、牛角状の把手が付き、内外面ともに工具ナデ調整が施されている。住居内の土坑に正位で埋設されたもので、祭祀など儀礼とのかかわりが考えられる。

「つつぬけタイプ把手無大型甑」(図117-2)は、口

縁部を欠くが口径は20cmを超えるものと思われる。

このタイプは、宮崎県地域に集中して分布し6世紀代以降のものと考えられる(杉井2002)。鶴喰遺跡からは、須恵器の坏蓋が共伴しており、時期は7世紀中頃と推定される。

「つつぬけタイプ」の特徴として、外面はナデ調整が施されているものが多い。内面に接合痕が明瞭に残るもの(図117-3・4)も見られる。

「棧後付けタイプ」(図117-5・6)は、口縁部がバケツ形で、口径・器高ともに20cmを超える大型甑である。蒸気孔付近には穿孔が2つあり、その孔は対置されている。胴部に1条の絡縄突帯がめぐるものがある(図117-6)。

このタイプの特徴は、外面に接合痕が明瞭に残っていることである。須恵器坏蓋が共伴しており、時期は7世紀中頃と思われる。

鶴喰遺跡22号住居跡では、竈のかけ口にかけられたままの状態で甑が出土し、甑の使用方法を考える上でも注目される。同じ住居跡からは甑が出土していることから、甑は甕の上にかけていたものと想定されている(米澤2004)。

牛角状の把手がある「つつぬけタイプ把手付甑」は、九州北部地域の影響が考えられる。また、器形がバケツ形で絡縄突帯がある甑は、成川式土器、その中でも最新段階の笹貫式土器の特徴がよく表れている(中村2009)。

鶴喰遺跡では、バケツ形の口縁部で平底の甕と丸底甕の2種類が出土し、竈・甑・坏(模倣坏)・丸底甕がセットで確認されていることが指摘されている(中村2008)。

都城盆地は、甑の製作方法において、川内平野と同じように在地的な特色がありながらも他地域からの影響を強く受けている地域と言えるだろう。

### (5)肝属平野(図118)

志布志市上苑A遺跡、鹿屋市吾平町中尾遺跡から「多孔タイプ」「棧後付けタイプ」「つつぬけタイプ」の甑が出土している。

「多孔タイプ」(図118-1)は、上苑A遺跡で出土した甑の底部で孔の直径は3mmである。須恵器の坏身が共伴しており時期は6世紀後半から7世紀初め頃と思われる。中尾遺跡で出土した甑は(図118-2)、小円孔を蜂の巣状に穿孔するもので、円孔は焼成前に穿孔されたと思われる(三垣2005)。

「棧後付けタイプ」(図118-3)は、口縁部がやや外反しバケツ形に近い。口径約25cm、器高約20cmの大型甑である。蒸気孔端部付近に16か所の円形の刺突痕がある。従来知られているタイプは、底部付近に一對な

いし二対以上の小円孔を穿つもので、中尾遺跡の出土例は特異である（三垣2005）。胴部には指頭による刻目突帯が1条めぐる。

「つつぬけタイプ」(図118-4～7)は、もっとも多く出土しているタイプである。「つつぬけタイプ把手無大型甑」(図118-4・5)は、竪穴住居跡から出土したもので、口径・器高は20cmを超える。このタイプは、胴部に突帯が貼り付けられ、外面はナデ調整が施され、成川式土器の特徴がよく表れている。

以上まとめると、肝属平野は「つつぬけタイプ把手無大型甑」の出土にみられるような宮崎県地域の影響を受けている地域ではあるが、甑の製作技法においては在来性が色濃く残る地域と言えるだろう。

#### 4 おわりに

最近の発掘調査成果から南九州の甑形土器についてみてきた。出土している甑は、様々でそれぞれ地域性があることがわかった。甑の製作技法においては、九州北部地域など他地域の影響を受けながらも、南九州の在来性がみられることが明らかとなった。中村氏は、「竈の導入や土器相の複雑さは、外来の情報や技術、慣習を南九州の人々が様に受け入れたのではなく、地域や集落ごとに選択していた」と述べているが（中村2009）、甑についてもそのことが言えそうである。

南九州でも古墳時代の竈付住居跡の検出事例が増え、それに伴う甑の出土数も以前にくらべると増えている。しかし、古墳時代の竈付住居跡は都城盆地など南九州の限られた地域でしか発見されていない。つまり、大部分は竈を伴わない住居跡である。

甑の使用法について、「住居跡中央部の地床炉（焼土域あるいは掘り込みをもつ焼土域）で使用された可能性」が指摘されたが（三垣2005）、筆者も首肯すべきと考える。南九州の古墳時代の竈がほとんど検出されていない中、甑の使い方も南九州独自であったと考える。竈を用いず、甕を炉に直接あるいは石などで支えて置き、その上に甑を据えたと思われる。今後、甑にみられる使用痕など（スス付着の位置）を検討する必要があるだろう。

今回、甑と関連のある竈についての検討をすることができなかった。今後南九州でみられる竈と九州北部など他地域との比較を行うことで、甑の地域性はより明らかになるとと思われる。

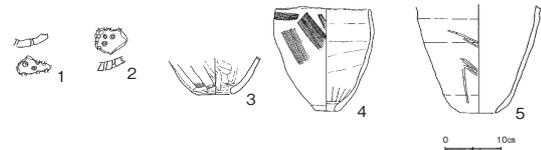
【付記】本稿作成にあたり、池畑耕一氏、中村耕治氏、宮田栄二氏、上床真氏から多くのご教示をいただいた。ここに記して、感謝の意を表したい。

#### 【引用・参考文献】

- えびの市教育委員会 1997『田代遺跡群 上田代遺跡・松山遺跡・竹之内遺跡、妙見原遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- えびの市教育委員会 2000『佐牛野遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書 第27集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (80)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『中尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (87)
- 河口貞徳 1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会
- 川口雅之 2007「薩摩国府推定域とその周辺の様相—近年の調査成果から—」『条里制・古代都市研究』第22号 条里制・古代都市研究会
- 志布志市教育委員会 2008『上苑A遺跡・穴倉B遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 杉井健 1999「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室
- 杉井健 2002「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 中村直子 2002「薩摩・大隅」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 中村直子 2004「古墳時代における南部九州在来土器と土師器との関係性」『新しい関係性を求めて「コミュニケーションのかたち—ことば・もの・メディア—』』鹿児島大学
- 中村直子 2008「第VI章 上苑A遺跡出土の成川式土器と須恵器について」『上苑A遺跡・穴倉B遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 中村直子 2009「7・8世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考 中巻』南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 三垣恵一 2005「第IV章 発掘調査のまとめ」『中尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (87)
- 都城市教育委員会 2004『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第61集
- 宮田栄二 2005「第XI章まとめ 第2節古墳時代について」『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (80)
- 米澤英昭 2004「IVまとめ」『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第61集

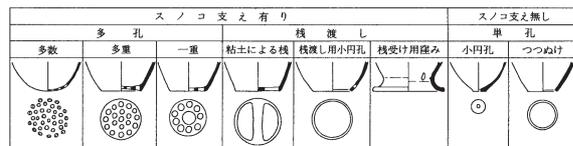
表41 蒸気孔の形態分類 (杉井1999より)

分類	細分とその内容	蒸気孔の形態	工作方法	
スノコ支え有り	多孔	多数	小円孔	刺突
		多重	中央孔のまわりの周囲孔が二重以上	刺突
	一重	多数	円孔	切り抜き
		一重	中央孔のまわりの周囲孔が一重のみ (中央孔)+(周囲孔) 針状孔+針状孔 円孔+針状孔 円孔+台形孔 円孔+三角形孔 円孔+円孔 円孔+楕円孔4孔以上 円孔+楕円孔3孔	切り抜き
棧渡し	棧作り付け	粘土による棧	半月孔2孔	切り抜き 粘土摩擦し
	棧後付け	棧渡し用小円孔 棧受け用窪み		
スノコ支え無し	単孔	小円孔 つっぬけ	底部中央に1孔 つっぬけ	小円孔 刺突

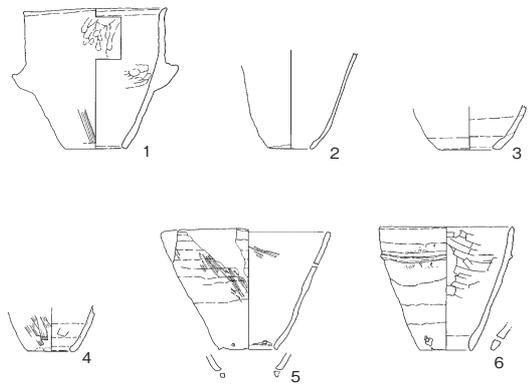


- 1: えびの市佐牛野遺跡SK-44
- 2: 佐牛野遺跡包含層
- 3: 佐牛野遺跡SA-11
- 4: えびの市田代遺跡8号住居
- 5: 上田代遺跡21号住居

第116図 えびの盆地の甑形土器

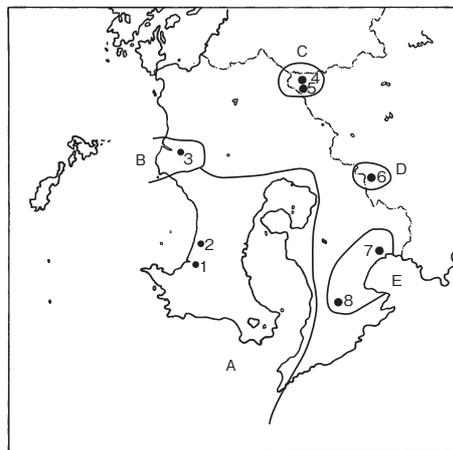


第112図 蒸気孔の形態分類模式図 (杉井1999より)

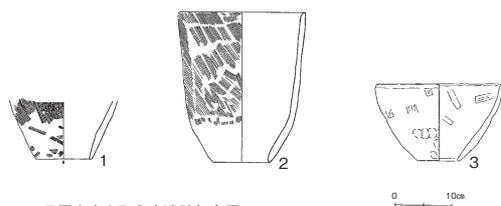


- 1: 都城市鶴喰遺跡SA36
- 2: 鶴喰遺跡SA20
- 3: 鶴喰遺跡SA2
- 4・6: 鶴喰遺跡SA24
- 5: 鶴喰遺跡SA47

第117図 都城盆地の甑形土器

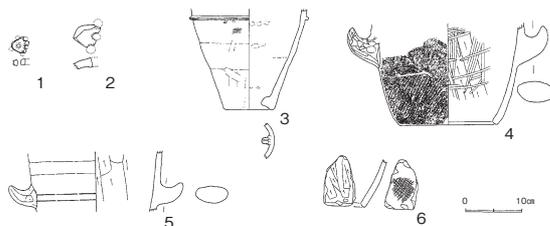


第113図 南九州の地域区分と甑形土器出土遺跡位置図



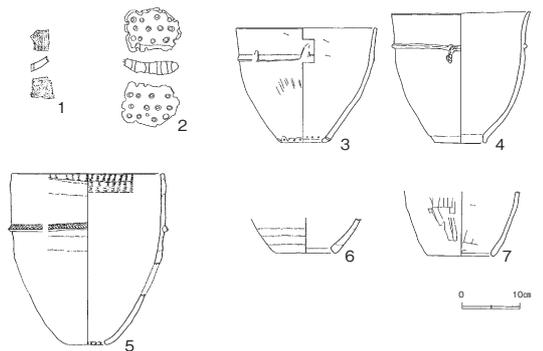
- 1: 日置市吹上町入来遺跡包含層
- 2: 入来遺跡6号住居跡
- 3: 南さつま市金峰町渡畑遺跡包含層

第114図 薩摩半島及び鹿児島湾岸地域の甑形土器



- 1~3, 5・6: 薩摩川内市大島遺跡包含層
- 4: 大島遺跡古代竪穴状遺構

第115図 川内平野の甑形土器



- 1・3・7: 鹿屋市吾平町中尾遺跡溝状遺構4号
- 2: 志布志市上苑A遺跡竪穴住居3
- 4: 中尾遺跡竪穴住居跡10号
- 5: 上苑A遺跡竪穴住居5
- 6: 上苑A遺跡竪穴住居1号

第118図 肝属平野の甑形土器

## 第6節 畝間状遺構について

万之瀬川下流域の遺跡では、縄文時代から近世・近代のそれぞれの時代でも注目すべき内容が少なくないが、その中でも特に中世以降について注目されることが多い。ところで、万之瀬川下流域の遺跡において中世以降の調査では、どの遺跡でも検出される遺構がある。大量のピット（柱穴跡）や、溝状遺構・竪穴建物・土坑などがそうであるが、ここではもうひとつ「畝間状遺構」をあげたい。中でも、渡畑遺跡A地点はほぼ全域が畝状遺構に占められているといっても過言ではない状況である。ここでは渡畑遺跡A地点で検出された畝間状遺構について取り上げたい。

まず、この「畝間状遺構」は、検出された状態では数十cmから数mの長さの溝状遺構が近接して検出され、かつそれぞれの溝状遺構が平行しているものである。基本的には、形状の類似性からはたけ（畠もしくは畑）の畝と畝の間につくられた「畝間」だけが残ったものであると考えられている。ただし、ほとんどの場合において畝間状遺構内からは出土遺物は発見されないし、発見されても混入品や同時代のものではない場合が多い。また、「はたけ」であるとされる場合でも、栽培種が明らかになっている場合はごく少なく、栽培種そのものの痕跡（種子・根・茎など）も残存している例は稀である。

本遺跡で検出された「畝間状遺構」でも以上のことは例外ではない。ここでは、本遺跡の畝間状遺構が「はたけ」であるという想定し以下の考察を行う。

今回の調査では、諸般の事情により全面にわたって調査を終了することができなかったため、完全に調査終了している部分は一部でしかない。ただし、完全に調査終了したエリアでは「畝間状遺構」が5層にわたって検出されたことから、最低でも5回程度は作り直されていると考えられる。軸としては、多くが北東方向に30°程度角度を持って南西方向に向かって走るという状況である。また、方位が異なる畝間状遺構もこの角度に直角に走るものが多い。基本的には一面が畝間状遺構に占められるが、ところどころには空白地帯が存在する。その多くは近代のガラスやセメント塊が混入する後世の攪乱であるが、中には肥料置き場や何らかの施設として同時期に利用されたものも含まれるかもしれない。

「畝間状遺構」の検出された層は、I b層からVI b層にわたっている。I b層が小さな軽石が混入した砂層であるほかは、II～VI b層までいずれも砂質土層である。本遺跡の基本的な土質は砂質であるといえるので、この事実から、砂質の土壌でも栽培が可能な作物を植えていたことが想定される。

砂質土壌でも栽培できる作物には、ラッキョウ（明治以降に全国に栽培が普及）・ソバ・大麦・大根・アワ・ヒエ・サツマイモなどがある。これらの作物は、現在で

も鹿児島の名産として著名なサツマイモをはじめとして、「救荒作物」として飢饉にも強いものが含まれる。特に、サツマイモは宝永2（1705）年に、前田利右衛門が民間人としてはじめて琉球から持ち帰って薩摩藩全域に伝えたものとされている。また、そのおかげで享保・天明・天保と何度も起きた飢饉でも、薩摩藩では一人の餓死者も出さなかったといわれている。

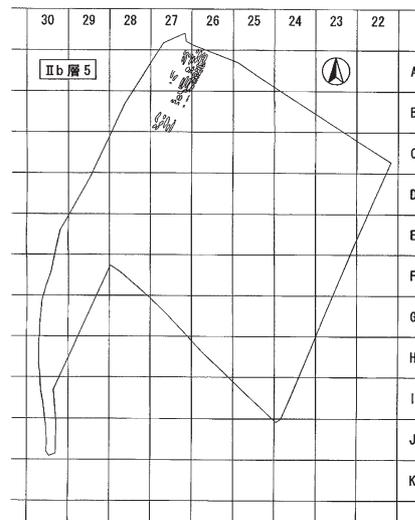
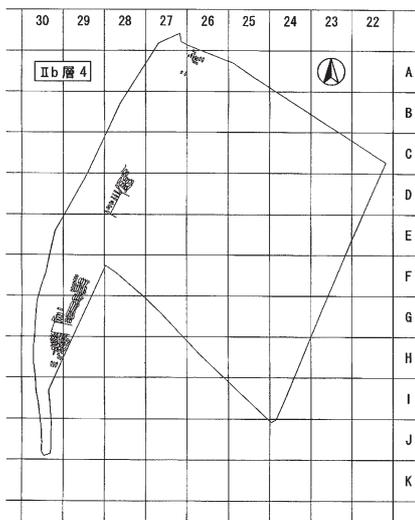
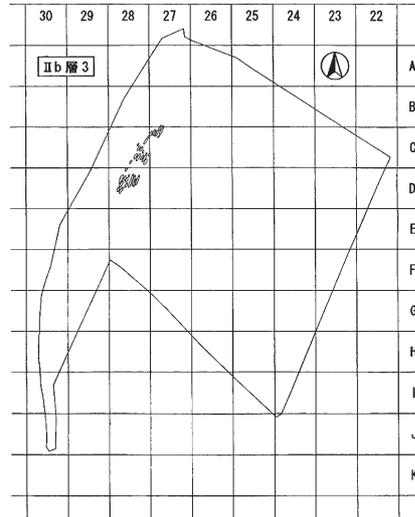
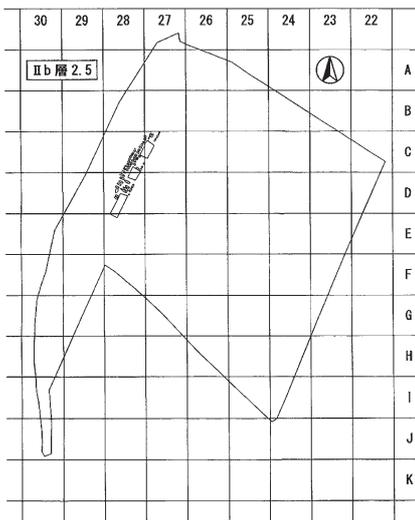
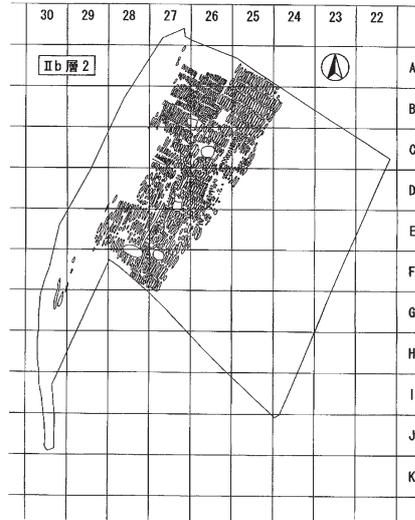
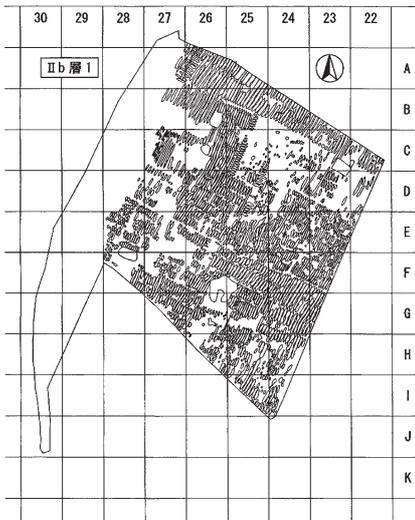
ところで、渡畑遺跡に隣接して、阿多御新田と呼ばれる新田が存在する。阿多用水路（阿多新田川）が享保10（1725）年に完成するが、伝承によれば、この御新田の開田のために渡畑付近に居住していた住民が他の場所に強制移住（立ち退き）させられたという話もある（金峰町1987・1989）。発掘成果からみても、持躰松・渡畑の各遺跡において17世紀後半以降の遺物がほぼ見られなくなることから、調査が行われた地点においてもこの頃に「生活の場」から「生産の場」に移行した可能性は高いと考える。

また、阿多用水路の完成によって、灌漑が可能となった後背湿地には乾田が形成されるわけであるが、その周囲を巡る自然堤防上は、地力が低く乾燥しているため、救荒作物の栽培を兼ねたはたけがつくられたものと推察する。そして、それが本遺跡で検出された畝間状遺構ではなかろうか。さらに、本遺跡においては川側に存在する畝間状遺構の中に、円形を呈したピット状のものもみられるので、さらに別の作物（例えば風避けのための生け垣になるもの等か）が植えられていた可能性も考えられる。ただし、遺構内から作物の痕跡が発見されていないので、以上に述べたことについてはあくまでも想定に過ぎない。

万之瀬川に暮らす人々にとっては、「飢饉」以上に「洪水」の方が脅威であったかもしれない。しかし、洪水が起きるのも数十年から数百年に一回であり、実際に水害にあう地点は毎回同じではないという。つまり、洪水は頻繁なものでなく、起きるにしても前兆を察知して事前に避難するなどして対処すれば大きな脅威ではない。いわば、河川に生活する人々は自然の脅威との付き合い方を心得ていたということになる。このあたりは現代に生きる我々にとっても大いに参考となるのではなかろうか。

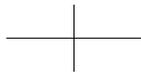
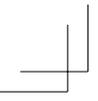
### 【参考文献】

- 日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会  
2000『はたけの考古学』  
上床真 2008「上水流遺跡とその周辺について」『上水流遺跡』2 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）  
金峰町郷土史編纂委員会 1987『金峰町郷土史』（上）  
1989『金峰町郷土史』（下）



第119図 敵間状遺構検出状況

# 写真図版





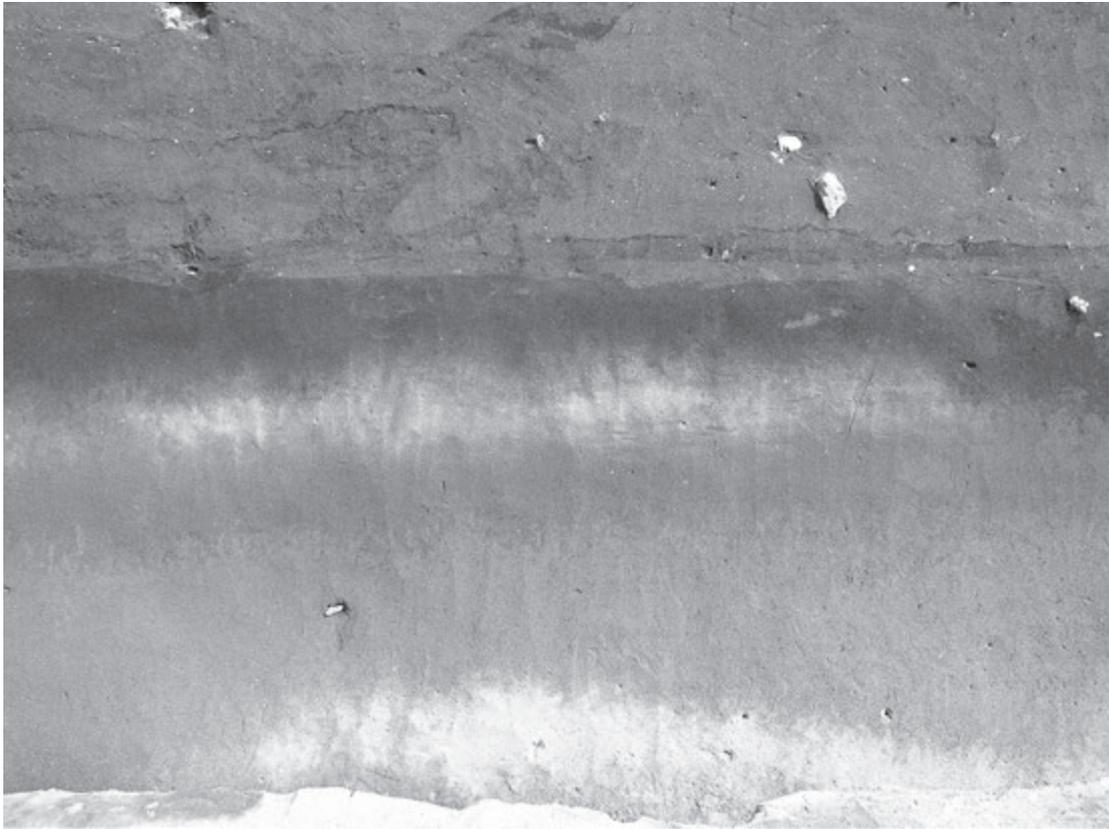
上空から見たB地点調査区



B地点調査区



B 地点北侧土层断面状况



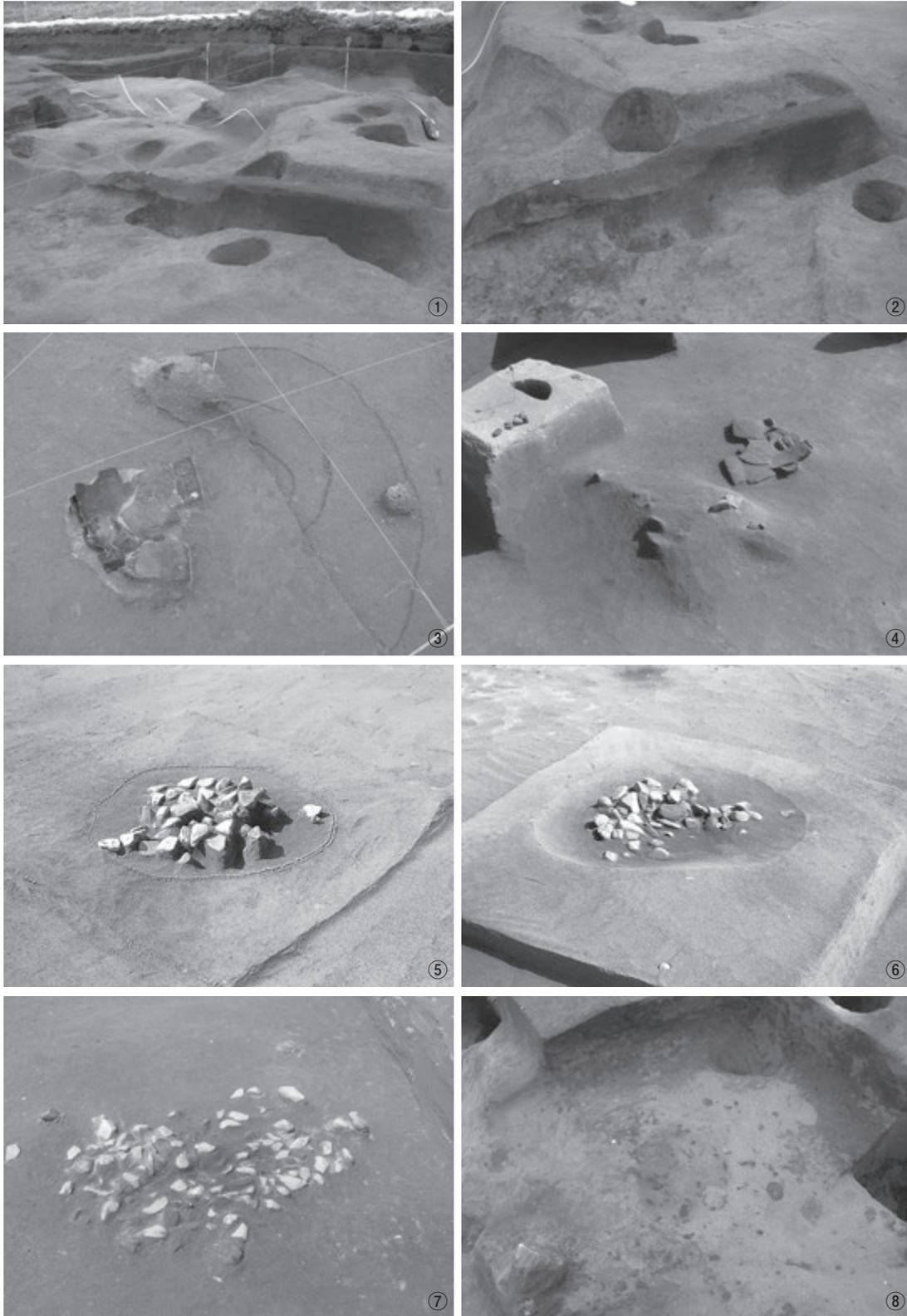
B 地点东侧土层断面状况



B地点遺構検出状況（1）



B地点遺構検出状況（2）



① B地点ピット検出状況（1）

③ B地点土坑検出状況（1）

⑤ B地点集石1号検出状況

⑦ B地点集石3号検出状況

② B地点ピット検出状況（2）

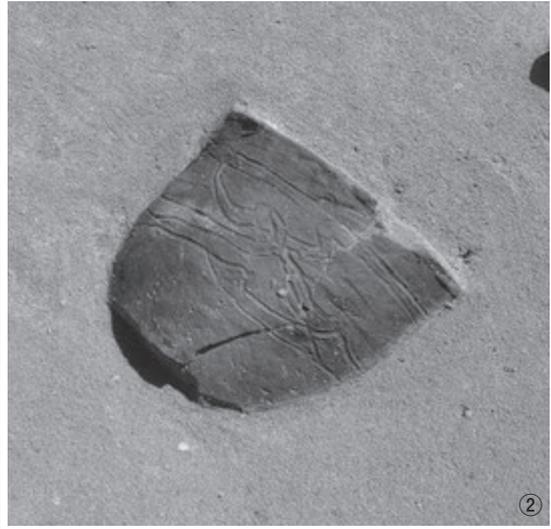
④ B地点土坑検出状況（2）

⑥ B地点集石2号検出状況

⑧ B地点焼土跡検出状況



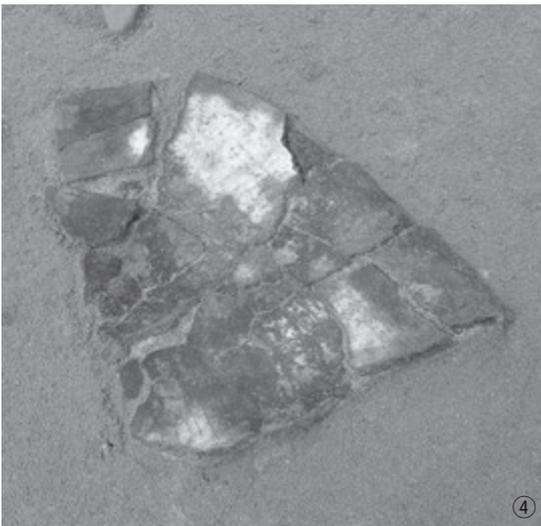
①



②



③



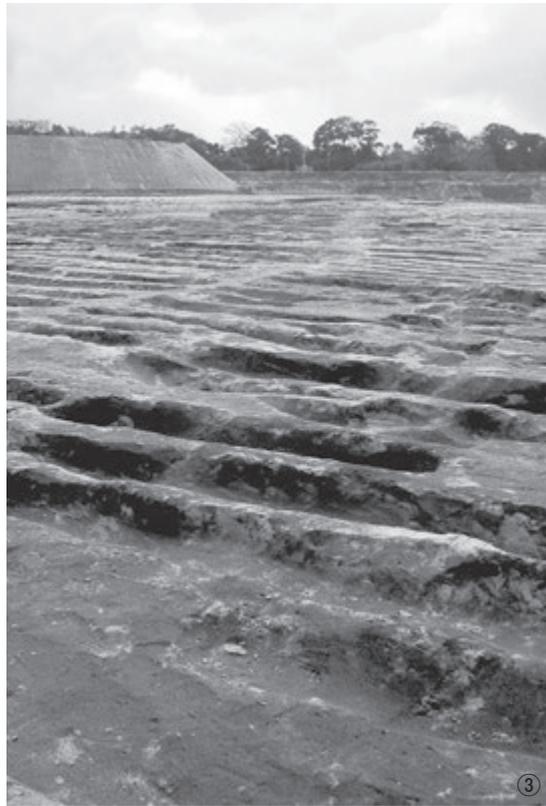
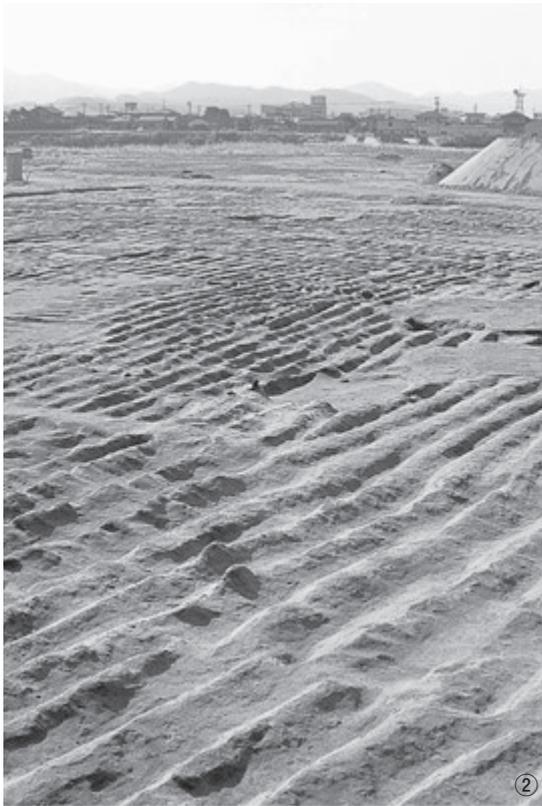
④



⑤

① B地点遺物出土狀況 (1)  
④ B地点遺物出土狀況 (4)

② B地点遺物出土狀況 (2)  
③ B地点遺物出土狀況 (3)  
⑤ B地点遺物出土狀況 (5)



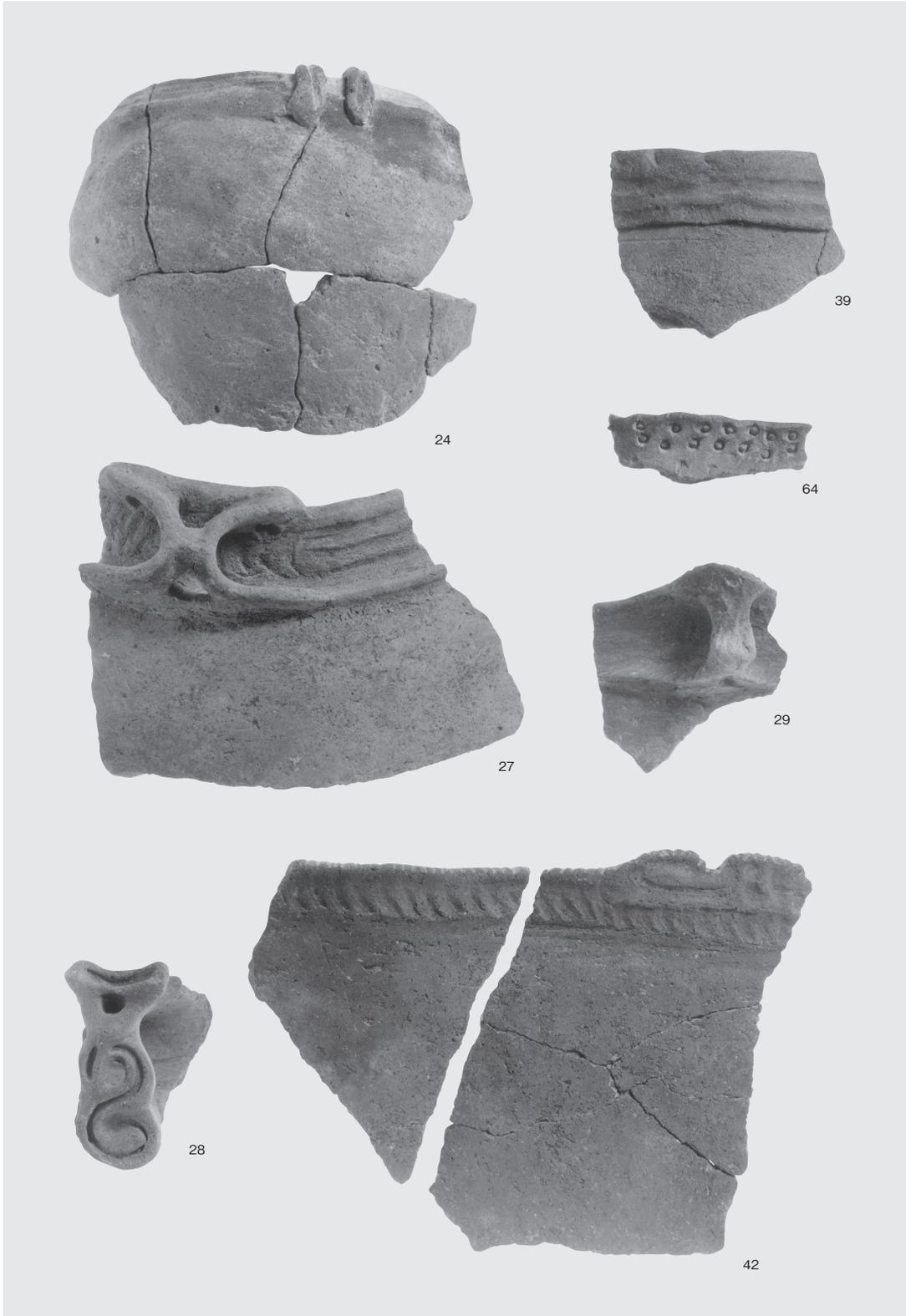
① A地点畝間状遺構検出状況（1）  
② A地点畝間状遺構検出状況（2）  
③ A地点畝間状遺構検出状況（3）



縄文時代後期ほかの土器



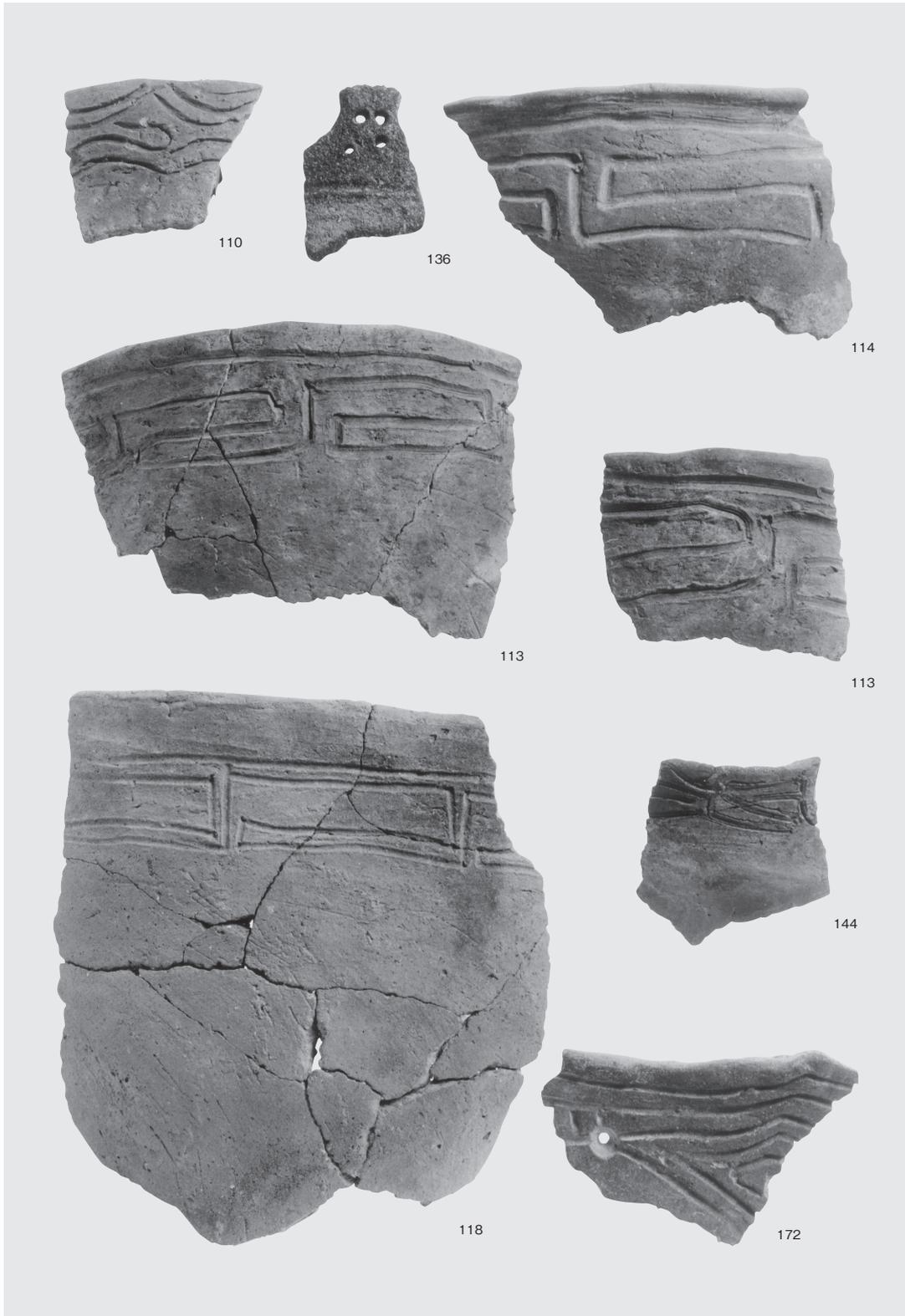
縄文時代中期の土器



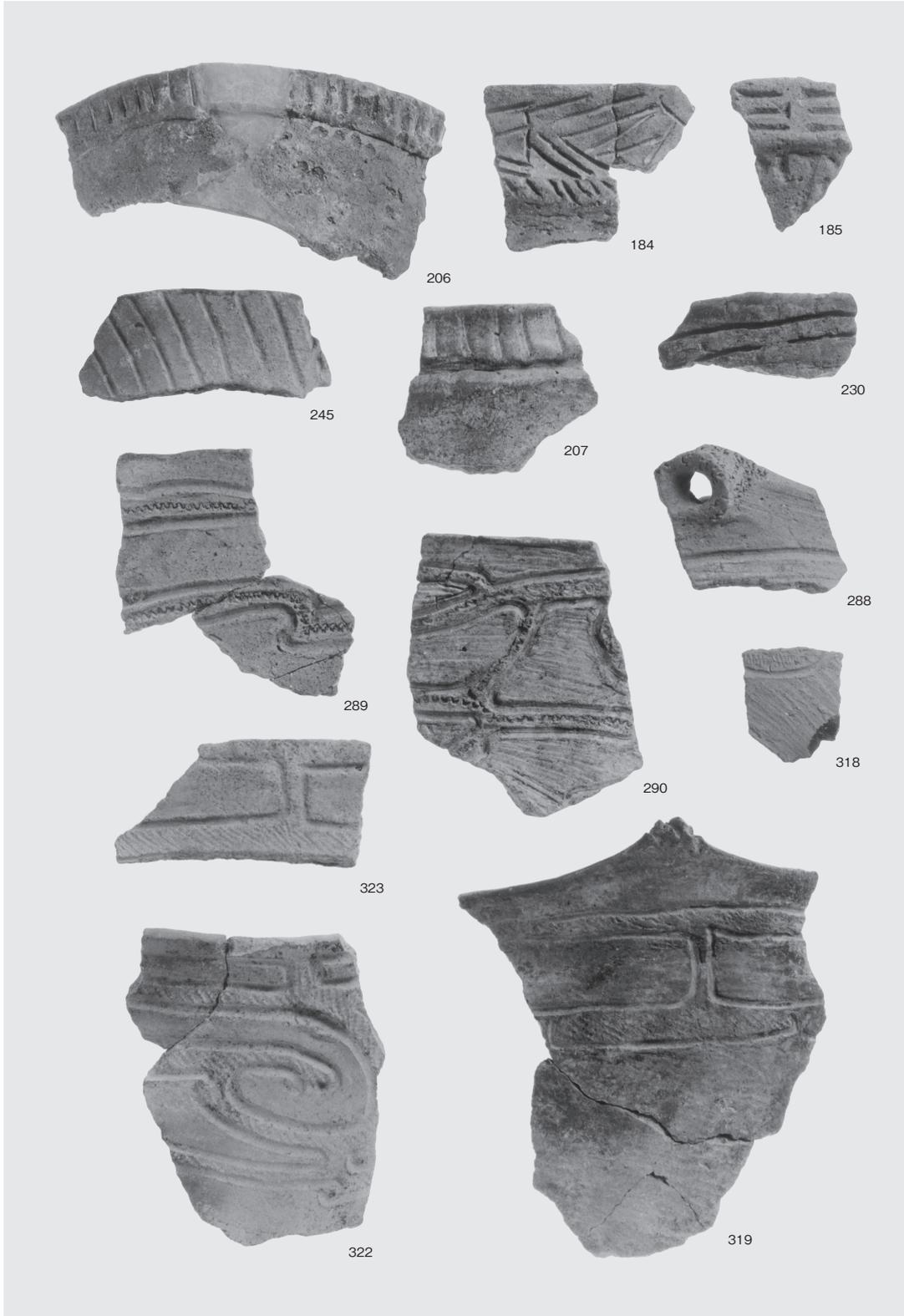
縄文時代中・後期の土器



縄文時代後期の土器（1）



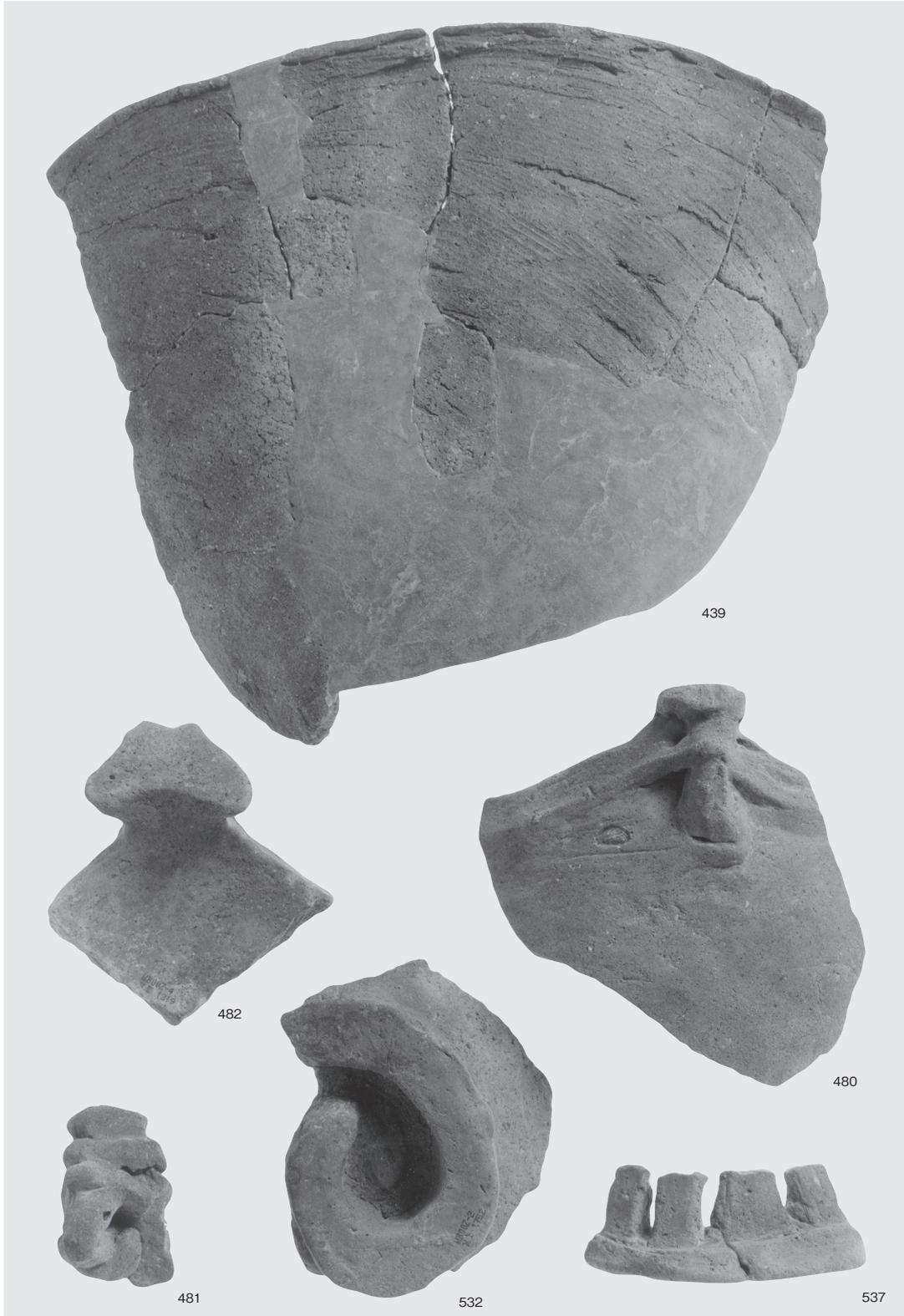
縄文時代後期の土器（2）



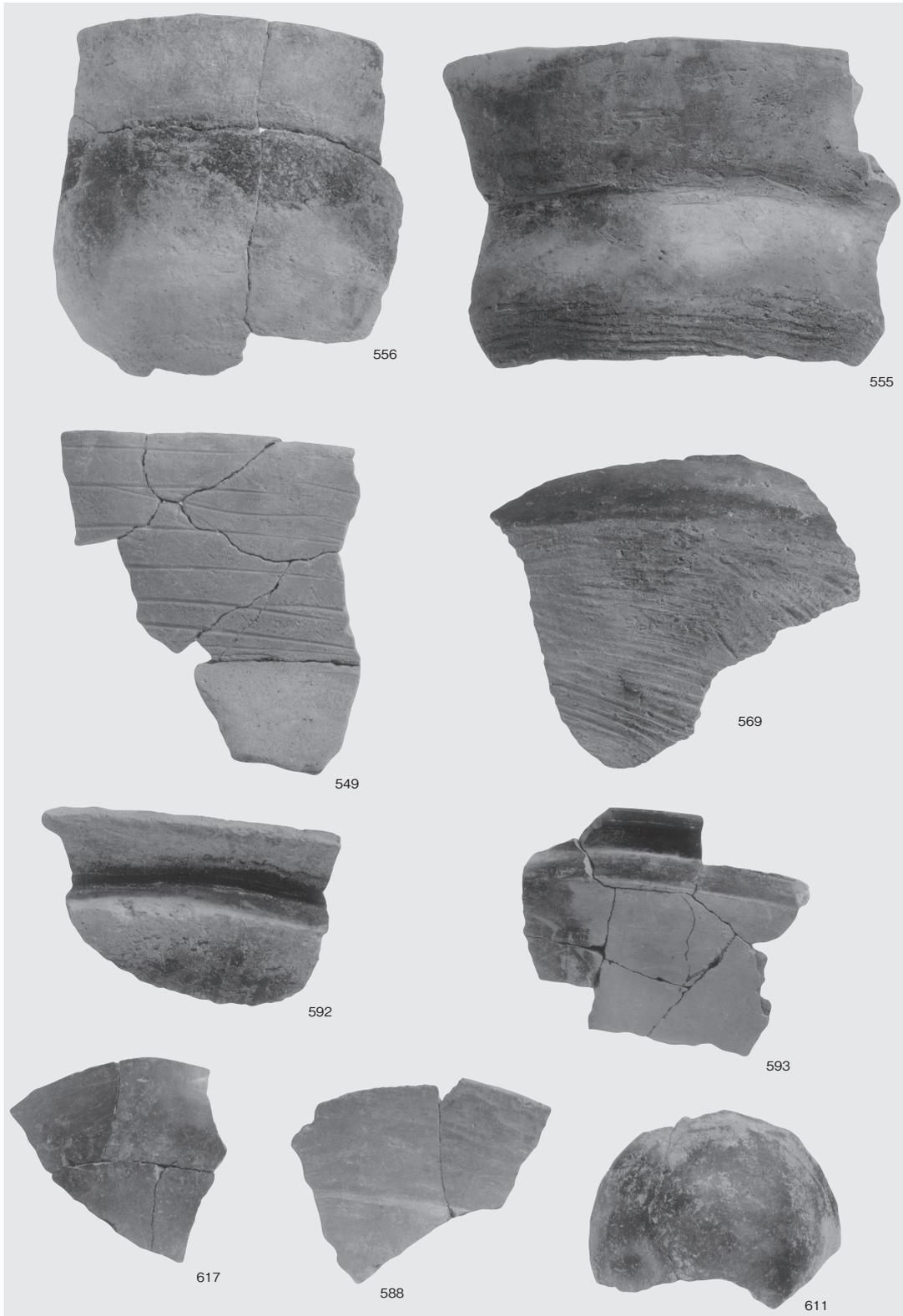
縄文時代後期の土器（3）



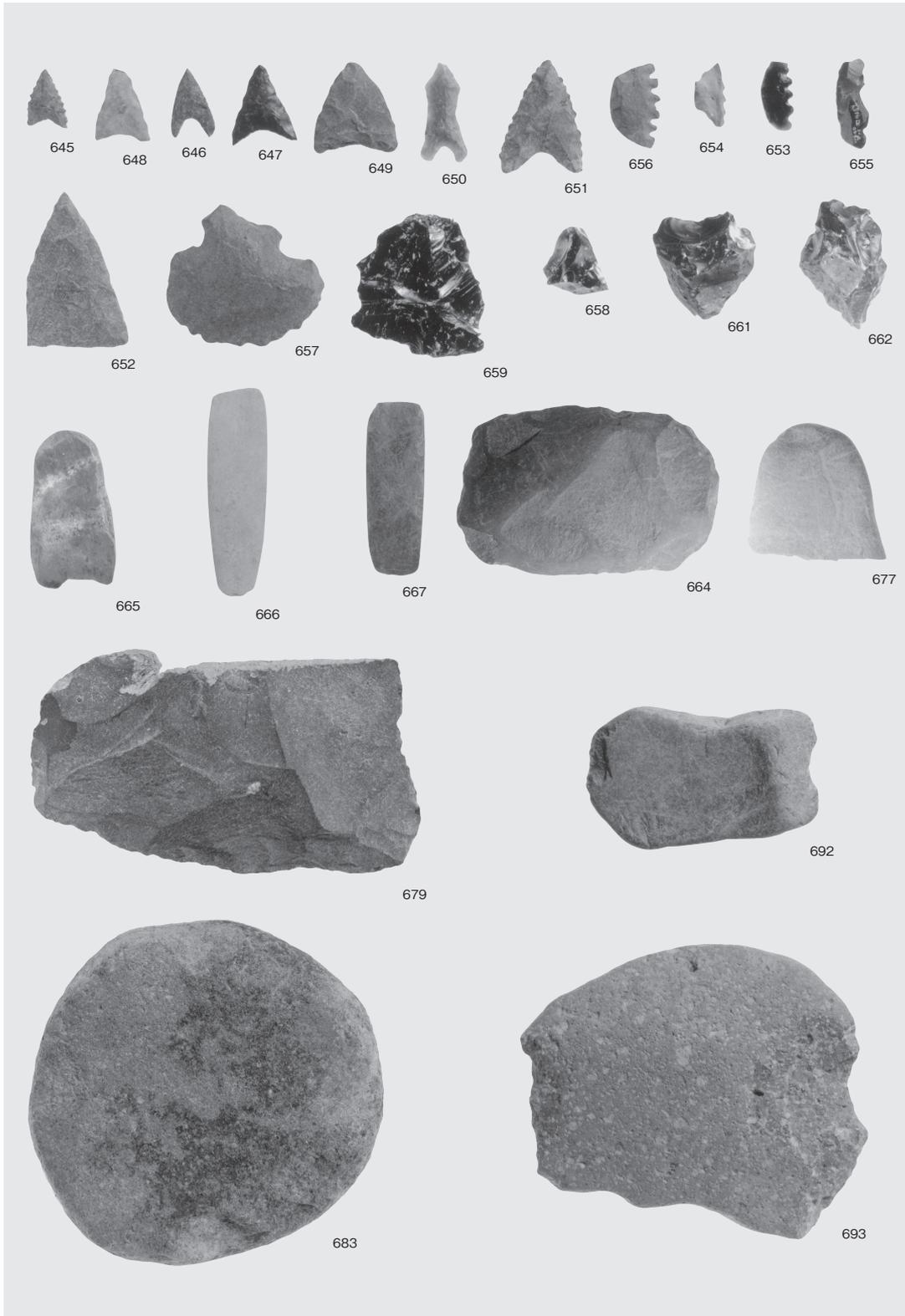
縄文時代後期の土器（4）



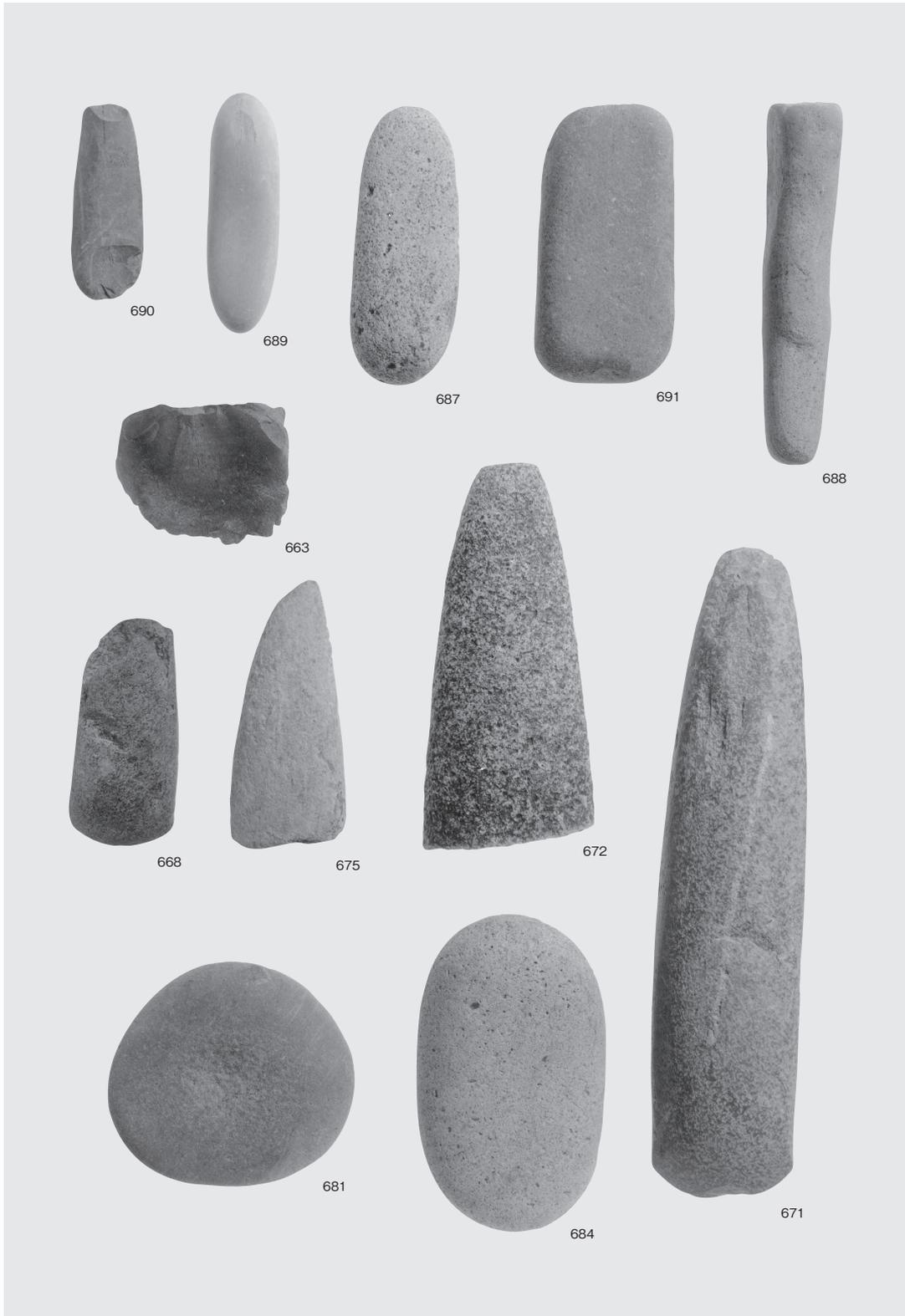
縄文時代後期の土器（5）



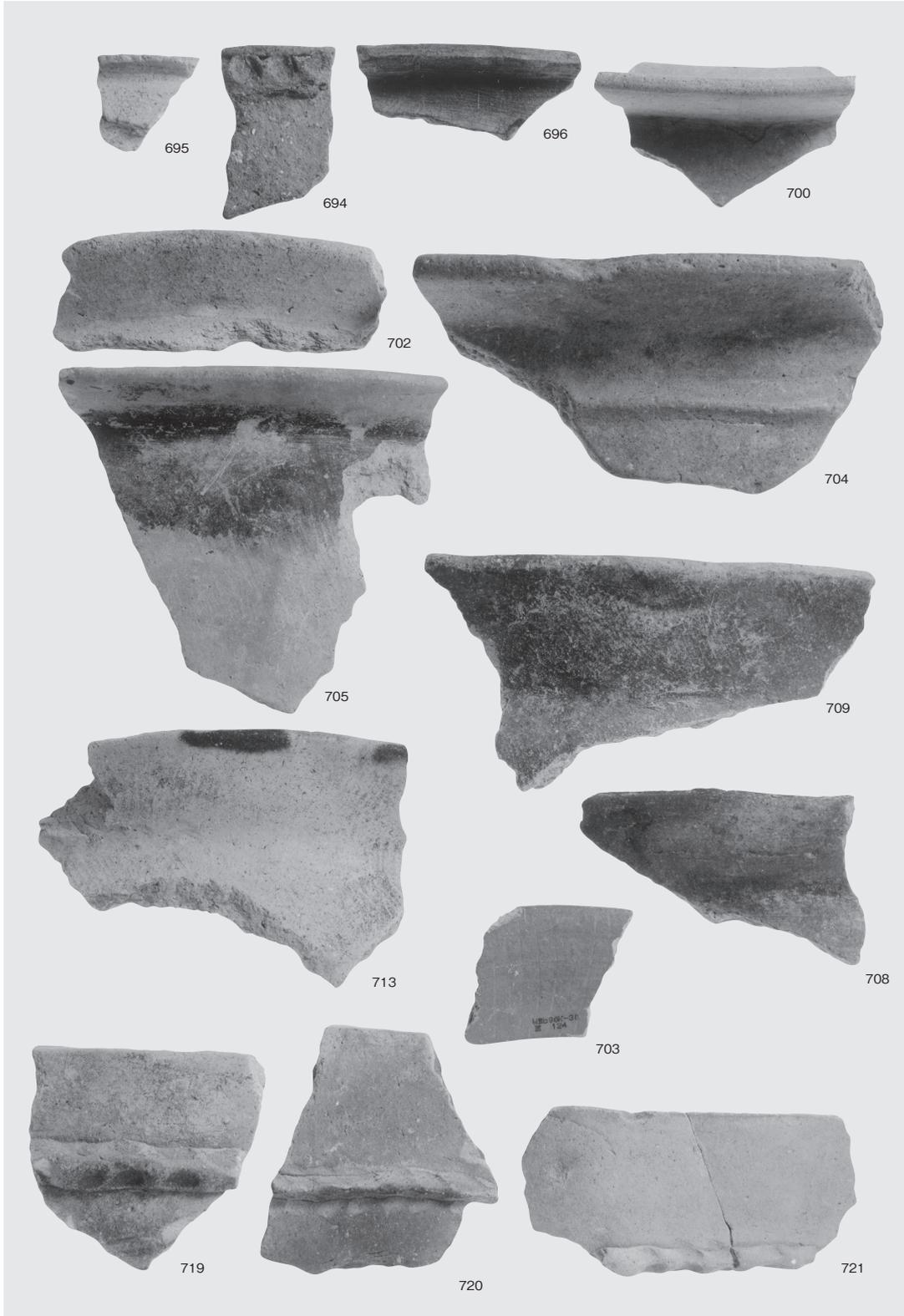
縄文時代晩期の土器



縄文時代後期～晩期の石器（1）



縄文時代後期～晩期の石器（2）



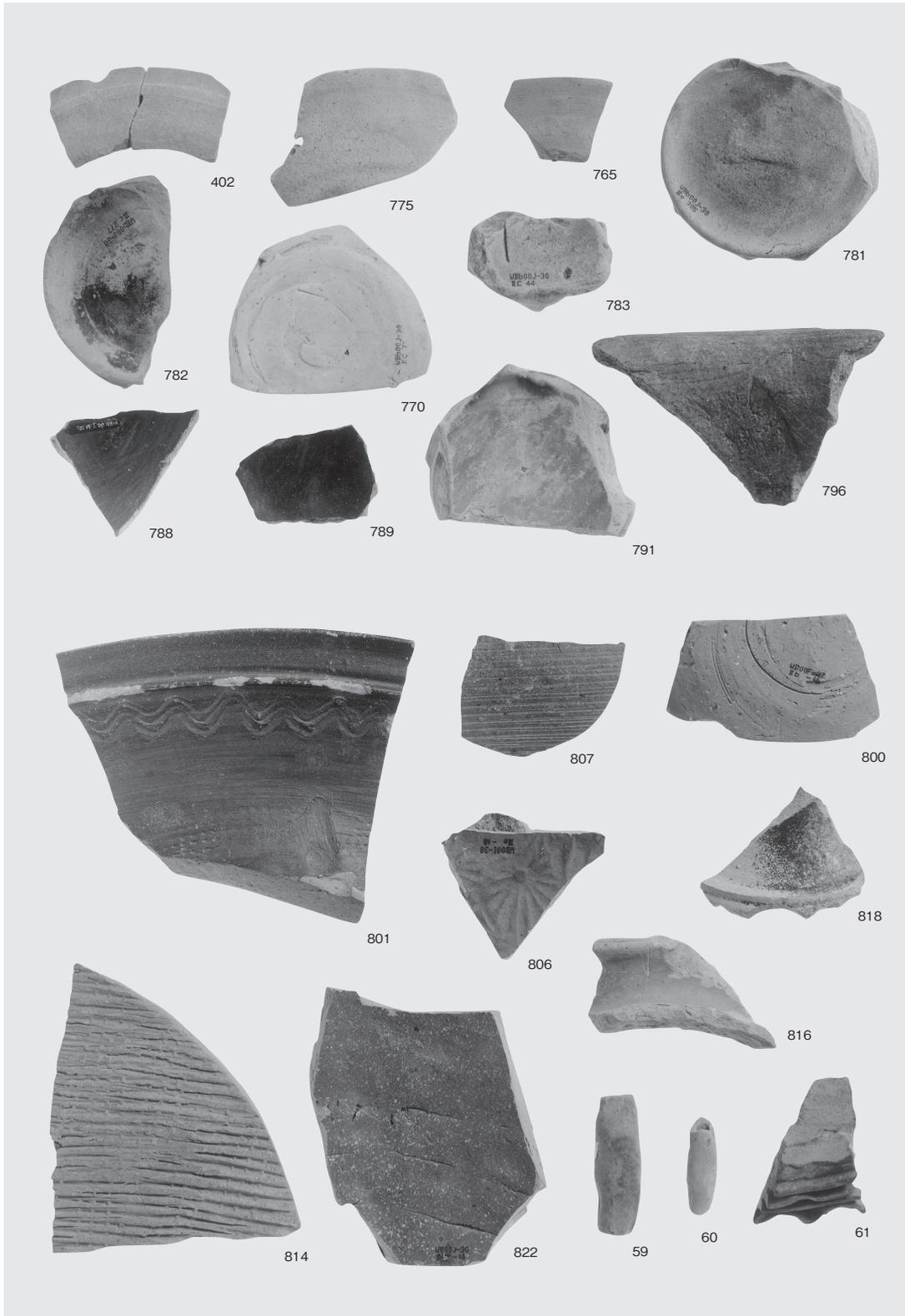
弥生・古墳時代出土遺物（1）



弥生・古墳時代出土遺物（2）



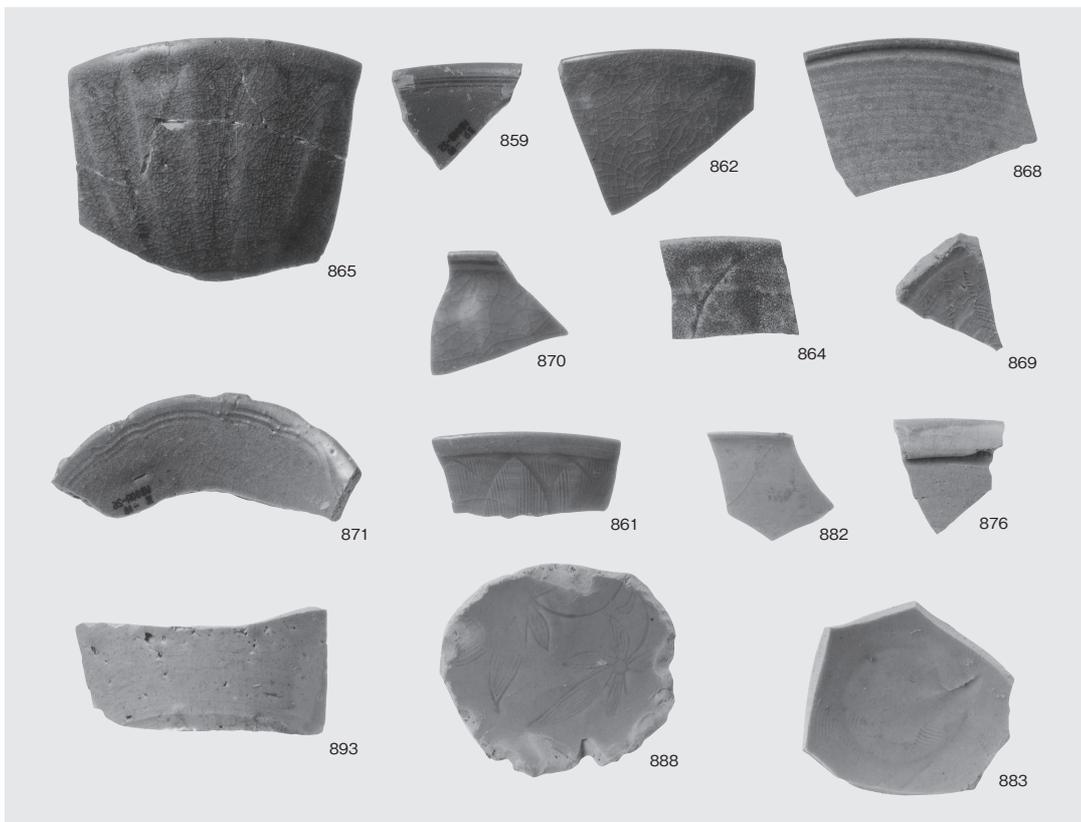
古墳時代出土遺物（3）



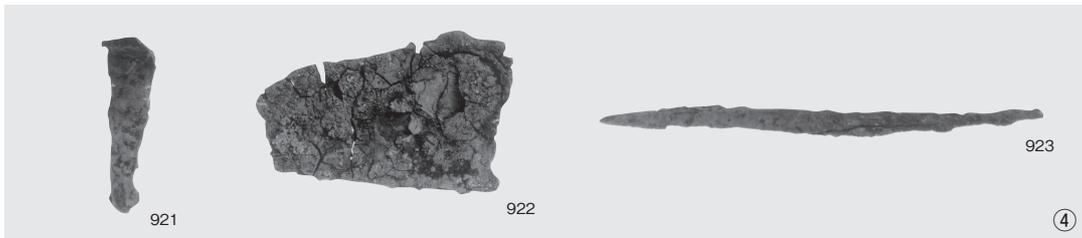
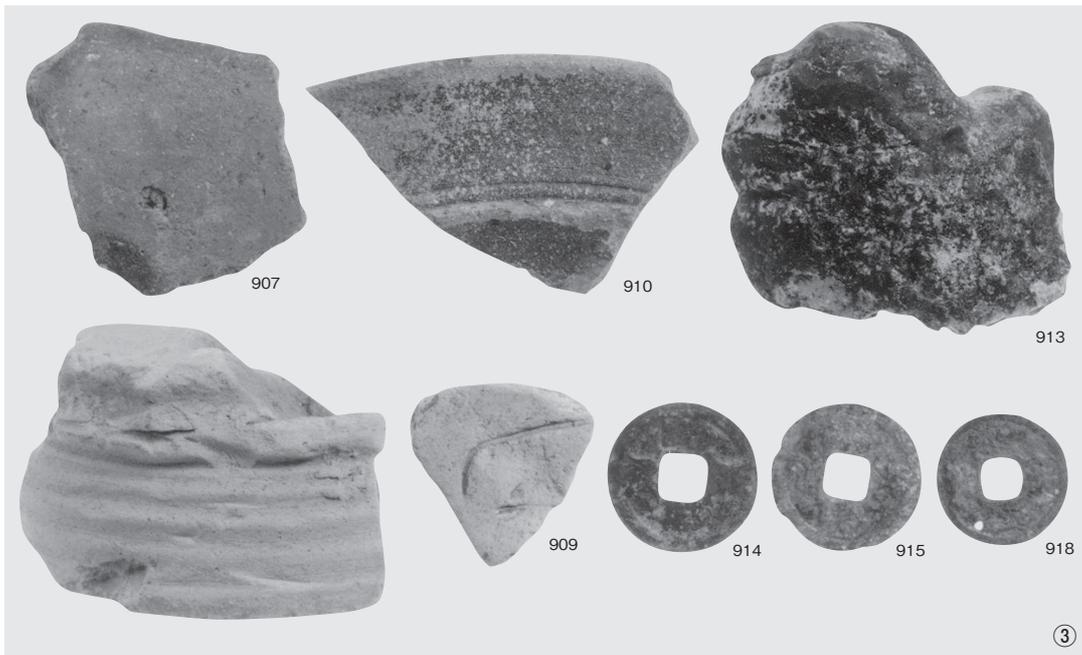
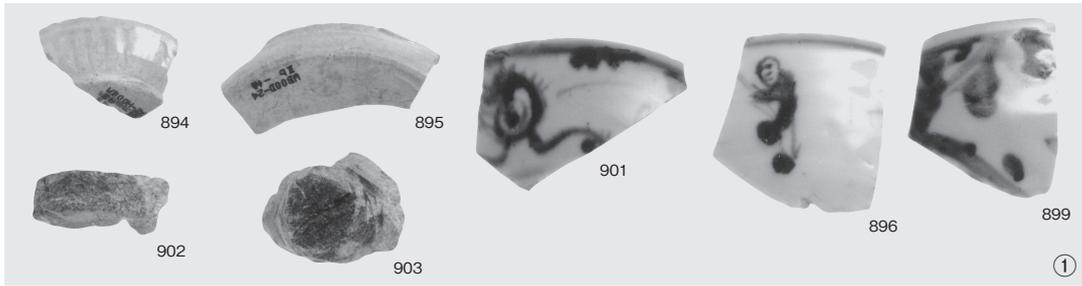
古代出土遺物



中世出土遺物 (1)



中世出土遺物（2）



①中世出土遺物 (3) 青白磁・青花・滑石製品  
②中世出土遺物 (3) 土製品  
③畝間状遺構内遺物  
④時期不明遺物

## あ と が き

これまで、中小河川改修事業（万之瀬川）関連である持躰松遺跡、上水流遺跡、芝原遺跡、南田代遺跡、古市遺跡の整理・報告書刊行については、平成16年度から計画的に進めて参りました。すでに、平成16年度には南田代遺跡、古市遺跡、平成18年度には上水流遺跡「縄文後期～弥生編」、平成19年度には持躰松遺跡、上水流遺跡「古墳～近世編」、平成20年度には上水流遺跡「縄文時代前期編（遺構含む）」の報告書を刊行し、縄文時代～近世まで多岐にわたる時代の貴重な情報を得ることができました。本年度は、上水流遺跡「縄文時代前期末～中期編」、芝原遺跡「縄文時代遺構編」、渡畑遺跡の報告書を刊行します。

渡畑遺跡は縄文時代中期～晩期を主体とした遺跡で、特に40m離れて隣接する芝原遺跡の土製品が接合し、同一個体の足形土製品は当時の生活文化の様子を知る貴重な資料となりました。

本報告書は、渡畑遺跡1「縄文時代編」であり、渡畑遺跡2「古墳時代以降編」は次年度に刊行する予定です。

本遺跡の報告書刊行に携わっていただいた多くの方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(151)

中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI

### 渡畑遺跡1

発行日 2010年3月

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL (0995) 48-5811

印刷所 日進印刷株式会社

〒892-0846 鹿児島市加治屋町16番20号

TEL (099) 222-8291(代)

